# 薔薇の館にて……

源　紫香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

**注意事項**

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
薔薇の館にて……

【Ｎコード】
Ｎ１７５６Ｗ

【作者名】
源　紫香

【あらすじ】
クーデターにより両親を殺され、首謀者の将軍によって祖国、本当の名や素性、純潔すら奪われた美しきソフィア姫が売られた先は隣国の高級娼館『薔薇の館』。ソフィア姫はそこで背中に娼婦である証の刺青まで刻まれ、『姫に瓜二つの娼婦クレア』として働かされる事になる。『薔薇の館』を舞台に、そこに集う様々な人々を横糸に、クレアの運命を縦糸にして紡がれる物語。妖しい世界の幕が今上がる。

# 第1話　堕とされし姫（前書き）

この物語は、読者の皆さんの多くが想像する方向へは進まないと思います。
あえてテンプレ破壊に挑戦したいと思ってます……たぶん……

気にいって頂けたら、評価、お気に入りへの登録を是非お願いします。
感想、メッセージ等は気楽な気持ちで送って頂けると嬉しいです。
また、下の方にある各リンク先へもクリックもしていただけたら嬉しいです。

# 第1話　堕とされし姫

レースのカーテン越しに朝日が入り始めていた。男は風呂から上がり身支度を整えると、ベッドの上で疲れ果てて横たわるクレアを満足げに見下しながら言った。

「噂に違わぬ良い女だ。本物のソフィア姫を抱いてる様だったぞ」

男はそう言うとベッド脇のテーブルに置かれた銀の皿の上にチップとして金貨一枚を置いて部屋を出て行った。

クレアは疲れた体を起こし、銀の皿に手を伸ばし金貨を握りしめ、悔しげに呟く。

「……いつか……いつか必ず……」

『クレア＝カラス』それが今の彼女の名前。歳は二十三。軽くウエーブの掛かる長く艶やかなブロンドの髪と宝石の様に光輝くグリーンの瞳に整った顔立ち、長い手足と細い体、娼婦には珍しくどこか高貴さを漂わす彼女は貴族や豪商、騎士など上流階級の者だけが出入りを許される、深い森の奥にひっそり建つこの高級娼館『薔薇の館』の中でも、また特別な商品だった。そう、クレアの売り文句は『今は亡きあの美しき聖女ソフィア姫の生き写し』。

彼女を指名する客は誰もがクレアを『ソフィア姫』として抱いた。ある者は舞踏会で恋に落ちたソフィア姫と結ばれる一夜の甘い喜びを、ある者は力ずくで奪って来たソフィア姫を凌辱し征服の喜びを、またある者はソフィア姫の僕になり彼女の横暴を受ける屈折した喜びを……それぞれの客が願っても叶う事は決して無かったソフィア

姫への妄想をここで現実化して楽しんでいた。

クレアが毎夜、演じさせられる『ソフィア＝クロフォード姫』とは、その美貌と聡明さで近隣諸国に知れ渡った隣国クロフォード王国の一人娘。しかし、そのクロフォード王国は四年ほど前に当時の将軍『スザク＝ジン』のクーデターにより王と妃は殺害され、クーデター発生当時はその美しさ故に殺害を免れたソフィア姫だったが、スザクとの政略結婚を最後まで拒み続け半年後に両親と同じ様に二十歳前の若さで惨殺されてしまった。

その悲劇性故に、ソフィア姫の人気は今でも高く、その生き写しと評されるクレアを抱く為なら、高額に設定された彼女の代金さえ厭(いと)わず、多くの客が今現在で半年待ちと言われる長い順番を平気で待つほどであった。

男に一晩中休むことなくオモチャにされ疲れ切って鉛の様に重く感じる体を引き起こし、部屋のクローゼットから絹のガウンを取り出しクレアは羽織る。そして、少しふらつく足で部屋を出ようとすると『薔薇の館』のマダム『シンシア＝ラザフォード』がちょうど部屋に入って来た。歳は五十代半ば、シルバーに近い薄いブロンドの髪に、灰色の鋭い瞳、色は地味な紺色ではあるが華麗な織り模様の入った高級そうな生地と凝った仕立てのドレスを身に纏い、いかにも娼館のオーナーらしい『やり手婆』と言う風貌ではあったが、それでも若い頃はかなりの美人であった事は容易に想像出来る程の美しさを持ち合わせていた。

「御苦労さま、クレア。お風呂？」

クレアは片手に握りしめていた金貨をさりげなくガウンのポケット

に納めて、乱れた髪を掻きあげる。

「ええ、男の使った部屋のお風呂は嫌だから下の広いお風呂を使わせて。
それから、あいつ、新調したばかりのドレスをズタズタにしたわよ。
ソフィア姫を無理やり犯すのがお好みだった様でね。
途中、肌を傷つけられないかハラハラしたわ」」

シンシアはニヤリとクレアに笑いかける。

「事前に聞いていたから、その分、特別料金とってあるから大丈夫よ」

クレアはシンシアをジロリと睨む。

「前にちゃんとそう言う趣味の客の時は事前に教えてって言ったのに。
商売とは言え、突然、レイプ紛いに襲われるこっちの身にもなってよ」

「だって、黙ってた方があなたの反応がリアルでしょ。
そっちの方が客も喜ぶしさ。
その分、あなたの取り分も多めにしてるんだから文句言わないの」

シンシアはあっけらかんとした調子で答える。

「まあ、そう言われるとは思ってたけどね。
じゃあ、これからお風呂に行って、
その後は自分の部屋に戻って眠らせてもらうわ。

着替えはロミに浴室まで持って来る様に言っておいてね」

クレアは、シンシアを見ずにそう言うとさっさと部屋を出て行った。そんなクレアをシンシアは目で見送りながら口元に笑みを浮かべながら小声で呟く。

「ふふふっ……クレア……
あなたも、すっかり一人前の『薔薇の乙女』ね……」

一階にある広い浴室。本来はここの娼婦たちの供用風呂なのであるが、さすがにこの時間に使うのはクレアだけだった。他の娼婦たちは日に数人の客を取るが一人一人の相手をする時間は短く深夜遅くには商売を終える。しかし、クレアに限ってはすべての客が『夕方(オ)から早朝(バーナイト)まで』になっているので、ここを使う時間が違うのだ。

広い湯船に疲れた体を沈めると少し疲れが癒えるのをクレアは感じた。そして彼女は思う。

誰も知らないソフィア姫の本当の悲劇を……

ソフィア姫はあの日、目の前で両親を殺され、悲しむ間もなく、すぐさま、両親を殺した将軍スザクによって力ずくで純潔を奪われたのだった。その後も、スザクは彼女を何度も何度も繰り返し弄(もてあそ)んだ、まるでおもちゃの様に。そして妻になれと迫ったが彼女は屈服しなかった。スザクはそんな強気なソフィア姫の屈服する姿を見たくて、彼女を城の地下室に閉じ込め、自分の部下達にも代わる代わる抱かせた。いつ終わるとも分からない地獄の様な凌辱の日々に彼女は耐え続けた。彼女は自らを辱め続ける男たちを、最後の最後まで憎し

みに燃える目で睨み続けていた。結局、それでもソフィア姫は最後までスザクに屈服する事は無かった。

スザクは、一年間ソフィア姫を城内で散々弄んだ後、彼女をさらなる地獄へと突き落とす。彼は、魔術師を呼びソフィア姫に怖ろしい呪縛を掛けた。その呪縛により彼女は真実の素性を他人（ひと）に語る事が出来なくなった。その代わりに偽りの素性を与えられた。もし、彼女自身、真実の素性を忘れ、偽りの素性を信じる様になっていたのなら苦しみはさほどの物では無かったかもしれない。しかし、残酷な事にソフィア姫は真実の素性は他人（ひと）に語れないだけで記憶には残り、口にする事が出来る素性が偽りである事も自覚していた。

その日から彼女は、両親が誰かも分からない孤児で幼少の頃から自ら体を売って生きのびて来た根っからの娼婦『クレア＝カラス』として生きる事になる。スザクはそんなクレアを『美姫ソフィアに瓜二つ』と言う謳い文句で隣国の高級娼館『薔薇の館』へ高値で売り飛ばしたのだ。それが三年ほど前の事だった。

もちろん、ソフィア姫は自害しようと思えばいつでも出来た。しかし、自害すれば両親の敵（かたき）を取る事も、国を奪い返す事も、憎いスザクに復讐する事も出来なくなる。クロフォード王家の血を引く最後の一人になった以上、死ぬ事は憎いあのスザクに屈服する事でもあったのだ。故に、彼女は生き地獄の日々に耐え続けた。最後には娼婦にまでその身を堕としても生き続けた。いつか、この屈辱を晴らす日が来る事を信じて。

「お父様……お母様……汚される事には慣れました。
でも、時々……それでも辛い時があります……」

そう呟いたクレアの両目から一筋の涙が零れた。彼女は思わず、湯船のお湯を両手で掬うと顔を洗った。

「ミロク……あなたは今どこに居るの？
もう一度あなたに会いたい……
会った所で、今の私がソフィアであるとはもう分からないでしょうけど」

ミロク、正しくは『ミロク＝クジョウ』……それは若い『黒騎士』であった。黒騎士とは特定の主人を持たぬ、言わばフリーの魔法の使える騎士の事である。その時々によって特定の国や集団に雇われる傭兵の様な存在であった。ミロクはまだクロフォード王国として存在した頃、時々、城にやって来た。彼の話す諸外国の珍しい話が好きで、ミロクが城に来た時は必ずソフィアは自室に彼を招き旅の話をする事をせがんだ。もちろん、それはただ話が聞きたいだけではなくソフィアの彼に対する淡い恋心からだった。しかし、クロフォード王家の一人娘ソフィアと一介の黒騎士ミロクではあまりに身分に差があり過ぎた。それは決して結ばれる事のない恋。聡明なソフィアの事、その事は十二分に良く分かっていた。それでもソフィアはミロクに自分をさらって逃げて欲しいと心密かに夢見ていた。結局、それはソフィアの夢のままで終わり、ミロクとは最後までキスすらないままになってしまった。ソフィアが『生き地獄』に堕とされた時も、ミロクは遠く離れた国で雇われていて、彼がソフィアの事を知ったのはすべてが終わった後の事だった。

# 第2話　薔薇に囚われし聖女

「クレア姉様……起きて下さい……」

どこか儚(はかな)げで可愛い声にクレアは、はっとして目を開く。そこには、自分の顔を見下ろす、特徴ある金と銀の瞳があった。どうやらクレアは湯船に浸かったまま、いつの間にまどろんでしまっていたらしい。

「あっ……ロミ……私、眠っていたのね」

『ロミ』と呼ばれたその少女はクレアの言葉ににっこりと笑って頷く。この少女、歳は十歳。腰まで伸ばした真っすぐで艶やかなシルバーの髪と人間離れした透き通る様に白い肌、そして何より右目がゴールド、左目がシルバーと言う世にも珍しい左右で色の違う瞳、まるで人形の様に妖しげな魅力を持つ美少女。クレア専属の付き人として彼女の身の回りの世話や雑用をしているこの館の使用人の一人であった。

「お背中を流しますので、一度お上がり下さい」

ロミは、湯あみ用の薄い下着の様な物を一枚だけ身に付けていた。クレアはゆっくり湯船から上がると、洗い場のイスに座る。ロミはクレアの後ろに立つと、クレアの背中をそっと素手で撫でる。

「ちょっと！ロミ……いきなり何を！」

クレアはびくっと身を震わせて、思わず小さな叫びを上げる。

「……ごめんなさい、クレア姉様。
でも、姉様のこの『薔薇に囚われし聖女』の刺青……
あまりに美しくて……つい……」

クレアの背中一面には、裸身に棘を喰い込ませながら無数の薔薇を纏わりつかれた姿で、目を閉じて立つ美しい聖女の刺青が施されていた。この刺青『薔薇に囚われし聖女』と呼ばれ、この『薔薇の館』の娼婦の背中には必ず施される、言わば『薔薇の館』の娼婦である証である。また『薔薇の館』の娼婦は、娼婦でありながら貴族同様の扱いを受ける国家公認の最高級娼婦でもあった。故に『薔薇に囚われし聖女』の刺青は他の娼婦たちはもとより、平民の娘達からさえも『憧れ』の目で見られていた。

ロミは、桶にお湯を汲み石鹸を熔かし泡立てると、天然の海綿を浸し、その海綿でクレアの背中をゆっくり優しく流し始める。クレアは気持ち良さそうに眼を閉じる。

「この刺青、ここの娼婦ならみんな同じ物を持ってるでしょ。
私のが特別珍しい訳じゃないんじゃない、ロミ？」

「クレア姉様の聖女の顔は、他の女のとは違う。
憂いを帯びてどこか悲しげ……そしてとても美しい顔……」

ロミはそう言うと左手の人差し指で、クレアの刺青の聖女の顔を愛おしそうにそっと撫でる。

「それはたぶん……
私の聖女の顔の部分だけはここ専属の彫師じゃなく、
あのシンシアが自らの手で彫った物だからよ……」

クレアは瞼を開き、何かを想い出すように視線を宙に泳がす。

それは、クレアが、スザクの手の物によりこの『薔薇の館』に初めて連れて来られた日の事。

代金の受け渡しを終えスザクの手の物が帰った後、クレアは両手を後ろ手に縛られたまま館の地下にある病室の様な一室に執事風の男の手で連れて来られた。そこで彼はクレアの両手のロープをナイフで切ると、中央に置かれた粗末なベッドの上に彼女の身を投げた。

（また犯される！）

クレアは咄嗟にそう思い身を強張らせたが、その男はただベッドの上のクレアをじっと見ているだけで襲いかかっては来なかった。彼女は何とも言えない不気味な雰囲気を感じ始めていた。彼女が今まで経験した事の無い何かもっと恐ろしい事が起こる様な予感を。

やがて入口のドアが開き腰の曲がった老人とシンシアが部屋に入って来た。老人の手には医者の往診用のカバンに似た物が握られていた。老人はクレアの居るベッドの横のテーブルにカバンを置くと、中から彼女の見た事もない様な色々な器具を取り出しテーブルの上に並べて行く。それが何に使う物かクレアには分からなかったが、その医療用具の様な形状から自分に対して良からぬ目的で準備されてるであろう事は容易に想像出来た。一方、シンシアの方は、怯える目で老人を見ていたクレアの髪を掴み顔を引き起こし、その顔をしげしげと見ながら言った。

「見れば見る程ソフィア姫に瓜二つじゃないか！
かなりの高い買い物だったが……

こりゃ、久々に良い買い物をしたよ。」

そしてシンシアはいきなり腰に付けた短刀を引き抜くと、クレアの着ていたドレスの背を一気に引き裂き、上半身を裸にしてしまう。

「うん……良い背中だ……
この肌の白さと肌理（きめ）の細かさ……
これは久々に『聖女』が映える良い出来栄えになる！」

突然の事に、クレアは慌てて露わにされた胸を両手で抱き締める様にして隠す。

「一体、私に何をするつもり？」

震える声でそう尋ねるクレアに、シンシアは彼女の顔に自分の顔を近づけその耳元でこう囁いた。

「何をって……？
お前の背中に『薔薇に囚われし聖女』の刺青をしてやるのさ。
うちの商品である証としてね……」

クレアの顔がその言葉に一瞬で引きつる。彼女は、娼館に売られると知った時点で、自分の体がさらなる辱めを受ける事は覚悟していた。しかし、まさか背中に刺青をされる事までは想像すらしていなかった。男達に体を汚される事にはこの一年である程度は慣れた。この地獄から解放された後、自分さえ黙っていれば体を汚された事を他人に知られずに済ます事も出来る。しかし、もしここで刺青をされてしまえば、もう、この屈辱の記憶を覆い隠す事は出来ない。例え地獄から解放されても、刺青を見れば誰でも『この女は堕ちる所まで堕ちた女』と言う事実を知ってしまう。その時のクレアにと

ってそれは耐えがたい屈辱だった。

「いやっ！止めて！他の事なら何だってする！
だから、刺青だけは止めて！お願いっ！」

思わずクレアはシンシアを見つめて懇願した。クレアの言葉にシンシアの表情が一変する。その顔は冷酷その物になり、その眼はまるで汚い物を見る様な目でクレアを見下ろします。

「ふっ……ついに本音が出たか、お嬢ちゃん！
大方、体で稼ぐだけ稼いで、その後は清純な娘を気取って、
その辺の馬鹿貴族でもたぶらかして貴族の妻に納まるつもりだったかい？」

シンシアはクレアの髪を片手で掴むと力任せに彼女の上半身を引き起こし、彼女の顔に自分の顔を近づけて言った。

「私はね……そう言うズル賢い女が大嫌いなんだ。
普通の娼婦ならこの『薔薇に囚われし聖女』の刺青は、
咽から手が出る程欲しくてたまらない勲章。
それを『何でもするから止めてくれ』だと！
許せないね！お前のその腐った性根（しょうね）を叩き直してやる！」

それだけ言うとクレアの髪から手を放して、後ろに控えていた執事風の男に声を掛ける。

「この女を身動きできない様にベッドの上に腹ばいにして縛り付けなさい！」

すぐさま執事風の男はクレアをベッドに縛りつけ始める。間もなく、

クレアは両手足をベッドの両隅の足から伸びる鎖に繋がれ、ベッドの上に両手足を広げてうつ伏せに寝かされ身動き出来なくなった。

「嫌っ！お願いっ！許して！」

クレアは絶望に震えながら、それでもシンシアを見て懇願した。シンシアはクレアを無視して顔を合わせず、しかしクレアに聞こえる様な声で、老人に向かって言った。

「こいつには『麻酔』の必要はない！
麻酔無しで刺青を入れておやり……」

その言葉にクレアの眼が大きく見開かれる。そして、想像を絶する恐怖の為に、彼女の上下の歯がかたかたと鳴り始める。老人の彫師がシンシアの耳元でそっと囁く。

「よろしいのですか？
下手をすると苦痛で気が狂うかもしれませんよ、この女」

シンシアは彼の耳元に口を近づけて小声で答えた。

「案ずるな……どうせ、痛みの為に数分で気を失う。
麻酔を使おうが使うまいが、結局は同じ事さ」

そう言うとシンシアはクレアに背を向けて、老人に笑みを浮かべてウインクした。

老人はテーブルの横の器具の一つを手に取るとゆっくり、恐怖でがたがたと震えるクレアの背中に器具の先の鋭利で太い針を近づける。やがて、地下室にクレアの絶叫と哀願の叫びが響き渡った。

「あああああっ！止めてっ！お願いっ！
止めてぇーーーっ！お願いよ！許して！許してぇーっ！」

## 第3話　苦痛の果てに掴んだ物

クレアの苦痛の叫びは一時間以上続いた。冷え冷えとした空気が籠るこの地下室の中ですら、彼女の全身は苦痛の為に脂汗が止めどなく流れ落ち、シーツを水に浸けた様にびっしょりと濡らしていた。シンシアの予想に反してクレアは意識を失わなかった。叫び声はさすがに二時間を過ぎる前に止まったが、それでも彼女の口からは呪文の様な呟きが止まる事は無かった。

「助けて……もう止めて……気が狂いそう……
お願いよ……もう許して……」

結局、この日、三時間半、老人がこの日の作業を終えるまでクレアは苦痛に耐えて、意識を保ち続けた。

「マダム、今日はここまでが限界だ」

そう言って、最後の一針を刺し終え、その器具をテーブルに戻した瞬間、クレアはやっと気を失った。シンシアは気を失ったクレアを笑みを浮かべながら見下ろして言った。

「少し、見直したぞ……
ここまで耐えた女は私も初めて見た。
思ったよりずっと良い根性してるな。
お前は、良い商品に化けるかもしれん」

シンシアは自らの負けを認め、翌日からは痛みを和らげる麻薬の様な飲み物を飲ませてからクレアの背中の刺青を彫りはじめた。結局、クレアの苦痛との闘いは初日だけで許された。とは言え、それでも

完全に痛みから解放された訳ではなかったが、初日の苦痛から比べればそれは天国に居る様な物だった。事実、三日目には彼女は途中でまどろむほどの余裕すらあった。そんなクレアを見てシンシアは呆れ顔で呟いた。

「おいおい……なんて奴だ……
これを彫られてる間に寝た女はこいつが初めてだよ……」

三日目は刺青の最終仕上げの段階だった。クレアの背中の『薔薇に囚われし聖女』もその顔を除きほぼ完成していた。最後に聖女の顔を刻むことで、一気に背中の聖女は全身に精気を宿す。その為、聖女の顔は最後の最後に彫師の全身全霊を傾けて彫る事になっていた。老人の彫師が眼を閉じ長い精神統一を行った後、大きく深呼吸をして、針を持つとクレアの聖女の顔になる部分に針を入れようした、その時だった。シンシアの手が老人の針を持った右手を押さえた。

「待て！この女の聖女の顔は私が彫る……」

老人の彫師は、驚きの顔で後ろに居たシンシアを振り返る。

「えっ！マダムが自ら……」

老人はクレアの脇から離れ、その場をシンシアに譲る。老人の座っていたイスに座るとシンシアはまだまどろんでいたクレアの頬を軽く叩く。びくりと体を一瞬震わせてクレアはすぐに眼を覚ました。そのクレアの顔を覗き込んでシンシアが声を掛ける。

「私はお前が気に入った。
お前の聖女の顔は私自らが彫ってやろう……」

「えっ……どう言う事？」

クレアはシンシアの言っている言葉の真意を測りかねて尋ねた。

「この『薔薇に囚われし聖女』の刺青の元絵は私が描いた物だ。ここの彫師は皆腕は一流だからその仕上がりに不満は無いが、それでもやはり聖女の顔の表情は彫師の個性が少なからず出る。だが、お前の聖女には私の想いに寸分違わぬ顔を入れたいんだ。彫師としてはプロじゃないから多少痛みは強くなるが許せ……」

そう言うとシンシアは針を手に持ち、眼を閉じ精神を集中した後、目をかっと見開くと、針先をクレアの聖女の顔の部分に刺し顔を想うままに彫りはじめた。約一時間ほど掛けてシンシアはクレアの背中の聖女を完成させた。彫り上がったそれは、その場に居たプロの彫師さえしばらく声もなく見惚れる程の美しさだった。

憂いを含み軽く眼を閉じ薔薇に絡みつかれて立つ聖女。その瞼はまるで微かな震えてるかの様に見え、今にも涙が零れ落ちそうな感じだった。その薔薇の棘に包まれた胸はクレアの呼吸に合わせて生きてるかのように軽く上下する。辛い運命に縛られた悲劇の聖女を表していると言われる『薔薇に囚われし聖女』。それはここで働く女達自身の象徴でもあった。特にクレアにとっては、まさにその聖女は自分自身の今の境遇その物だった。

この時は刺青を施されることで最後の尊厳すら踏みにじられ絶望の底に落とされたかの様に感じたクレアだったが、程なくこの『薔薇に囚われし聖女』の刺青を彼女自身も誇りに思う様になる。それほどこの『薔薇に囚われし聖女』の刺青を持つ意味は深い物があった。国家公認の高級娼館の頂点に君臨するシンシアの『薔薇の館』、そこで働くクレアを含めて五名の娼婦は『薔薇の乙女』と言われ、娼

婦でありながら下手な貴族では太刀打ち出来ないほどの高い地位と自由を許されていた。彼女達が一度機嫌を損ねれば、どれほどの高価な対価を払っても、その指先に触れる事すらできないとまで言われる程に。

通常『薔薇に囚われし聖女』の刺青を彫られた女は、皮膚の下に入れられた染料への中毒症状で三日三晩、背中の痛みと高熱で苦しむ事になる。普通なら館の先輩娼婦達が交代でその新人娼婦の看病をするのだが、クレアに関しては異例だった。刺青を入れ終わったクレアを、シンシアは何と自分の部屋に運び込みそこで痛みと熱が治まるまで自らの手で看病したのだ。一部では「クレアを気にいったシンシアが、この時、密かに彼女を自らの愛人にしたのでは？」と言う噂が経つほどだった。シンシアはもちろんその噂を知ってはいたが、否定も肯定もせずにただ笑っているだけだった。

「姉様、起きて……お背中、流し終えましたよ」

ロミの声に再びクレアは眼を覚ます。今度はロミに背中を流されながらまどろんでしまっていた様だった。

「姉様、本当にお疲れなのですね……」

「悪いな、ロミ……さすがの私も仕事五日目で色々疲れてる様だ。もう一度湯船の浸かったら、『離れ』のサンテラスで朝食食べて、その後は部屋に帰って昼まで眠るよ」

クレアは微笑みながらロミを見ながら立ちあがると、再び湯船に体を沈めて横たわる。

「私も少しだけクレア姉様の横で一緒にお風呂に浸かります」

ロミはそう言うと湯あみに用の薄い下着を脱ぎすてて、クレアの横に並んで横たわると子供の様にクレアの体にしがみ付いた。

「お疲れで嫌でしたら、すぐに上がります」

ロミはクレアの顔を見上げてそう言うと、クレアはそっとロミの小さな体を片手で抱き寄せ、もう片方の手で頭を撫でながら眼を閉じて静かに言った。

「気にするな、ロミ。
こうしてお前を抱いてると不思議と心が休まるよ……」

しばらくクレアはまるで人形を抱くかの様にロミを抱いて湯船に浸かっていた。温かく、やや独特の香りのある天然温泉のお湯、そのお湯よりやや低めのロミの体温。合わさった胸を通して伝わる小さな心臓の鼓動。実際にロミを抱いてこの湯に浸かると天国で雲のベッドに横たわってるかの様な至福の一時をクレアは味わえた。クレアにとってロミが付き人で本当に良かったと思える瞬間でもあった。

ここの『薔薇の乙女』は全員専属の付き人を持ってはいるが、不思議な事にその付き人は千差万別だった。ある者は執事風、ある者は老婆、ある者は少年、そしてまたある者は同年代の娘と言う様に。しかも、それぞれの娼婦たちは他人の付き人を羨んだりする事はなく、皆自分にあてがわれた付き人に満足していた。これはシンシアがそれぞれの娼婦の好みと性格をきちんと把握していて、それぞれに最適な付き人をあてがっている事に他ならなかった。

「明日明後日はお休みだから、昼までお昼寝したら、

今日の午後は一緒に街に出ようか？」

クレアはロミの髪を撫でながら彼女に尋ねる。

「はい……喜んでお伴します、クレア姉様」

ロミは、満面の笑みを浮かべてクレアを見上げた。

「じゃあ、お昼はここで食べずに、
あのジュゼット爺さんの店のガレットにしよう」

「では……私はいつもの様にキノコとバターオムレツ乗せを……」

クレアはそんなロミに笑いながら言う。

「ロミはいつも同じ物だな。
私は、そろそろマスの美味しい季節だから、
マスの塩焼き乗せが良いかな？」

「また、クレア姉様目当てのお客で行列ができますよ、あの店」

ロミはクレアを見てくすりと笑う。

「それも良いさ、いつも、美味しいケーキをオマケしてくれるからな。
さて、そろそろ出るか……このままじゃまた眠ってしまいそうだ」

そう言うとクレアは、ロミの体から手を離し湯船から上がって脱衣所に向かって歩いて行く。ロミもすぐに湯船から上がり、洗い場に脱ぎ捨ててあった下着を拾い上げると、クレアの後に続いて行った。

# 第４話　薔薇の乙女たち　～その１～

浴室を出たクレアとロミは脱衣所で、仲良く二人で体を拭きあげ髪を乾かしていた。

「クレア姉様……新しいお洋服と下着をこちらにお持ちしておきました。
それからガウンのポケットに入っていた金貨はこちらに……」

そう言うと、ロミは自分の脱衣籠に入れてあった小さなポシェットから、昨夜の客にチップとしてクレアが受け取りガウンのポケットに入れてあった金貨を取り出し、クレアに手渡す。

「ありがとう……ロミ……
別に客から直接チップをもらう事は禁止されてないけど、
やっぱりシンシアには知られたくないのよね。
私達の『へそくり』みたいな物だから……」

ロミはそう言うクレアを見上げて笑みを浮かべる。

「でも、マダムはちゃんと知ってますよ……たぶん……」

「まあ、そうでしょうね……シンシアの事だから……」

クレアは金貨をロミの持って来たワンピースのポケットに仕舞いながら苦笑する。

髪をあらかた乾かした二人は身支度を整え脱衣所を後にする。クレアは普段着の鮮やかなブルーに染められたロングのワンピース、ロ

ミは黒に白いレースを多めに配した可愛いメイド服に白いエプロンとカチューシャを身に纏っていた。脱衣所を出て玄関ホールとは逆の方向へ廊下を進むと『薔薇の館』の裏口へ出る。この裏口とクレア達『薔薇の乙女』の宿舎でもある『離れ』とは風雨の凌げる壁と屋根が付いた長い渡り廊下で繋がっていた。ちなみに『離れ』の隣には『薔薇の館』を警備する用心棒達が寝起きする丸太小屋の様な建物が並んで建っていた。

『薔薇の館』に初めて来た者は、ここに居ると必ずある種の違和感に囚われる。最初は漠然とした違和感だけでその原因が分からないが、しばらくするとその意外な原因に気が付く。

この『薔薇の館』の窓は異様に大きく、その上鉄格子が無いのだ。中には窓の外に広いバルコニーが付いた部屋さえ存在するのだ。

街の一般的な娼館の部屋はどこも窓が小さく、必ず鉄格子が嵌っていた。それは当然と言えば当然で、娼館の商品たる娼婦が脱走しない様にする為であった。宿屋風には見せてはいるが、作りの基本はまさに『牢獄』であった。その『牢獄』に捕えられた娼婦を客は金を払って楽しむと言う物だった。

しかし、この『薔薇の館』はどの部屋にも広い窓があり、客は夜空を楽しみながら『薔薇の乙女』との一時（ひととき）の淡い夢の時間を楽しめる様になっていた。鉄格子などと言う無粋な物は客の目に触れる場所には一つとして存在せず、『薔薇の館』は重厚にして開放的な『領主の館』風に作られていた。唯一『鉄格子』が存在する窓もマダムであるシンシアの部屋で、ここは客が払った代金が集められる為に、外部から侵入を防ぐために付けられた鉄格子であった。もちろん『薔薇の乙女』達が普段寝起きする『離れ』の建物も同じで、鉄格子等は存在せずごく普通の品の良い宿屋風のたたずまいをしていた。

では何故『薔薇の館』はこの様に開放的に作られているのかと言うと、それには『薔薇の乙女』達のあまりに残酷で厳しい一つの『掟』の存在があった。『薔薇の乙女』は貴族並みの高い地位と自由を許されてはいたが、それはあくまで『薔薇の館』のマダムに従順である事が大前提で、もし、一度でも彼女に逆らい脱走すれば理由の如何を問わず捕えられらたその場で首を撥ねられる事になっていた。その上、その死体は街の刑場で骨になるまで晒されると言う苛酷な物であった。故に『薔薇の乙女』達にはあえて物理的に自由を奪う必要はなかったのだ。

クレアとロミは渡り廊下を通って『離れ』へと歩いていた。二人が『離れ』のエントランスホールに入ると、回りの空気が一変する。本館『薔薇の館』は、そこを訪れる客が一時の淡い夢の世界を『薔薇の乙女』と共に堪能する為に作られた場所であり、重厚な中に微かな淫靡さと儚さが共存する独特の空気が隅々にまで満たされていた。一方、『離れ』の方は『薔薇の乙女』達の生活の場であり、雑多で温かくそして軽やかな空気に満ち溢れていた。

エントランスホールの左手には中庭に面したガラス張りの広いサンテラスがある。そこはここに住む『薔薇の乙女』達の食堂であり、溜まり場でもあった。今は、ちょうど朝食時で『薔薇の館』に所属するすべての『薔薇の乙女』が勢ぞろいして、各々が決まったお気に入りのテーブルでそれぞれの付き人と共に朝食を摂っていた。

「クレア！お仕事終わった様ね。
その顔、朝風呂浴びてさっぱりした所って感じだな。
私の客が手土産に採れたての美味い桃を山程持って来たから、

キッチンの井戸水で冷やしてあるんだ！
朝食の時に、クレアも食べな」

クレアとロミが『離れ』に帰って来たのに最初に気が付いた現『薔薇の乙女』の最高齢者で乙女達の姉御（あねご）的存在の『アマンダ＝シカルティア』がクレアに声を掛ける。彼女は年齢は三十五。肩よりやや長めでカットされた栗毛の巻き毛と深いブルーの瞳、メリハリのあるスタイルながら筋肉質で男性的な雰囲気のある大柄な美人だった。外見だけでなく実際アマンダは剣術、馬術に関しては下手な騎士でも裸足で逃げ出す程の腕を持っていた。実際、若い頃、彼女を乱暴しようとした街のならず者五人を棒切れ一本で半殺しにしたと言う武勇伝すらある。そして彼女の横に座るロミと同じ十歳くらいの可愛い少年が彼女の付き人の『イカロス』。

「アマンダお姉様……お茶のお代りは？」

イカロスが隣のアマンダを見上げて尋ねる。

「ああ、お願い……二杯目はお砂糖とミルク多めね」

アマンダはその男っぽいキリリとした顔を思いっきり崩して、イカロスの頭を愛おしそうに撫でながらそう言った。イカロスはテーブルの上のティーポットを取るとアマンダのカップに注ぎ、ミルクと角砂糖を二個入れてスプーンで丁寧にかき混ぜるとアマンダの前にそっと置く。

「ありがとう、アマンダ姉さん。桃……って言うと……」

クレアは眼を宙に泳がせて何か考えている素振りを少ししてから続ける。

「ああっ！あの方ですね！ありがたく頂きます！」

クレアはにっこり笑いながらアマンダにウインクする。アマンダはメイプルシロップとバターのたっぷり掛かった焼き立てのパンケーキを頬張りながら、笑顔で頭の上で両手を使って大きな丸を作ってクレアに見せる。

「ロミ、私達の朝食をお願い。
私は、マフィン一個、卵は三個プレーンオムレツで。
それと……カリカリベーコン多めで！
アマンダ姉さんの桃はカットしてバニラアイスを添えてね」

「かしこまりました、クレア姉様」

クレアのオーダーにロミはスカートの裾を広げ膝を少し折って挨拶してから、サンテラスの奥にあるキッチンへ消えて行った。

「卵三個……くれあ、オ疲レダナ。
昨夜ノ客、激シカッタカ？」

クレアのオーダーに反応して、特徴ある口調の声が飛んで来た。クレアが声のする方を見ると、そこには透き通る様な白い肌と、膝まである癖のない白銀の髪、ルビーをはめ込んだ様な真っ赤な瞳、そして上の方が長く鋭く伸びた珍しい形の耳を持つ女性が座っていた。彼女の名は『ヘルガ＝シュッターマイヤー』二十七歳、中堅所の『薔薇の乙女』。ヘルガは絶滅した『妖精族』の血を引く女性で、この世の物とは思えない美しさは、歴代『薔薇の乙女』の三大美女の一人に入ると称えられる程だった。ちなみにクレアの美しさは五本

の指に入ると言われている。しかもヘルガにはシーブラムと言うギターに似た楽器の名手であり、弾き語りをさせたらこの国一番とも言われていた。横には腰の曲がった老婆が座ってる。ヘルガの付き人『クン』である。

「姫様、サラダのお代りをお持ちしますね」

クンがヘルガを下から見上げる様にして尋ねる。

「れたすトきゅうりダケデ、どれっしんぐナシダゾ！」

ヘルガのオーダーを聞くとゆっくりとイスから降りてキッチンの方へ歩いて行く。

「シンシアがさる方に無理矢理押し込まれた新規の客だったんだけど、
良く居る『ソフィア姫を力ずくで』って妄想が好きな奴だったのよ。
部屋に入って挨拶もそこそこに押し倒されて、
新調したてのドレスをビリビリに引き裂いて……もう大変だったわよ！
まあ、チップの払いは良かったからマシと言えばマシの方だけど」

クレアは、窓際に空いていたお気に入りのテーブルの椅子に腰を下ろしながら顔をしかめてヘルガに言う。

「ソレハ災難ダッタナ。
くれあ、アノどれすスゴク気二入ッテタノニナ。
しんしあ二、文句言ッテ、モウ一着作ラセル、ヨロシ」

「もちろんそのつもりよ！
これって労災みたいなもんだもん！
私もちで作り直すのは納得いかない！」

クレアはわざと頬を膨らませて言った。そんなクレアを見てヘルガは笑いながら頷き、コップに立てられていたニンジンスティックを三本一緒に手で掴むと口の中へ放り込む。

# 第5話　薔薇の乙女たち　～その2～

「クレア！待ってたんだぞ！これ見てくれよ！」

アマンダとヘルガの話が終わったのを見て、美青年がクレアの所に数冊の本を持って駆け寄って来る。彼、いや正確には『彼女』の名は『シーヴァ＝エクダル』クレアとほぼ同い年の二十四歳。綺麗なブロンドの髪を美しい首筋が見える様に短くカットして、茶色の瞳を持つ、体形もクレアに良く似た美しい娘だった。彼女はいつも若い男性貴族の着る服を身に纏っていた。しかし、彼女自身は特にレズの趣味がある訳ではなく男装しているのはあくまでも自身の『商売上の売り』にすぎなかった。それよりも本当の彼女の魅力は類稀（たぐいまれ）なる彼女の『歴史』と『法』に対する知識であった。国家公認の『歴史博士』『法博士』の称号を持つまさに歴代『薔薇の乙女』で一、二を争う『才女』だった。彼女のテーブルには、そんなシーヴァをにこやかに見つめるメイド服を着た二十歳程の娘が居た。彼女の名は『ニーナ』、シーヴァの付き人である。

「ご主人様、先にお食事を……
せっかくの朝食が冷めてしまいますよ」

シーヴァはニーナを振り返って真剣な眼差しで捲し立てる。

「昨夜、寝る前にここの矛盾に気が付いて、そしたら……
もう気になって気になって眠れなかったんだ！
クレアの仕事が終わって帰って来るのを、
今か今かとイライラしながら待ってたんだよ、僕は！
食事なんか、後、後！」

「はいはい……わかりました、ご主人様」

ニーナはそんなシーヴァを呆れ顔で見て笑う。

「……で、シーヴァ、私に何か聞きたい事があるの？」

クレアは興奮して少し頬が赤く上気しているシーヴァの顔を覗き込みながら尋ねた。シーヴァはクレアの横の椅子にどっかりと座ると、クレアの前に数冊の旧い本をそれぞれ広げて早口で捲し立てる。

「第五代クロフォード王アルヴィンについての記述なんだけど、こっちとこっちの本ではアルヴィンとエレーナは『王と妃』なんだが、

この本だと二人は『兄と妹』と記述されてるんだ。

結構マイナーな人物なんでどっちが正しいのか決定的な資料がない。

それで『王朝マニア』のクレアなら、何か知ってるかなと思ってさ」

『ソフィア姫を完璧に演じる事』を売りにしているクレアは、王朝関係の知識については客達の間でも定評があった。皆、知的な事でも有名な高級娼婦『薔薇の乙女』と言えど、王朝関係の細かい裏事情にまで精通している者は非常に珍しい存在だったので、クレアはいつの頃からから同じ『薔薇の乙女』達や客達の間ではかなりコアな『王朝マニア』として認識される様になっていた。実際は、クレアは『ソフィア姫』その人であるので、その程度は当然と言えば当然の知識ではあったのだが。

「それはね、シーヴァ……どちらも正しいのよ」

クレアはそう言うとシーヴァにわざと意味ありげな笑みを投げかける。

「えっ！えっ……どう言う意味、それ？　……えっと……
……待て、待て……考えろ！考えるんだ！……
……あっ！ああっ！……まさかそれって！」

「そう！二人は『兄妹』にして『夫婦』の関係だったの。
当時はスキャンダルを恐れて何度も二人を引き裂こうとしたらしいけど、
結局二人の愛の絆は強くて心中未遂までやらかした物だから、
結婚を許したの……結局、子供を二人も作ってるしね。
公式記録ではエレーナは前王の養女で血縁関係はないって事にして」

シーヴァはクレアの言葉を聞いて、したり顔で何度も頷く。

「そうか！そうか！それで公式記録やお堅い歴史書は『王と妃』で、
ちょっと眉つば系の記述が多い本には『兄妹』なんだ！」

シーヴァとクレアは歳も近い上に、シーヴァの趣味とクレアの知識が微妙に絡み合うので『薔薇の乙女』達の中でも特に仲が良かった。
それは姫として特別な環境で育ったクレアにとっては初めて出来た『友人』でもあった。

疑問が解けて満足げな顔になったシーヴァは持って来た本を抱えて自分のテーブルに戻って行った。それと入れ違いにロミが二人分の朝食を乗せたワゴンを押してクレアのテーブルに帰って来る。

「お待たせいたしました、クレア姉様」

ロミは手際良く、ワゴンの上の朝食とフォークナイフをテーブルの上に並べて行く。クレアの前には、牛乳の入ったコップ、マフィンとプレーンオムレツとカリカリに焼いたベーコンが三枚乗った皿と、それにカットされた桃にバニラアイスが添えられたデザートの小皿、お茶のカップが、自分の前には、クレアより大きめのマグカップに入った牛乳とバターとはちみつが塗られたトーストが一枚乗った皿と、クレアと同じデザートの小皿が並べられる。最後にポットからクレアのカップにお茶をゆっくりと注いだ。

「じゃあ、朝食にしましょう……ロミ……」

ロミがすべての準備を整えてクレアの横の席に座るのを見てそう言うと、二人は手を合わせて神に感謝の祈りを捧げてから朝食を食べ始める。

クレア達『薔薇の乙女』の朝食は明らかに女性としては量が多過ぎ、若い男性の朝食並みにボリュームのある物だった。しかし、それは深夜まで（クレアに関しては徹夜で）重労働する彼女達にとっては朝食をしっかり食べる事は消耗した体力を回復させる上で必要不可欠な事だった。彼女たちは朝しっかり食べる代わりに、仕事で客と夕食を共にする時以外は、彼女達の通常の夕食はかなり質素な物であった。クレア自身、ここに来た当初はそれが分からず、劣悪な監禁生活ですっかり食が細くなった事もあり、朝食が沢山食べられず倒れる事が多々あった。その経験からクレアも今では朝食を多過ぎるくらいに取る様にしていた。

クレアが、食事を終えてナプキンで口を拭く頃には、他の『薔薇の

乙女』達は食事を終えて、それぞれの席でつろいでいた。ヘルガが奏でるシーブラムの音色が静かな朝のサンテラスに心地良く流れ、アマンダはイスの背に寄りかかりうたた寝をし、シーヴァは持ちこんだ本を静かに読んでいた。

その中で一人、他の『薔薇の乙女』とは少し雰囲気の違う娘が一人テーブルで時々考え事をしながら、何かを一心に書き止めていた。その娘は、艶やかで癖の無い黒髪を腰まで伸ばし、磨き抜かれた碁石の様に輝く黒い瞳を持ち、やや彫の浅い顔と小柄な体、黄色みがかった肌は、クレア達とは明らかに違う東方系の人種である事が一目瞭然だった。さらこの娘は明らかに子供の着る様なフリルの多い可愛いドレスを身に纏(まと)っていた。彼女の名は『アル』。本当の歳は十九だが、着ている服の影響もあり、この国では見かけ上の歳はどう見ても十四、五の少女にしか見えず、彼女の客の半分は彼女を幼さの残る美少女として求めていた。そして残りの半分は彼女の『作家』『詩人』としての才能に惹かれて彼女を求めた。実際、彼女は『アル＝ローズハウス』と言う名前のベストセラー作家でもあった。付き人は隣に座り彼女を優しく見守る執事の格好の美青年『ルイ』である。

ただ、アル自身が非常に無口な事もあり、素性などに謎の多い『薔薇の乙女』だった。もちろん決して他の乙女達と仲が悪い訳ではないのだが。そもそも『アル』と言うのも愛称であり、彼女のペンネームで、本名はマダムのシンシア以外は誰も知らない程であった。『薔薇の乙女』になったのは四年前の十五の時であるが、最長老のアマンダによると彼女が十年前に『薔薇の乙女』として来た時にはすでに使用人としてアルはここに居たらしい。

「お嬢様、コーヒーのお代りは？」

ルイがアルの前のコーヒーカップが空になっているのに気が付いて小声で声を掛ける。

「エスプレッソ……ダブル、ブラックで……」

アルはテーブルの上の紙に羽ペンで文字を書き連ねながら視線を動かさずに消え入る様な小声で答える。

クレアはナプキンをテーブルの上に置くと席を立ち上がり、アルの後ろにそっと近づいて、一心に執筆を続けている彼女に小声で声を掛ける。

「アル、それ新作？」

クレアの声に、アルはゆっくり紙面から視線を上げて彼女を見上げる。

「あっ……クレア……そう……新作。
ちょうど良かった……クレアに意見が聞きたいの……」

普段、他の乙女達とはあまり口をきかないアルだが、クレアとは比較的話す機会が多かった。もちろん彼女の事、べらべらと長話しする訳ではなく、ひととき短い会話を静かに交わすだけだった。クレア、いやソフィア姫に兄弟はなく子供の頃から常に本が彼女の遊び相手だった。その為に彼女はいつの間にか人並み以上の文学の知識が身に付いていたのだ。アルにとって、クレアは大好きな文学の話を同じレベルで語れる唯一の存在だった。

## 第6話　悪夢の記憶

「アル、私に聞きたい事って？」

クレアは、見上げるアルに優しい微笑みを浮かべる。

「新作……幸せに暮らしていた小国の美しい姫が、
ある日、隣の大国に侵略され両親を殺され、自らは囚われの身に。
結局、幼馴染の騎士が仲間と共に姫を救い出すと言う典型的な叙事詩……」

アルのその言葉に、クレアは自らの過去が重なり一瞬表情を曇らす。
アルはクレアの表情の一瞬の変化を見てとったがその事には何も触れず続ける。

「ラストで悩んでるの……
最後は騎士との結婚式の場面で終わるのだけど……
姫は、囚われてる間に一度だけ国を侵略した王子によって辱め(はずかし)を受けてる。
その事は彼女と当事者の王子以外誰も知らないし、
しかも、その王子もラスト近くで騎士によって殺されている……」

クレアの呼吸が少し乱れ始める。いつの間にか彼女の体は軽く汗ばみ震えていた。しかし、ここに居る誰も気がつかない程微かな変化であった。クレアとて三年近くここに居れば、職業柄激しい感情の起伏があっても相手に悟られない訓練ぐらいは出来ていた。

「一つの案は……
騎士が控室で花嫁となる姫を待つ間に、

姫はたった一度とは言え辱めを受けた自らを恥じ、
すべてを告白する手紙を騎士に残して
純白のウエディングドレスに身を包んだまま、
自らの咽を王家の宝剣で刺し自害する……と言う結末。
もう一つの案は……
恥辱の過去を自らの胸の奥に封印して、騎士との結婚に臨む。
過去の傷を己の生きる力に変え、
その懺悔の気持ちから深く深く騎士につくし、幸せな家庭を築き、
新たな国の為に力強く生きて行く……と言う結末。
クレア……あなたならどちらの結末を選ぶ……？」

クレアにとっては残酷とも言える問い掛けに、彼女はしばらく目を閉じうつむいて考えた後、アルの目をしっかり見ながら答えた。

「アル……その姫は、決して『死』を選ばないと私は思う。
姫にとって、自害する事は『運命』に負ける事。
それにその王家最後の一人なら尚の事、
自らの個人的感情より王家の血を絶やさない事を最優先に考えるはず。
だから、姫はどんな『恥辱の記憶』にも耐えて生き抜くはず」

やや強い口調でそう言ったクレアを見て、アルは静かに頷く。

「私もそう思ってた……
ソフィア姫を演じられるクレアがそう言うなら決まりね……」

アルはそう言うと、再び紙面に視線を落とし筆を走らせ始める。クレアは一度深い深呼吸をすると固くなっていた表情を緩めて自分の席に戻ろうとした。その時だった。

「『死』は愚か者の選択……
『生』は賢者の選択……
生きて行けば、いつか汚辱を雪ぐ事も出来る」

アルが紙面から目をそらさずに　独り言の様に小声で呟いたのをクレアは聞き逃さなかった。アルの言葉に彼女はびくりと体を震わせて一瞬立ち止まる。しかしクレアはアルを振り返る事もなく、そのまま自分のテーブルに戻って行った。

テーブルに戻ってきたクレアの微妙な変化に気がついたロミが、隣に座るクレアに小声で尋ねた。

「ご気分でも悪いのですか、クレア姉様？
少し、お顔の色が良くない様に見えますが……」

クレアはカップに半分ほど残っていた冷めたお茶を飲み干すと無理に笑顔を作ってロミを見る。

「大丈夫よ……昨夜の疲れが出てるだけ」

それでもロミの目はやはり誤魔化せない様だった。ロミは心配そうにクレアの額にそっと手を当てる。

「熱は無い様ですね。
クレア姉様は、早くお部屋に帰ってお休みになっていて下さい。
ここを片付けたら私もすぐに行きますから」

「ありがとう、ロミ。そうせてもらうよ」

クレアはロミから部屋の鍵を受け取ると彼女の頭を軽く撫でてから、席を立ち、『離れ』のエントランスホール正面の階段を上がって行く。

正面の階段を上がるとそのまま奥へ伸びる廊下があり、その両側に『薔薇の乙女』達の部屋が三部屋づつ並んでいた。向かって左奥がアマンダ、左中央がアル、左手前ヘルガ、右手前がシーヴァ、そして右奥の部屋がクレアの部屋になっていた。右中央の部屋は現在空き部屋になっている。クレアの部屋の横が空き部屋になっているのは、彼女だけ常に『夕方から早朝まで（オーバーナイト）』の仕事時間で他の乙女たちとやや生活リズムが違うのをマダムのシンシアが配慮して部屋割を決めたからだった。

クレアは自分の部屋の鍵を開け、ドアを開ける。右手にトイレと小さなバスルームが並び、左手には大きなウォークインクローゼットがある。そのまま進むと正面に朝日が燦々《さんさん》と降り注ぐバルコニー付きの大きな窓が並ぶ寝室兼リビングになる。ここにはクレアが使う天蓋付きのキングサイズのベッドが左の壁際に置かれ、右の壁際には飲み物と軽い食事程度は作る事の出来るミニカウンターが造り付けられていた。中央には大理石のテーブルと革のソファーが一セット置かれていた。

ミュールを脱いで、クレアは自分のベッドの上に身を投げる様にして仰向けに横たわる。彼女の視界一杯に星座に基づく刺繍の施された立派な天蓋の織物が広がる。クレアの耳の奥で先ほどのアルとの会話が微かに繰り返されていた。見えない不安から身を守る様に体を丸めたクレアの呼吸と心臓の鼓動がまた少し早くなる。眠ろう軽く目を閉じると、彼女の脳裏に悪夢の記憶が蘇ってくる。

石の台の上に湿ったマットをひいただけのベッドに、汚れた薄い毛布一枚を裸の体に巻きつけただけの姿で横になっていた。その時見たのは、煤(すす)でどす黒く汚れた石の天井だった。時折、石の床の上を鼠が走り、得体のしれない虫までも居た。窓もなく、明かりは松明(たいまつ)の炎だけ。昼なのか夜なのかも分からない。食事はコップ一杯の生ぬるいミルクと切りくずの様なパンが少しだけ。男達は勝手気ままな時にやって来て、自らの欲望を吐き捨てるかの様に乱暴に犯していった。覚えているのは、目の前にあった獣の様な男のぎらぎらした目。早く終わって欲しい、いつもただそれだけ願った。泣きたくても、涙はとうの昔に枯れ果てていた。ただスザクをはじめとするそこにいた男たちへの憎しみだけが生きる糧(かて)だった。すでに神の存在も信じなくなっていた。この世には悪魔しかいないと思った。その悪魔が自分の体を痛めつける為だけに毎日やって来る。そこはまさに地獄だった。

「ソフィア姫……今日も存分に可愛がってさしあげますよ」

不意に、いやらしい声と共に闇の中から悪魔の黒く太い腕が伸びて来た。彼女は悲鳴を上げる。

「いやっ！もう許して！」

その腕を払いのけようと両手を振り回して暴れる。

ベッドの上で、目に見えない何物かを払いのけようと暴れているクレアの異常な姿を見てロミは思わず悲鳴に似た声を上げる。

「クレア姉様！どうなされました！」

ロミの叫びにクレアは目を覚ます。彼女はいつの間にか浅い眠りに落ちていたらしい。ロミがクレアの体をしっかりと抱き締めて、彼女を心配げに見詰めていた。

「大丈夫ですか、クレア姉様？」

「ごめん、ロミ……
私……悪い夢を見てた……」

クレアが目を覚ましたのを確認して、ロミは彼女の体から手を離してベッドから降りると、反対側の壁際に造り付けられたバーカウンターへ行きコップ一杯の水と二錠の薬を銀のトレイに乗せて、またクレアの元へ帰って来る。トレイをベッドサイドのテーブルに置き、薬を手に取るとクレアに手渡す。

「いつものお薬です。気持ちが楽になってぐっすり眠れます」

「ありがとう……ロミ……」

クレアはそう言うと薬を咽の奥に放り込む。それを見てロミはすぐに水の入ったコップを手渡す。咽の奥に引っかかっていた薬を、クレアは渡された水で流し込む。

「クレア姉様……今日のお出かけは止めた方が良いのでは？」

「いや……逆にこう言う時だから気分転換に街に出たいんだよ。
このまま、眠るからお昼少し前になったら、起しておくれ、ロミ。
」

クレアは着ていたワンピースを脱ぎロミに手渡すと、絹の薄布一枚になり再びベッドに横になる。ロミが受け取ったワンピースをクローゼットに仕舞って再びクレアの元に帰って来た時には、すでに彼女は小さな寝息を立てていた。ロミはそっと、軽い羽根布団をクレアのむき出しになっていた肩まで引き上げてやる。

クレアをベッド脇に立って見下ろすロミの両方の瞳が、オレンジ色に輝き、引きずり込まれる様な漆黒の瞳孔がまるで蛇の様に縦長に変わる。愛くるしかったその顔も、ぞっとするほど無表情になっていた。

「ソフィア……あなたの半分はまだ悪夢の中にいるの？
しかし、もう決して元へは戻れない……
自身をクレアで染め上げる事でしかあなたは救われない」

抑揚の無い言葉でそう呟くと、再び、ロミは、いつもの瞳と表情に戻る。

「それでは、お昼前にまた起こしにまいります」

愛らしい声でそう言ったロミは、スカートの裾を広げ膝を折って、ベッドの上で静かに眠るクレアに挨拶するとそっと彼女の部屋を出て行った。

# 第7話　クレアの香り

「クレア姉様……お時間です。起きて下さい」

昼前にロミは再びクレアの部屋を訪れ、ベッドの上でぐっすり眠っていたクレアを可愛い手で軽く揺する。クレアの白い瞼が長い睫（まつげ）と共に開き、エメラルドの様な美しいグリーンの瞳がその下から現れる。

「あっ……おはよう……ロミ」

クレアは上半身をベッドから起こし、両手を上げて伸びをしてから、ロミを見てにっこり笑う。

「お部屋のお風呂にお湯を張っておきました。
お着替えの前に軽く汗をお流し下さい」

「うん……そうさせてもらおうかな」

クレアはそう言うと、ベッドから降りその場で着ていた薄布を足元に落して一糸纏（いっしまと）わぬ姿になる。長い手足に、陶磁器の様な白い肌、そして美しい曲線を描くその裸身は彫刻の様に美しかった。浴室に向かって歩く彼女の長いブロンドの髪を透して見える背中の『薔薇に囚われし聖女』は、彼女の体の動きに合わせて、あたかも薔薇の刺の痛みに身悶えするかの様な妖しげな動きをしていた。

クレアが湯船に浸かっている間に、ロミはクレアの外出用のランジェリー、ドレスと片手で持てる程の小さなバックをクローゼットから選び出しベッドの上に広げ、外出用の短い編み上げブーツを入口

のドアの脇の大きなシューズボックスから取り出しベッド脇の床に置く。次にベッド脇にあるドレッサーのジュエリーボックスからドレスに合うピアス、ネックレス、ブレスレットなどのアクセサリーを手際良くドレッサーのテーブルに並べ、最後に香水（パヒューム）の小瓶の候補を三本選んでそれもテーブルの隅に並べておく。香水のチョイスは選んだドレスやアクセサリーから大体の候補を数本選ぶまでがロミの仕事で、最後の一本に絞るのはクレアの楽しみにの一つだった。

ロミが香水の候補を選び終えると、クレアが髪を結い上げて、白いバスローブを羽織った姿で浴室から出て来た。クレアがドレッサーの前のイスに座ると、ロミはすぐ後ろに立ち彼女の髪をほどいて乾いたタオルで良く拭いて湿気を取った後、丁寧にブラッシングを繰り返す。クレアはロミの持つブラシの心地よい刺激に気持ち良さそうに目を閉じる。クレアの髪が綺麗にブラッシングされると、ロミはその髪を肩まではゆったり広げ、その先を柔らかめに編み上げて行き先端を赤いリボンで結ぶ。

「クレア姉様……髪は結い上がりました。
お立ちになってあちらでランジェリーとドレスを……」

ロミはそう言うと、クレアの手を取りベッド脇に連れて行く。ロミがバスローブを脱がせるとクレアは自分で絹のランジェリーを身に付ける。それから、ロミの手を借りながら彼女の選んだドレスを纏い、ブーツを履く。

「うん……このドレス！
私も今日はこのドレスが良いって思ってた。
いつもながら、ロミのドレスを選ぶ目は間違いないね」

ベッド脇の大きな姿見の前に立ち、色々と体を動かしながら確認を

して、クレアはロミに満足げにそう言う。

「恐れ入ります……」

ドレスを着るとクレアはドレッサーのイスに再び座る。彼女がイスに座るとすぐさまロミはドレスに化粧品が付くのを防ぐ白い布を彼女の首に巻く。元々、素顔でも十分過ぎる程美しいクレアであったが、それでも外出時は薄いブルーのアイシャドーと細めに引いたアイライン、極々薄いチークと、控えめなピンクのルージュを手早く付ける。これは自分をより美しく見せる為と言うより、『薔薇の乙女』として外出する場合の最低限のマナーと言う意味合いが強かった。もちろんクレアと言えど、仕事になれば、当然化粧はもっと濃くなる。

顔を上下左右に動かしながら、ドレッサーの鏡をみてムラなどないか確認してから首に巻いた汚れ防止の布を取って、クレアはピアス、ブレスレットを身に付ける。ロミはそれを見てネックレスを手に取りクレアの首に掛け、後ろの留め金を留める。そこまでですると、クレアは再び大きな姿見の前に立ち、ドレス、アクセサリー、化粧のバランスを確認する。

「うん……これで良し……後は……」

そう呟くとクレアは、ドレッサーの前に戻りテーブルの上にロミが置いた三本の香水（パヒューム）を手に取って、それぞれ濾紙（ろし）の切れ端に数滴付けて香りを確かめながら思案顔になる。

「さすがロミね……ここまでの絞り込みは完璧。
でも、この先が難しいのよねぇ……

クルーゼルは、まるで深い森の中にひっそり咲く薔薇の香り。
シムカは、果樹園に迷い込んだような甘い果実の香り。
アクセームは、やや男性的なムスクとじゃ香の混ざった香り。
どれも捨てがたい……
これがお客とのデートならクルーゼルで良いんだが……」

やがてクレアはシムカの小瓶を手に取ると指先に一滴垂らし、両耳の後ろとへ軽くすり込む。その後、手首にも一滴垂らし両手首をすり合わせる。

「やはりシムカでしたか……私もそう思っておりました……」

ロミがクレアの顔を見てに満足げに頷く。ところがクレアはアクセームの小瓶も手に取る。

「えっ！クレア姉様……何を？
香水はそれ単体で完成された物。
混ぜたら台無しですよ！」

クレアがアクセームの小瓶の蓋をひねるのを見てロミが驚きの声を上げる。ロミの顔を見てクレアは何も言わず意味ありげに、にやりと笑うと、ドレッサーの中から綿棒を取り出しその先をアクセームの小瓶の中へ入れ、ほんの僅(わず)か綿棒の先を浸す。さらにその綿棒を何度も手に持ったまま良く振ってから、左右の耳の後ろにそれぞれ一度だけその先をそっと当てる。

「ロミ……香ってごらん……」

その言葉にロミはクレアの首筋辺りに顔を近づける。

「あっ！……これは……
素敵……何か分からないけどシムカより大人の感じ！」

「シムカ単独じゃ、私達には甘過ぎるんだ。
これがロミみたいな少女や、貴族の生娘なら良いのだがな。
そこで微かに男性的なアクセームを添える事で、
色々訳ありの私たち『薔薇の乙女』にピッタリの香りになるって訳。
元々香水って奴は、付ける人の持っている体臭と組み合わさって本当の香りが出来る物なんだ。
だから同じ香水を使っていても、
ロミと私じゃ微妙に他人が感じる香りは違うんだよ」

クレアはそう言いながらイスから立ち上がる。

「香水に関しては『館』の中でもクレア姉様が一番こだわってますよね。
天気や、お客様によって必ず変えてる。
時には同じお客様でも違う時がある……」

ロミがクローゼットからつばの広い帽子を取り出しクレアに渡す。

「私の場合は、色々演じる必要があるからな。
仕事中は裸だから、服装なんかで誤魔化せないから、
香りで私自身のイメージを微妙に変えてるんだよ」

クレアは手渡された帽子を被ると、ベッド脇に行きマットの下からお金の入った革袋を探り出す。そしてベッドの上に置かれていた小さなバックにある程度の金額を袋から取り出して入れると、革袋は再びマットの下に戻し、バッグを片手に持つ。そして、にっこり笑

ってロミの頭を撫でる。

「じゃあ、行こうか！ロミ」

「はい……クレア姉様」

部屋のドアに向かって歩いて行くクレアの後を、ロミは愛用のポシェットを肩に掛けながら追う。ドレスアップして帽子まで被ったクレアは、誰が見ても娼婦などとは思えず、どこかの貴婦人その物だった。

二人が、一階のエントランスホールに降りると、アマンダ達他の『薔薇の乙女』達は皆いつものサンテラスの思い思いの席で昼食をとっている最中だった。階段を下りてきたクレアに真っ先に気が付いたシーヴァが手を振りながら、からかう。

「おっ！お姫様、おめかしして街へお出かけかい？」

ヘルガは手に持った野菜スティックを頭の上で振り回しながら声を上げる。

「くれあ！新シイどれす注文シテクルノ忘レルナヨ！」

膝にひいていたナプキンを手に持ってひらひら振りながらアマンダもクレアに声を掛ける。

「クレア！あんた明日はお休みだからゆっくり楽しんでおいで！
くれぐれも、街の男共（おとこども）には油断するんじゃないよ！
まあ私ら『薔薇の乙女』に手を出す馬鹿はいないとは思うけどね」

相変わらず食事中も手元に原稿用紙を置いて執筆していたアルも言葉はなかったが顔を上げて笑顔で手を振る。

クレアも一度エントランスホールの真ん中で立ち止まるとサンテラスの方を向いてドレスの裾持って広げながら膝を折って食事中の乙女達に、にこやかに笑って挨拶をする。

「では、行って来ます！」

クレアはそう言うと『離れ』のドアを開けて渡り廊下へ歩いて行く。ロミも彼女の後を一歩遅れてついて行く。

「くれあ！土産忘レルナヨ！」

クレアの背中をヘルガの陽気な声が追う。クレアは振り返らず手だけを上げて答えた。

# 第8話　シンシアとその執事

クレアとロミが本館の『薔薇の館』のエントランスホールに着くと、中央に置かれた客用のソファーにシンシアが長いパイプを付けた煙草を吸いながら座っていた。彼女の後ろには、シンシア自身の執事であり、『薔薇の館』のすべての使用人の長でもある『ロメオ＝メカイ』が立っていた。彼は歳の頃なら三十代半ば、細身の長身にブロンドの髪にゴールドの瞳を持つロミと良く似た雰囲気を持つ美しい男であった。そのロメオと目があったクレアは思わず目を逸らし頬を少し赤らめた。それをあざとく見つけたシンシアは少しいやらしい笑いを口元に浮かべ早速クレアをからかう。

「ふふふっ……クレアも他の乙女達同様に『ロメオ』には……」

その言葉にクレアはシンシアの目の前まで駆け寄り喰ってかかる。

「からかわないで、シンシア！もうあれから二年半以上経ってる！彼にはもう特別な感情は持ってない！」

「クレア……強がるのは止めな。
そう言う事は正直に認めた方が可愛い女って奴よ。
三カ月の間、恋人同士の様に過ごした相手でしょ、彼は。
まあ、それはあなたに限った事じゃないけどね」

シンシアは、テーブルの上の灰皿に煙草の灰を落としながらクレアを見て言う。自分の事が話題に上っているのにロメオはまったく無表情のまま、シンシアの後ろに立ったままだった。

実際、クレアは今でもロメオに対して特別な感情を少なからず持っ

ていた。例えそれが彼女を一人前の『薔薇の乙女』に育て上げる為の『仮初めの愛』だったと頭では分かっていても、あの甘美な三カ月は到底忘れる事の出来ない想い出だった。聡明なクレアの事、あの三カ月の『仮初めの愛』はシンシアによって周到に計画された『薔薇の乙女』をこの場に繋ぎ止める『精神の鎖』にもなると見抜いていた。だがそんなクレアをしても、その『鎖』から今も逃れられずにいた。もし今ロメオから『僕と逃げよう』と甘い言葉で誘われたら、クレアはあの厳しく残酷な『掟』があっても、その誘いを断る自信が無いほどだった。

「それよりシンシア！この間の客がダメにした私のドレス、
今から街に行くついでにもう一着オーダーしてくるけど、
これって『館』持ちって事で良いわよね！」

クレアは、その話題に深入りされるのを恐れて、慌てて話題を変える。

「ああ、その事ね……。
しょうがないわねぇ……今回はこっち持ちにしてあげる。
請求書は『薔薇の館』に回してくれる様に店には言っておいて」

シンシアは諦め顔で両手を広げながらそう言うとゆったり煙草を吹かす。それを聞いてクレアは後ろに居たロミを振り返り、したり顔でウインクする。

ちょうどその時、エントランスホールに玄関の呼び鈴が鳴る。

「どうぞ！」

シンシアが入口の方へ声を掛けると正面の立派な扉が開き、馬車の御者が深々と頭を下げながらおずおずと入って来た。

「すいません……馬車の用意が整いました」

「あっ！ご苦労さん！今、行かせるから！」

「へいっ……マダム」

御者がまた外へ出て行くと、シンシアはクレアの方を向いて、煙草のパイプを咥えたまま右手を上げて手の甲を向けてしっしっと振る。

「さあ、行った！行った！
せっかくの休みなんだから、楽しんでおいで、クレア！
子供じゃないんだから門限なんて言わないけど、
夜中に街の男に襲われたとか言って、
泣いて帰って来ても慰めてなんかやらないよ！」

そんな軽口を叩いたシンシアに、くるりと背を向けて振り返りもせず片手を上げてひらひらさせながらクレアも負けずに言う。

「大丈夫よ！襲われたらちゃんと特別料金ふんだくってやるから！
じゃあ、行ってくる！」

そう言いながらクレアはロミを連れてエントランスホールの扉を開けて出て行った。

「やれやれ……まったくクレアの奴……
今のやり取りを見たら誰だってクレアが『元お姫様』とは思わな

いよな」

シンシアは、クレアとロミが扉の向こうへ消えるのを見て、煙草を深く吸い込み、ゆっくり煙を吐き出しながら呟く。そして、天井を仰ぎ、何かを思い出す様に遠い目をする。

「まったく、あのスザクの狸爺（たぬきじじい）め……

面倒な奴を高値で売りつけやがってさ。

最初は、『ソフィア姫の身代わり』にするつもりで拾って来た街娼が、

不要になったんで私の所に押し付けてきたなんて簡単に思ってたんだ。

それでも気になって、ロメオ、お前に調べさせてたら、ぶったまげたよ……」

シンシアは一度ロメオを見上げてウインクする。それでもロメオは無表情のままだった。

「何とまぁ、本物の『ソフィア姫』様だったとはねぇ……

さすがの私も、ロメオの報告聞いた時には腰を抜かしたよ。

その『聞くも涙、語るも涙』の身の上話を聞いた後じゃ、

『薔薇に囚われし聖女』の刺青を刻んだ時の事も納得できる。

普通の街娼じゃ、麻酔無しであんなに長い時間、耐えられっこない。

しかし、よくお城育ちのお姫様が、

あんな生き地獄を経験して気も狂わずに正気を保てたもんだ。

普通の娘なら完全に気が狂ってるよ……。

だから、私もクレアの奴を高く買ってるんだけどさ。

しかし、ここの客もまさか『ソフィア姫自身がソフィア姫を演じてる』

なんて夢にも思ってないだろうねぇ。
それ考えたら、今のクレア一晩の値段なんてバーゲン価格だよ！」

そう言ってシンシアは咥えていた煙草のパイプを灰皿に置いて一人で大笑いする。そしてひとしきり大笑いした後、彼女は無表情のまま後ろに立っていたロメオのネクタイを掴んで顔を急に引き寄せ、その耳元で囁く。

「それから、ロメオ、お前もだ……
クレアとの『三カ月のハニムーン』終わった後、お前何て言った？
忘れたとは言わせないよ……
『クレアを本当に商品として店に出すのか？』って私に言ったよな。
他の娘の時は淡々と仕事して、終わった後はケロリだったのにさ。
やっぱり『ソフィア姫』様は堪（たま）らない美味だったのかい？
何なら、もう一度、改めてクレアを自分の物に堕としてみたいか？」

「御命令とあらば、もう一度彼女を堕としてみせますが……」

それでもロメオは無表情のまま抑揚のない声でそう答えただけだった。シンシアはロメオのネクタイから手を放して大きなため息をつく。

「まあ、お前に何言ってもしょうがないのは分かってたけどね。
しかし、お前と言い、ロミと言い、
何でお前らは、ああもクレアに御執心なんだ？
……と聞いても無駄なんだよな、分かっちゃいるんだが……」

灰皿に置かれたパイプの先の煙草はすでに燃え尽きていた。シンシ

アは新しい煙草をパイプの先に差し込むとその先にマッチで火を付けて一旦大きく吸い込み煙草に火が移るのを確認してから、静かにゆっくり煙を吐き出す。

「あなたの言われた……
『ソフィア姫が美味だったか？』かと言う問いは正しい。
ただし、美味なのは『体』ではない……『魂』ですよ、マスター。
ロミの奴もそれをよく知っている。
姫の魂は、堪（たま）らなく美味な香りがする……」

ロメオはシンシアを見ながら静かにゆっくりと言った。シンシアはそのロメオを見て目を丸くする。

「おやまあ！お前がそんなにペラペラ語るのは久しぶりに聞いたよ。
しかも、そんな事を言うなんてね。
そうか……やはり『ソフィア姫』……
いや今は『クレア』か……あいつは『特別』って訳か。
私の運もまだまだ捨てたもんじゃないな」

「彼女は、あの当時のあなたに似てる。
あなたの『魂』も堪らなく美味ですからね。
それはあなた自身も気が付いているのではないですか、マスター」

シンシアは再びゆったりと煙草を燻（くゆ）らせる。

「まあ、良いさ……とりあえず『クレア』は私の『切り札』。
最後まで大事に持っていれば、世の中どう動いても損はないさ。
お前らだって、そうだろ？」

「イエス……マスター……」

ロメオも元の無表情に戻って静かにそう答えた。

しばらく無言で煙草を燻らしていたシンシアが、その煙草を灰皿に押し付けて火を消し立ち上がる。

「さて、そろそろ、開店準備をしますか……
ロメオ、お前『離れ』の方へ行って乙女たちの様子を見て来ておくれ。
私は、その間に今日来店予定の客の確認をしてくるから……」

そうロメオに命じるとシンシアは、奥の自室へ向かって歩いて行った。

「かしこまりました……マスター」

ロメオはシンシアの後ろ姿にそう言ってから、テーブルの上の灰皿を手に取って奥へ下がって行く。

# 第9話　国と館と乙女の事情

クレアとロミを乗せた馬車は森の中を街に向けて走っていた。

『薔薇の館』から最寄りの街『ティボーシア』までは馬車で約三十分程の距離。そしてティボーシアは『ダルメハイン法国』の首都『シゼルカンド』までは馬車で一時間の距離に位置していた。元々ティボーシアは首都シゼルカンドへ向かう街道の小さな宿屋街だった。しかし二百年程前に『薔薇の館』がこの街の外れの森の中に建ってからは、そこへ通う貴族、騎士とその付き人たち目当ての宿屋、土産屋、食堂などの店が競う様にして軒を連ねて建ち、今では首都の中堅衛星都市の一つに数えられるほどに発展していた。また街の一画には『薔薇の館』には出入りできない身分の者たち相手の『薔薇の宿』を真似（まね）た娼館も建ち並び、さらには夜になれば街角に立って客を引く街娼もそこかしこに見られるほどの『夜の歓楽街』としても知られる様になっていた。皮肉な物で街がそうなればなるほど、本家とも言える『薔薇の館』と『薔薇の乙女』の評判はさらに上がっていった。

走る馬車の中でクレアとロミは進行方向に向かって並んで座っていた。クレアは窓の外に流れる景色を窓枠に頬杖をついてぼんやり見ながらロミに話しかける。

「ここへ来て……と言うより私は売られて来たから、
連れて来られてって言う方が正しいけど……
最初は戸惑ったよ……この『ダルメハイン法国』って物に。
元々、私は隣の国の『クロフォード王国』育ちだからね。
今じゃ『クロフォード共和国』って言うんだっけ……」

クレアは『クロフォード共和国』と言った時だけ、顔が明らかに憎々しげになり、吐き捨てる様な口調になっていた。

「『法国』って物が全然理解できなかった。
最初は『法王グリエル五世』って普通の王様と同じと思ってた。
まさか『枢機卿』と言われる貴族の親玉みたいな連中の中から、なんて言うんだっけ……選択じゃない……推挙じゃない……
あっ！思い出した！『選挙』だよ！『選挙』！
その『選挙』って言う投票みたいな物で選ぶんだってね。
王様をミスコンみたいに投票で選ぶなんて私には今でも理解出来ない。
その上、『法王』様でも自由に国を治められる訳じゃなくて、
『ダルメハイン法典』って言う書物に書かれている通りにしか、国を治める事が出来ないんだろ？何か釈然としないんだ」

ロミはそう言うクレアの不満げにもみえる表情を見ながら言う。

「『法国』って言う国家形態は珍しいですからね。
かえって『共和国』形態の国から来た人の方が理解し易いかも」

今度はロミの顔を見てクレアは続ける。

「だからシーヴァの事も『法学者』って言うから、
普通に犯罪人を取り締まる法に詳しい学者って思ってたんだ。
それが『ダルメハイン法典』の知識を国に認めれていると言う事で、
『枢機卿』になれる資格を持ってると言うじゃないか。
私の感覚じゃ、王族の一人って感じだよ、驚いたのなんのって……
しかし、シーヴァってそんなにすごい肩書あるのに、

何で、私と同じ『薔薇の館』に居るんだろうって時々不思議に思うんだ」

「残念ながら、私もシーヴァ様の事情は存じ上げておりません。その本当の理由はマダムのシンシア様しか分からないと思います」

クレアは馬車の窓を少し開けて風を入れ、そのまま、また窓の外を見ながら話す。

「私の場合は、クロフォードの主都『グローリア』で街娼やってて、商売中に客の財布盗んで逃げる途中に将軍の手の者に捕まって、あの『ソフィア姫』に似てるから高く売れるだろうって理由で、死刑台に吊るされる代わりに『薔薇の館』に売り飛ばされたって、情けない事情だから別に隠す必要もなく誰もが知ってるし……」

クレアは偽りの記憶と事情をさも本当の様に淀みなく話す。

「アマンダも同じ街娼上がりだけど、あっちは努力に努力を重ねて、娼婦の頂点である『薔薇の乙女』まで登り詰めたって事で有名だしね。

でも謎だらけで有名なアルや、シーヴァ、それとヘルガの事情って私も三年近く『薔薇の館』に居るけど良く分からない。

ヘルガは訛りがキツイからどっか遠い国育ちって事くらいは分かるけど。

まあ、私たち『薔薇の乙女』同士はお互いの過去は詮索しないって暗黙のルールがあるし、私も特に知りたいとも思わないけどね」

「事情はともあれ……

クレア姉様のクロフォード訛りはすごく素敵な響きです。

お客様にも、クレア姉様の言葉は、

『綺麗で優雅なクロフォード王朝訛り』だってすごく好評ですよ」

ロミのその言葉に、クレアは外を見たまま、やや悲しげな表情を浮かべる。

「元は汚い下町訛りだったのを、例のシンシアの研修で矯正されたんだよ。

お客に無理なく『ソフィア姫』と思い込める様にってさ……」

二人を乗せた馬車はやがて森を抜けて平原に出る。すると間もなく首都へ通じる大きな街道と合流する。今まで走って来た道は、ほとんど『薔薇の館』専用みたいな物なので客たちがやって来たり帰る時間でなければ滅多に人や馬車などは通らない。しかし、さすがに街道に出ると一気に人や馬、馬車の往来が多くなる。

クレア達の乗る馬車の横には『薔薇の館』のトレードマークでもある『薔薇に囚われし聖女』の図案が描かれていた。これは宣伝効果を狙った物と言うより、一種の『警告』であった。御多聞の漏れず、この辺りでも盗賊が現れる事が少なからずある。しかし、誰であろうと国家公認の高級娼館の頂点に君臨する『薔薇の館』の馬車を襲ったりすれば、近隣諸国に『最強にして最凶』と恐れられる法王直属の『神聖エリシア騎士団』が地の果てまでも犯人を追い詰め一人残らず嬲り殺しにされる事になっていた。その為『薔薇の館』の馬車に手を出す事は死を意味するのと同じであった。

さて、ここまで来ると、何故『薔薇の館』を初めとする高級娼館や高級娼婦がこれほどまでに優遇されるかと疑問に思う者も少なくない。事実、貴族階級の奥方の多くが口には出さないが「汚(きたな)らしい娼

婦ふぜいが何で私たちと同じ貴族扱いされてるのだ。その上の時として私たち以上に国が保護してるとは」と不満に感じてると言われる。しかし、これには国家としてそれ相応の理由が存在していた。

『薔薇の館』を初めとする国家公認の高級娼館へ出入りできるのは、枢機卿などの国家の重要役職の者、貴族、騎士、一部特権を認められた豪商に限られている。もちろん、自国民だけでなく、他国民も同じ様な地位にある者なら出入りを許される。細かく言うなら『ダルメハイン法国発行の入館許可証』を所持している者となるのだが。入館を許される顔ぶれはすなわち、『ダルメハイン法国』にとって重要人物であり重要な情報を知りえる者なのだ。男と言う者（中には女性も一握りではあるが存在する）娼館で娼婦と居れば、寝物語についつい国家機密クラスの情報を語ってしまう事も多い。つまり『薔薇の館』などの高級娼館は国家の存続を左右する様な情報が漏れやすい所なのだ。それ故、そこで漏れた情報がそれ以上拡散せぬ様に高級娼館には国家として並外れた便宜を払っているのである。逆に娼館の方では、優遇の見返りとして、他国の客から得た重要情報を国家に渡していた。『薔薇の館』を初めとする国家公認の高級娼館は国家の情報機関の役割もはたしていた。『薔薇の館』がその頂点に君臨するのはマダムのシンシアがその辺りの駆け引きに長けていたのが大きな要因だった。実際、クレア自身もシンシア以外には話してはいないが、身震いするほど怖ろしい情報を客から聞かされた事が何度もあった。

小難しい理由はともあれ、クレアとロミを乗せた馬車には『薔薇の館』のトレードマークが描かれている為に、その中に『薔薇の乙女』が乗っているであろう事は誰でも分かる。その為、街道に馬車が出るとわざと二人の馬車に並走して走り中を覗いて『薔薇の乙女』を一目見ようとする輩も増えてくる。もちろん、速度を上げて振り切

ってしまうのも良いのだが、そこは無用のトラブルを防ぐ観点から余裕を見せて道端寄りを速度をやや抑えて走るのが『薔薇の館』の馬車の通例だった。

今日もクレアは何度もそうして覗かれていた。そこはクレア自身も慣れっ子になっていて、そう言う時はとびっきりの営業スマイルで手を振っていた。それも一種の営業の一環と割り切っていたのだ。下手にそう言う輩と見下して無碍（むげ）な態度をとると、時として自身の常連客が混じってたりするので、クレア達『薔薇の乙女』は油断大敵なのだ。

# 第１０話　バナビー＝アディソン

やがてクレアとロミを乗せた馬車は、ティボーシアに街外れに位置する『馬車溜まり』に到着する。ティボーシアに限らずダルメハイン法国の多くの中堅以上の都市が、外から街に来る馬車は、この様な『馬車溜まり』に馬車を停め、ここからはタクシーの様な街馬車で市内の目的の場所に行くのが通例だった。もちろん、ここで馬車の御者達は主人を待つ事になるので、その為のドライブインの様な食堂や休憩場所もあった。

「御苦労さま！
帰りは陽が落ちてからになる予定。
ここに帰ったら休憩所に寄るわ。
それまでゆっくりお昼寝でもしてて」

所定の乗降場所に馬車が到着すると、クレアは馬車を降り御者にチップとして銀貨一枚を渡しながら声を掛ける。ロミもクレアの後に続いて馬車から降りてくる。

「ありがとうごぜぇます……姉（あね）さん！ではごゆっくり」

御者はそう言うと、二人が降りたのを確認して馬車をゆっくりと馬車置き場へ動かして行った。

「よっ！クレアの姉御！久しぶり！」

街の中心へ向かう為、街馬車の待合所へ向かいロミを伴って歩き始めたクレアの背中へ底抜けに明るい声が飛んで来た。クレアが振り

返ると、肩までの長い黒髪を後ろに束ね、グリーンの瞳が清々しい細身で小柄の少年が満面の笑みをたたえて右手を上げて立っていた。彼の名前は『バナビー＝アディソン』十六歳。ここティボーシアの自警騎士団『ソードエンジェル』の最年少の騎士である。ソードエンジェルは、本来、『夜の歓楽街』として発展し色々面倒も多いティボーシアの治安維持の為に街の顔役たちが腕利きの騎士を雇って作った物だった。

「またお前が私のボディーガードなのか？少年！
最近のソードエンジェルは余程人材不足と見えるな」

クレアはバナビーを振り返り、明らかにうんざりした顔をする。ソードエンジェルの仕事の一つにクレア達『薔薇の乙女』が街に出て来た時のボディーガードがある。今回も事前にシンシアが連絡を入れていた為にバナビーがここまで出迎えに来たと言う訳である。

その言葉に、バナビーはいきなりクレアの細い腰を片手で引き寄せ、彼女の顔に自分の顔を間近まで近づけて大人びた言葉を囁く。

「クレア……あんたなら俺の女にしてやっても良いぜ」

「バナビー！クレア姉様になんて事を！」

突然の狼藉（ろうぜき）にロミが慌てて声を上げる。しかしクレアは平然とした顔でバナビーに言い返す。

「私は、タダでお前の『最初の女』になる程お人好しではない！
もっとも、お前も騎士なんだから『館』まで正規の料金払って来たら
拒まないで相手してやっても良いぞ、少年！」

「ちっ！クレアの姉御には敵わないなぁ……」

そう言うとバナビーは大人しくクレアの腰から手を離し、彼女に聞こえない様に小声で独り言を言った。

「しかし、何で俺がまだ童貞ってバレてるんだ……」

「アホか！私を誰だと思ってんだ！
そんな事くらい一発で見抜けなくて商売出来るか！」

クレアはバナビーの呟きを聞き逃さず、自分の腰に手を当てながら勝ち誇った顔になる。そんな二人のやり取りを見てロミは口を押さえてくすくすと笑う。

「姉御、俺……あんたの事マジで好きなんだぜ。
出会った時から『最初の女』はあんたって決めてんだ。
その為に必死に金貯めてる……」

バナビーはうつむいて頬を少し染めながら消え入る様な小声でぼそぼそと呟く。その時、彼は自分の唇に柔らかく温かい物が一瞬触れたのに気が付いて、目をぱちくりさせる。

「ありがとう……少年。
だが、貯めてる金はもっと有意義な物に使え」

クレアは優しい笑みを浮かべてバナビーにそう言うと、すぐに何事もなかったかの様な顔で続ける。

「さて、馬鹿な事やってないで早く私たちを街に連れて行け、少年

！」

「で、では、こ、ちらへ……あ、姉御……」

それはクレアにしてみれば挨拶代わりの軽い物だったが、バナビーにとって正真正銘生『初めてのキス』だった。彼の心臓は息苦しいほど早く鼓動し、頭の中は訳の分からない物がぐるぐると回り続けていた。それ故、言葉も呂律（ろれつ）が回らず、クレアとロミを用意した馬車に案内する為に歩きだした時も、左右の手足が一緒に出てしまう程だった。

クレアとロミは、バナビーの用意したソードエンジェル専用の馬車で、少し遅めの昼食をとる為に当初の予定通り、美味しいガレットを出す事で有名な『ジュゼット爺さんの店』へ向かう事にした。馬車の中では進行方向に向かってクレアとロミが並んで座り、バナビーは向かい側の席に座る。彼は、膝が触れ合うほどの距離で向かい合うクレアの顔を直視出来ず、まだ頬を軽く染めたままうつむいていた。窓の外の町並みを見ていたクレアがそんなバナビーをちらりと見て、また窓の外に視線を戻して独り言の様に言った。

「今、いくら持ってる？少年」

突然の問い掛けにバナビーは戸惑いながらも自分の財布を開いて手持ちを確認する。

「……えっと……大体合計で金貨一枚分ってとこかな」

その答えを聞いて、クレアはバナビーの顔を見てにやりと笑う。

「少年、銀貨二枚出せば、
今この場で『大人のキス』を教えてやるが、どうだ？」

「えっ！それって……でも……」

バナビーはクレアのあまりに生々しい言葉に、驚いた様な表情になる。そして彼は、自分の胸の中に、苦く悲しい想いが湧きあがって来るのを感じた。クレアはバナビーの表情の変化を読み取ると再び、窓枠に頬杖をついて窓の外を見ながら彼に語りかける。ロミはそんなクレアをちらりと見る。

「少年、私をどこかの貴婦人の様に思ってくれるのは嬉しい。
だがな……
いくら国に保護され、貴族並みの扱いを受ける『薔薇の乙女』であろうと、
私は所詮、ただの『娼婦』だ」

クレアはここで、窓から見える昼間から街角に立って客引きする街娼を、指（ゆび）さしながら続ける。

「元を正せば、ほら……あの『街娼』と同じだ。
私達に下手な幻想は抱（いだ）くのはよせ。
特にお前は騎士の端くれだ。
もっと上を見て生きろ」

クレアは、バナビーを見ずに窓の外を見たままだった。しかし、そう言ったクレアの顔は少し悲しげだった。バナビーからはクレアの横顔しか見えなかったが彼にも何か感じる物があったのだろう。彼は一度、両手でぱんぱんと自分の頬を叩いてから、いつもの彼の顔に戻ってクレアに両手を合わせて祈る素振りをしながら、底抜けに

明るい声でクレアに言った。

「じゃあ、姉御、持ち金全部出すからさぁ……
最後までとは言わないから、キスのもうちょっと先までお願いっ！」

今度はバナビーのその言葉にクレアが驚き、彼の顔を見つめて目をぱちくりさせる。そして頭を掻きながら呆れた顔になって答える。

「ふっ……この馬鹿者が……
キスの先はここでは無理だし、
お前の持ち金じゃ明らかに足りないぞ」

「くそぉ～、やっぱり足りねぇ～か！」

バナビーは明らかに悔しそうな顔をすると両手を上げ天を仰いだ。そんな二人のやりとりを黙って聞いていたロミは視線を窓の外に向け、二人に気づかれない様にそっと微笑む。

やがて、馬車は目的地『ジュゼット爺さんの店』の前に到着する。まずバナビーが馬車を降り、回りの安全をさりげなく見回し確認してから、クレア達に目配せする。その合図を見て、クレアとロミは馬車を降りてくる。バナビーは二人が降りるのを確認して、馬車の御者に一言二言声を掛けると、馬車は三人をそこに残して静かに走りだす。

『ジュゼット爺さんの店』はメインストリートから一本路地に入った、主人のジュゼット爺さんと奥さんが二人で切り盛りしている小さな店だった。クレアとロミは馬車を降りると早速、店の前に駆け

寄り黒板にチョークで書かれた本日のメニューを確認する。幸い、店の前はランチの時間をやや過ぎていたので行列などは出来ていなかった。

「おっ！あるある！本日のお薦めに『マスの塩焼き』だ！私はこれだな！後は……お茶とフルーツタルトかな？」

「あっ！もう『シナール茸のソテー』が出てる！じゃあ、私はこれにプレーンのバターオムレツ添えで！」

クレアとロミはまるで子供同士の様にはしゃぎながらメニューを決めると、店内へ入って行く。バナビーは二人をやや呆れ顔で見ながら後について行く。

「いらっしゃいっ！あっ！クレア姉さん！お久しぶり！いつものテラス席空いてるんでどうぞ！」

すぐさま、店の中からこの店の主人にしてコックのジュゼット爺さんの元気な声が店の外まで響いてくる。

# 第１１話　ジュゼット爺さんの店

クレア達三人は、一旦店に入ってジュゼット爺さんに注文を通してから、店内を抜けて通りに面したテラス席の一つに陣取る。そこは普段は籠の鳥同然のクレアにとっては久々に普通の世界の空気を満喫しながら食事の出来るお気に入りの場所であった。また店の方も、有名人である『薔薇の乙女』のクレアがそこに座る事で良い客寄せになるのでクレアがテラス席に座るのは大歓迎であった。実際、今日もクレアがその席に座ると、通りから彼女の姿を見つけた客が、ちらほらと店に入って来ていた。そして彼らはクレアの顔と姿が良く見える席を選んで座って行く。クレア達『薔薇の乙女』に実際に『館』で会っているのは限られた者だけであったが、『薔薇の乙女』ともなるとブロマイドの様な似顔絵が街のお土産屋などで売られているので、実際は会った事は無くてもほとんどの街の者が五人の『薔薇の乙女』の顔は知っていた。

しばらくすると、丸々した体を揺する様にして、奥さんが両手に料理を運んで来て、クレア達の座るテーブルの上に並べて行く。クレアの前にはマスと季節の野菜の塩焼きをたっぷり乗せたガレット、ロミの前にはシナール茸のソテーとスクランブルエッグが乗ったガレット、バナビーの前には分厚いミートパテ二枚にチーズと野菜をバンズに挟んだ見るからにボリュームたっぷりのハンバーガー。そして帰り際に、クレアの耳元で小声でそっと囁く。

「クレア姉さん、いつもありがとね。
おかげでこんな時間でも商売繁盛さ。
食後のデザートと飲み物はいつもの様にサービスだよ」

「ありがとう……おかみさん」

そう言ってウインクする。クレアはにっこり笑って小さく頭を下げる。

「姉御のパワーはホント凄いなぁ……。
さっきまで空席が目立っていた店内が姉御目当ての客でもう待ちが出てる」

バナビーが呆れ顔でそう言ってから、大口を開けてハンバーガーにかぶりつく。

「当たり前です！
クレア姉様は、現『薔薇の乙女』のＮｏ．１ですから！」

少し自慢げに言いながら、ロミは自分のガレットをナイフで切り分け始める。

「こうやって穏やかなお日様を浴びて食事するのは楽しいよな。
『館』のサンルームも日差しは入るけどあそこはちょっと静かすぎる。
ここのざわざわした生活の匂いに溢れた空気が私は好きなんだ」

クレアはそう言って、手で帽子を押さえながら一度空を見上げてから、ガレットを一口大に切って口に入れる。

クレア目当てに来た客たちは食事やお茶をしながら、ちらちらとクレアの事を盗み見しながら……

「あれが『クロフォードの聖女ソフィア姫』そっくりと言われてる

クレアかぁ」

「ソフィア姫見た事のある奴の話じゃ、本当に似てるらしいぞ」

「こうやって実際に見ると少なくとも『街娼』とは全然違う。どっかの貴族の娘にしか見えないよな、さすが『薔薇の乙女』」

「当たり前だ！誰とでも見境なく寝る『街娼』の雌犬連中とは気品が違う。

相手が偉い貴族や枢機卿が相手だって、

『薔薇の乙女』が一度機嫌を損ねれば、平気で追い返すそうだぞ。まあ、俺たち庶民には手の届かないって意味では貴婦人と同じだけどな」

と言う様な事が、どのテーブルでもひそひそと話されていた。

ちなみに先ほどロミは『クレアは現『薔薇の乙女』のＮｏ．１』と言ったが、それはあくまでロミ個人の主観であって、クレア達『薔薇の乙女』の同士では順列等はまったく意識されていなかった。唯一あるとすれば、年齢と経験の長さと言う意味でアマンダが『姉』の様に他の乙女たちから慕われている事ぐらいである。実際『客の待ち行列』の長さはクレアが一番ではあるが、それはクレアが『夕方から早朝まで（オーバーナイト）』専門と言う特殊な理由があるからで人気とはあまり関係が無い。実際には誰が一番の稼ぎ頭かはマダムのシンシアだけが知っているだけであるが、それもあまり差がないのが事実らしい。

今日は、幸い、声を掛けてくる図々しい客が居なかったおかげでク

レア達は、多少好奇の目に晒されはしたが平穏無事にゆっくり食事を楽しむ事が出来た。三人の食事が終わったのを見て、何故かジュゼット爺さんが直々にクレア達のデザートと食後の飲み物をテーブルに持って来た。

「クレア姉さん、この間は本当にありがとな。
ホントに助かったよ。
姉さんがあの時に……
『今年は『シュルマンの汐』で天気が荒れて作物が不作になるだろうから、
小麦粉や蕎麦粉は値が上がる前に多めに仕入れておきなよ』
って教えてくれたんで、不作で値が上がる前に大量に仕入れが出来たんだよ。
他の店が値上げしてる昨今でもうちは料金据え置きで客足好調さ！
そのお礼に、タルトに桃のシャーベットも添えておいたよ」

笑顔でクレアにそう言うと、季節の色々な果実が山盛りの美味しそうなタルトの横に甘い香りのする桃のシャーベットが乗った皿とティーカップを三人の前に置き、大きめのティーポットからそれぞれのカップにお茶を注いでからポットをテーブルの真ん中に置く。

「ありがとう、爺さん！
そうかぁ……仕入れ、値上げ前に間に合ったんだ。
まあ、おかげで私達も今まで通りの値段で、
爺さんの美味しいガレットが楽しめるからお互い様さ」

クレアは爺さんを見上げてにこやかに答える。

『街娼』や普通の娼館にいる『一般娼婦』が軽蔑の対象であるのに対して、『薔薇の乙女』が同じ娼婦でありながら、一般市民から『

ある種の尊敬』を集めているのは、『国家公認の高級娼婦』で色々な『特権』を持っているからだけではなかった。一般の娼婦が単に体を売るだけの商売なのに対して、『薔薇の乙女』たち国家公認の高級娼婦は、貴族並み以上の知性と教養を持っているからだった。逆に言えば、例え絶世の美女であっても知性と教養の無い者は決して国家公認の高級娼婦とは認められない。良く言われる言葉に『高級娼婦は体を触らせることなく男を満足させる事が出来る』と言うのがあるし、実際、『薔薇の乙女』の年配の常連客の中には料金を払って彼女たちを抱かずにおしゃべりだけを楽しんで帰る者も少なくない。つまり国家公認の高級娼婦と言うのは『娼婦にして貴婦人』と言う稀有な存在なのである。故に、クレア達『薔薇の乙女』が街に出ると彼女らの持っている知識に期待して、顔見知りの街人からは色々な相談も持ちかけられる事も多々あった。街人達も貴族や専門家にはおいそれと相談は出来ないが、『薔薇の乙女』達なら比較的気軽に相談に乗ってもらえる為にありがたがられていたのだ。

三人はデザートも食べ終え、クレアとロミは十分のおしゃべりを堪能し、バナビーはそろそろ退屈を感じはじめ、ポットのお茶も底をついた頃だった。

「さて、そろそろ、街を回って用事をすますか！」

クレアが一度座ったまま背伸びをしながら言う。

「そうですね……まだドレスの注文もしなくちゃいけないし、『館』のお姉さまやマダムへのお土産も買わないといけないですよね」

ロミはにっこり笑って答える。

「じゃあ、次はどこへ行くんだ、姉御？」

丁度、退屈しはじめていたバナビーにはクレアの言葉は渡りに船だった。

「そうだな、先に『館』への土産を買うか。
今なら、馬車で届ければディナーのデザートに間に合うからな」

そう言ってクレアが立ちあがるとロミとバナビーも続く。

「と言う事はお土産はやっぱり……
『マダムシモーヌ』のロールケーキですか？姉様」

「そうだよ、ロミ！あそこのロールケーキは『館』では一番評判良いからな」

クレアはそう言ってロミにウインクする。そしてすぐにバナビーを振り返って声を掛ける。

「と言う事で……
悪いが買ったケーキを先に『館』に届ける馬車の手配を頼むぞ、少年！」

「了解！それじゃ、俺、ちょっと馬車の手配に行ってくるから、
『マダムシモーヌ』で合流します！」

駆け出して行くバナビーの背中にクレアが声を掛ける。

「『マダムシモーヌ』に居なかったら仕立屋『バウマンの店』の所

な！」

バナビーはその声に振り返らず、手を上げて答えた。

入口のカウンターでジュゼット爺さんに代金を払うと、クレアはロミを連れて店を出て、表通りの方へ歩いて行く。その姿を通りの陰からじっと窺う黒い影がある事に、二人はまったく気が付かなかった。この時、もしバナビーが一緒に居たなら、きっとその妖しげな気配に気づいていたであろうが、彼は馬車の手配の為に一歩先に出て行ってしまっていた。

# 第12話　ケーキとチョコと黒い影

『ジュゼット爺さんの店』から『マダムシモーヌ』までは、徒歩で数分の距離。『マダムシモーヌ』は表通りに面していた。裏通りは比較的人通りも少なかったが、一歩表通りに出ると途端に人通りが多くなる。行き交う人で肩が触れ合うのは日常茶飯事だった。その中を歩くクレアは、やはり美しさと独特の雰囲気で目立っていた。すぐに『薔薇の乙女』のクレアと気が付き、すれ違いざまにに振り向く者や、後ろからわざと追い抜き振り返って見る者、さらには立ち止まって彼女を目で追う者などが後を絶たなかった。そんな中、人ごみに紛れ『ジュゼット爺さんの店』から二人を密かに付け狙う影があった。

クレアとロミは『マダムシモーヌ』の店の前まで来ていた。すでに店の前にはお菓子の甘い香りが流れ出て来ていた。二人はその甘い香りに誘われながら表通りに面したドアを開けて店内に入る。

「いらっしゃいませ、マダム！」

すぐに若い女性店員の明るい声がする。入って左側には、ガラス張りの大きなショーケースがあり、色とりどりのケーキやチョコレート、焼き菓子などがまるで宝石箱の様に並べられていた。そして、その後ろには数人の可愛いメイド風の制服を着た店員が客のオーダーを聞いたり、商品を箱詰めしたり忙しそうに働いている。そして反対側には、イートインのコーナーがありテーブルでゆっくりお茶を飲みながら出来たてのお菓子を楽しめる様になっていた。また、ショーケースの奥にも小さなバーカウンターがあり、立ち飲みで良ければここでお茶と焼き菓子程度は楽しめる様になっている。三時

のお茶の時間はやや過ぎてはいたが、それでもイートインコーナーは満席で空き待ちが数組出来ている状態であった。

クレアがショーケースの前に来ると、馴染みのベテラン店員が声を掛けてくる。

「これはクレア様、『館』の皆様にはいつもお世話になっております。
本日は何にいたしましょうか？
今は季節のフルーツ入りロールケーキなどお薦めですが……」

「季節のフルーツ入りロールケーキか……うん、それが良い！
それを三本と……あとは……」

そう言いながらクレアはショーケースを覗き込む。しばらく思案顔で色々見回してから、店員の顔をまた見て花の様な笑顔で言った。

「マカロンを三十個……種類は任せるから適当に彩り良く詰めてね」

「かしこまりました……
季節のフルーツ入りロールケーキ三本とマカロン三十個、
他はよろしかったですか？」

ベテラン店員は笑顔で確認する。その時、クレアはロミがショーケースのチョコレートが並べれらた辺りを今にも涎を垂らしそうな顔でじっと見入ってるのに気が付いた。

「ロミ、食べたいチョコがあるなら言ってごらん。
ついでに買ってあげるから、バーカウンターで食べて行けば良い

さ」

ロミはクレアのその言葉に顔を上げ、嬉しそうに満面の笑みをたたえて答える。

「じゃあ、チェリー入りの生チョコと新作のプラリネを！」

ロミは、元々中毒ともいえる程のチョコレート好きだったし、クレアにとってその事は周知の事実だったのだ。

「それじゃ、そのチョコとエスプレッソとホットミルクもね。
チョコと飲み物はバーカウンターで頂くわ。
他の物は後でソードエンジェルの馬車で『館』に届けてもらうから、
後で御者が来たら渡してやってね。
会計は先に私が払っておくから……」

「では合計で一万六千五百ルベルになります」

そう言いながら、店員が銀の皿をショーケースの上に置く。クレアは手に持った小さなバッグから銀貨四枚を取り出すと、その皿に置く。

「お釣りはとっておいて……
じゃあ、バーカウンターの方へ行ってるから」

「ありがとうございます、クレア様！」

そう言うと店員は深々とお辞儀をする。クレアはロミと共に奥のバーカウンターに歩いて行きながら店員に軽く手を上げた。

その時、クレアが代金を支払う所を、店の外からショーウインドウ越しにじっと見ている黒く小さな影があったが、その姿は街の風景に見事に溶け込んで誰も不審には思わなかった。

クレアはバーカウンターに片肘を乗せて寄りかかり、ロミはその横で壁に寄り掛かって待っていると、間もなく店員が、エスプレッソとホットミルクとチョコレート二つを乗せた小さな銀の皿を、銀のお盆に乗せて運んで来てクレアの前に置く。クレアはミルクとチョコの乗った皿をロミの前に回してやる。ロミは、待ち切れぬ様子で早速プラリネの方を口に放り込む。

「うわっ！この新作のプラリネすごく美味しい！」

ロミは思わず大きな声を出してしまう。その声に、カウンター内に居た店員が笑顔で軽く頭を下げる。クレアはエスプレッソのカップに手に持ったまま、そんなロミを優しい笑顔で見つめる。そうしてる間も、同じ様にカウンターでエスプレッソを立ち飲みしていた数人の男たちは、ちらちらとクレアの顔を盗み見していた。彼らにとって、こんな間近で『薔薇の乙女』のクレアを見られる幸運が訪れるとは先ほどまでは夢にも思ってなかった。チェリー入りの生チョコを口に頬張りながらロミはクレアを見上げて尋ねる。

「クレア姉様は、エスプレッソだけで良いのですか？」

「さっき『ジュゼット爺さんの店』でタルトまで食べちゃったからなぁ。

これ以上食べて太るったりすると、商売に差し支える」

クレアはそう言ってから、ブラックのままのエスプレッソを啜(すす)る。
ロミは自分のホットミルクを少し吹いて冷ませてから口をつける。
クレアはロミがミルクを飲み干すのを確認してから彼女に声を掛ける。

「さて、それじゃ遅くなるから『バウマンの店』に向かうか。
バナビーの奴も、じきに追い付くだろうさ」

「はい、クレア姉様」

クレアとロミがその場を離れて出口に向かうと、クレアの横に立っていた若い男がすぐにカウンター内の店員に声を掛ける。

「そのクレア嬢が使ったカップを金貨一枚出すから売ってくれ！」

二人が『マダムシモーヌ』の店を出たその時だった。

小汚い格好をした少年がクレアの背中に体当たりした。彼女は思わず姿勢を崩し地面に尻持ちをつく。少年はすかさずクレアが片手に持っていた小さなバックをひったくると、脱兎のごとく人ごみの中を器用に掻き分け逃げて行く。

「ど、ドロウボウ！誰か彼を捕まえて！」

クレアは思わず大声を上げる。ちょうど『マダムシモーヌ』のすぐ近くまで来ていたバナビーがクレアの声に気が付き人を掻き分け彼女の傍(かたわら)まで来て、腰に手を回して引き起こしてやる。

「どうした？何があった？」

そう叫ぶバナビーに、ロミが怒鳴る。

「ひったくりです！クレア姉様のバックをやられました。
私が犯人を追いますので、バナビー様はクレア姉様のお傍にいてください」

そう言うとロミは、人ごみに消えた少年の後を追って駆け出す。

「もう良い！危ないから追わなくて良い！ロミ！帰って来い！」

駆け出したロミの背中にクレアが叫ぶ。しかし、ロミは止まることなくそのまま人ごみに消えて行った。それを見てクレアは慌ててバナビーの両肩を掴んで揺すりながら怒鳴る。

「バナビー！ロミを！あの娘を追って！
あのままじゃロミが……ロミが危ない！」

必死な形相のクレアに、バナビーは少し悲しげな瞳で語りかける。

「姉御……姉御の気持ちは分かるけど俺は『姉御のボディーガード』。
今、この状態では姉御の傍を離れる訳には行かないんだ。
分かってくれ……」

「ちっ……融通のつかない朴念仁が！
もしロミの身に何かあったら私はお前を許さないからな！」

クレアはバナビーの胸倉を掴み上げで顔を近づけて彼に詰め寄る。

「その時は……姉御の気が済む様してくれて良い……
あの時、姉御達を二人きりにした俺の落ち度だからな」

バナビーはそう言うとすまなさそうに頭を下げる。その姿を見てクレアもバナビーの胸倉から静かに手を離す。

「あの時、お前に馬車の手配を頼んだ私が悪かったんだ……
すまない……一方的に責めて……」

クレアは悲しげに呟くと下を向く。今度はバナビーがクレアの両肩に手を置いて落ちついた声で言う。

「姉御……ロミちゃんはしっかりした娘だよ。
無理や無茶はしない。きっとすぐにここに帰って来る。
それまで、店の中でお茶でも飲んで待っていよう。
店の者にソードエンジェルの事務所まで使いを出してもらって、事情を説明してあちらでも対策を至急とってもらうから」

「悪い……バナビー……頼む」

バナビーはクレアの肩を優しく抱き、『マダムシモーヌ』の店内に一緒に入って行く。

# 第13話　ロミ＝ディブロ　～その1～

人ごみを巧みにすり抜けながらロミは、少年を追っていた。彼女の両方の瞳はまたオレンジ色の光を放ち瞳孔が蛇のごとく縦長に変化していた。

「逃がさない……絶対に……」

少年が小さな路地の角に差し掛かると、そこに立っていたやや大柄なもう一人の少年にクレアのバックをさりげなく手渡し、自分自身は何事もなかったかの様にそのまま大通りを人ごみを掻き分け走り抜けて行く。バッグを受け取った少年は、上着の下にバックを隠すとゆっくり歩きながら小さな路地へ入って行く。しかし、ロミは騙されずクレアの財布を持った少年の後を正確に追って行く。

最初は口笛を吹きながら余裕を見せて歩いてたその少年も、背後から離れず追ってくるメイド服を着た銀髪の少女に気がつき早足になる。すると背後の少女も同じ様に早足なる。少年はその少女が自分の追跡者である事を確信して一気に駆け出した。

ロミは少年が駆け出すのを見て自分も走り始める。少年は細い路地の角を時々急に曲がりながらロミを振り切ろうと必死に走る。しかし、ロミは猟犬のごとく少年の後を正確に追い続ける。やがて少年は両側を建物、正面を高い壁に阻まれた袋小路に追い詰められてしまう。壁を背にして怯えた表情になった少年に、ロミは両目の色を元の金と銀に戻して優しく話しかける。

「お願い……クレア姉様のバッグを返して」

「分かったよ……返すから……
ソードエンジェルの連中にはつきださないで……」

少年は涙目になって、おずおずと手に持ったクレアのバックをロミの方へ差し出す。

「バックさえ返してくれればあなたには危害を加えない」

ロミはそっと少年の差し出したバックに手を伸ばす。ロミの手がバックに触れそうになった、その時だった。急に少年の口元がにやりと歪む。

「バーカ！誰が返すか！」

そう捨て台詞を吐くと少年は手に持ったクレアのバックを思いっきり上に投げ上げる。少年の手を離れたバックは高く舞い上がり、道を遮る高い壁を越えて向こう側に落ちて行った。そして壁の向こうから勝ち誇った声がした。

「グレイ！獲物は受け取ったぞ、逃げろ！」

グレイと呼ばれたロミの目の前の少年は、ロミに向かって馬鹿にしたように叫ぶ。

「ざまぁー見ろ！お前みたいなガキのメイド風情（ふぜい）に俺達が捕まるかよ！」

そう言ってロミを突き飛ばして駆け出そうした、その瞬間、彼は全身の力が一気に抜けた様にその場に崩れ落る。地面に倒れた少年は口から泡を吹いていた。彼の手がロミをつき倒すより早く、ロミの

蹴り上げた右足の膝が少年の胃の辺りに入っていたのだ。

ロミはぞっとするほどの無表情で倒れている少年を見下ろし完全に意識を失っているのを確認すると、瞼を閉じて一度深呼吸してから、再びゆっくりと瞼を開く。すると彼女の両方の瞳がまたオレンジ色に輝く。さらに、ばさりと言う音と共に彼女の背中に大きな黒い翼が広がる。ロミが広げた翼を羽ばたかせると、その小さな体がふわりと浮き上がり一気に高い壁の上まで舞い上がる。彼女はそのまま、壁の上に舞い降り、クレアのバックを受け取った少年を目で追う。

クレアのバックを持った少年は、安心しきって意気揚々と数人の仲間と共に路地を歩いていた。あの壁の向こうからこちら側へ来るにはかなり大きく迂回しなければ来られない。しかも、この辺り一帯は無計画に増築を繰り返した建物が多く、その間にある路地はまさに巨大な迷路と化していた。あの壁を乗り越えてこちらへ来ない限り、壁のあちら側に居る人間に自分たちを捕える事は絶対に不可能だと彼は知っていた。

主犯格の少年は人通りの無い薄暗い路地に入って立ち止まると、クレアのバックを開いて中を確認する。仲間の少年達が、彼の回りに集まって来る。少年は、まずバックから白いレースに薔薇の刺繍の入ったクレアのハンカチを取り出すとそれを鼻に当て大きく深呼吸をして少し卑猥な笑いを浮かべて仲間を見回してから叫ぶ。

「うぉーっ！堪んねぇー！良い香りだ！
こんな香りのする女、抱いてみてぇーなぁー！」

「兄貴！俺にも！俺にも！」

横に居た少年が両足をばたばたと踏みならしながら叫ぶ。

「ほらよ！お前の汚い鼻水つけるなよ！
これでも売れば金になるからな！」

主犯格の少年は、そう言って、少年にクレアのハンカチを渡す。ハンカチを受け取った少年もその香りをかぎ、うっとりとした表情を浮かべ天を仰いで叫ぶ。

「ホント、堪らねぇー！香りだけであそこがむずむずして来た！
このハンカチ嗅ぎながらベロニカとやれたら最高だっ！」

そう言うとその少年も他の少年にクレアのハンカチを手渡す。それぞれの少年がクレアのハンカチの香りを堪能して、またそれぞれが、無理に大人びた卑猥な感想を口々に叫ぶ。

「なぁ、兄貴、今度は貴族の女、さらって犯(や)っちまおうぜ！
ここに連れ込めば大丈夫さ！一度、貴族の女抱いてみたいんだ！」

「それはダメだ！それやったらソードエンジェルの連中が黙ってない。
スリ程度なら、その場で捕まらなきゃ今みたいに大目に見てもらえるがな」

少年の一人が軽く言った言葉を、主犯格の少年がぴしゃりと制する。小悪党の少年スリ集団とは言え、主犯格の少年には世の中の微妙なさじ加減と言う物が自然と身についていた。

「さてと……前菜はこのぐらいにしてメインディッシュはと……」

主犯格の少年は、再びクレアのバックを開いて、ハンカチを一度その中に納めてから中を覗き込む。そして、中の物を一枚二枚と数えて行く。最初はニヤニヤ笑っていた少年の顔が、数えて行くに連れ徐々に真顔になって行く。そして最後に少し震える声で絞り出す様に言った。

「金貨四枚に銀貨十枚、銅貨が十枚……
すげぇ……このバッグの持ち主はどんな奴なんだ」

その言葉に、一瞬その場に何とも言えない重い沈黙が走る。しかし、すぐに沈黙は破られる。

「兄貴！それだけあれば、しばらく危ない橋渡らなくて良いじゃん！」

「久々に、美味い物、腹いっぱい食えるぞ！」

「食いもんも良いけど、街娼なら一人に一人づつ女買えるぞ！」

少年たちは口々に喜びの声を上げる。

「いや、お前ら、こんだけありゃ……
適当に数人『街娼』買い漁って一緒に飲み食いして一晩楽しめるぞ！」

主犯格の少年が、他の少年たちの顔を見回して、舌なめずりしながら言う。

「じゃあ、早速『ドレイクの店』行って三階の広間を借り切って、

女の手配もしてもらおうぜ！」

「やべっ！俺、もうあそこがビンビンだ！」

「あほっ！そりゃ、いくらなんでも早過ぎだろうが！」

少年たちは、大声でお互いに囃し立て合い、笑い声を上げる。

その時だった……路地の角から見なれない、メイド服を着た長い銀髪の可愛い少女が彼らの前に現れる。少年たちの表情が一瞬固まる。少女は、スカートの裾を持って広げ膝を軽く折って少年たちに挨拶をする。

「私めは……
『薔薇の館』にて『クレア様』のお世話をさせていただいております、
『ロミ＝ディブロ』と申す者です。
そこの方がお持ちのバッグは我が主（あるじ）『クレア様』の物とお見受けします。
どうか素直にお返しいただけませんか？
素直にお返ししていただければ、事を荒立てるつもりがございません……」

その少女は紛れもなくロミだった。ロミを見て、主犯格の少年が呆れ顔で大笑いしながらて答える。

「メイドのお嬢ちゃんさ……これはもう俺たちの『物』なんだ！
返す訳にはいかねぇな。
それに『事を荒立てる』ってあんた言ったけどさ、

他人（ひと）の心配するより自分の心配した方が良いと思うぜ。
あんたみたいな小娘が一人でこんな所に来て無事に帰れるつもりかい？」

主犯格の少年はそこまで言ってから、急にいやらしい笑いを受かべて、ロミの体を舐め回す様な視線で続ける。

「まあ、良いや……可愛いあんたの事だ、
ここで服全部脱いで裸になれば考えてやっても良いぜ」

その言葉を聞いて、他の少年たちも舌なめずりをしながら、ポケットから各々ナイフを取り出す。

「せっかくのお申し出ではございますが、
私、その様な破廉恥な行為はいたしかねます」

そう言うとロミは軽く頭を下げる。主犯格の少年はロミをじっと見詰めながら冷たく言い放つ。

「それじゃ仕方ないなぁ……お嬢ちゃん。
可哀想だけど、あんた、ここで俺たちのオモチャになりな。
恨むのなら、真昼間にバックを盗まれる様な馬鹿な主人を恨むんだな。」

そう言ってから、今度は回りの少年を見て叫ぶ。

「構わねえ、お前ら、その小娘を捕まえろ！
なるべくなら傷つけるんじゃねぇーぞ！
早い者勝ちだ！たぶんそいつは『初物』だ！
みんな、せいぜいがんばりな！」

その言葉を聞いて、少年たちはナイフを手に一斉にロミに襲いかかった。

## 第１４話　ロミ＝ディブロ　～その２～

集団で襲いかかって来る少年たちを見て、ロミの目が再びオレンジに輝きだす。

「そちらがそのつもりならば、仕方が無い。」

そう呟くと両手をぱっと斜め下に広げる。すると、何もなかった彼女の両手に短剣が現れる。ロミは現れた短剣をしっかり握ると、風の様に少年たちに向かって駆け出す。そして、そのまま右側の建物の壁を駆け上がると壁を蹴って、襲いかかった来た少年たちの頭上を体をひねりながら飛び越えて、彼らの背後に着地する。

「もう一度だけ言う。クレアのバックを大人しく返せ。
さすれば、このまま何もせずに見逃してやる」

ロミは、慌てて振り返る少年たちを見回して言うと、両腕を交差させて二本の短剣を構える。

「デカイ口を叩くんじゃねぇ、ちびメイド！どうせ身軽なだけだ！
早いとこ、取り押さえて輪姦(まわ)してやろうぜ！」

「そうだ！囲んで全員で掛かれば、多勢に無勢！
俺たちの物ブチ込まれてから泣いて謝っても遅いぞ！」

「今すぐメイド服引き裂いて、素っ裸に剥いてやるぜ！」

少年たちは口々に威勢の良い言葉を吐きながらロミを素早く取り囲む。主犯格の少年は、ロミを仲間の少年たちが取り囲むのを見て、

その場から後ろ足でやや下がる。そして左手にしっかりクレアのバッグを握ったまま、背中に差してある短剣の柄に右手を掛ける。ロミは両手の短剣を構えたまま、自分を取り囲みナイフを構える少年たちを見回す。

一瞬の沈黙が流れる。今まで聞こえなかった街のざわめきがやけに大きな音で流れてくる。

「うわあああああっ！」

雄たけびを上げて一斉に少年たちがロミに襲いかかる。何本ものナイフが彼女めがけて前後左右から振り下ろされる。しかしロミはまるで舞を踊る様な軽やかな身のこなしと、手に持った短剣ですべてを鮮やかに受け流す。さらにロミは、ナイフの動きを完全に見切ると、今度は両手の短剣と足を使って逆に少年たちに攻撃を仕掛ける。次の瞬間、彼女を取り囲んでいたすべての少年たちは地面に倒れてうめき声を上げて身悶えしていた。それは倒された少年たちにも何が起こったのか分からない程の速さであった。

ロミは再び体の前で両手を交差し短剣を構える姿を取り、残った主犯格の少年を不気味にオレンジに光る蛇の様な瞳で見つめる。

「さあ、どうする？お仲間たちはもう戦力にはならない。
まだ間に合う。バックを返せ。そうすれば見逃してやる」

ロミのその言葉に、主犯格の少年は急に表情を崩し、目に涙を浮かべて叫ぶ。

「ごめんなさい！許して！バックは返しますから……」

少年はクレアのバックを握った左手を震わせながら前にさし出しながらロミに近づく。ロミは左手の短剣だけを手放し地面に捨てると、右手の短剣は構えたまま、ゆっくりとバックに向かって左手を伸ばす。彼女の手がバックに触れたその瞬間だった。今まで涙を浮かべ怯えた表情だった少年の表情が、一瞬にして勝ち誇った表情に変わる。そして、背中の短刀の柄を握っていた右手が短剣を引き抜き、ロミの首筋を狙って大きく弧を描く。

「！」

小年の表情の変化を読み取ったロミは、咄嗟（とっさ）に体をのけ反らす。少年の短剣は彼女の首筋を外れ左腕の肩の下辺りを舐めて行った。ロミの左腕は一瞬にして力を失ってだらりと垂れ下がり、メイド服のその部分は大きく切り裂かれ、その下に現れた真っ白な肌には深く大きな刀傷が付き真っ赤な血が溢れだす。やがて、その血が腕を伝って指先からぼたぼたと地面に落ちはじめる。

「巧く避けたな、メスガキ！
だが、それでは左腕はもう使えまい！
こっちも手加減なしだ！
その体、無傷で楽しむつもりだったがやめた！
今すぐ、ぶっ殺してやる！」

冷酷な表情を浮かべた少年はそう叫ぶと短剣を構え直し、ロミに再び切りかかる。彼女は右手の短剣で少年の剣を受け流す。しかし、少年は流された短剣を巧みに切り返し何度もロミに切りかかる。ロミは少年の太刀筋を見極めすべて受け流してはいたが、それでも少年の力に押されて少しづつ後退をしていた。少年の何度目かの切り込みを受け流した時、ロミは背中に固い物を感じる。

「さぁどうするメスガキ！もう、後が無いぞ！」

少年のその声に、ロミは思わず自分の後ろを確認してしまう。その一瞬の隙を逃さず少年の左手がクレアのバックを離して地面に落とし、ロミの短剣を持つ右手首を掴み、彼女の頭の上辺りの壁に押しつける。さらに自らの体をロミの小さな体に押し当て壁を背に挟み込み、彼女の自由を奪う。

「勝負あったな……メスガキ……。
こうやって近くで見ると、お前、なかなか可愛い顔してるな」

少年はロミの顔を見下ろし舌舐めずりをしながら言った。しかし、ロミはオレンジ色に輝く瞳で少年を見ながら、無表情のまま微動だにしなかった。

「ふっ……それでも強気か……
まあ、良いさ……もう少し痛めつける前に、
少し楽しませてもらおうか……」

少年はそう言うと、右手の短剣を手の中でくるりと回して逆手に握り直すと、ロミの首筋からメイド服の下に刃先を入れ胸元を一気に切り裂く。彼女のまだ幼い小さな膨らみが少年の目の前に露わになる。少年はナイフを持った右手の甲を彼女の膨らみに当て、その柔らかい感触を楽しみながら、ゆっくりとロミの唇に自分の唇を近づける。少年の唇がロミの唇に触れ様としたその瞬間だった。

「ぐぅ……っ……」

少年が異様なうめき声を上げ、ロミの足元に崩れ落ちた。唇を奪わ

れる寸前、ロミの膝が少年の無防備に開いた股間を蹴り上げていたのだ。

ロミは、自分の左腕の傷をぺろりと舐める。すると今まであった深く大きな切り傷が一瞬で消えてしまう。さらにロミは眼を閉じ、じっと何かを念ずる様な表情になると、彼女の全身が一瞬淡い光に包まれる。その光が消えると、彼女のメイド服の破れや血の汚れなどが綺麗に消えて何事もなかったかの様な元の綺麗な状態に戻っていた。ロミは、地面に落ちていたクレアのバックを右手で拾い上げると、体を丸めて股間を押さえ苦痛のあまり地面を転げ回る少年を無表情のまま見下ろして静かに言う。

「このバックは返してもらう。
この金はな……クレアが自分自身を『館』から買い戻し、一日も早く自由の身になり、『ある男』に復讐する為に、文字通り身を削る様にして作った尊いお金。
毎週五日間ぶっ通しで、一晩中休みなく男のオモチャにされると言う
一番辛い『夕方(オーバーナイト)から早朝まで』を繰り返してな。
その辺の貴族連中が気楽に遊びながら手にしたお金とは重みが違うんだ」

そう言って踵(きびす)を返し二、三歩歩いた所でロミはふと立ち止まり主犯格の少年を振り返る。

「まあ、お前達にしてみれば生きる為にした事か……
その怪我じゃ、しばらく稼ぐ事も出来まい」

ロミはクレアのバックを開けて中から銀貨を五枚取り出して、倒れ

ている主犯格の少年に投げる。

「怪我の治療代だ……とっておけ……
そして私の事は忘れろ……」」

ロミのオレンジ色に輝いていた瞳が一瞬その輝きを増す。輝きがゆっくりと消えて行くと、ロミの瞳はまたいつもの様に金と銀に戻る。そして、ロミはまた正面を向いて何事もなかったかの様に歩きだす。

ロミの姿が路地の角を曲がって見えなくなると、少年たちが痛む体をさすりながら次々と体を起こす。

「畜生！あの……？……あれ……？」

「あの野郎、今度会ったら……って、あれ？」

「えっ……俺たち……誰と？」

体を起こした少年たちの誰もが怪訝な顔になっていく。最後に主犯格の少年も体を起こし、傍に落ちていた銀貨を拾い集めながら呟く。

「畜生、あの野郎、カッコつけやがって……
んっ……えっ！……俺たち、一体誰と喧嘩してたんだ？」

そう、少年たちはロミと大立ち回りを演じた事は鮮明に覚えていた。しかし、その記憶は相手の姿形だけがすっぽりと抜け落ちていたのだった。

『マダムシモーヌ』のイートインコーナーのテーブルでは、心配げな顔のクレアとバナビーがお互い無言のまま座っていた。二人の前にはお茶のカップが置かれていたが、二人ともほとんど手が付かない状態で冷めきっていた。

その時、『マダムシモーヌ』の扉が開き、メイド服姿の可愛い娘がひょっこりと顔をのぞかせて店内を見回す。そして、クレアとバナビーを見つけると、満面の笑顔で店内に入って来て、クレアに手を振りながら声を掛ける。

「クレア姉様！お待たせしました！
バックは無事に取り返してまいりました」

# 第15話　仕立屋バウマンの店

「ロミ！良かった！」

『マダムシモーヌ』の扉を開けて店の中に入って来たロミの声に気が付いたクレアは思わずそう叫んで、彼女に駆け寄り跪(ひざまず)いて、ロミの小さな体を抱き締める。思わずクレアの美しいエメラルドグリーンの瞳から安堵(あんど)の涙が流れる。そして一度体を離し、ロミを頭の先から足の先までゆっくり見回しながら尋ねる。

「ロミ……大丈夫？怪我はない？」

「はい……クレア姉様！」

ロミはにっこり笑ってそう答える。バナビーもクレアの後からロミの元に駆け寄っていた。

「ロミちゃん、一体何があったんだ？」

「クレア姉様のバックを盗んだ少年を追って行ったら、
不良少年グループの溜まり場に行きついてしまったんです。
そこで囲まれて襲われそうになったのを、
たまたま通りかかった旅の騎士様が救って下さって、
その上、バックまで取り返して下さったのです。
お名前をお聞きしたのですが教えてはもらえず、
騎士様は何も言わずに立ち去られてしまいました。
何とかお礼に銀貨を五枚だけ受け取って頂きました」

そう言うと、ロミはクレアをすまなそうな目で見て言いながら、手

に持ったクレアのバックを彼女に返す。

「クレア姉様、私、持ち合わせが無かったので、
姉様のバックから銀貨を出してお渡ししました。
『館』に帰ったら、必ずお返しします」

クレアは自分のバックを受け取ると、手にバックを持ったままロミを今一度抱き締め、その小さな頬に自分の頬を当てて目を閉じて言った。。

「それは私が払うべき謝礼……
気にしなくて良いよ、ロミ。
私は、お前が無事なら、それでもう十分なんだ」

「嬉しい……クレア姉様……」

ロミはそのクレアの言葉を聞くと、彼女の体にしがみつく。

「しかし、ロミちゃんが無事で良かったよ。
ところで、姉御達、これからどうする？
やっぱ、こんなケチがついたから『館』に帰るかい？」

バナビーはそう言いながら、クレアとロミをにこやかに見る。バナビーの言葉にクレアはロミの顔を見て尋ねる。

「ロミ、どうする？今日は、もう『館』に帰りたい？」

「私は大丈夫です、姉様。
せっかく街まで出て来てまだ時間はありますので、
最初の予定通り『バウマンの店』へ行って、

先日ダメになってしまったドレスの注文だけはしておきましょう」

ロミは明るい声でそうクレアに答える。

「ロミがそう言ってくれるなら、
ドレスの注文だけはしてから帰ろうか……」

クレアはそう言うと立ち上がり、バナビーを振り返って言った。

「じゃあ、悪いが『館』への土産は先に届けてくれ。
私たちは、これから仕立屋の『バウマンの店』へ行くから、
お前は、もう少し私たちに付き合ってくれるか、少年？」

「お安い御用で……姉御！」

バナビーはそう言うとにっこり笑って右手を軽く上げる。

クレア達三人は、ロミを待つ間に飲んだお茶の支払いを済ませると『マダムシモーヌ』を出る。今度は、バナビーが一歩先に表通りに出て、さりげなくクレアのバックを持つ手の側に自分の体を近づけて、しっかり彼女をガードする。その時、彼はいっその事、クレアの腰に手を回して恋人同士の様に体を密着させた方がより安全では？と考えたが、クレアとロミに何を言われるか分からないので、さすがにそれは思い留まった。

仕立屋『バウマンの店』は大通りに面していて、『マダムシモーヌ』から二ブロック先になる。距離にして歩いて数分と言う近い場所にあった。仕立屋『バウマンの店』は石造りの重厚な店構えで、通りに面した一部がガラス張りのショーウインドウになっている。その

中には流行の最先端のドレスが数着、帽子、靴、バック、アクセサリーなどの小物と共にセンス良く飾られていた。この『バウマンの店』は『薔薇の乙女』が贔屓（ひいき）にしている事もあり、ショーケースに飾られたドレスの足元には、そのドレスを購入したクレア達『薔薇の乙女』の名が書かれた札がさりげなく置かれていたりした。もちろんクレアの名前もその中にある。

ショーウインドウの横にある華麗な彫刻が施されたドアを開けてクレア達三人は店内に入って行く。この時もバナビーはレディーファーストを行うかのように、ドアを開きそのまま押さえて、クレアとロミを店内に先に入れ、その後追跡者などが居ないか通りの様子をさりげなく確認してから自分も店内に入る。

「ようこそお越し下さいました。クレア様」

入って右側のカウンター内で生地を慎重に裁断していた黒いドレスを着た小柄で品の良さそうな中年女性が、手に持っていたハサミを置いてクレアにお辞儀をして挨拶をすると、クレアの方に歩いてくる。ここの店主の『アルマ＝バウマン』である。

この店は『バウマン夫妻』が二人で経営をしているが、店の現場を切り盛りしているのが妻の『アルマ＝バウマン』で、夫の『エーベル＝バウマン』は経理や仕入れなどバックグラウンドの仕事を担当していて、滅多に店に出る事は無かった。店内はいつも非常に静かで、外見同様、重厚で落ち着いた造りになっている。店の一階には、生地見本やバックなどの小物が並ぶ一角と、採寸をする小部屋、アルマの仕事場、それに中央に客と商談するテーブルとソファーが置いてある。一階にはアルマと番頭役の若い女性店員が一人いるだけだが、二階の作業場には多くのお針子さんたちが賑やかに働いている。

「どうぞ、皆さん、おかけ下さい」

アルマは、クレア達三人に店の中央のソファーを勧める。長い客用のソファーにクレアが一番左、中央にロミ、一番右にバナビーと三人は並んで深々と座る。アルマは、クレアの前の一人掛けのソファーに浅く腰を下ろす。

「クレア様、先日お届けしましたドレスは如何でしたでしょうか？」

アルマはクレアを見てにこやかに尋ねる。その問い掛けにクレアは少しすまなそうな顔で答える。

「それがね……アルマ……」

その言葉に、アルマがすぐに反応する。彼女は慌てた様子で身を乗り出して尋ねる。

「何か不備でもございましたか？！クレア様」

クレアは、苦笑いを浮かべて頭を掻く。

「いや……不備なんかなかったよ。
出来はパーフェクト。私もすごく気に入ってたんだ。
……でもね、先日、仕事に着て出たら……
お客が力任せに脱がそうとして、破いてしまったんだ」

アルマはクレアの言葉に少し安心して、でも呆れた表情を浮かべる。またバナビーもその言葉に一瞬表情を曇らす。

「それは……また大変な事でしたね。
また、こちらへお持ちいただければお直しいたしますが」

「その、アルマ……実は……
あのドレス修復不可能な状態にされちゃったのよ」

クレアはすこし頬を赤らめて恥ずかしそうに言う。さすがにアルマも、ここに至りクレアの商売を知っているので『何があったか』を理解した様だった。

「なるほど……それは誠に残念です」

「それでね、アルマ。
あのドレスは、今までで一番気に入ってたんで、
是非、もう一着作って欲しいんだ」

「かしこまりました……クレア様。
それで、何か新たなご要望はございますか？」

アルマはドレスのポケットからメモ帳を取り出す。クレアは視線をしばし宙に泳がせる様にして考えてから答えた。

「胸元（デコルテ）をもうちょっとだけ広めに開けてもらえるかな？」

「かしこまりました。
ただあまり広げ過ぎると淫靡な感じが強く出て、
クレア様がお持ちの『ソフィア姫様』のイメージと離れますので、
5ミリ程で如何でしょう？」

「そうね……その位でお願い」

クレアの言葉を確認して、アルマはメモ帳に絵を添えた覚書を書き込んで行く。

「では、生地の在庫を確認してまいりますので、しばしお待ちを」

そう言って、アルマは立ち上がって二階の作業場へ上がって行った。
アルマと入れ替わりに番頭役の若い女性店員がクレア達にお茶の入ったカップとプチシューが乗った小皿を持って来て、テーブルの上に置く。

「お茶とお菓子です。
どうぞお召し上がりください」

そう言って、深々とお辞儀をすると、若い女性店員はまた奥へ戻って行く。

出されたお茶をすすりながらバナビーがクレアを見て言った。

「今日、何杯目のお茶だろう？
お茶ばっか飲むとトイレが近くなって困るよな、姉御！」

「馬鹿者！レディーに向かって何って事聞くんだ！
そんなんだから、いつまで経っても彼女の一人も出来ないんだぞ」

クレアは呆れた顔でバナビーを見る。

「バナビーさん、見た目は結構カッコ良いんだけど、
言動に思慮が無いと言うか……何か子供っぽいんですよね……。

だから、クレアお姉様はまともに相手をしてくれないんですよ」

ロミがテーブルの上のプチシューに手を伸ばしながらぼそりと呟く。

「うわっ！ロミちゃんにまで……

俺ってそんなにガキっぽいのかなぁ……」

「だから、私に『少年』って呼ばれるんだよ！」

そう言って落ち込み頭を抱えるバナビーを見てクレアはけらけらと笑った。

# 第１６話　少年騎士と想い人

間もなく、アルマは二階から降りて来て、クレアの前のソファーに座って彼女に確認する。

「クレア様、生地やその他の材料は在庫がありますので、一週間ほどで仕上げて『館』の方へお届け出来ると思います。胸元（デコルテ）の部分以外は前の物と同じでよろしいですね？」

「ええ、それで結構よ。お手数掛けるけど、お願ね、アルマ」

クレアはそう言って立ち上がろうとして、大事な事を思い出す。

「そうそう、忘れる所だった！今日注文したドレスの請求書は私でなく『館』宛てで、お願い！」

アルマは、手帳を開きメモを加えながらにこやかに言う。

「かしこまりました、クレア様」

クレア達三人が仕立屋『バウマンの店』を出ると、すでに陽は落ち、表通りの街灯に火が灯っていた。店の前にはすでにソードエンジェルの馬車が停まって三人を待っていた。表通りは、街灯や店の灯でかなり明るかったが、バナビーは細心の注意を周囲に払い、クレアとロミを馬車に乗せる。そして、自分が乗って馬車の戸を閉める寸前も鋭い目つきで一度周囲を見回す。

三人が乗り込むと馬車は静かに町外れの『馬車溜まり』へ向かって動き出す。今回もクレアとロミは進行方向に向かって並んで座り、バナビーは向かい側に座る。ただ、バナビーは行きと違って席の真ん中に座り、クレアとロミの間から馬車の後ろの窓から不審な追跡者が居ないか常に確認していた。

一見華やかで楽しげな夜のティボーシアの街であるが、国中でも有数な『夜の歓楽街』として栄えているだけあって、危険も多かった。

「陽が落ちた後は、若い娘が間違って表通りを離れ、裏通りに迷い込めば一時間もしない内にさらわれ、数日後にはどこかの娼館で働かされている」とまで言われる程であった。事実、若い女に限らず旅行者が行方不明になる事件はここでは日常茶飯事だった。そんな中、悪(わる)は悪でもこの街に長く居る者なら、国の庇護を受けている『薔薇の乙女』であるクレア達には後の事を恐れて間違っても手を出さないが、昼間の少年達の様にまだ悪に染まって日の浅い連中はその辺りの事情が分からず、人目を引く飛び抜けた美しさのクレアと、可愛いメイドのロミを見れば、良からぬ事を考える輩はまだまだ多い。それ故、バナビーは、陽が落ちてからの二人の身辺警護には特に気を使っていた。

やがて、三人を乗せた馬車は『馬車溜まり』に到着する。ここは、常駐するソードエンジェルの配下の者や、『馬車溜まり』独自の自警団もあって、ティボーシアの街中よりもかなり安全であった。クレアは馬車乗り場のベンチで『薔薇の館』の馬車を待ち、ロミは御者に馬車を乗り場に回してくれる様に頼む為に『御者の待合所』に向かった。バナビーはクレアの横に立ち、しっかりと彼女をエスコートしていた。そのバナビーを見上げてクレアは微笑みながら言う。

「真剣な顔で立ってるお前は結構良い男だぞ、少年」

突然のクレアの言葉に、バナビーは少し驚く。

「さて、そろそろ馬車も来るだろう。
今日は色々世話になった、ありがとう、少年」

クレアは静かに立ち上がるとバナビーの顔をじっと見る。

「これは、今日のチップ代わりだ、受け取れ……」

そう言うと、クレアはバナビーの両肩を軽く掴むと自分の唇を彼の唇に押し当てる。バナビーの歯の間にクレアの舌がそっと滑り込み彼の舌に一瞬だけ触れるとすぐに戻って行った。静かにクレアが唇を離すと、バナビーの目が大きく見開かれ、焦点の定まらない様子で瞳が宙を泳いでいた。そして、声にならない声でしばし口をパクパクさせ後、やっと絞り出す様な声で言う。

「あ、姉御……こ、これって……これって……」

そんなバナビーをクレアはどこか威厳に満ちた、でも優しい笑顔で見つめながら言った。

「少年よ、お前は良い騎士になる素質がある。
もっと大人になれ。上を向いて生きよ。
いつか国の主(あるじ)を主人として仕える騎士となれ。
その時になっても私を覚えていてくれれば、
それは私にとって何にも代えがたい喜びになるだろう」

そのクレアの言葉は、本当は『ソフィア姫』としてバナビーに掛けられた言葉だったのかもしれない。

バナビーがクレアの言葉の真意を量りあぐねてただじっとクレアを見詰めている間に、『薔薇の館』の馬車が二人の前にやって来て静かに停まる。中から扉が開き、ひょっこりロミが顔を出す。

「クレア姉様、お待ちどうさま！」

そうクレアに声を掛けてから、バナビーの様子が少しおかしい事に気が付き彼にも声を掛ける。

「バナビーさん、どうしたの？何か変」

ロミはそう言うってくすりと笑う。

「じゃあな、少年！
今度、街に出てきた時も、またお前に会いたいものだ！」

クレアはいつもの飄々（ひょうひょう）とした表情に戻り、ぽんとバナビーの肩を軽く叩いてから馬車に乗り込む。バナビーは何とか気を取り直して、馬車に乗り込んで行くクレアの背中に声を掛けた。

「姉御、それって、次のボディーガードに俺を指名するって事？」

クレアは何も言わずに、ただ笑顔で片手を上げ、そのまま馬車の扉を閉める。すると、静かに馬車はその場を離れて行く。一人残ったバナビーはクレアの乗った馬車が夜の闇に紛れて見えなくなるまでずっと見送っていた。

「やっぱり俺、あんたが良い！クレアの姉御……」

バナビーは最後にそう呟いて、待たせてあったソードエンジェルの馬車の方へ一人歩いて行く。

クレアとロミを乗せた馬車は大きな街道から、『館』のある森へ続く道に入ろうとしていた。この時間でも街道ではすれ違う馬車が結構あったが、脇道に入るとすれ違う馬車は全くなくなっていた。月明かりに照らされた馬車の外の景色を窓枠に頬杖をついてぼんやり眺めながら、クレアがロミに尋ねる。

「ロミ……
街でお前を助けてくれた旅の騎士の事だけど……
どんな男だったか覚えている？
背格好とか、髪の色とか、瞳の色とか……」

「何か気になる事でもあるのですか、クレア姉様？」

ロミは少し怪訝（けげん）な表情を浮かべてクレアに聞き返す。

「いや、良いんだ……何でもない……
ちょっと気になっただけさ、忘れてくれ……」

クレアは顔を窓の外に向けて頬杖をついたまま答えた。

その時、クレアの脳裏には一人の忘れ得ぬ人の姿があった。自分でも今、何故その人の事が頭に浮かんだのかは分からなかった。しかし、クレアは確かに、ロミが出会ったと言う旅の騎士が、もしかしたら彼女の心に秘めた想い人の『ミロク＝クジョウ』ではないかと、その時思ったのだ。『ソフィア姫』は生きていると信じて探すミロクが、『姫に似た娼婦がいると言う噂』を頼りに、このティボーシ

アの街までやって来たのではないかと。

（私、何考えてたんだろう？
馬鹿な私……そんな訳ないよね……
きっとミロクも、私は殺されたと思ってる。
そう思っていた方が彼も私も幸せなんだって分かってる。
彼が目の前に現れても私にはどうする事も出来ない……
会えば心の痛みが増すだけなのに……）

クレアはそう考え直し、頭からその淡い希望を消そうと軽く頭を振る。それでもクレアは最後に心の中でそっと願う。

（でも……もう一度、もう一度だけで良いから……
私が『ソフィア』と気付かれなくて良いから……
それでも、ミロクに会いたい……）

そんなクレアを、ロミはちらりと盗み見すると悲しげに目を伏せる。

やがて、二人を乗せて走る馬車の前方に、ぼんやりとした明かりの塊が森の中に現れる。さらに近付くと、貴族の館の様な『薔薇の館』のすべての窓には明かりが煌々と灯り、森の暗闇の中にその姿をはっきりと浮かび上がらせる。正面の門には松明が掲げられて、宵闇の中来るお客を迎える。馬車は門をくぐると、すでに営業を始めた正面玄関エントランスを避けて通り過ぎ、そのまま『館』の裏に回り、乙女たちの宿舎である『離れ』玄関ホール脇の車止めに静かに滑り込んで停まった。

クレアとロミが降りると、馬車はまた静かに動き出し車庫の方へ走って行った。

「今日は色々あって疲れたな、ロミ。
部屋に帰って着替えたら、夕食食べて、
皆が使う前に、一緒に『館』の方の大きなお風呂に入ろう！」

クレアは『離れ』の玄関ホールへ歩いて行きながら、笑顔でロミを振り返って言った。

「はい！クレア姉様！」

ロミも嬉しそうにクレアを見て大きく頷く。

# 第17話　ティエリー＝ボンフィス卿

『薔薇の館』の玄関ホールの向かって右側にある広い部屋が『薔薇の乙女』達の『控えの間』になっている。毎日、夕方、陽が沈むと『館』は営業を開始するのだが、乙女達はその少し前には支度を整えてこの部屋に集まる。この部屋は、まるで貴族の館のホールの様な造りで、中央に大理石の立派なテーブルやソファー、イスが置かれ、そこに乙女たちはくつろいだ姿で座って自分の客を待つのだった。またこの部屋と玄関ホールとの境の壁には大きなガラスの窓がはめられていて、客が玄関ホールに入れば、すぐにそこに居る『薔薇の乙女』たちの姿を、まるでショーケースを眺める様に見比べ選ぶ事が出来る工夫がされていた。もっとも、今は完全予約制で飛び込み客は無いので、この部屋の本来の意味はすでになくなっていた。

一方、マダムのシンシアは後ろに執事のロメオを従え、正面の大階段の脇にあるカウンター内のイスに座って三々五々やってくる客の受付をする。その為、最初のお客がやって来るまでの時間は、シンシアに話を聞かれる事もなく、気楽にお互いおしゃべりを楽しめる乙女たちの格好の雑談タイムとなっていた。

ちなみに客は玄関ホールに入り『控えの間』の前でお目当ての乙女と出会い、その乙女を伴ってシンシアのいるカウンターで受付と支払いを済ませてから、大階段を上がりそれぞれの乙女の仕事場となる部屋に入ると言う流れになっている。

ちょっとした事件があった外出ではあったが、翌日は部屋で一日のんびり過ごせた事もあり心身ともリフレッシュ出来たクレアは、この日が、休み明けの最初の営業日だった。『控えの間』には、営業

開始少し前にはドレスアップした『薔薇の乙女』五名全員が集まり、各自お気に入りの席について自室に居るかの様に寛(くつろ)いでいた

「くれあ、今日ノ化粧、一段ト念入リダナ」

ヘルガが、クレアを見ながらにやにやして声を掛ける。

「ふふふっ……そりゃ、そうさ、ヘルガ。
今日は、クレアの待ちに待った恋人がやってくるんだもんな！」

アマンダも同じ様に、クレアをからかう。

「なんか、妬けるよな！クレアの顔、いつもより生き生きしてる！」

シーヴァはクレアを指さして笑う。さらに、アルまでも手に持って読んでいた本から顔を上げてクレアを見てくすりと笑った。

「もう！止めてよ！
確かに『彼』は大事なお客様の一人だけど、恋人だなんて……。
歳だって、父娘(おやこ)ぐらい離れてるんだから！」

クレアは頬を赤らめて必死に否定する。

「『彼』、何日振リダ？胸ドキドキ？
彼、ドノ客ヨリ早ク来ル、くれあ今日ハ一番二ココカラ出ル」

「そうそう！『彼』いつも一番に来てここでクレアを見つけると、満面の笑顔で手を振るんだよな。
その『彼』を見つけた時のクレアの顔ったら……」

ヘルガとシーヴァは顔を見合せて大笑いする。

「止めて！止めて！お願いだから、もう許してってば！」

クレアは顔を手で覆って、まるで小娘の様にいやいやをする。その時、アルがぼそりと言った。

「あっ……『彼』来た……」

『館』の玄関の扉が開き、ブロンドの髪に灰色の瞳の見るからに上品そうな初老の紳士が入って来た。彼はそのまま、脇目も振らず『控えの間』のガラス窓の前まで来て、その中にクレアの姿を見つけると満面の笑みを浮かべて彼女に手を振る。そうこの初老の紳士こそが噂の『彼』『ティエリー＝ボンフィス枢機卿』であった。彼はその名の通り『ダルメハイン法国』の法王になる資格とその選挙に投票する権利を有する二十四名の枢機卿の一人だった。その中でも彼は現法王『グリエル5世』に非常に近い間柄で、首都シゼルカンドの法王庁近くに邸宅を構え、代々枢機卿を務める名家の当主である。また彼の歳は五十五、クレアが言う通り彼女とは父娘（おやこ）ほどの歳の差があり、誰が見ても外見的には恋人同士と言うより、仲の良い父娘と言った感じだった。

ティエリーに手を振られたクレアの顔に思わず笑みがこぼれ、イスから立ち上がって大きく手を振り返す。そんなクレアとティエリーの姿を見て、他の乙女たちは口を押さえてくすくす笑う。

「まったく、クレア、いくら言い訳したって、
その姿見たら、あんたの心の中は見え見えだよ。
まあ、良いや……さあ、早く行った！行った！

『彼』と素敵な夜を過ごしておいで！」

クレアにアマンダが呆れ顔で手を振る。クレアは小走りに『控えの間』の扉に駆け寄り、一度乙女たちを振り返って手を振ってから、扉を開けて玄関ホールに出て行く。玄関ホールに出ると扉の前にはティエリーが笑顔で立っていた。

「いらっしゃいませ……ボンフィス卿。
お待ち申しあげておりました」

クレアはそう言って、膝を折って挨拶するとすぐに彼の左腕にしっかり腕を絡ませる。

「クレア……また君に会えて嬉しいよ……」

ティエリーは優しい笑顔でクレアを見つめる。

二人は腕を絡ませたまま、シンシアの所で受付と支払いを済ませると、大階段を上り二階へ上がって行く。顧客台帳に今日の支払い金額などを記入しながら、階段をまるで恋人同士の様に仲良く上がって行くティエリーとクレアをちらりと見る。

「ボンフィス卿をクレアの『薔薇の初夜』の相手に選んだ私の目に、狂いは無かった。
『姫様』は、期待に違(たが)わず『良い後ろ盾』をしっかりと銜(くわ)え込んでるね。
しかも、昨日はバナビーの奴を、早速『騎士』として青田狩りしてたみたいだしさ。
『ソフィア姫』あんたやるね、その汚された体を逆手にとって着々……」

そう一人呟いてシンシアはにやりと笑った。

クレアは、自分の仕事部屋に入って後ろ手にドアを閉めると、待ち切れなかった様にティエリーにしがみ付き自ら自分の唇を彼の唇に押し当てる。そして、長いキスの後、甘える様な声でクレアはティエリーに囁きかける。

「会いたかった……そしてやっと会えた……
嬉しい……今夜はゆっくりしていってね、ティエリー……」

「私もだよ、クレア……この日をどれだけ待った事か……」

そう言ってティエリーもクレアの頭を優しく撫でながら、甘く優しい声で答える。

そして二人は手をつないで部屋の奥へ入って行く。クレアはティエリーを中央のソファーに座らせると、自分は壁際のサイドボードからティーカップを二つ取り出し、彼の前のテーブルに置く。そして、もう一度サイドボードの前に戻ると、その引き出しを開けてティエリーに尋ねる。

「お茶はいつもので良かったかしら?」

「ああ……でも、どんなお茶でも君が入れれば、
蜜の様に甘く美味しいから同じだけどね」

ティエリーは笑いながら答える。

クレアはその答えを聞いてから、引き出しの中にある彼女のお気に入りの茶葉『天上の桜』の入った小箱を手に取りティーポットにティースプーンで三杯入れてから、暖炉前までやって来てその上にある釜で沸いていたお湯を柄杓(ひしゃく)ですくうと、少し高い位置からポットの中へ器用に注ぐ。こうして注ぐ事でお湯の温度が適温に下がる効果があった。お湯を入れたポットをテーブルに置くと、保温用のポットカバーを掛けてからテーブルの上にあらかじめ置いてあった砂時計をひっくり返して、クレアはティエリーの横に座る。

ティエリーは砂時計の砂をちらりとみてから、隣に座ったクレアを優しく抱き寄せ、今度は彼の方からクレアにキスをしながら、左手で彼女の華奢な肩を抱き、右手の指先でドレスの上から彼女の緩やかな曲線を描く胸から腰をそっとなぞる。クレアは体の力を抜きティエリーにすべてを任せて目を閉じていた。彼女の瞼と唇がティエリーの指先に動きに合わせて時々、軽く痙攣するかの様に震える。しかし、その行為も長く続くわけではなく、砂時計の砂がすべて落ち切るのを視界の端で見たティエリーはそっとクレアの体を放す。

クレアは少し頬を染めながら乱れた髪をそっと手で直して、ポッドから保温カバーを外し、二人のカップにお茶を注ぐ。

「昨日は街で大変な目にあった様だね……大丈夫だったかい？」

「御存じだったのですね……でも、私もロミも大丈夫でした。怪我もありませんでしたし、お金もバックごと無事に返って来ました。

スリを追ったロミの話だと『旅の騎士』様が取り返してくださったとか」

ティエリーはカップに口をつけ、お茶を一口飲んでから、少し不安

げな顔になる。

「『旅の騎士』か……何か少し気になる話だね」

「私も、少し気になる事はありますが……考え過ぎだと思います」

クレアはそう言ってにっこり笑う。

その後、しばらく二人は恋人同士の様にとりとめもない話をしながら過ごす。ポットのお茶を飲み干す頃合いを見計らって、ティエリーは再びクレアを抱き寄せキスをすると、クレアの体を抱き上げてベッドに横たえる。

「ごめん、クレア……年甲斐もなく、性急かな?」

自分もクレアの横に身を投げて、クレアの顔を見詰めてそっと囁く。

クレアは小さく顔を左右に振ると、そっと目を閉じる。

# 第１８話　二度と引き返せぬ道

時間はすでに日付が変わる頃になっていた。

ベッドの中、天井を見ながら気だるそうに、でも満足げに裸で横たわるティエリーにクレアは寄り添う様に体を寄せていた。暖炉で暖まった部屋の中で、二人とも少し汗ばんでいたがお互いの体温と心臓の鼓動が感じられて心地よい時間が流れていた。

クレアはティエリーの胸板に手を当てて、ティエリーの顔を見上げる様にして少し悲しげな顔で囁く。

「あなただけ……私を『クレア』として抱いて下さるのは……
他の人は皆、部屋に入ると私を『ソフィア』としか呼ばない……」

ティエリーはクレアの頭を優しく撫でながら呟く。

「皮肉なものだ……ここでは……
君の本当の名を知っている私が君を偽名で呼び、
君の偽名しか知らない者達が、君の本当の名を呼ぶ」

そう、このティエリーもクレアが『ソフィア姫』その人である事を知っていた。

話は、二年と七カ月程前に遡る……

ロメオとの三ヶ月間の『偽りのハニムーン』を終えたクレアが『館』の一階にあるシンシアの仕事部屋に呼ばれていた。扉を開けると、

正面にそのまま中庭に出られる大きな窓があり、入ってすぐ右手にシンシアの私室へ繋がる扉がある。扉と窓の他の壁は一面おびただしい書物で覆われて、そこは事務所と言うより、書斎と言う雰囲気だった。中央に黒檀で出来た重々しいテーブルがあり、その両側に長いソファーと一人掛けのソファーが二つ向かって置かれていた。向かって右側の二つ並んだ一人掛けのソファーの後ろには同じく黒檀で出来た素晴らしい事務机と黒い革張りのイスがあった。

クレアが部屋に入ると、シンシアは一人掛けのソファーに座って長いパイプで煙草を吸っていた。

「まあ、座って、クレア」

シンシアに促されて、クレアはシンシアの向かいのソファーに座る。クレアがソファーに座ると、間もなく扉が開いてロメオがティーカップに入ったお茶を持って入って来た。彼はティーカップをシンシアの前とクレアの前に置きながら、さりげなくクレアの目を見て、シンシアに分からない様にそっと微笑みかけた。一瞬そのロメオと目が合ったクレアは頬を赤らめ慌てて視線を外す。ロメオがお辞儀をして部屋を出て行くと、シンシアはクレアの表情の変化を見逃さず、にやりと笑って煙草の煙を吐き出しながら言う。

「クレア……ロメオとのハニムーンは楽しかったかい？
彼から仕込まれた男を喜ばせるテクニック、ちゃんと覚えてる？」

その言葉に、クレアは自分がロメオとの甘い生活を餌に娼婦としてのテクニックをその体に仕込まれてしまった事を改めて自覚した。しかも、仕組まれた罠と頭では最初から分かっていたのに、その快楽の罠に体だけでなく心までもすっかり堕とされてしまった事に悔しさを感じて、シンシアを睨みつける。

「悔しそうね、クレア。
何も知らずに甘い罠に落ちるより、
あなたみたいに賢い娘が罠と分かっていながら、
それでも快楽に負けて堕ちてゆくは辛いでしょ。
見てる方はとっても楽しいけどね……」

「シンシア……今日は私を言葉でいじめる為にここへ呼んだの？」

そう言ったクレアの表情は怒りに満ち溢れ、その美しいグリーンの瞳から一筋悔し涙が零れる。そんなクレアにシンシアはテーブルの上の灰皿に煙草の灰を落としながら、笑顔を作って答える。

「ごめん！ごめん！
クレア、あなたが可愛いからつい、いじめたくなっただけさ。
今日は大事な話があるんだよ。
『薔薇の乙女』としてのデビューに関してね」

シンシアの言葉にクレアは思わず身を固くする。『薔薇の乙女』としてのデビューすなわち『娼婦』としてここで仕事を始めると言う事。すでに体はスザク達によって散々弄ばれていた。いまさら男達の慰み物になる事自体には恐怖も嫌悪感もなくなっていた。しかし、今までは「無理矢理された」と言う言い訳が出来た。しかし、一旦『娼婦』として仕事を始めれば、その言い訳は通じなくなる。『娼婦』として仕事を始めると言う事は、自らの意思でさらに自分自身を堕としめる事を意味するのだ。

シンシアは、再び、大きく煙草の煙を吸い込んで、ゆっくり吐き出しながら続ける。

「あなたの場合、『街娼』やってたって割に、
ここに来た当初、夜のテクニックは呆れるくらい下手くそだった。
まあ、そっちはこの三カ月でロメオが『薔薇の乙女』として
恥ずかしくないまでに仕込んでくれたみたいだから問題ない。
逆に他の知識や教養、マナーは天涯孤独の『街娼』にしては
最初からきちんと備わってた……
私が教える事もほとんどないくらいにね」

ここでシンシアは一度じろりとクレアを疑う様な眼差しで見る。クレアはさりげなく目を伏せ、視線を合わせない様にする。すぐにシンシアはまた笑顔に戻る。

「ホント、クレア、あなたは変わった娘(こ)だよ。
まあ……良いや……
それでね、こちらとしても、あなたには特別高い金を払ったんだから、
いつまでもタダ飯食べさせておく訳にもいかないの。
そろそろ、しっかり稼いでもらわないとね。
と言う事で、いよいよ『薔薇の乙女』デビューになるわけだけど……
その前に、あなたには、他の乙女たちがそうだった様に、
プレビューとして『舞踏会』に出て『社交界デビュー』してもらうわ」

「『舞踏会』『社交界』……？」

クレアは少し怪訝な顔をする。その時のクレアには、『娼婦』と『社交界』『舞踏会』と言った単語がどうしても繋がらなかったのだ。

「隣国クロフォードの『街娼』上がりのあなたじゃ、

イマイチ良く分からないかもしれないけど、
ここの『薔薇の乙女』が、相手をするのは皆、上流階級の方ばかり。
『薔薇の乙女』は、『娼婦』ではあるがその身分は『貴族』でもあると言う、
ほんの一握りの人数しか存在しない『国家公認の高級娼婦』なの。
だから、『館』でデビューする前に、
正式な『舞踏会』で、『社交界デビュー』する必要があるのよ。
もちろん、手続き上の意味だけじゃなくて、
そこでしっかり顧客を捕まえる目的もあるんだけどね」

クレア自身は、まだ『ソフィア姫』であった十六の時に『社交界』デビューは済ませていたし、『舞踏会』自体もすでに何度も経験していたので、それ自体には何の不安もなかった。しかし、それがクレアとして二度と引き返せぬ『娼婦としてのデビュー』と思うと、複雑な心境になっていた。そのクレアの表情の微妙な変化を見逃さずシンシアが尋ねる。

「『舞踏会』とか『社交界』は不安かい、クレア？」

シンシアの言葉に、クレアは覚悟を決めた。そして、彼女はこの時、改めて誓った……

（もう何も恐れない。
そうよ……失う物などもう何もない。
私は生きる……どんな屈辱に塗（まみ）れようと生き抜いて見せる。
そして必ず、あの男、スザクに復讐する！）

クレアは決意を込めた強い眼差しでシンシアを見て答える。

「いいえ、シンシア。
私には、もう怖い物など何もないわ」

シンシアは、クレアの目を見て満足げに頷きながら言った。

「うん、クレア……あなたには、その眼が似合う……」

そしてシンシアは、煙草をまた大きく吸い込むと、静かに煙を吐きだしながら、テーブルの上の灰皿に煙草の先を押しつけて火を消しパイプも灰皿の上に置く。

「それじゃ『舞踏会』の日時は早々にこちらで決めて連絡するわ。
あなたは、それまでに着て行くドレスや靴、アクセサリーなどの小物を揃えて。
もちろんそれはあなたの商売道具になるんだから、ちゃんとあなたが払うのよ。
今のあなたは一文無しの状態だから、とりあえずは『館』が立て替えて払ってあげるけど、
その分はお仕事してお金が入る様になったらしっかり返してもらうからね」

シンシアの言葉に、クレアは苦笑しながら答える。

「働く前からしっかり借金を増やしておくって訳ね。
もちろん、その借金、目の玉が飛び出るくらいの利息を取るんでしょ？」

クレアのあまりに的を射た言葉に、シンシアは大笑いしながら言う。

「ははははっ！さすがは、クレア！　分かってるじゃない！

でもね、利息は街の娼館に比べたら、この『館』は良心的さ。
そうそう、だからと言って……
安いドレスなんか買って来たら恥かくのはあなた自身よ。
お客はみんな目の肥えた人たち、変な物着たり持ってたりしたら、
足元見られてお客が付かないよ。
お客が付かなきゃ、借金もいつまで経っても返せない。
借金返せなきゃ、自由の身にはなれないんだよ」

「分かってるわ……私だって一日も早く自由の身になりたいから。
じゃあ、今日はもう良いかしら？」

クレアの言葉に、シンシアは黙って頷き、ドアの方へ右手を向けて
クレアを促す。それを見てクレアは、ソファーから立ち上がり、ド
アを開けて部屋を出て行く。

## 第19話　エドラ＝フォルシウス

部屋を出て行くクレアの後ろ姿を見送りながらシンシアはそっと呟く。

「『一日も早く自由の身になりたい』か……
そうだろうねぇ……あなたにはやるべき事があるものね。
クレア……いや、『ソフィア姫』……」

そう、この時、すでにシンシアはロミオを使ってクレアの素性の調査を終えていたのだ。クレアとの『偽りのハニムーン』をこなしながら、クレアの素性調査も並行してきっちりこなす。それが出来るのが『薔薇の館』のマダム『シンシア＝ラザフォード』の専属執事の『ロメオ＝メカイ』であった。

城を出る時のクレアは、さらなく屈辱を彼女に与える為と本当の素性を隠す為に、下着すら与えられず、裸の上に粗末なワンピース一枚を纏(まと)っただけの姿だった。しかも、その粗末なワンピースですら『薔薇に囚われし聖女』の刺青を彫られた時に背中を切り裂かれて二度と着れなくなっていた。その為、『館』では下着と使用人用のメイド服を借りて日々暮らしていた。しかし、ティボーシアの街へデビュー前とは言え『薔薇の乙女』がドレスや小物などを買いに出るにあたってメイド服はまずいと言う事になり、背格好が良く似たシーヴァにドレスを借りてティボーシアの街まで行く事になった。シーヴァは、この時、すでに一年早く『薔薇の乙女』としてデビューしていた。その上、シーヴァは自分の休みの日に、わざわざクレアの買い物に付き合ってくれた。お城育ちで、街で買い物などした事の無かったクレアにとって、その時のシーヴァは男装している事

も手伝ってとても心強い存在だった。また、シーヴァも、しっかりした性格そうでいて、買い物の仕方などをみると天然ボケと思えるほど頓珍漢な言動をするクレアに大いに興味を持った。この事が切欠で、二人は乙女の中でも特に仲の良い友人となっていった。

そして、いよいよ、クレアが『薔薇の乙女』として正式に『社交界』デビューする日が来た。

クレアは、全体は淡いピンク、胸の部分に白いレースをあしらい、腰から下には赤い薔薇の模様を散らした美しいドレスに身を包み、磨き上げられた白のハイヒールを履き、輝くばかりに美しく長いブロンドの髪を綺麗に結い上げていた。『薔薇の乙女』達が着るドレスは、特に決まりがあるわけではないのだが、どの乙女達も背中の開いていない物を好んで着ていた。これは、彼女達が背中に背負う『薔薇に囚われし聖女』の刺青をこれ見よがしに世間の目に晒すのを嫌う為だった。『薔薇の乙女』である誇りはあるが、それは密やかに持つ物であると乙女たちは考えていたのだ。その代わりに今回の様な『薔薇の乙女』である事を他の人々に知らせる必要のある時は、髪に『薔薇の乙女』である事を示す薔薇の花を模した髪飾りをする事が習わしになっていた。クレアが今着ているピンクのドレスも同様に背中はきちんと覆われて彼女の『薔薇に囚われし聖女』の刺青は見えなかったが、習わし通りそのブロンドの髪に薔薇の花の髪飾りをしていた。

クレアのプレビューになる『舞踏会』へ向かう馬車の中、自身も色は常日と同じ濃紺一色、レースなどの飾りも最小限で一見地味ではあるが、彼女らしく手の込んだ織りと造りのドレスを着たシンシアがやや緊張気味のクレアにそっと語りかける。

「クレア、これだけは忘れないで……
この舞踏会はあなたのプレビューが目的の舞踏会だけど、
『薔薇の乙女』を快く思わない人たちも出席している事をね。
彼らは、必ずあなたに『恥』をかかせようと罠を仕掛けてるはず。
一旦、会場に入れば私は、その罠に気が付いても、
あなたを救ってあげる事は出来ない……悲しいけどそれが『大人のルール』。
クレア、自分の身は自分で守るのよ。
そして、一人でも多くの殿方の興味を勝ち取りなさい」

「分かったわ……シンシア……
十分の気をつける……ありがとう……」

そう言ったクレアの瞳は、決意に満ちた強い輝きを持っていた。

（ふふふっ……今までは連中にやられてばかりだったけど、
今回ばかりは、ひょっとすると奴らに一泡吹かせてやれるかも）

シンシアはそう心の中で思い、馬車の窓の外を見て密かにほくそ笑んだ。実際、今まで連中の『罠』に落ちなかった『薔薇の乙女』は誰一人居なかった。皆、プレビューの舞踏会で何かしらの『恥』をかかされ連中の笑い物にされた。ただ実際の所は、笑い物にされてもそれが完全な失敗になる事はなく、逆にそれが殿方の同情を引いてその場で結構な人数の顧客が付く事が多かった。それ故、シンシアも会場内では素直に『大人のルール』に従っていた。

やがて、馬車は舞踏会の会場となる首都『シゼルカンド』の法王庁直轄の『大ホール』に到着する。

ホール前の馬車停めにはすでに多くの馬車が停まっていた。その前をクレアとシンシアを乗せた馬車は進み、エントランスホール前で止まる。すると、『薔薇に囚われし聖女』の図柄が描かれた馬車を目ざとく見つけた男達が、少しでも早く新人の『薔薇の乙女』の姿を見ようとクレアの乗った馬車に近寄って人垣を作る。ここで通常なら目上であるマダムのシンシアが最後に馬車を降りるのだが、今夜に限っては主役はクレアである為に、シンシアが先に馬車を降りクレアをエスコートする。

先に降りて馬車のドア脇に立ったシンシアが差し出した手の平に自分の手を乗せたクレアは、優雅な仕草で馬車を降り、回りに集まった人々を静かに見回し、目を伏せ軽く膝を曲げて挨拶をする。その『娼婦』とは思えない優雅さと気品、その上、高貴さえ漂わすクレアの姿に、どよめきが起こる。

「あれが新人の『薔薇の乙女』クレア嬢か、なんて美しいんだ……」

「売り文句は『聖女ソフィア姫に瓜二つ』らしいが……
あの気品と優雅さは、誇大広告じゃなさそうだ」

「俺は二年ほど前に本物の『ソフィア姫』を見た事があるが、
そっくりだ！まるで『ソフィア姫』が生き返った様だ！」

集まった人々がクレアの姿を見て口々に感嘆の言葉を囁く。その中をクレアはシンシアの手を引かれて会場内へとゆっくり歩いて行く。

エントランスホールに入るとすぐに、手の込んだ織り柄の入った真っ赤なドレスに白いレースをあしらったドレスと高価そうな宝石のついた多くのアクセサリーを身に纏い、シルバーに近いプラチナブロンドの髪を結い上げ、とび色の瞳を持つ歳の頃なら四十代半ばの

貴婦人が、同じ様な取り巻き風の貴婦人を数人従えて二人の前に現れた。

「ごきげんよう、娼館『薔薇の館』のマダム、シンシアさん」

その貴婦人は『娼館』と言う部分を吐き捨てる様に強調して言うと、軽く膝を曲げて挨拶する。

（しまった！もう仕掛けられるとは……迂闊だった）

シンシアは自分も膝を曲げ軽く頭を下げながら、心配げにそっとクレアを見る。

「はじめまして、マダム……私（わたくし）、『薔薇の館』の『クレア＝カラス』と申します。
不束（ふつつか）な者ですが、以後お見知りおきを……」

クレアはそう言うと、その場に跪（ひざまず）き深々と頭を下げる。

「そう、あなたが噂になってる『薔薇の館』の新人娼婦のクレアさんね。
ふふふっ……殿方が噂してた通りの美しいお人形さんね。
私はフォルシウス家の長女『エドラ＝フォルシウス』、覚えておいて下さいね」

エドラはまた『娼婦』と言う言葉を強調して言うと、クレアの顔を見下ろしてやや軽蔑を込めた笑いを浮かべる。

「では、後ほど会場で……」

彼女はそう言うと、背筋をきりっと伸ばし、くるりと踵を返すと取り巻きを引きつれて人ごみに消えて行く。

シンシアはエドラがとりあえず何事もなく去ってくれた事に、安堵の表情を浮かべてクレアを見て小声で囁く。

「心臓が止まる思いだったよ。
よく、あそこで跪くことが出来たね、クレア」

クレアは立ち上がると、口元に余裕の笑みを浮かべるとシンシアと目を合わさずに呟く。

「あの方が誰かは知らなかったけれど、
立ち振る舞い、取り巻きの数、言葉使いを考えれば、
自(おの)ずと、かなりの家柄の貴婦人だと分かったわ。
あの人が、あなたの言う『要注意集団』のボスでしょ……」

シンシアもクレアを見ずに小声で答える。

「ご明察(めいさつ)！やるわね、クレア……」

そう言うとシンシアは、またクレアの手を取って会場の方へ歩いて行く。

一方、エドラはクレアとシンシアの前で踵を返すとすぐに不機嫌な表情になって吐き捨てる様に呟いた。

「畜生！あの小娘！
私の対して完璧な対応しやがって！

シンシアの奴、今度の奴は余程しっかり仕込んで来たと見える！」

# 第２０話　三匹の黒い飼い犬

クレアとシンシアが会場に入ると、すぐに二人は多くの男性陣に取り囲まれた。そして彼らは口々にクレアの前でにこやかに自己紹介をしてゆく。そのほとんどが、すでにシンシアとは顔見知りらしく、シンシアの方は先ほどのエドラの時と打って変わってリラックスしている様子だった。時々、この場に相応（ふさわ）しいかどうか疑問になる様な冗談さえも飛び交っていた。

その時だった。『ティエリー＝ボンフィス枢機卿』が人垣を掻き分ける様にしてクレアの前に進み出ると、さっと彼女の前に跪く。シンシアは彼の姿を見ると、慌てて自らも膝を追って挨拶した。

「私は、この『ダルメハイン法国』にて枢機卿を務めさせていただいております、
『ティエリー＝ボンフィス』と申す者です。
以後、お見知りおきを……」

ティエリーはそう言うとそっと右の手のひらをクレアの前に差し出す。クレアは右足を一歩後ろに引いてから、やや深めに膝を折って挨拶すると、彼の右手の上に自分の左手を置きながら自己紹介をする。

「はじめまして、ボンフィス卿……
私（わたくし）、『薔薇の館』の『クレア＝カラス』と申します。
身に余る丁寧なご挨拶を頂き、恐縮の限りです」

ティエリーはクレアの顔を見上げ、にっこり笑うと彼女の差し出された左手の甲にそっとキスをしてから静かに立ち上がる。

「ではまた……是非、後ほどゆっくりとお話しをしたいですね……」

そう言ってティエリーは、クレアに向かってにこやかに手を振りながらその場を後にした。これがクレアとティエリーの出会いであった。

「クレア、悪いが少し、ここを離れる。
しばらく一人にするが大丈夫か？」

シンシアは、その場を離れるティエリーの背を見ながら、クレアの耳元で囁く。

「私は大丈夫よ、シンシア」

クレアの言葉を聞いて、シンシアは彼女の肩を軽くぽんと叩いてから、ティエリーの後を追って人ごみに消えて行った。

ティエリーとシンシアがその場を去ると、クレアの周りに集まっていた男達がにわかにざわめき始める。

「あのボンフィス卿がクレア嬢に跪いて挨拶を……」

「これは強敵が現れたな……」

「クレア殿の『薔薇の初夜』を狙っていたが……
あの方が相手だと、ちと苦しそうだわい！」

その時のクレアは、まだティエリーが『何者』なのかは正確には分からなかったが、自分の回りに集まった男達の話から、この国では

かなり身分の高く家柄も良い人物だと言う事は理解できた。また彼女を取り囲む男達の会話に時折出てくる『薔薇の初夜』と言う言葉もクレアには気になる言葉であったが、その時はまだ意味が分からなかった。

シンシアはティエリーの後を追ってクレアの傍には居なくなっていたが、彼女の周りに集まった男達が適当な話し相手になってくれていたので、特に寂しさや不安はあまり感じなかった。逆に、クレアはこの機会を捕え、その男達との会話から色々な世間の情報を収集する事に努めていた。お城育ちで世間の事に疎い彼女にとってそれは願ってもない機会だった。たまにクレアが普通の女性からすれば、明らかにおかしな言動をしても、そこは売り文句が『ソフィア姫に瓜二つ』のクレアの事……

「……ってお城育ちの本物のソフィア姫なら言いますよね！」

の言葉をその後に繋げれば、男達は特に不審に思う様子は無かった。

そうこうしてる内に、シンシアがクレアの所に帰ってきた。開口一番シンシアが心配げにクレアの顔を見て尋ねる。

「クレア、あなた、大丈夫だった？
変な事されたりしなかった？」

まるで母親が我が娘を心配する様な問い掛けに、周りに居た男達からからかいの声が上がる。

「おいおい、シンシア！その言い方じゃ、
まるで僕らがクレア嬢に『良からぬ事』を考えてる様じゃないか？」

「今までに、デビューする乙女に対してそんな心配の仕方した事あったか？」

「まあ『神に誓って「そう言う事」を考えてないか？』と問われれば、

僕らも返答に苦しむ所だがな……」

もちろんシンシアが心配したのは、エドラが自分が傍に居ない間にクレアに対して『何か謀（はかりごと）』を仕掛けて来たのではないかと心配したのであり、そこに居た男達の事を心配したのではなかった。男達が考える程度の『良からぬ事』ならば、心配せずともクレアなら無難にあしらう事出来ると彼女は確信していた。

「大丈夫よ、シンシア。

ここにいる素敵な殿方達が話相手になって下さって、

とても楽しい時間を過ごす事が出来ました」

クレアは花の様な笑顔を浮かべて、シンシアの問い掛けに答える。そのクレアの言葉を聞いて、今やクレアの取り巻きと化した男たちはさらに気を良くして、クレアにどんどん夢中になって行く。

クレア達の近くで数人の男女と歓談をしていた若い貴婦人がその輪をそっと離れる。彼女は、そのまま会場を横切るとクレア達の居た場所のちょうど反対側にたむろする貴婦人の集団の中へ入って行った。彼女は、その中心にいて周りの貴婦人と楽しげに歓談するエドラの後ろからそっと近づき、耳元でそっと何事か囁く。その瞬間、それまでにこやかな笑顔で歓談していたエドラの表情が一変する。

「ちっ……あのクレアとか言う売女め……」

悔しげな表情で吐き捨てる様にエドラが呟く。しかし、すぐに元のにこやかな笑顔に戻って彼女は周りの婦人達を一度見回す。

「皆さん、すみませんが、私、用事がございますので少々中座いたします。
すぐに戻ってまいりますので、それまで御歓談を続けていて下さいね」

エドラは軽く頭を下げながらそう言うと、静かにその場を離れて会場の外に出て行く。

そのまま、エドラはエントランスホールとは逆側の人通りのほとんどない廊下を歩いて行く。

「シンシアの所の売女、多くの男共に囲まれお姫様気取りだって！
その上、あのボンフィス卿の正式な挨拶まで受けただと！
このままじゃ、すまさないからね！
必ず、死ぬほど恥ずかしい目に遭わせてやる。
あいつら娼婦は、私たち慎ましやかに生きる女から、大事な男を奪う魔女よ！
誰にでも足を開くサカリのついた雌犬の分際でこんな場所に出て来て！
許さない……私はあいつらの存在を絶対に許さない」

彼女は歩きながら憎々しげに独り言を呟き続ける。

やがて廊下の途中にあった扉をノックしてからエドラは、その扉の中へ入って行く。その部屋は、ホールで行われる催事の際、控えの

間として使われる部屋で、中央に大きなテーブルやソファー、イスなどが置かれていた。今回の舞踏会では使用される予定にはなく空室になっているはずだった。しかし、エドラが部屋に入るとそこには三人の若い貴族風の男達が、ある者はソファーに寝転がり、ある者はイスにのけ反り座り、またある者はテーブルの上に横になっていた。さらに三人が三人ともワインの瓶を手に持って、時折そのままラッパ飲みをしている。見かけはきちんとした貴族風ではあったが、実際の印象は街のならず者と変わらない粗野な感じであった。そんな三人は入って来たエドラを見つけるといやらしい笑いを口元に浮かべて語りかける。

「なあ、エドラの姉御よ……いつまで待たせるんだ?」

ソファーの上のリーダー格らしい男がそう言うと、イスにだらしなく座る男が続ける。

「良い想いが出来るって言うから俺たち来たんだぜ!」

「早くしねぇと、俺たち帰っちまうぞ」

最後にテーブルの上に寝そべる男が呟く。エドラはそんな男達に気後れすることなく背筋を伸ばし姿勢を正して静かに言った。

「もう少し待ちなさい。
こちらで用意した『お楽しみ』が全部外れたら、
『極上の御馳走』を味あわせてあげる。
もしこちらの目論見が一つでも当たれば、
残念だけどその御馳走はなくなる。
でも、その代わりに……
『薔薇の館』とまではゆかないけど、

そこそこの娼館で一晩思いっきり遊ばせてあげるからね。
まあ、どちらに転んでも、約束通りの報酬は払うから安心して」

その言葉を聞くと、ソファーの男が舌なめずりをしながら立ち上がり、エドラの後ろに回りその耳元で囁く。

「俺らさ、その『極上の御馳走』がダメな時は、
別に『娼婦』じゃなくても良いんだぜ……
いつもの様に『熟した貴婦人』を三人でって奴でもさ」

エドラはその言葉に動じる事無く、男を振り返り怖ろしい形相で睨みつけて囁き返す。

「余分な事は口にするんじゃないよ……
私にとって、あなた達をこの世から消し去る事なんて造作無い事。
飼い犬は大人しく主人の言う通りに動けば良い」

「ちっ！……分かったよ、姉御……」

そう少し悔しげな表情で言った男は、大人しくソファーの上に戻る。
エドラは、そのまま、くるりと踵を返すと扉を開けて部屋からヒールの音を響かせながら出て行った。

# 第２１話　ラ・クレシーダの円舞曲

その後、クレアの周りではエドラが仕組んだと思われる小さなトラブルが何度か起きた。しかし、それはこの様な場に不慣れな者に恥をかかせる様に仕組まれた物であった為に、『ソフィア姫』としてのマナーがしっかり身に付いている上に経験も豊富なクレアにとっては大事に至らず、すべてそつなくやり過ごしていた。『大人のルール』により分かっていても見守る事しか出来なかったシンシアも、そんなクレアを見てこの会場に入った時に比べれば遥かに安心していった。

そして、この『舞踏会』のメインイベントのダンスの時間が始まろうとしていた。

早速、クレアの一番近くに陣取っていた若い男が、クレアの前に跪きうやうやしく片手を彼女の前に差し出し誘った。

「クレア嬢、どうか私と一曲お願いいたします」

クレアはにっこり笑うと、男の手の平の上に自分の手を乗せて答える。

「はい……こちらこそ、喜んで……」

クレアの返事を聞いて若い男は満面の笑みを浮かべて立ち上がると、そのままクレアの手を引いてダンスフロアーの方へ歩いて行く。すぐさま、クレアの周りにいた他の男達のやっかみの声が上がる。

「あっ！油断していましたよ！彼に先を越されてしまいました！」

「クレア嬢とのダンス、私が一番を狙っていたのに！」

「あなたなんか、途中で転んで、皆さんの前で大恥をかきなさい！」

フロアーで踊る位置を確保し、クレアの細い腰に片手を回し、もう片手で彼女の手を取ってポーズを取った男は、やっかむ男たちを見てにやりと笑う。

やがて、フロアー奥のオーケストラが静かにワルツを奏で始める。まるで時計仕掛けの人形の様にフロアーの上に男女がそろって曲に合わせてくるくると軽やかに舞い始める。踊っている人数は多かったが、やがてフロアーを囲む男性の視線だけでなく女性の視線さえも、クレア一人に釘付けになっていった。その優雅な身のこなしはとても付け焼刃でダンスを覚えた『娼婦』の物とはとても思えなかった。それはまさに『ソフィア姫』を思わせる高貴ささえも醸し出していた。特に女性の視線は、最初はクレアのダンスを笑ってやろうと言う悪意に満ちた冷たい物だったが、そのあまりに完璧で美しいダンスに、程なく称賛に満ちた物に変わって行った。

最初の一曲が終わると、クレアの元には周りから男達が集まり、皆、我先に彼女の前に跪きダンスの申し出をする。クレアは嬉しそうに、でもあまりの多くの男達の申し出に戸惑いの表情を浮かべて彼らに言った。

「この様に、多くの殿方のお誘い、身に余る光栄です。
しかし、私の様な女が皆さまの様な立派な殿方の中から、
次のダンスのお相手をお一人選ぶなどと言う恐れ多い事は出来ません。

私は、曲が続く限り皆さんのお相手をいたしますので、
どうか皆さま同士で踊る順番を決めていただけないでしょうか？」

クレアのその言葉と、可愛い困った表情がさらに男達を彼女の虜にしていく。すぐさま男達はクレアから少し離れて集まり、何やら相談事をすると、すぐに次のパートナーを決めてクレアの元に送り出す。その男は、集まった男達の中で、誰もが認める一番社会的地位が高い者の様であった。その男を送りだした後、残りの男たちはダンスが始まってもフロアーからやや離れて集まり順番を色々と話しあっていた。

人々の注目を浴びて優雅に踊るクレアをシンシアは満足げに見守っていた。

「今までは、このダンスタイムが鬼門だったんだ。
うちに来る女達の大半はこんな『舞踏会』の経験なんてないからねぇ。
何とか短期間で基礎は叩きこむ事は出来ても、
良く行ってミスなく初歩のステップが踏める程度が精一杯。
結局、あのエドラの奴の目論見通りに、
中盤以降の難しい曲で、衆人環視の中で恥をかかされてきた。
しかし、今度こそ、あの野郎に一泡吹かせられる気がするよ」

そう独り言をつぶやくとにやりと笑う。

『舞踏会』のダンスも中盤を越えて、曲も変化に飛んだ難しい曲になる。当初は踊る人間の肩同士が触れ合う程の混雑だったフロアーも、ここまで来ると踊りこなせる自信のない者は皆フロアーを降り観客に徹する様になり、残った腕に覚えのある十数組のカップルが広々としたフロアーを一杯に使い、優雅に、かつダイナミックに踊

っていた。もちろん、クレアもその中に含まれ、いまだ優雅に踊り続けていた。さすがにクレアの腰を抱いて何度でも踊りたいと願う男達も、今のレベルの曲を踊りこなせる自信のある者はほんの一握りとなって、大半の男は踊るクレアを指を咥えて見守っているだけになっていた。

「すごいな、クレア嬢は……
フロアーに残ってる奴ら、もうセミプロ級の有名人だけだぞ」

「ああ……その中にでも、まったく遜色なく踊ってる！
いや、奴らより、光ってる気がする」

「まるで、あの『ソフィア姫』様が蘇って踊ってる様じゃないか！」

すでに会場全体が、クレアのダンスに魅了されていた。それは、美しく、優雅で、そして高貴な光に包まれているかの様に輝いて見えた。そんな会場の様子に、シンシアは満足げに見回していた。

その時だった……彼女の耳元で特徴ある声が囁き掛けた。

「安心するのはまだ早いわよ、シンシア」

振り向いたシンシアの目に、エドラが不気味な笑顔を浮かべる顔が映る。

「エドラ！どう言う事よ！」

シンシアの目をしっかり見つめて、静かにエドラは言った。

「今日の最後の曲は『ラ・クレシーダの円舞曲』よ……」

その言葉にシンシアの表情が凍り付く。『ラ・クレシーダの円舞曲』それは最高のダンステクニックを要求される最難関曲。リズムの変化が激しく、しかも要求されるステップのすべてが上級クラスばかり。しかもラストに、最大の難関が控えていた。通称『堕天使のターン』と言われるウルトラC級のターンが女性には待っているのだ。この『堕天使のターン』は複雑かつ繊細でありながらダイナミック、もはやそれはダンスの域を超えてアクロバットとも言われ、この国でも踊りこなせる女性は片手で数える程だった。

「ふふふっ……事の重大さが分かった様ね、シンシア。
あなたの所の新しい雌犬は、今までに十分観衆の関心を集めてくれている。
しかも、曲が『ラ・クレシーダ』となれば、フロアーには何人残るかしら?
あの雌犬は、スポットライトを浴びて、大恥をかくのよ。
それで、デビューは大失敗……」

「なぜ『ラ・クレシーダ』?
あのダンスは女性のみならず、踊れる男も知れているはず。
相手が居なければ、そもそもダンスは成立しない。
あの曲は事前に踊れる者の申請がなければ演奏はしないはずよ!」

シンシアはエドラの胸倉を掴みかからんばかりに詰め寄る。

「残念でした……あのトップダンサー『アラム＝ブガロフ』が来てるの。
彼が、あなたの所の雌犬と是非この曲を踊りたいって申請したのよ」

「仕込んだわね、エドラ！」

悔しげにエドラを睨みつけるシンシアにエドラは勝ち誇った顔で言う。

「さて、あのクレアとか言う雌犬、どうするかしらね？
恥を忍んで、天才ダンサー『アラム＝ブガロフ』の誘いを断るか？
或いは、誘いに乗って下手くそな踊りを披露するか？
どちらにしろ、衆人環視の中で大恥かく事は間違いないわね」

「……くそっ……」

シンシアは悔しさに歯ぎしりをする。

そうこうしている内に、最後の曲になる。司会の夫人が最後の曲が『ラ・クレシーダの円舞曲』である事をフロアーに残っていた者達に告げると、すべての者が顔を左右に振りながら残念そうにフロアーから降りて行く。クレアのパートナーだった男も例外ではなく彼女の手を取りながら言った。

「残念だけれど、『ラ・クレシーダ』だけは私も無理だ。
しかし、驚いたよ。ここまでの曲をすべて完ぺきに踊りこなすとは。
じゃあ、一緒にフロアーを降りようか、クレア殿」

そしてクレアもパートナーに手を取られフロアーを降りようとした時、会場がにわかにどよめきた。フロアーの回りの人ごみを掻き分け一人の男がフロアーに入って来た。その男はブロンドの長い髪と、

引きしまった肉体が特徴の若い男であった。

「おいっ！あれは『アラム＝ブガロフ』じゃないのか？」

「嘘だろ！あの男がここに来てたなんて！」

その男こそエドラの連れて来た天才ダンサーの『アラム＝ブガロフ』だった。彼はフロアーを降りようとするクレアの前に跪くと手を差し出しながら言った。

「どうかこの私と最後の一曲を踊っていただけませんか？」

その言葉に、会場が一瞬静まり返る。誰もがクレアの返答を期待して待つ。シンシアは固く目を閉ざし祈る。

（クレア、もう良い！
ここで引くのは負けじゃない！
恥を忍んで断るんだ！
もう今日はここまでで十分だ！）

## 第２２話　堕天使のターン

会場中が固唾（かたず）を飲んで見守る中、ついにクレアがその口を開いた。

「はい……喜んでお誘いをお受けいたします」

アラムの誘いに、クレアは軽く膝を折ってからそう答え、自分の手をアラムの手にそっと乗せる。同時に会場がまたどよめきに包まれる。

「おおっ！クレア嬢が誘いを受けたぞ！」

「踊れるのか？曲は『ラ・クレシーダ』だぞ！」

「彼女はあの曲を知ってて受けたのか？」

そしてシンシアはがっくりと肩を落とす。

「クレア……あなたの強気な性格が裏目に出た……」

エドラは自らの勝利を確信して満面の笑顔で呟く。

「ふっ……あの雌犬は自ら破滅を選んだか……」

アラムはクレアの手をとってゆっくりとフロアーの中央にしずしずと歩いて行く。その場にいるすべての人間の視線が二人に集まる。アラムとクレアがフロアー中央で、それぞれが少し離れてポーズを取る。一瞬、会場全体が静まり返る。

最難関曲と言われる割に、あまりに静かな出だしで知られる『ラ・クレシーダの円舞曲』の演奏が始まった。

まるで踊る者の技量を試すかの様な、あらゆる基本ステップの繰り返しから始まり、曲の中盤、徐々にステップ、ターンの難易度が上がって行き、何度かの難関ステップターンが繰り返される。アラムのリードに寸分の遅れもなくクレアは巧みに踊りこなしていく。クレアの踊る表情は、にこやかで余裕すら感じられた。『ラ・クレシーダ』を踊るのは『娼婦』と聞かされていたアラムは、当初クレアがまともに踊れるのはどう頑張っても前半部分だけで、中盤になれば踊りはメロメロになるだろうと予想していた。しかし、今のクレアは中盤の山場を越えようとしているのに、まったく破綻なく踊りこなしていた。それどころかクレアはにこやかな表情を浮かべ、この難関曲を楽しんでいる様にさえ見える。かなり踊り慣れた女ですら次々と要求されるテンポの速い難関ステップとターンを追いかけるだけで必死のはずだった。プロの彼からしてもクレアの踊りは素人のレベルを越えていた。

（何者なんだ、この女？）

アラムはそう思った。

フロアーの回りの客は、すでに言葉を失っていた。その場に居たすべての者が、『舞踏会』の会場である事を忘れ、『踊りの舞台』を見に来ている様な錯覚に陥っていた。二人の踊りは完全に素人のパーティーダンスのレベルを遥かに超えて、今や『舞台芸術』の域に達していた。

（なんなの、このクレアって言う『娼婦』は！
この踊り、ダイナミックにして、繊細で美しい！
付け焼刃のダンスなんかじゃない！
これは、まるでプロのダンサーじゃない！
まさか、このまま『堕天使のターン』まで……）

クレアに恥をかかせる為に、この事態を仕組んだエドラさえもクレアの踊りに魅了されかかっていた。そしてクレアがアラムの誘いを受けた時点では、自らの勝利を微塵も疑わなかったが、今では言い知れぬ不安が彼女の脳裏を覆い尽くそうとしていた。

（クレア……いや……ソフィア姫……
これがあなたの実力なの？
ふっ……こりゃ、クレアの『売り文句』がまた増えたよ！
『舞踏会出張、喜んで承ります！』ってね。
しかし、やはり最後の『堕天使のターン』だけはまだ……）

逆にシンシアは、クレアがダンスフロアーに残った時は敗北を確信してクレアの踊りを直視出来ない程だったが、今はその口元に笑みさえ浮かべ楽しげに片手でリズムを取りながらフロアーの二人のダンスを目で追っていた。

もう一つ踊るクレアを、優しく見守る特別な視線があった。

（ああっ！この難曲を優雅に踊る姿！
私の『アイリーン』が生き返った様だ！
姿だけじゃなく、踊る姿も似ているとは……
もしもの時は飛び出して行って彼女を救おうと思ってたが、
取り越し苦労だったかもな……

だが、まだあの『堕天使のターン』が……）

その視線は『ティエリー＝ボンフィス枢機卿』の物であった。彼の妻『アイリーン』は大恋愛の末結婚したものの、その数年後あっけなく病死してしまった。実は、今度デビューする『薔薇の乙女』が死んだ愛妻『アイリーン』に似ているとの噂を聞きつけて、ティエリーは一目その姿を見たくてこの会場にやって来たのだった。

三人が……いや会場に居たすべての人間が、今はただ一つの事に固唾を飲んで注目していた。そう、あと数分後にやって来る『ラ・クレシーダの円舞曲』のラスト、踊る女性に対して最高度のテクニックを要求される『堕天使のターン』。それは、舞台等ではプロのダンサーが時折アトラクションとして見せる事はあっても、この様な『舞踏会』の場でそれが見られる事はほとんどなかったのだ。

実はこの時、会場担当のメイド達が使う、バックヤードと会場を繋ぐ出入り口を隠す為のカーテンに隠れる様にしてクレアの踊りをじっと見詰める三つの影があった。そう、あのエドラが控えの間に用意した三匹の飼い犬達であった。

そして、ついにその時がやって来た。

激しかった曲が一瞬、静かなリズムを刻み始める。これが踊る者への合図となっていた。アラムとクレアは、静かに歩いて距離を置く。そして、アラムは片膝を付き右手をクレアの方へ伸ばす。

（どうする？本当にやるのか？『堕天使のターン』を。
失敗すれば、君は衆人環視の中、女性として大恥をかくぞ！
今なら『悪魔のターン』程度で誤魔化す事も出来る）

アラムは目でクレアに最終確認の問い掛けをする。そうこの『堕天使のターン』はアクロバティックなスタイルの為に、失敗すると女性はドレスの裾が捲れ上がり衆人監視の中、素足を太ももまで晒す事になる。その為、『舞踏会』ではその失敗を恐れて、挑戦する者が居なかったのだ。

アラムの目配せに対して、クレアも片膝をついて、両手を広げ、限界まで背中を反らせた、まるで『堕天使』が黒い翼を広げたかの様なポーズを取る。

一瞬だけ、会場がどよめく。アラムも目を見張った。そう、そのポーズは紛れもなく女性が『堕天使のターン』を行うと言うサインであった。

楽団の指揮者もクレアのポーズを確認して、タクトを大きく振る。静かだった曲調が一気に元の激しいリズムと変化に飛んだ破綻寸前とも言える曲調に変わる。

その変化を耳で捕えたクレアは、両手を広げたまま立ち上がり、跪いて手を伸ばすアラムの方へ駆け出す。まるで『堕天使』が翼を広げて、跪く『騎士』の元に舞い降り様とするかの如く。

アラムと激突するかと思えたその一瞬、クレアはタンッと片足で地面を蹴る。その音を聞いてアラムは腰を折ってお辞儀をする様なスタイルになる。地面を蹴って舞い上がったクレアは両手をアラムの背中に当て、そのまま一気に体をアラムの背の上で側転させる。十分な速度で回転するクレアのドレスは遠心力で美しい扇形に広がる。さらに彼女は側転させながら横方向に体を百八十度捻る。逆さまになったドレスの裾が、あたかも『堕天使』の羽ばたく翼の如く綺麗

に舞い踊っていた。

そう……少しでも躊躇があったり技術がなくて回転の速度が低ければ、女性のドレスの裾はここまで綺麗に広がらず、だらしなく下がり素足を晒す事になるのだ。それ故、エドラはクレアに恥をかかせる為にこの曲を選んだ。

アラムの背の上で、見事『堕天使のターン』を披露したクレアはそのまま、反対側に綺麗に着地し、跪き両手を胸の前に組むポーズを取る。そこにアラムが駆け寄り、『堕天使』の姿から『人間』の姿に戻った『姫』を優しく抱擁する『騎士』を表す最後のポーズを決める。それと同時に曲が静かに終わった。

会場が、水を打ったように静まり返る。すべての音がその場所から消失したかの様な静寂がその場を包む。誰もが、あまりの二人のダンスの素晴らしさに身動き出来ないでいた。アラムとクレアの少し荒い呼吸音が静寂の中、唯一流れる。

やがて、地響きの様な歓声と拍手の嵐が巻き起こった。二人を見ていた観衆が一斉に二人の元へ我先に駆け寄って行く。

アラムが跪くクレアに手を差し伸べる。クレアはその手を掴み立ち上がる。

「パーフェクト！まさに完璧……それ以外に言葉はない！
久々に、文句のつけようの無い『堕天使のターン』見せてもらった」

アラムはにこやかにクレアに語りかける。クレアは呼吸を整えながら、膝を少し折ってから光輝く様な笑顔で答えた。

「あなたのリードが素晴らしかったからですよ……」

すぐに二人は、口々に二人への感嘆の言葉を発して拍手をしながら駆け寄る群衆にもみくちゃにされた。

## 第２３話　黒い罠に落ちて

アラムとクレアの二人を何重にも取り囲む人垣を掻き分ける様にして、シンシアがクレアの元へやって来る。そして呆れ顔でクレアに声を掛ける。

「クレア、あなた、そんな才能があったなんて……」

「ふふふっ……シンシア、あなたと違って私、身軽だから……」

クレアはシンシアの言葉に、少しいたずらっ子の様な顔をして答える。

「おいおい……言うじゃないか、クレア！
でもさ、そう言う才能があるなら、私には先に言ってよね！」

シンシアはそう言って、笑いながら軽くクレアの頭をこつんと叩いてから、彼女を抱き締める。

そこへ、ティエリーも同じ様に人ごみを掻き分けながらやって来た。彼は盛んに手を叩きながらシンシアにまるで娘の様に抱き締められているクレアに語りかける。

「素晴らしかった！
本当に目の前に『魔法で堕天使にされた姫』が現れた様だったよ！
こんな素晴らしい『ラ・クレシーダ』の舞を見たのは何年振りだろう！」

ティエリーが傍に来たことを知って、シンシアはクレアから手を離

す。そして二人はティエリーに向き直り、同時に膝を折って挨拶する。

そして、しばしの間、アラムとクレアを中心にダンスフロアーの中央で歓談が続いた。

会場での喧騒の中、エドラが悔しげな表情でそっとその場を一人離れて行く。会場を出て、また裏側の通路に出た彼女は憎々しげに独り言を呟く。

「畜生！あのクレアと言う女！
他人の男を寝取る娼婦の癖に、生意気な真似しやがって！
でもね……それがあんたの身の不幸になるんだ。
自分が薄汚い売女（ばいた）だって事を思い知らせてやるよ！
あんたのその体を、飢えた男たちの餌食にしてやる。
まあ、生娘じゃあるまいし、
あんたにとっては、大した事ないわよね、その位……ふふふっ……」

最後は高笑いをしながらエドラは誰も居ない廊下をヒールを響かせながら歩いて行く。

正式な舞踏会では姫と言う立場上、ごく普通に踊るだけだったので一般にはまったく知られてはいなかったが、クーデター前のクロフォード城内に限れば『ソフィア姫のダンス好き』と言う事は有名な話だった。当時のソフィアは、頻繁に有名な踊り手を城内に呼んでは一人様々な踊りを楽しんでいた。城の外ではきちんと『聡明でお淑やかな姫君』として振舞っていたので、この程度のやんちゃは王

も妃も黙認していたのだった。言ってみれば『ソフィア姫の密かな楽しみ』と言う物だったのだ。その為、そのダンスの実力はまさに玄人跣（くろうとはだし）にまでなっていた。

会場はやや落ち着きを取り戻していたが、それでもクレアの回りにはまだ人垣が残っていた。クレアとシンシアは周りの者達の相手をするのに精一杯で、自分の周囲に対する注意がおろそかになっていた。

クレアは自分の肩を後ろから軽く叩く手に気が付いて振り返ると、会場担当の若いメイドが一人が立っていた。

「クレア様、さる高貴な方が、是非あなたとお話がしたいと、あちらのお部屋でお待ちしております。ご案内しますので、どうかご一緒くださいませ」

メイドはクレアの耳元で小さくそう囁いた。クレアはにっこり笑って頷く。

「皆さん、すみません、ちょっと席を外します」

クレアは周りにいた人々に言うと、歩きだしたメイドの後をついて行く。その場を会場のメイドと共に離れるクレアの姿を、シンシアもティエリーも周りの者達と話しながら視界の片隅に捕えてはいたが、その時はさほど気にせず話を続けていた。

クレアが会場担当のメイドについて裏の通路に出て行くのを、いつの間にか会場に戻って取り巻き達と話をしていたエドラはちらりと

確認すると、手に持った扇をさりげなく広げて口元を隠してから笑みを浮かべる。

（さあ、クレア、恋人達とのデートの時間よ。
心ゆくまで楽しんでいらっしゃいな……）

エドラは心の中で、通路に消えて行くクレアの背中に向かって囁いた。

クレアは、メイドの後をついて静かな通路を歩いていた。彼女がこの会場に入った廊下と比べるとすれ違う人もなく妙に静かで、やや不審に思いながらも案内するのがこの会場の正式メイドである為に引き返す事もなく素直に歩いていた。

メイドはやがて一つの扉の前で立ち止まる。そして、その扉を軽くノックする。

「クレア様をお連れいたしました」

そう声を掛けてから彼女は扉を開けて、もう片方の手でクレアを招く。クレアはその招きに応じて、扉の中へ入ろうとした、その時だった。扉の死角に隠れていた男が素早くクレアの腰を抱いて部屋の中へ引きずり込むと同時に、叫び声を上げようとした彼女の口をすかさず手で塞ぐ。その男は、振り向いてメイドに目配せすると、彼女は扉をそっと締め、来た通路を小走りに帰って行く。

身の危険を感じたクレアは必死に暴れて逃れようとしたが、口を塞ぐ手も、腰に回された手も振り解く事は出来なかった。そのまま、引きずられる様にしてソファーの上に押し倒されてしまう。その間

にもう一人の男が扉の鍵を内側から掛ける。そして、部屋の奥からさらにもう一人の男がソファーに押し倒されたクレアに近づいて来た。

クレアはソファーの上に仰向けに寝かされ、彼女を部屋に引きずり込んだ男に片手で口を塞がれもう片方の手で左手を押さえられ、扉に鍵を掛けた男に右手と腰を押さえ付けられ身動き出来なくなっていた。彼女に出来たのは、辛うじてまだ自由になる両足をバタバタさせる事だけだった。

やがて部屋の奥から来た男が、クレアの顔に自分の顔を目と鼻の先まで近づけてきた。クレアの宝石の様に美しいグリーンの瞳が涙を滲ませ恐怖の為に限界まで見開かれる。

（何故？……何故、私は何度もこんな目に……
嫌っ！こんな事はもう嫌っ！
誰か……誰か来て！助けて、お願い！）

自分の運命を呪いながらクレアは、無駄と知りつつ、心の中で必死に叫んでいた。

そう……クレアが連れ込まれた部屋は、エドラが招き入れたあの三匹の飼い犬がたむろしていた部屋だった。

それからしばらくした頃、『舞踏会』の会場では、シンシアがやっとクレアが傍に居ない事に不審を抱きはじめていた。

「すみません、うちのクレアを見ませんでしたか？」

彼女は、会場を歩き回りながら、参加者に聞いて回り始める。しかし、誰もがおしゃべりに夢中になっていて、クレアがどこかへ行った事に気づく者は居なかった。しかし、何人かに同じ問い掛けをした後の事だった。

「……あっ！そう言えば、会場担当のメイドについてどこかへ行ったよ」

と若い男が答えた。シンシアはその男に聞き返す。

「えっ？それで、あの娘（こ）、どちらへ？」

「うーん、それがどうだったっけ？……待てよ……
あっ！そうそう、あっちの扉から裏の通路へ出て行った様な気が……」

ここに至って、シンシアはやっと事の重大さに気が付く、すぐさま、シンシアは小走りに駆け出し、会場内にエドラの姿を探す。

間もなく、会場の片隅でいつもの様に取り巻きの婦人たちと楽しげに歓談するエドラの姿をシンシアは見つける。彼女は、取り巻きの婦人たちを押しのけるようにしてエドラの眼前まで詰め寄ると、噛みつかんばかりの勢いで彼女を問い詰める。

「エドラ！あんた、うちのクレアを何処（どこ）にやったの？！」

エドラは、扇を広げて口を覆い、回りの婦人たちを見回し、肩をすくめて笑いながら答える。

「おお怖い！娼館のマダムが血相変えて私（わたくし）に詰め寄るなんて。

おたくの娼婦がどこに行ったかなんて私、知るはずもございませんわ！
大方、どこかの殿方と空いたお部屋で商売でもなさってるんじゃないかしら？」

そう言い終わった後、エドラは一瞬にやりと笑い、シンシアの耳元でそっと囁いた。

「残念だったわね、もう手遅れよ、シンシア……」

その言葉にシンシアの顔が鬼の形相に変わる。

「エドラ、貴様、なんて事を！」

シンシアが怒りに任せてエドラに掴みかかろうとした時、エドラが静かに言った。

「あらっ……おたくの『お姫様』、お帰りの様よ」

そう言ってエドラが指さす方をシンシアが見ると、ちょうどクレアが裏の通路に続く扉を開けて会場に入って来る所だった。彼女は少しふらつく様な足取りで、壁に片手をつきながら壁際を歩いていた。

「クレア！」

思わず、そう叫んでシンシアはクレアの方へ駆け出して行く。その姿を見てエドラは扇で隠した口元に笑みを浮かべて小声で呟く。

「どうやら、目論見通り、あの売女（ばいた）、
三人の餌食になったみたいね……いい気味だわ」

# 第２４話　扉の中の真実

シンシアはクレアに駆け寄り、彼女に優しく声を掛ける。

「クレア……大丈夫？」

うつむき加減だったクレアが顔を上げる。彼女は口元に無理に笑顔を作って答える。

「大丈夫よ、シンシア。
踊り疲れて、裏の空いたお部屋で休ませてもらっていたの」

しかし、シンシアにはそれが『嘘』である事はすぐに分かった。綺麗に結い上げてあったクレアのブロンドの髪は明らかに乱れがあった。シンシアはクレアの耳元で小声で囁く。

「無理しなくて良いよ、クレア。分かってるから……
ごめん、もっと早く私が気が付いていれば……」

シンシアはクレアを一度両手で強く抱きしめてから、庇（かば）う様に肩を抱いて一緒に歩き出す。シンシアが振り返ると、エドラが勝ち誇った表情でこちらを見ていた。

疲れ果てた様子のクレアを庇いながら、ティエリー達が集まっている元居た場所まで戻ってきたシンシアは、壁際に置いてあったイスにクレアをそっと座らせる。そして自分も隣に座り優しい笑顔を浮かべてそっと小声で語りかける。

「クレア、もう大丈夫よ。
今は何も考えないで……
すぐに、静かな所で横にさせてあげるから、
もう少しだけここに座って待っていて……」

その言葉に、クレアはうつむいたまま無言で小さく頷く。そして、シンシアが立ち上がると、周りの男達に言った。

「すみませんが、皆さん、クレアは踊り疲れて少し体調を崩した様なんです。
申し訳ありませんが、しばらくしたら、お暇させていただきます」

そう言って、膝を軽く折って挨拶すると、ティエリーの元へ小走りに駆け寄り、その耳元で何かを囁く。するとティエリーは一瞬強張った表情になりシンシアと二人会場の外へ消えて行く。その間、男達はコップに冷たい水などを持って来て疲れた様子のクレアを優しく介抱していた。

程なくしてシンシアは、クレアの元へ帰って来た。

「さあ、行こうか、クレア。立てる?」

シンシアはクレアの前にしゃがんで、座っているクレアの頬を両手で優しく包んで尋ねる。クレアはシンシアの問い掛けに小さく頷いて答えた。シンシアは、クレアの肩を抱いて立ち上がらせると、そのまま会場を後にしてエントランスホールへ出る。二人がエントランスホールに着くと、ティエリーが二人を待っていた。

「シンシア、屋敷の方には先に『使い』を走らせた。

とりあえず、医者を呼ぶ様に言ってある。
私もすぐ後を追うから、私の屋敷に着いたら、
クレアを医者に見せて、その後はくつろいでいてくれ」

「ありがとうございます、ボンフィス卿。
今夜一晩、お世話になります」

そう言って、シンシアはティエリーに深々とお辞儀をする。それから、うつむいているクレアの方を見て優しい声で言う。

「クレア、今から『館』に帰るのでは、あなたの体も心配だから、
今夜はボンフィス卿のお屋敷に泊めてもらう事にしたんだよ」

シンシアの言葉を聞いて、クレアも消え入りそうな小さな声でティエリーにお辞儀をしながらお礼言った。

「ボンフィス卿……お世話掛けてすみません……」

「クレア、気にしなくて良い……
それより、今は何も考えず体と心を休める事だけを考えて」

ティエリーは優しい笑顔を浮かべてクレアを見てそう言った。

その時すでに『薔薇に囚われし聖女』の図柄が描かれた『館』の馬車がホールの前に横付けされて二人を待っていた。シンシアは御者の手も借りて、先にクレアを馬車に乗せてから自分も馬車に乗り込む。扉が閉まるのを確認して馬車は静かに『舞踏会』の会場を後にする。

「畜生！エドラの奴、正式デビュー前のクレアをこんな酷い目に遭わせやがって！」

シンシアは辛そうにうつむいて座るクレアを見て憎々しげに叫ぶ。

その時だった……

「ふふふふっ……ははははははっ！シンシアまで……」

急にクレアが笑い出す。その姿に驚きシンシアがクレアの肩を両手で掴んで言う。

「クレア、あなた、まさか気が……」

クレアは両手でお腹を押さえながら笑いをこらえて答える。

「違う！違う！シンシア、私は正気だってば！
その上に、あなたが心配してる様な事もされてないし！」

「……えっ？それどう言う事よ、クレア」

クレアの言葉に、シンシアはきょとんとした表情になる。ひとしきり笑ってから、呼吸を整えたクレアがシンシアに説明する。

「エドラが男達を使って私を乱暴しようとしたのは事実だけど……
『ある事情』があって、助かったの。
悪いけど『ある事情』については聞かないで。
でも、何もなかったのがエドラに知れるとあの女の事だから、
私を助けてくれた男の人達がどんな酷い目あわされるか分からないでしょ。

だから、乱暴された振りをしていたの。
要は、エドラ自身が満足できれば良い事だからね」

クレアの説明を聞いてシンシアも大笑いをし始める。

「ははははっ！じゃあ、あれは演技だったの？！
すっかり騙されたわよ、クレア！
あの疲れ切った顔と足取り、悔しげな涙目……
もう絶対に、あなた犯られちゃったと思ったわよ！
その演技力なら『ソフィア姫』を演じるのも楽勝ね！」

そして、ひとしきり二人で笑いあった後、クレアは窓の外を見てそっと呟いた。

「あの日、スザクに人生を狂わされたのは、私だけじゃない……」

あの部屋に連れ込まれ、ソファーに押し倒されて口を塞がれた上に手と腰を押さえ付けられ身動き出来ないクレアの顔に、自分の顔を近づけた男はしばらく彼女の顔をしげしげと見つめた後、意外な言葉を彼女に投げかけた。

「間違いない……やはり『ソフィア姫』様だ！
やはり噂は本当だった！生きておられたんだ！
姫様、どうか私どものご無礼をお許しください」

そう言って、他の二人に目配せすると、クレアを押さえ付けていた手を離す。体が自由になったクレアは、髪の乱れとドレスの裾を直しながらソファに座り直して男達に尋ねた。

「あなた達は？」

男達はクレアの事を『ソフィア姫』と呼んだ男を前に、その男のやや下がって左右に二人の男が位置して、それぞれが片膝をついて跪き深々と頭を下げる。中央の男が頭を深々と下げたまま答えた。

「私めは、元クロフォード王宮近衛兵部隊の
『カサド＝バンデラス』と言う者です」

その言葉にクレアは驚きの声を上げる。

「お城の近衛兵ですって？！
そのあなた方が何故この様な事を……」

カサドと名乗った男がゆっくりと語りだす。

「私はあの日、姫様がお逃げになるはずだった城の抜け道を守っておりました。
しかし、何分、平和続きで実戦の経験の無い我々三人は恐怖のあまり、
その職務を放棄して逃げ出してしまったのです……」

その後の事は、こうであった……

王と妃を捕えたスザクの手の者達は、『ソフィア姫』を捕えるべく必死に探していた。そして、三人が職務を放棄して誰も居なくなった抜け道の前に近衛兵の姿で立ちソフィア姫が来るのを待ち伏せした。案の定、抜け道を通って逃げようと現れたソフィア姫と護衛の者達は不意打ちを受けて、護衛は全員殺され、ソフィア姫はその場で囚われた。彼ら三人はソフィア姫が囚われの身になるのを物陰か

ら見ていた。その後、ソフィア姫を連れてスザクの手の者がその場を立ち去った後、カサド達三人は城を抜け出し、逃亡を続け、隣国ダルメハイン法国の首都シゼルカンドに流れ着いた。後は酒場の用心棒などをしてやさぐれていた所をエドラに拾われ、愛人兼用心棒の様な事をしていたとの事だった。

「あの日から私たちに心の平安はありませんでした。
私たち三人が、結果的に姫様をスザクの手に渡した。
後に、姫様はその半年後に殺されてしまったと聞きました。
姫様は、私たちの様な者が控える詰め所にまで、
笑顔でいつも美味しいお菓子や果物を差し入れに来て下さった。
そんなお優しかった姫様を私たちは……
私たちは、毎日、自分たちを責め続け、気が付けば自暴自棄の毎日に……
そんな日々の中……
私たちは元宮中の使用人と名乗る者からある噂を聞きました。
姫様は実は生きておられると……
一年間、スザクから口にするのもはばかられる程の惨(むご)い仕打ちを受け、
あげくの果てに、自らの素性を他人(ひと)に語れない様にされて、
この国の『娼館』に、『娼婦』として売られたと……」

クレアは、思わず自らの胸を両手で抱き締めた。そして、ごくりと唾を飲み込む。

「その噂を聞いてしばらくしてから、エドラから今回の事を聞かされました。
『ソフィア姫そっくりの娼婦』が来る舞踏会があると。
私達は、もしやと思いました。
その『娼婦』が本当の『ソフィア姫』様ではないかと。

それで、エドラの計画に乗るフリをしてこの会場まで来ました。
でも、最初は半信半疑でした。
あの『ソフィア姫』様が『娼婦』になってまで生きておられるとは……」

その言葉に、思わずクレアは目を伏せる。

「すみません、姫様、大変失礼な事を申しました……」

「いや……気にせずとも良い、続けよ……」

クレアは、思わず『ソフィア姫』であった頃の口調でそう言った。

## 第２５話　男の贖罪と女の思惑

カサドの告白は続いた。

「それが確信に変わったのが……
先ほど姫様のダンスを人目を避けて陰から見た時でした。
城に居た当時、私たち下級の近衛兵は、
姫様が、時折プロの踊り手を呼んで広間でお二人だけで踊る美しいお姿を、
こっそりと窓から見るのが楽しみの一つでした。
ですので『ソフィア姫』様の踊りは、今でもこの目に焼きついております。
あの踊りは、紛れもなく『ソフィア姫』様の踊りです！見間違う事はありません」

ここまで言うとカサドは、腰に差した短剣をクレアに差し出す。

「やっとお会い出来ました、姫様……
どうか、この短剣で私たちの胸をお刺しください。
あなたを、生き地獄に堕とした張本人は私どもです。
どうか、その自らの御手で私達に死の罰を……」

カサドは跪いたまま、クレアの目の前に高く短剣を差し出しながら頭を下げる。他の二人も頭が地面に付くのではないかと思える程深々と頭を下げていた。

クレアは、まるで氷の様な冷たい表情になり、汚い物を見る様な目で跪く三人を見下ろす。彼女の脳裏に思い出すのもおぞましい城での凌辱の日々が蘇る。そのすべてが、この三人のあまりに無責任な

行為が原因だったとは。

（許せない！）

クレアは無表情のままカサドの差し出す短剣に手を伸ばす。

……とその時だった。三人の顔の下の絨毯に濡れた痕がある事にクレアは気が付く。そして、その染みは少しづつ広がっていった。

（涙……？！）

そう分かった途端、クレアの顔が悲しみの表情になる。

（そうか……彼らが悪いんじゃない……彼らも私と同じ……）

クレアは短剣に伸ばした手を止め、膝の上にもどしながら、優しい声で言った。

「残念ですが……カサド、私は『ソフィア姫』ではありません。姫様に姿が似ていると言うだけの『クレア』と言うただの『娼婦』です」

その言葉に三人は驚き、顔を上げてクレアを見詰める。

「何をおっしゃいます！私たちは『ソフィア姫』様を見誤るはずありません！」

「そうです！あの踊りは姫様以外では考えられません！」

左右の男がそう言うのを、カサドはすぐさま手でさえぎる。そして

彼はクレアの顔をじっと見つめた。その時、カサドはクレアが悲しげな目で小さく頷いたのを見逃さなかった。カサドもクレアを見て頷き返す。カサドが頷き返すのを見てクレアは続ける。

「ですが、もし私が『ソフィア姫』様なら……
きっとあなた達を許しているでしょう。
あなた達はもう十分に苦しんだ。
それに、諸悪の根源はあの『将軍スザク＝ジン』です。
あの男は、クロフォードの王と妃を殺して国を奪い、
その姫を人として許されぬ程に辱め、そして貶(おとし)めた。
姫が、もしどこかで生きていれば、
きっとその汚辱を雪(そそ)ぐ機会を待っているでしょう。
あなた達に、姫に対して贖罪の気持ちがあるのなら、
姫にその機会が来た時に、共に立ち上がり戦えば良いと思います。
それまで、どんな事があっても死んではなりません。
きっと姫はそれを望んでいると私は思います」

そう言うと、クレアはゆっくり立ち上がった。

「カサドさん、私をこのまま見逃していただけますか？」

クレアはにっこり笑いながら跪いたままのカサドに尋ねる。

「もちろんです、クレア殿。お時間を取らせました」

カサドも笑顔でそう言うと、クレアはゆっくりと扉の方に歩いて行く。そしてノブに手を掛けた所でその手を止めてカサド達を振り返らず言った。

「私は、あなた達に乱暴されたフリをして時間を稼ぎます。

その間に、あなた達三人はどこか安全な所へお逃げなさい。
あの女の事、必ず口封じの為、あなた達を亡き者にすると思いますから。
そして、最後に……
そちらのお二人のお名前もお教え頂けますか？」

その言葉に、カサドの左右に居た男達がそれぞれ答える。

「私は『ダンテ＝バルビ』と申します」

「私は『エリク＝フィンク』です」

「カサド、ダンテ、エリク……
もう自分たちを責めるな。
ただ、前を向いて生きよ。
私（わたくし）は、あなた達に会えて本当に良かった……」

クレアは最後に再び『ソフィア姫』の口調になりそう言うと静かに扉を開けて部屋を出て行く。その背中に三人は深々と頭を下げて言った。

「『ソフィア姫』様……今度こそ私たちはあなたを最後までお守りいたします」

走る馬車の窓から夜の街をぼんやり見ていた。

「カサド達、無事に逃げおおせると良いのだが……」

クレアがぼそりと呟く。

「んっ？クレア、何か言った？」

シンシアはクレアの顔を覗き込むようにして尋ねる。

「あっ！何でもないの、シンシア」

クレアはシンシアを見て、にっこり笑って誤魔化した。

さすがに首都と言うだけあり、ティボーシアの街より通りも広く、街並みも綺麗だった。街灯と店の明かりに照らされた道を歩く人々も身なりの良い人ばかりで、街娼の姿などどこにもなかった。ごちゃごちゃした感じで生活感あふれるティボーシアの街に比べ、ここシゼルカンドは清潔感があふれてはいたが、どことなくよそよそしさも感じられた。

（クロフォードの首都『グローリア』もこんな感じだったかな？もう何十年も見てない気がする……ほんの数カ月前までそこに居たのに）

クレアは馬車の窓枠に頬杖をつきながら、流れる街の夜景を見ながら思った。

「ねぇ……クレア、あなたの『薔薇の初夜』の相手だけど……」

シンシアが、にやにやしながら窓の外を眺めるクレアに語りかけた。

「『薔薇の初夜』？舞踏会でも何回かその言葉聞いたけど何なの、それ？」

クレアはシンシアの方に向き直り尋ねる。シンシアはクレアの顔を見て、わざとらしく大げさに驚いた顔をして、頭を掻きながら言う。

「ありゃ、私とした事があなたに話してなかったけ『薔薇の初夜』の事。

クレア……『薔薇の初夜』ってのは……

あなた達『薔薇の乙女』が初めて『館』で客を取る夜の事。

『薔薇の初夜』の相手は『館』の主……つまり今なら私が選び、この時だけはお客様から料金は頂かない。

逆に、お礼のお金や品をお渡しする。

まあ、あなた達『薔薇の乙女』にとっては『二度目の初夜』みたいなもの。

『薔薇の初夜』の相手がその乙女にとって最重要顧客にしてパトロンになる事が多い。

だから、私も相手の客選びには苦労するのよ」

「……で私の『薔薇の初夜』の相手はもう決まったの？」

クレアはやや不安げにシンシアの顔を見詰めて答えを待った。

「そんな顔で私を見ないでよ、クレア。

あなたの相手は『舞踏会』で会った『ティエリー＝ボンフィス枢機卿』に

お願いしようかと思ってるんだけど、どう？」

クレアは戸惑いの表情を浮かべる。

「どう……って言われても……

確かに、優しそうで、身分も高そうで良い方の様だけど……

私とじゃ、父娘（おやこ）ほど歳が違うし……

その前に、彼の事、まだ何も知らないし……」

シンシアは、そんなクレアに顔を近づけて真剣な眼差しで彼女を見詰めて言った。

「あのねクレア、あの『ティエリー＝ボンフィス枢機卿』は、二十四人しか居ない枢機卿の一人にして、現法王『グリエル５世』と非常に親しい間柄なの。はっきり言っちゃうと、次期法王の最有力候補者なのよ。その彼が『ある事情』であなたにすごく興味を持ってるわけ。こんな美味しい話はないわよ。彼が『薔薇の初夜』の相手なら断る理由は無いはずよ！」

そう言いながら、シンシアは心の中でクレアに問い掛けていた。

（さあ『ソフィア姫』どうなされる？『ボンフィス卿』はあなたの『復讐』には、咽から手が出るほど欲しい駒よね）

同時にクレアは心の中で考える。

（『ボンフィス卿』の後ろ盾があれば、いつかあの男に復讐する時に力になる。彼が私を欲しているなら……この汚された体でも利用できるなら……）

私は、復讐の為なら人の心を弄ぶ『悪女』にでもなる）

「シンシア……そう言う事なら、私は『ボンフィス卿』が相手で異存はないわ」

クレアは、シンシアの目を見てきっぱりと言い切った。その答えを聞いて、シンシアの口元がにやりとした。

「クレア、あなた、きっと良い『薔薇の乙女』になるわよ」

シンシアは穏やかにそう言いながら、小躍りしたい程の喜びを押さえて心の中で叫んでいた。

（よしっ！姫様は餌に食いついた！これで面白くなって来たよ！）

シンシアとクレア、女二人の思惑を乗せた馬車は、静かに『ボンフィス卿』の屋敷の門をくぐって行った。

# 第２６話　希望と言う名の『愛』

「ははははっ！クレア殿は『ダンスの名手』だけでなく、『役者』としても素晴らしい才能をお持ちだ！
私も、今、お二人の話を聞くまではすっかり騙されてました。
明日一番に法王の元へ赴き、クレア殿を辱め(はずかし)た犯人を、『神聖エリシア騎士団』を使ってでも、探し出し処罰するつもりでおりましたよ！」

屋敷の広間で、ワインと共に軽い夜食をクレアとシンシアと共にとっていたティエリーが、大声で笑いながら言う。

「……で医者のジャコブは何もせずに帰ったのかな？」

「いえ、せっかくだったので一応診察していただきました」

ティエリーの問い掛けにクレアがにこやかに答える。

「それがね、ボンフィス卿、そのお医者様に私、怒られたのよ。
クレアにもっと良い物を食べさて、陽に当たらせろって。
やせ過ぎだし、肌も白すぎるからって。
『館』じゃ、乙女たちは見習い中でも『体が資本の大事な商品』だから、
毎日、良い物を沢山食べさせて、
彼女には、南側の陽当たりの良い部屋を割り当ててるつもりだったですがねぇ……」

シンシアがチーズの乗ったカナッペを口にしながら、やや不満げな表情で口を挟む。ティエリーはシンシアの言葉を聞いて、クレアを

しげしげと見て言った。

「うん……確かにクレア殿は、もう少しふくよかになっても良いですね。
肌の色も雪の様に白く美しいですが、
もう少し血色の良い健康的な色の方が良いですよ」

ティエリーの言葉に、クレアは少し俯き加減で、恥ずかしそうな表情を浮かべる。

「『館』の食事は私から見ればいつも何かの記念日の様な御馳走ですし。
普段暮らすお部屋も食堂もとても陽当たりが良く気持ち良い所です。
ただ、『館』に来る前は日々まともに食事も出来ず、
ほとんど陽の当たらない様な場所に居ましたから……」

その時のクレアは、まだ城の地下に監禁されていた時の名残で、食が細くやや痩せ過ぎで、肌はあのヘルガに匹敵するぐらいの青白さだった。もちろん、それでも『館』に連れて来られた時からすれば遥かに健康的にはなっていたのだが。

「今までは苦労してたんだね、クレア殿は……
でもこれから、しっかり食べて、陽に当たって、体を丈夫にするんだよ。
シンシア殿がついているから大丈夫とは思うけど、健康には気をつける様に」

そのティエリーの言葉を聞いてシンシアは意味ありげな笑みを浮かべてからかう様に彼に言った。

「あら、ボンフィス卿……
まるでクレアを自分の娘さんの事の様に心配してる！」

「あっ……いや、私は……」

ティエリーは思わず頬を赤らめる。クレアは、そんなティエリーを微笑みながら見詰めていた。

「では、そろそろ日付も変わる時刻になりますので、
私はここらで部屋で休ませて頂きますわ、ボンフィス卿。
では、クレアを今夜一晩、あなたに託します。
『薔薇の初夜』の前に、この様な事は許される事ではありませんが、
他ならぬボンフィス卿の事……例外中の例外と言う事で。
もちろん、今後もクレアの正式な『後見人（パトロン）』となって頂くと言う条件で……」

シンシアが頃合いを見て、ティエリーに向かって切り出した。実はすでに、この事は『舞踏会』の最中にシンシアとティエリーの二人だけの密談で決まっていた。この言葉はどちらかと言うとクレアに向かって発せられた言葉だった。シンシアはクレアを見て彼女の意思を確認する。

「クレア、あなたもそれで良いかしら？」

まさか今夜いきなりとは思ってもみなかったが、すでに馬車の中で覚悟を決めていたクレアに異存はなかった。クレアは席を立ってティエリーの横に歩いて行く。クレアは膝を軽く折って改めてティエ

リーに挨拶してから、少し恥ずかしそうに小声で言った。

「不束者ですが、どうぞよろしくお願いします」

その言葉にティエリーは立ち上がって、クレアの細い腰を優しく抱き寄せて彼女の耳元でそっと囁く。

「じゃあ、後は私の部屋でゆっくり話をしようか、クレア……」

ティエリーはシンシアを見て軽く頭を下げる。

「では、クレア殿は、朝まで私が確かにお預かりします。
お休みなさい、シンシア殿……」

その言葉にシンシアも座ったまま、黙って頭を下げた。ティエリーはそのままクレアの腰を抱いて広間を出て行く。広間を出て行く時、クレアは一瞬、シンシアの方を振り向いた。そんな彼女アにシンシアはそっと頷く。クレアはそのまま少し俯き加減にティエリーと共に歩きだす。

ティエリーは、クレアを連れて自室に入ると彼女をソファーに座らせ、自分もその横に座って、しばし取りとめのない話をした。そして、その後、彼はクレアを抱き寄せて長いキスをした後、彼女を抱き上げベッドに横たえた。

クレアはソファーで話した事は何も覚えて居なかった。きちんと受け応えはしていた。しかし、何を話したのかは、彼女の記憶にまったく残っていなかった。そして今、彼女は、ベッドの上にドレスを着たまま横たわり、上着を脱ぐティエリーを少し不安げに見ていた。

ティエリーは上半身裸になると、クレアの横に静かに身を横たえた。
彼は彼女の頬を優しく片手で撫でながら甘く囁く。

「クレア……君が欲しい……」

ティエリーの手がクレアのドレスに掛かった時、彼女は不意に思った。すでに覚悟は出来ていたはずなのに。

（私は……ついに……本当の『娼婦』に……）

そう思うと、感情が抑えられなくなった。

ティエリーの手が止まる。ベッドに横たわるクレアが自らの指を噛み声を殺して嗚咽を漏らしはじめていた。クレアの華奢な肩が震え、美しいグリーンの瞳から涙が止めどもなく零(こぼ)れていた。ティエリーは思わず呟く。

「クレア……まさか……君は本物の……」

その言葉にクレアは目を見開く。そして『一縷の希望』を掛けた。
クレアはティエリーにすがりつき叫んだ。

「助けて！お願い……ボンフィス卿、私を助けて！
そうよ！私は本物の『ソフィア姫』！私をこの地獄から救って！」

……しかし、その言葉はティエリーに届かなかった。

クレアは、悲壮な表情でティエリーにすがりつき、何かを訴えようと口を動かしているのだが言葉がそこから発せられる事は無かった。

「クレア……そんなに必死になって……
君は、私に何が言いたいんだ？」

その言葉を聞いてクレアは絶望した。彼女に掛けられた呪縛はやはり彼女に真実を語る事を許さなかった。クレアは目を閉じ首を力なく左右に振って、ティエリーから離れる。そして無理に笑顔を作りティエリーに言った。

「ごめんなさい……私、取り乱してしまいました」

そう言ってクレアは自分からティエリーの唇に自分の唇を押し当てた。

（もう良い……もう……私はこのまま本物の『娼婦』になる。
忘れてた……どの道、この体はもう二度と姫に戻れぬ程汚され、
その上、背中に『娼婦の烙印』まで刻まれていたんだ……）

長いキスの後、ティエリーはクレアの耳元でそっと小声で言った。

「良いですか……良く聞いて下さい。
今、動けば確実にあなたは殺される。
辛いでしょうが、もしあなたが『復讐』を望むなら、
今は『クレア』として生きて下さい。
その先にあるのが『地獄』と知りながら、
あなたにこんな残酷な事を言う私を、
恨んで下さい……憎んで下さい……
それがあなたの生きる力になるならそれで良い。
だから、今夜、私はあなたを『クレア』として抱く。
そして、これからも……」

クレアはその言葉を聞き、ティエリーの目をじっと見つめてからゆっくり口を開いた。

「わかりました、ボンフィス卿。
私は、あなたに、この身も心も捧げます。
さらなる『地獄』に自らの意思で堕ちます。
その代わり、いつか『時』が来たら、
この私を助けていただけますか？」

「お約束します、『ソフィア姫』。
私はあなたと言う『毒のワイン』の飲みましょう」

ティエリーもクレアの目を見詰めて静かにそう答えた。

「最初は、若くして死んだ妻に似ていると言う噂を聞いてあなたに会いたかった。
でも、誓っても良い……
私はあなたを決して『妻』の代わりとしては抱かない。
ましてや『ソフィア姫』の代わりとして抱く事もない。
今の私は、『クレア』と言う名の美しい『娼婦』を愛し始めている。
だから……」

そうティエリーは言うと、クレアのドレスをそっと脱がせる。クレアはそっと目を閉じ、ティエリーにその身を任せる。

「ティエリー……あなたに、私の『すべて』を捧げます。
だから……あなただけは私を裏切らないで……お願い……」

一糸纏(まと)わぬ姿になったクレアは、そう言って泣きながらティエリーにしがみ付いた。そんなクレアをティエリーは、たまらなく愛おしく感じた。それは『恋人』としてだけでなく、『娘』の様な、『妻』の様な、不思議な愛情だった。それは、ただ純粋に『このクレアと言う娘を守りたい』と言う想いだった。

# 第27話　薔薇の初夜と身請け話

ティエリーは優しかった。そして、クレアは生まれて初めて『愛されて抱かれる』喜びを知った。

クレアにとって城での『その行為』は単なる『暴力』でしかなかった。そこには『愛』はおろか、微塵の『快楽』すらなかった。彼女にとってそれは『苦痛』でしかなかった。彼女に『屈服』を強いる残忍な『拷問』その物だった。

ロメオとの『偽りのハニムーン』でクレアは『その行為』が『快楽』である事を教えられた。クレアはその『快楽』に溺れ一度は身も心も堕ちた。しかし、そこにも『愛』はなかった。あったのは麻薬の様に抗しがたい『快楽』だけだった。

しかし、クレアはその夜、『愛』に満たされ、何度も愛する男と一緒に堕ちた。このまま二人一緒なら死んでも良いとさえ思った。あの日から忘れていた『幸せ』と言う物を再び思い出した。あの地下室で見失った『神』に再び出会えた気がした。ティエリーに愛されながらクレアは思った。

（この人が居てくれるなら……
私はこの先どんな地獄が待っていても生きて行ける）

シンシアとクレアを乗せた馬車は、お昼過ぎの眠たくなる様なうららかな陽ざしの中、『館』へ向かって静かに走っていた。

窓に寄りかかったまま、すやすやと寝息を立てて幸せそうに居眠り

するクレアを、シンシアは優しい目で見ながら独り言のように呟く。

「ふふふふっ……お姫様は、かなりお疲れのご様子……
昨夜は、ほとんど眠らせてもらえなかった様だな……
打算的な理由はともかく……
ボンフィス卿をあなたの後見人（パトロン）に選んで正解だったみたい。
あなたのこんな幸せそうな顔を見るのは初めてよ。
なんか、妬けるな……その寝顔見てると……
私も、ちょっとだけ思い出すよ……
幸せだったあの頃の事……『愛』の力を信じきっていた。
でも、あなたと同じ様に私もすべて根こそぎ奪われてしまった。
『愛』は『幻』と思い知らされた。
全身に刻まれた二度と消せない『薔薇』の痛みと共に……」

一方、ティエリーは体の芯に残る気だるい疲れを感じなら窓の外をぼんやり眺めながら呟く。

「噂は本当だった。
最初はあまりに悲惨な内容故（ゆえ）に信じてはいなかったが。
さて、どうする？陛下にご報告すべきか？
クレア……君に出会う前なら、
私は躊躇なく陛下に事実を報告していた。
しかし、君を深く知ってしまった今となっては……
陛下に報告すれば、間違いなく君は『政治的』に利用される。
そうすれば、君の『復讐』は叶（かな）うかも知れないが……
君の『幸せ』は、その先にはない。
ただ一生『操り人形』として生かされているだけの人生。
クレア、私は君に女性として『幸せ』になって欲しい……」

それから、一ヶ月ほどの後の『薔薇の館』の夕刻。

エントランスホールに美しく着飾った『薔薇の乙女』達とその付き人が左右に分かれて、整列していた。彼女らの出で立ちは、まさに『正装』と呼ぶにふさわしいほど素晴らしい物であった。常には男装しているシーヴァでさえも今宵はきちんと女性の姿でイブニングドレスに身を包んでいた。さらに彼女らの付き人達も、きちんと正装に身を包んで乙女たちの後ろに控えている。エントランスホール正面に向かって、右側手前に『アマンダ』と『イカロス』その奥に『ヘルガ』と『クン』、左側手前に『アル』と『ルイ』その奥に『シーヴァ』と『ニーナ』がやや扇形に広がり並ぶ。

そして、正面大階段下に『シンシア』が立ち、その後ろに燕尾服の『ロメオ』が控える。いつもは乙女たちを引き立てる為に地味な色のドレスしか着ないシンシアであったが、この日ばかりは深紅の生地にレースや美しい刺繍をちりばめた豪華なドレスを身に纏っていた。

この日だけは、『薔薇の館』はたった一人の選ばれた客と、たった一人の新しい『薔薇の乙女』の為だけに、店を開ける。そして、その客に代金も請求しない。客が帰る時には『祝儀』として金貨や記念の品が『館』の方から客に渡される。もちろん、これは儀礼的な物で、実際は『お礼』と言う名目で、後日、客は『館』のマダムとすべての乙女達にドレスを新調してやり、『館』にも色々な品々を送る習わしになっている。結局の所、客はそれ相応の金額を『館』に払うのと同じ事になる。

やがて、エントランスホールに一台に馬車が静かに停まり、正装した初老の紳士が降りてくる。その紳士が『薔薇の館』の立派な扉を

開けてエントランスホールに入ると、そこに控えた女性はドレスの裾を広げ右足を一歩引き膝を折り、男性は深々と頭を下げる。

「いらっしゃいませ『ティエリー＝ボンフィス枢機卿』さま！
ようこそ『薔薇の館』へ！」

その中を、ティエリーは静かに正面大階段の元へ歩いて行く。正面大階段の下に着くと、シンシアが彼の前に立ち、今一度、膝を折って挨拶をする。

「ようこそ『薔薇の館』へ『ボンフィス卿』。
お待ち申し上げておりました。
ここは訪れるお客様の願望をかなえる『秘密の花園』。
今宵は、あなた様お一人の為だけに最高の夜をご用意いたしました。
どうぞ、美しい乙女と共に素晴らしい想い出をあなた様に……」

シンシアがそう言うと、正面大階段の上に鮮やかなブルーのドレスを身に纏い、髪を美しく結い上げたクレアが現れる。その姿はまるでどこかの『姫君』の様に気高く美しかった。クレアは、ほんの昨日、彼女の付き人になったばかりの『ロミ』に手をひかれ一歩一歩ゆっくり階段を下りてくる。ティエリーは、その美しさに見とれてじっと彼女の姿を目で追う。やがてクレアはティエリーの目の前に立つ。ロミはひいていたクレアの手をそっと離し、右足を一歩引いて深いお辞儀をティエリーにしてから、その場を離れシンシアの横に下がった。

クレアは、ティエリーの前に跪くと頭を下げる。

「はじめまして『ボンフィス卿』。

私（わたくし）、今宵初めて『薔薇の乙女』として、
お客様をおもてなしする『クレア＝カラス』と申します。
まだ不慣れな女ですが、今夜一晩よろしくお願いいたします」

「顔を上げて……クレア……
その美しい顔を私に良く見せておくれ……」

ティエリーはクレアの前に自分も跪いて囁く。クレアはその言葉にそっと顔を上げる。その瞬間、ティエリーは彼女を強く抱きしめてクレアにキスをしてから叫んでいた。

「会いたかった！クレア！
この一ヶ月、僕には何十年も掛かった気がするよ！」

「ちょ、ちょっと待って……ティエリー……」

クレアはそのティエリーの行為と言葉に目を丸くする。そんな二人を見てシンシアが呆れた表情で呟く。

「やれやれ……前代未聞の展開だな、こりゃ」

シンシアは苦笑いを浮かべながら、まだクレアを抱きしめているティエリーの傍まで来て、その耳元で小声で言った。

「ボンフィス卿、お気持ちは分かりますが……
そこから先は、どうかお部屋に入ってからに……」

「あっ！すまない、シンシア……
私とした事が、年甲斐もなく性急な事を……」

ティエリーは慌ててクレアから手を離して立ち上がり、ばつの悪そうな顔をする。シンシアの声は、静かなエントランスホールでは他の乙女たちの耳にも届いていた。その言葉を聞いて、乙女たちは必死に笑いをかみ殺す。クレアはクレアで、顔を首筋まで真っ赤にした。

ここで再び、時間は現在に戻る……

カーテン越しに白々と微かな陽の光が射し始めていた。ティエリーは、隣でクレアが静かに寝息を立てているのを確認すると、そっとベッドから起き上がり、一人静かに身支度をする。そして、彼女を起こさない様に細心の注意を払って、そっと部屋を出る。彼はそのまま廊下を通り、大階段を下りて行く。彼が階段を下り終えるとシンシアはそっと歩み寄って来る。

「お楽しみいただけました、ボンフィス卿?」

「いつもの様に、クレアは朝まで寝かせておいてやってくれ。
それから、シンシア、今、少し良いかな?」

ティエリーがシンシアに問い掛ける。シンシアは、その言葉に少し怪訝な表情を浮かべる。

「何でしょうか、ボンフィス卿」

そう言いながらシンシアは、エントランスホールのソファーに座り、パイプの先に煙草を挿し火を点ける。ティエリーも彼女の向かいに座り口を開く。

「クレアがここに来てもうすぐ三年になる。
三年経てば、乙女達は『身請け』される権利が生まれる。
率直に言おう……僕はクレアを『身請け』したい。
シンシア、僕は真剣なんだ。
クレアを幸せにする自信と覚悟はある、信じてくれ」

「ボンフィス卿……いつかあなたがそう言いだすと思ってました。
しかし、クレアは特別な娘です。
単に金銭的な物だけの問題ではありません。
その話は、いずれまた、時間を掛けてゆっくり話し合いましょう。
でも、今、もしクレアを『身請け』させるなら、
私はあなた以外に考えられない、これは嘘偽りない私の気持ちです」

シンシアはティエリーの目をじっと見て、煙草の煙を吐きながら静かに言った。ティエリーもその言葉に静かに頷いた。

# 第２８話　クレアの少し幸せな朝

クレアが目を覚ますと、隣にティエリーは居なかった。

「また、あの男（ひと）、私を起こさずに行っちゃった……」

誰も居ない自分の横を見てクレアは少し寂しげな表情を浮かべる。
それが疲れ果てたこの体を少しでも長くゆっくり眠らせてやりたいと言う彼の『やさしさ』であることはクレアにはちゃんと分かっていた。

「でもね……ティエリー……」

そう独り言を呟きながらクレアはベッドから身を起こす。白いシーツに花の様に広がっていた彼女の艶やかなブロンドの髪が少し汗ばんだ美しい曲線を描く裸の体に絡みつく。ブロンドの髪を透かして見える『薔薇に囚われし聖女』の顔が少し悲しげに見える。

「本当はね、一度で良いから、あなたを玄関までお見送りしたいの。
そしてね、子供みたいに、馬車に乗ろうとするあなたにしがみついて、
『行かないで！』って叫んであなたを困らせてみたいの……」

そして、ベッドから降りクローゼットから絹のガウンを取り出して羽織る。いつもなら客が帰るとすぐに部屋に入ってくるシンシアもこの日ばかりはクレアが一階に降りて行くまでは決して上がって来ない。クレアは、部屋を出る前に、そっと深呼吸をする。

「あの男（ひと）の残り香がする……」

一階に降りるとシンシアが、クレアの傍に歩み寄って来る。そして少し意地悪な表情で彼女に小声で囁く。

「起きた？……同じ疲れた顔でも、今日のあなたは幸せそうよ……」

クレアは、思わず頬を赤らめ、シンシアと目を合わさない様にして言った。

「もう！小娘じゃあるまいし、からかわないで、シンシア。
いつもの様に、ロミに着替えを大浴場まで持って来る様に言っておいて……」

そう言って大浴場の方へ歩いて行こうとしたクレアの背中にシンシアが声を掛ける。

「そうそう、クレア、今日、私、野暮用でお昼前にはティボーシアの街へ出かけるから。
夕方には帰る予定だけど、その間は事はロメオに任せてあるからよろしくね！」

クレアはその声に振り返らずに右手を上げて答えた。

いつもの様に一階の大浴場でロミと合流して、二人でお風呂を楽しんだ後、クレアはロミと共に渡り廊下を通って『離れ』に向かっていた。ふと中庭を見ると、見慣れた三人組が中央にある池に入って何やら格闘していた。クレアは、渡り廊下の窓を開けて、三人組に声を掛けた。

「カサド！ダンテ！エリク！おはよう！
あなた達、朝っぱらから何やってるの？！」

「あっ！クレア様！おはようございます！
池の鯉を捕まえてるんです！
今日は池の水全部抜いて、池の大掃除なんですよ！」

そう、あの舞踏会で出会った元近衛兵の三人組である。カサドがクレアの声に顔を上げて、手を振りながら答える。ダンテとエリクもにこやかにクレアに手を振る。

あの『舞踏会』での少し後の事、それまで居た用心棒が引退して田舎に帰る事になり、シンシアが求人広告を出した所、この三人がそれに気が付き応募して来た。後はクレアの口利きもあり、無事三人まとめて住み込みの用心棒兼雑用係として採用された次第である。もちろん、シンシアは彼ら三人とクレアの本当の経緯（いきさつ）などは知らない事になってはいるが、実際の所は、抜け目ない彼女の事、すべてを知っての上で三人を雇ったらしい。

クレアとロミが『離れ』のサンテラスにやって来ると、いつのも様に乙女達が決まったお気に入りのテーブルに座ってくつろいでいた。ヘルガの奏でるシーブラムの心地よい音色が流れていた。いつもなら皆、朝食を摂っている所だが、昨夜はティエリーが相手でクレアの『離れ』に帰る時間が遅くなっていた。

「おはよっ！クレア！今朝はさすがに充実した顔してるな！
『恋人』との夜は楽しかったかい？
半月ぶりだから、さぞかし『彼』は激●●●●しかったんだろうなぁ……」

クレアの姿を見つけたアマンダがにやにやしながら声を掛ける。

「もうっ！アマンダ姉さんまで！
『彼』とは、そんなに激しくなんてしてません！」

頬を真っ赤に染めて、クレアは否定する。

「くれあ、ソレ、否定ニナッテナイ気ガスルゾ！」

ヘルガがシーブラムを奏でる手を休めてからかう。

「その言い方だとかえってこっちは妄想を掻き立てらるよなぁ。
どっちかって言うと惚気（のろけ）られてる気がする……」

シーヴァも読んでた本を膝の上に置いて、にやりと笑って言う。

「もうっ！ヘルガもシーヴァも！」

クレアは首まで真っ赤になってしまう。

「あっ……首や胸元にキスマークがいっぱい……」

アルがクレアをじっと見てからぼそりと呟く。その言葉にクレアは慌てて、首や胸元を手で隠す。

「えっ！アル、やっぱり残っちゃってる？！
もう！ティエリーったら、キスマークが残るからダメって言ったのに！
あんなに激しくキスの雨降らすから！」

その言葉に、一瞬サンテラスが静まり返る。アルの口元が微かに笑いを浮かべる。クレアは訳が分からず回りをきょろきょろと見回す。ロミが笑いを必死に堪えながらクレアを見上げてそっと囁く。

「クレア姉様……本当はキスマークなんてついてませんよ」

同時に、乙女達の大きな笑い声がサンテラスに響く。

「もうっ！みんな、意地悪！知らないっ！」

クレアは居たたまれず、火の様に真っ赤になった顔を両手で覆って、二階へ駆け上がって行く。そんなクレアを目で見送りながらアマンダが呆れ顔で頭を掻きながら呟く。

「もうあの娘ったら、ボンフィス卿がいらした翌朝はこの繰り返し。いつもは、年齢より大人びてどこか達観した感じなのに、『彼』の事となると、ホント、文字通りの乙女になっちまうねぇ……」

「くれあ、デモ『彼』来ル前、後、トテモ幸セソウ。スゴク良ク笑ウ。普段ハ余リ笑ワナイノニ」

そう言うとヘルガは再びシーブラムを奏で始める。

「ロミ、クレアはああなるとたぶん昼まで降りて来ないから、キッチンで朝食をサンドイッチにして二階の部屋に持って行っておやり」

アマンダは、そこにまだ残っていたロミに声を掛ける。

「はい、そういたします……」

ロミは、回りの乙女達を見回し、一度膝を折って挨拶するとキッチンの方へ歩いて行く。

「クレアってさ、不思議な娘だよね。
アマンダ姉さんと同じ『街娼』上がりって言うわりに、
あっちのテクニックは素人以下だったし……
ここに来た当初は、男の人を見る時にすごく怯えた目をしてた。
さすがに『偽りのハニムーン』が終わった後はさすがにそんな事はなくなったけど」

シーヴァが本を開きながら誰にともなく言った。

「ああ、私も覚えてる。
ありゃ、『男』に酷い目に遭わされた素人女がする目だったよ。
『街娼』なら、男を見下す目にはなっても、あんな目にはならない」

アマンダがイスの背にもたれかかって宙に視線を泳がせながら答える。アルがテーブルの上で物書きを続けながらぼそりと呟く。

「あの『噂』……本当って事は……」

アルの言葉に、シーブラムを弾きながらヘルガが小声で言う。

「ある、ソノ『噂』、触レル、良クナイ」

「どの道、私らは『お互いの過去を詮索しない』ってのがルールだしね。
たとえ、過去がどうあれ、私らにとってクレアはクレアさ。
それ以上でも、それ以下でもない。
ただ、個人的には……
もしも、その事でクレアを利用しようとする奴が居れば私はそいつを許さない」

アマンダが天井を見詰めたまま、少し強い口調で言う。

「うん……僕もだよ。
クレアは毎晩『夕方(オーバーナイト)から早朝まで』までして早く自由の身になりたがってる。
あの娘(こ)は必死なんだよね、だから僕もなんか守ってやりたい気持ちになるんだ」

シーヴァは本に目を落したまま、独り言の様に呟く。

「くれあ、歌巧(うま)イ、踊り巧(うま)イ、可愛イ女。
男ノ人、必ズ、ミンナ夢中ニナル。
私モくれあ大好キ、クレア幸セニナル、ソレ、私モ幸セ」

ヘルガもシーブラムを弾きながら、歌う様に呟く。

「私、いつか……クレアの物語書きたい……
もちろんハッピーエンドで……」

アルが、テーブルの原稿用紙に羽ペンを走らせながらそう呟いた。

お陽様が燦々(さんさん)と降り注ぐ暖かな『離れ』のサンテラスは、その後、

再びヘルガの奏でるシーブラムの音色だけが響く静かな時が流れ始める。

その頃、シンシアは一人ティボーシアの街を細々した買い物をしながら歩いていた。乙女達の場合は昼夜を問わずバナビー達ソードエンジェルにボディーガードを依頼するのだが、自分の時に依頼する事は余程の夜遅くにならない限りはなかった。シンシアの場合、年齢的には乙女達より上にはなるが、それでも人目を引く美人には変わりなく襲われる危険がないわけではない。しかし、その危険よりたまには一人で街をぶらぶらしたいとの想いがあってのことだった。もっとも、このティボーシアの街でシンシアに手を出そうとする身の程知らずなど一人も居なかった。

……が、しかし、この日は、シンシアの後をつけるフード付きのマントを着た人影があった。

# 第２９話　隻眼の黒騎士

シンシアは、インクや帳面など事務用品を買って表通りから路地へ入った。これが夕方になっていれば彼女と言えども、路地には決して入らない。しかし、さすがにまだ昼前、街自体が夜型のティボーシアの街では危ない連中も午前中は皆眠っている為、午前中は街全体が非常に健康的になっていた。道行く人々も女子供が多く午前中の明るい日差しもあって、とてもあの夕方以降の危険な香りのする街と同じとは思えない雰囲気だった。

「さて、そろそろお昼だな。
いつもの『ミルバイユ』に行って、軽く一杯ひっかけてランチにするか」

シンシアがそう呟いて歩を速めようとした矢先だった。

「『薔薇の館』のマダム『シンシア＝ラザフォード』だな。
しばしの間、私に付き合ってもらう」

シンシアの耳元でそう小声で囁く男の声がすると同時に、左の腕を掴まれ、右の脇腹辺りに何か先の鋭い物が押し当てられる感覚がした。

「分かったわ……抵抗はしないから手荒な真似はしないで。
このドレスも高かったんだから、その物騒な物で切り裂いたりしないでよ。」

「分かった……では、そのまま振り返るな。
大人しくしていれば手荒な事はしない」

後ろの男は囁くと、左腕を掴んだまま体を彼女の背中に体を押しつけるようにして歩く。そのままシンシアは、三方を高い建物に囲まれ昼間でも薄暗い人気のない路地裏に連れ込まれた。

シンシアは、突当りの壁に押しつけられる様にして立たされていた。陽当たりが悪い為に、やや湿り気を帯びた壁や地面から路地裏独特の嫌な匂いが彼女の鼻をつく。その上、脇腹の鋭い物は押しつけられたままだった。

「……昼間だからって油断してたかな？
目的は何？お金？それなら財布ごとあげるわ。
それとも、まさかとは思うけど、私の体？
それなら抵抗しないから、早く済ませて……
両方って言うならそれでも私は構わない。
ここじゃ嫌だって言うなら、どこでも付き合うわよ」

努めて落ち着いた調子でシンシアは壁に向き合ったまま言う。

「さすがマダム、この状況でも落ち着いた物だな。
しかし、私はその様な下賤な目的ではない。
ただ、『ある女性』を探している」

「ふっ……分かってるよ、あんた『黒騎士』だろ？」

シンシアのその言葉に、男が明らかに動揺する。

「なぜ、分かった？！」

「独特の『匂い』って奴さ。
……で……
『黒騎士』ともあろう方が私みたいな『娼館のマダム』風情（ふぜい）に、
『誰の事』を聞きたいのさ？」

男はしばらく沈黙したあと、重い口を開く。

「あなたの所にいる『娼婦』の事で聞きたい事がある」

シンシアは、突然、男を振り返る。そこにはフード付きのマントを目深に被り顔を隠した背の高い男が立っていた。男は振り返ったシンシアに驚き、再び彼女の腹辺りに手に持った短剣を押し当てようとする。しかし、一瞬早く、シンシアの左手が短剣を持った男の右手首を押さえる。

「私の目を見ろ！返答によってはここでお前を殺す」

男がシンシアの目を見ると、灰色だった瞳がオレンジ色に輝き出だし、その中の黒い瞳孔が蛇の様に縦に長くなる。

「お前、『あの国』の手の者か？」

フードの陰に隠れた男の目に言い知れぬ恐怖の色が浮かぶ。

「違う……『あの国』とは関係ない。
あくまで個●●人的に『人探し』をしてるだけだ」

「ふっ……良いだろう、では私について来い。
昼飯でも食べながらゆっくり話をしようじゃないか」

シンシアの目が再び元の灰色に戻る。彼女は男の手首を放し、その横をすり抜けて歩き始める。男も素直に彼女の後について歩いて行く。

それから数日後の昼過ぎ……

『薔薇の館』のエントランスホール横の『控えの間』に、シンシアによって『薔薇の乙女』達が集められていた。客待ちをする時の様に乙女達は各自のお気に入りのイスやソファ―に寛いだ格好で座っている。そして、その後ろには各々の付き人達も控えていた。さらに、珍しい事にカサド達三人組も部屋の後ろの方に立っていた。

「シンシアの奴、私ら集めて何なんだろう？
しかも、カサド君達まで一緒とはさ……」

アマンダが部屋をぐるりと見回しながら言う。そんなアマンダと目があったカサド達は、ばつの悪そうに苦笑いを浮かべて頭を掻く。

「新シイ乙女来ル、違ウカ？」

「うん、僕もそうじゃないかと思う。
僕とクレアの間の部屋が空いてるしさ」

ヘルガとシーヴァが期待に目を輝かせる。

「私がここへ来てからもうすぐ三年。
その間、誰も新しい乙女は来てないものね」

クレアは後ろに立っているロミをにこやかに振り向きながら言う。

ロミも笑顔で頷く。

「乙女が六人……久々のフルキャストになるのかな？」

アルは手に持った本に目を落したまま呟く。

そうこうしていると、シンシアがロメオと、もう一人、三十代半ば程、肩まである少し艶の無い白髪とブルーの瞳、長身で細身の均整のとれた体つきの男を引き連れて部屋に入って来た。その男は長い髪を顔の前にも垂らして左半分の顔を隠していたが、見えている右半分の顔は彫が深く美しい男だった。入って来た男と一瞬目があったクレアの表情がこわばる。

（まさか！そんな……嘘でしょ……）

クレアは心の中で小さな叫び声を上げた。

シンシア達が『控えの間』に集まった者達の前に立ち止まると、集まった者達はお互いの顔を見合わせざわつく。シンシアは、そんな彼らを一度見回し、手をパンパンと叩いてから口を開く。

「今日、みんなに集まってもらったのは他でもない。
この『館』の新しい用心棒を紹介しようと思ってね」

早速、アマンダがカサド達を見てにやにや笑って言う。

「おいおい……と言う事はカサド君達、お払い箱か？」

その言葉に、カサド達三人組の顔が引きつる。アマンダの言葉を聞

いてシンシアが笑いながら続ける。

「安心しな、カサド達三人組は今までのままだよ。
お前らは用心棒ってより、手先の器用さで色々助かってるからね。
あっ！もちろん、用心棒としての腕もちゃんと認めてるよ」

カサド達はシンシアの言葉を聞いて、引きつった顔が和らいだ。

「じゃあ、紹介しておく。
『クロウ＝オリバレス』。
これでも彼は『黒騎士』、腕は確かさ。
色々物騒な世の中なんで『館』としても警備の要（かなめ）が欲しくてね。
慣れるまではカサド達が色々教えてやってくれ」

シンシアはそう言うと、クロウを目で促す。クロウは一歩前に出ると鋭い目で集まった者たちを見回してから一言挨拶した。

「『クロウ＝オリバレス』……これから世話になる」

そう言うと軽く頭を下げた。頭を戻した時に、男の顔に掛かった髪が揺れ左の頬に大きな縫い傷とが黒い眼帯で左目が隠されているのが見えた。男の名を聞いてやや強張っていたクレアの表情が少し緩む。

（人違い？！うん……確かに、『彼』はブロンドの髪だったし、眼帯もしてなかったし、頬にあんな傷も無かった。
それに、こんな殺気漂う険しい顔じゃない！
もっともっと優しい顔をしてた……）

そう自分自身を納得させるかの様にクレアは心の中で呟く。

その後は、『館』の者達が順に簡単に自己紹介して、その場はお開きとなった。その後、実力はともかく『館』での経験と言う意味で先輩格になるカサド達が、クロウを『館』の中を案内して回り、乙女達は『離れ』に帰って行く。

渡り廊下を通って『離れ』に帰って行く乙女達は、やはりクロウの事が気になる様で歩きながらも彼の話で持ちきりになっていた。

「あのクロウって男……良い男だねぇ……
いかにも歴戦の勇士って感じでさ。
夜になったら、荒々しく愛してくれそうじゃない？」

アマンダがにやにやしながら言う。

「あっ！アマンダ姉さん、ああ言う男が好みなんだ！
と言う事は、もう狙ってるんですか、彼を？！」

シーヴァがアマンダを指さしながら囃し立てる。

「あまんだ、手早イ。モシくろう狙ウ、急グ、良イネ」

「ああっ！ヘルガもクロウ狙いで行くの？」

歩きながらシーヴァは、後ろを歩いていたヘルガにくるりと体ごと振り返る。

「私ヨリ、くれあドウダ？オ姫様ニハ、オ似合イノ騎士（ナイト）ダゾ」

「えっ……私？……」

突然、話を振られたクレアは少し慌てた表情になり視線を宙に泳がす。

「私は、同じナイトでも、もっと優しい感じの人が良いな。
あの人、なんか怖そうだもん……」

そう言ったクレアをじっと見てアルがぼそりと呟く。

「……クレアにはもう騎士（ナイト）居るものね……
年上で、やさしくて、クレアにメロメロの……
『某枢機卿』様っていう素敵なナイトが……」

そのアルの言葉に、そこに居た乙女達に爆笑が巻き起こる。一緒にいた付き人達も肩を震わせ笑いを必死に噛み殺す。

「もうっ！また、アルったら！知らないっ！」

クレアはまた顔を真っ赤にして、その場から逃げる様に、先に『離れ』へ駆け込んで行く。

# 第３０話　クロウ＝オリバレス

一度は否定しても、あの日からクレアの心は揺れていた。

城での『生き地獄』の日々でも忘れなったその人の名。『神』の存在を信じなくなった時でも、『彼』の事は決して忘れなかった。昼か夜かさえも分からない暗闇で何度もその名を呼んで助けを求めた。他の男に抱かれながらも『彼』の事を想う事もあった。それは、ティエリーと言う心から愛する恋人が出来てからも変わらなかった。クレアの心の中にいつも居る密かな『想い人』、『ミロク＝クジョウ』。

「『クロウ』……あなたは誰？『ミロク』ではないの？」

雰囲気はまるで別人ではあるが、他人とも思えぬほど顔や背格好が似ているその男。クレアは一度、ゆっくりと『クロウ』と話してみたくなっていた。それを確かめる為に。

その機会は意外に早くやって来た。

クロウが『館』に来て一週間程たった、ある日の午前中。クレアは五日間の『夕方から早朝まで（オーバーナイト）』を終えて二日間の休日に入っていた。普通ならお昼過ぎまでぐっすりと眠る所なのだが、その日は何故か眠れずにいた。そこでロミを部屋に呼んでおしゃべりかカードゲームでもしようと思い、ベッドから起き上がり普段着のブルーのワンピースを着てふと窓の外を見ると、裏庭で、一人脚立に乗って立木の剪定（せんてい）をしているクロウの姿があった。先日のカサド達が中庭で池の清掃をしていた様に、『館』の用心棒は日中など特に用心棒とし

ての用事が無い時は建物の軽い修理や庭の剪定や掃除などをする事になっていた。

クレアは意を決して、コートを羽織ると部屋を出る。そして、『離れ』のエントランスホールに繋がる正面大階段ではなく、クレアの部屋のすぐ隣にある狭い裏階段を小走りに降りて行く。階段の下の通用口の小さな扉の前で一度深呼吸をして息を整えてから扉を開けて裏庭に出ると、散歩をしてるかの様にゆっくり歩きだす。

『館』の裏庭は、垣根代わりの立木と『離れ』に挟まれた小さな薔薇園になっていた。さすがに今は、薔薇の時期も終わり葉さえも落ちやや寒々しい風景になっていたが、所々にさりげなく置かれた彫刻、中央に造られた趣（おもむき）のある東屋、迷路の様に曲がりくねりながら伸びる散策道、所々に置かれたしゃれたベンチは風情のある物だった。

クレアは、クロウが脚立に乗って木の剪定をしてる下まで来ると、にこやかな笑顔を浮かべて彼を見上げて話しかける。

「おはよう！クロウさん！」

その声に気がつきクロウは、大きな剪定用のハサミを持った手を止めてクレアを見下ろす。

「お、おはようございます……クレア様」

クロウはクレアの姿を見て一瞬、戸惑った様な表情を浮かべた。クレアの方もクロウと一瞬目が合い、思わず頬を染めて視線を逸らす。

「『クレア』で良いし、敬語とか要りませんよ……私の方が歳下だ

から。
お仕事中みたいだけど、少し良い？一人で散歩するのも飽きたの」
「じゃあ、遠慮なく普通にしゃべらせてもらう。
先に言っておいくが、上品にしゃべるあんたらと違って、
『騎士』って言っても俺はかなり口が悪いからな。
ちょうど良い、今から三十分休憩にする。
その間なら、俺は構わん」
そう言うとクロウは脚立から降りて地面にどっかりと座り、脚立の足もとに置いてあったカバンから水筒を取り出すと蓋を開けて口をつけ中の飲み物をぐっと一口飲む。それを見てクレアも傍にあるベンチに腰を下ろす。
「私たちだっていつも上品にしゃべる訳じゃないわ。
あくまで『お客様』に合わせてるだけ。
実際、アマンダと私は『街娼』上がりだしね。
ヘルガは、訛りのきつい、あの通りのしゃべり方。
シーヴァとアルだって、普段はもっと砕けた話し方よ。
ここに来る以上はみんな『理由(わけ)あり女』ばかりだから」
クレアはそう言いながら、クロウの反応を読み取ろうとさりげなく彼の顔を見たが、彼は興味なさそうにカバンをさばくって小ぶりなパンを取り出す。そして、それをクレアの方に差し出す。
「食うか？」
にっこり笑って首を左右に振りながらクレアは答える。
「ありがとう。でも朝ご飯食べた所だから……」

それを聞いてクロウは手をひっこめ、そのパンにがぶりと大口を開けてかぶりつく。クレアは差し出された彼の手を記憶に残る『ミロク』の手と比べていた。彼女の記憶の中に残る『ミロク』の手は白く綺麗な手だったが、『クロウ』の手は浅黒く傷だらけの手だった。

「クロウさん、あなた、クロフォードの国には行った事ある？」

クレアは、残りのパンを口に押し込み、また水筒の飲み物をぐいっと一口飲むクロウを見ながら、思い切って核心に迫る質問をしてみた。

「ああ……行った事はある」

「それはいつ頃？クーデターの前？後？」

クロウの答えに、クレアは思わず身を乗り出して聞いてしまう。そんなクレアを見てクロウは怪訝な顔つきになって逆に彼女に問い掛ける。

「あんた、いやにクロフォードにこだわるな。
そう言えば、あんた、あの国の出だろう？
言葉にクロフォード独特の訛りが混じってる」

そこまで言って、クロウはじろりとクレアの顔を探る様に見ながら続けた。

「ただ、時々聞き慣れないイントネーションが混じるな。
それはたぶん王宮独特の物だろう。
あんた、王宮で働いていたのか？」

「私は、クロフォードの『街娼』上がりよ。
あそこの『姫』様に似てる事で売ってるから、
ここでシンシアから王宮訛りを叩きこまれてるだけよ」

そう答えながら、クレアの心臓は口から飛びだしそうになっていた。
クロウに核心をつく質問をした癖に、逆に彼から自分の正体に迫る質問を返されてしまった。

（もしかして、あなたは『ミロク』？
私が『ソフィア』かどうか探ってるの？
なら、私はどうすれば良いの？）

「へぇー、あんた『ソフィア姫』に似てるんだ！
あんたがあの姫さん似ななら、姫さんは評判通りの美人だった様だな」

クロウは、クレアの顔をしげしげ見ながら言った。その言葉にクレアは驚く。

「クロウ、あなた『ソフィア姫』様を見た事ないの？」

その言葉にクロウは大笑いしながら答える。

「ははははっ！俺みたいな粗野で下品な奴が、
クロフォードのお姫様に会った事なんかある訳ねぇだろうが！
ああ言う所には同じ『騎士』でも、もっと上品な『騎士』様が行かれるんだよ」

クロウは立ち上がりクレアの方に近寄りながら続ける。

「あんた知ってるか？
あのスザクに生け捕りにされたお姫様がどう言う目にあったかを」

「結婚を迫られたけど拒否し続けたから半年後に殺されたんでしょ」

クレアがそう答えると、クロウはすでに彼女の目の前まで来ていた。
そして彼女の耳元に口を近づけて囁く。

「おいおい、生娘じゃあるまいし、そんな事信じてるのか、あんたは。
お姫様はスザクの野郎にすぐに『手籠め』にされたんだぜ。
スザクはお姫様を散々弄んだ挙句、飽きて半年後に首を刎ねた」

クレアはクロウの言葉に身を固くし、目の前に迫っていた彼の顔を見る。

「嘘よ……そんな話は……下賤な噂よ……」

少し震えながらそう言ったクレアの顎を片手で掴みクロウはその口元にいやらしい笑みを浮かべて言う。

「なあ、あんた……本当は、俺を誘ってるんだろう？
お姫様と同じ様に『手籠め』にして欲しいんだろう？」

そう言ったクロウは、もう片方の手を彼女の細い腰に回して抱き寄せながら立たせると、自分の唇を彼女の唇に押し当てる。驚いたクレアは逃れようともがくがクロウの強い力は彼女の体を抱き寄せた

ままだった。長いキスの後、満足げな顔で彼女から離れたクロウの頬をクレアは平手で思いっきり殴った。

「痛ぇじゃねぇか！娼婦の癖にこの程度の事で何すんだ！」

思わず殴られた頬を手で押さえてそう叫んだクロウを、クレアは睨みつける。

「俺はな、金の為なら誰にでも足を開く娼婦って奴が大嫌いなんだよ！

ここに居るのも、条件が良いからだけだ！

『薔薇の乙女』とか言われても、あんたらも所詮『娼婦』だろうが！」

そう怒鳴るクロウにクレアが言い返す。

「あなたって最低な男！

私も、あなたの様な男が一番嫌い！

あなたみたいな人が自分勝手な欲望で女を弄び不幸にするのよ！」

そう叫んで、クレアは駆け出していた。とにかくその場から逃げたかった。たまらなく悲しかった。

（あんな男、絶対に『ミロク』じゃない！

一瞬でも、あんな男を『ミロク』と思ったなんて！

私、なんて馬鹿だったの！）

クレアの美しいグリーンの瞳から涙が止めどなく溢れだしていた。

その一部始終を、建物の陰で壁に寄りかかりながら腕組みをして聞き耳を立てていた影があった。その影は、口に咥えた煙草を地面に捨ててヒールのある黒革の靴で踏んで火を消すと、にやりと笑って呟く。

「そう……二人とも今はそれで良い……」

その影はまぎれもなくシンシアだった。彼女は一人呟くとくるりと踵を返して『本館』の方へゆっくり歩いて行く。

# 第３１話　クレアの狂想曲

『離れ』の通用口を開け、クレアは泣きながら裏の階段を駆け上がっていた。そして、二階の通路に出ると、自分の部屋のドアの前にロミが立っているのが見えた。

「ロミ……」

クレアはロミの名を呼ぶと彼女に泣きながら駆け寄った。何故だか分からなかったが、小さなロミの姿が無性に心強く思えた。気がつくとクレアはロミの前に跪(ひざまず)いて彼女の小さな体を抱きしめて泣いていた。

「クレア姉様……一体、どうしたのですか？」

自分を抱きしめて泣いているクレアの頭を軽く抱きながらそう尋ねる。

「私……私……」

クレアは何も言えなかった。ただ嗚咽がこみ上げてくるだけだった。

「とにかくお部屋に入りましょう……」

ロミに促され、クレアはロミの体から手を離して立ち上がり部屋の扉を開ける。ロミはクレアの腰を優しく抱える様に抱いて一緒に部屋に入っ行った。

ロミは部屋に入ったクレアのコートを脱がせてクローゼットにしまう。クレアはそのままベッドまで歩いて行き、ベッドの上にうつ伏せに倒れ込む。そして、声を上げて泣き出す。一番綺麗な想い出を自分の手で汚(けが)してしまった気がした。無性に悲しくて、悔しくて、どうしようもなかった。

突然クレアの脳裏にクロウの強引なキスの記憶が蘇る。体の中にクロウの唾液が残って、それが内側からじわじわと体を蝕(むし)ばんで行く様な恐怖感から吐き気がこみ上げてきた。クレアはベッドから飛び起きると手で口を押さえて洗面所に駆け込むとひとしきり吐いた。クレア自身、何故そんな極端な反応をしてしまったのかは分からなかった。仕事柄、クロウの言葉ではないがキスなどは挨拶程度にしか感じなくなっていた。仕事中に酷く乱暴な行為をされ腹立たしく思った相手とのキスでも嫌悪感はあったが『吐く』などと言う事はなかった。なのに今回だけはどうしようもない吐き気が彼女を襲った。あのクロウと言う男の物が自分の体の中に一滴たりとも残っているのが嫌だった。

クレアの異常に気がついたロミが慌てて洗面所に飛びこんでくる。

「大丈夫ですか?クレア姉様!
お医者様を呼びましょうか?」

「大丈夫よ、ロミ……」

クレアは無理に笑顔を作ってロミを見てから、蛇口をひねって水を流し、その水を手で掬(すく)って口を回り洗う。ロミは洗面台の横に掛けてあったタオルを取るとクレアに手渡した。受け取ったタオルでクレアは口を拭く。

「ごめんね、ロミ、心配させて……」

ロミはそんなクレアの顔をじっと覗き込んで、大きく深呼吸してから意を決して小声で彼女に尋ねた。

「クレア姉様、姉様もこんな事は言い出し難いとは思いますが……もし、そう言う事でしたら、早い方が良いです。
姉様から言い出し難ければ、私がマダムにそっとお話します。
この場合、もし、お相手に心当たりがあるのなら、
その方と、姉様、マダムとのお三方での話合いが必要になりますし……」

ロミの言葉にクレアの目が文字通り点になる。

「えっ……それって……
違うってそうじゃないよ、ロミ……」

すでにロミの顔は真剣そのものになっていた。

「姉様、ダメです。お一人で何とかしようとするなんて。
変な事を試したりすると大切なお身体を壊してしまいます。
これは恥ずかしい事ではありません。
むしろ、喜ばしい事です。
私は姉様に、是非、このまま産んでいただきたいのです」

クレアは真剣な顔のロミを見て苦笑いを浮かべながら答える。

「本当に違うんだよ、ロミ。これはね……」

そこまで言ってクレアの言葉が止まる。先ほどのクロウとの事は他

人にはどうしても言いたくはなかった。言葉の止まったクレアにロミが尋ねる。

「では、クレア姉様、逆にお聞きしますが、ちゃんと『月の物』は来てますか？」

その瞬間クレアの顔が強張る。

（そう言えば……先月来てない！）

さらにロミはクレアを問い詰める。

「姉様、本当にお心当たりはないんですか？」

クレアの額に冷たい汗が一筋流れる。

（そう言えば、二カ月くらい前にティエリーが来た時、どうしてもって言われて一度だけ……つい『大丈夫な日』だと思ったから……）

「まずいよ、ロミ！私、もしかしたら『そう』かもしれない！」

クレアは思わずそう叫んだ。

（クロウのキスが原因と思い込んでいたけれどそれこそが勘違いだったのでは？）

脳裏に浮かんだ疑惑がクレアの体をがたがたと震わせていた。

「姉様、とにかく、今は静かに横になってください」

ロミはそう言うと、震えているクレアの手をそっと取る。

クレアはワンピースを脱いで下着姿でベッドに横になっていた。ロミはシンシアの元へ相談に行った。天蓋の星座の刺繍をぼんやり眺めながら、彼女は思っていた。体の中から蝕まれる感覚と吐き気の原因は、クロウのキスではなく、お腹の中に宿った小さな命かもしれない。クレアはそっと自分の下腹辺りを撫でてみた。一気に色々な事が頭を渦巻き始めた。もし、そうならティエリーが相手の可能性が高い。彼は何と言うだろうか?喜んでくれるのか?それとも自分ではないと否定するのだろうか?いや、ひょっとすると冷たく一言『堕せ!』と言われるのでは?

「嫌っ!もしティエリーとの子供なら欲しい!産みたい!」

思わず一人そう叫んでいた。叫んで我に帰って、急に恥ずかしくなった。

「私、なんてこと考えてるの!まだそうと決まった訳じゃないのに!」

クレアは掛け布団を頭まで被り、顔を真っ赤にしていた。

しばらくすると、扉がノックされロミの声がした。

「クレア姉様、マダムをお連れしました。入りますよ」

そして扉が開く音がした。ばたばたと言う騒がしい足音と共にシン

シアは部屋に駆け込んで来る。ロミもその後ろを駆けてくる。シンシアはベッドで横になるクレアの脇まで走り寄ると息を切らせながら矢継ぎ早に彼女を問い詰める。

「クレア、あなた、本当なの？
で、今はどう？吐き気はまだする？
体がだるいとか、他に自覚症状はあるの？」

「シンシア、落ち着いてよ。
吐き気は落ち着いてるし、他に自覚症状は特にないから」

クレアは努めて冷静な顔でそう答える。ロミはシンシアとは逆側に立って、そっと掛け布団の中に手を入れてクレアの手を握る。クレアはロミの方を向いてにっこり笑う。

「クレア、こっち向いて！
それで、心当たりの相手はあるの？」

シンシアは、まだ慌てた様子のままさらに問い詰める。

「あると言えば、ティエリーだけと思う……」

そう答えて、クレアは頬を赤らめる。

「もしそうなら不幸中の幸いなんだが……。
とりあえずロメオに医者を呼びにやったから、
詳しくは、お医者様の判断が出てからにしましょう。
しかし……まさかあなたがこう言う事になるとは……」

そう言って、シンシアは少々困った様な顔になり頭を掻く。

「シンシア、やっぱり冷静に考えて違うと思うんだ。
ティエリーと『危ない事』したのは一回だけだし……」

「もう、クレア！なんでそんな事したの？
子供じゃないんだから分かるでしょ。
そう言う事は回数じゃないの。
出来ちゃう時は、その一回で命中しちゃうの」

「だって……『大丈夫な日』だったし……
彼が一度だけで良いからどうしてもってせがむから……」

「はぁ……お熱い事で……」

シンシアは呆れ顔でベッドのクレアを見下ろす。掛け布団の下でクレアの手を握りながら立っているロミがその言葉を聞いて、くすりと笑う。

「とにかくお医者様が来るまでは安静にしている事！
良いわね、クレア」

そう言って、出て行こうとするシンシアの背中に向かって、クレアが声を掛ける。

「シンシア！もしそうだったら、私、産みたい。
ティエリーの子供なら、例え、彼が認めてくれなくても欲しい！」

シンシアはその言葉に一度立ち止まりクレアを振り返り、少し優しい顔で頷く。

「あなたの気持は分かったわ……」

そう言ってシンシアは部屋を出て言った。

その後がまた大変だった。本来、クレアとロミ、シンシア、ロメオだけの話だったはずが、どこをどう漏れたのか乙女達が集団になってクレアの部屋に押し掛けてきた。それはもう嵐がやってきた様な騒ぎになった。彼女たちはクレアを、からかう様な、祝福する様な、励ます様な、まあ、とにかくクレアを出汁にして散々盛り上がり大騒ぎした挙句、最後には……

「クレア！絶対に産め！
男とシンシアなんかの横暴に負けて堕ろしちゃダメだ！
あんたが産む為なら、私らもストやっても戦うぞ！」

と勝手に共同宣言をブチ上げて帰って行った。

結局、この『妊娠騒ぎ』は、翌日、医者がやって来てクレアを診察した結果『妊娠の兆候なし』との判断が出て、呆気なく終息する事になった。

# 第３２話　箱の中の娼婦と黒騎士

そして平和な日々が流れた一ヶ月ほど後。季節は早春となり暖かい陽射しの降り注ぐ、少し気だるい午後。

ロミは『薔薇に囚われし聖女』の図柄が描かれた馬車に乗っていた。その客室内は、外の穏やかな気候とは裏腹に、彼女にとって耐えがたい空気で満たされたいた。肌を刺す様なぴりぴりと張り詰めた空気。その空気を少しでも変えようとロミは無理矢理にこやかな笑顔を作って言葉を発する。

「春ですね……なんか楽しい事がありそうな……」

「楽しくなんかない！私はむしろ不愉快だ！」

クレアは窓の外を睨みつけたまま、ぶっきらぼうに言った。ロミはそんなクレアを見て、おろおろしながら今度は前の席に座るクロウに話を振る。

「クロウさんとこうして出張のお仕事するのは初めてですよね」

「俺だって、お前みたいな女と膝つき合わせて居るのは苦痛なだけだ」

クロウは一瞬クレアの顔をじろりと睨んだ後に、また窓の外に視線を戻す。ロミはたまらず声を上げる。

「もうっ！姉様もクロウさんも！
久々に出張のお仕事なんだから楽しくやりましょうよ！」

「私は『護衛』はバナビーか、カサドのどっちかにしてって言ったのに、
シンシアの奴……何で、この男に！
少なくともカサドは他の仕事なんかなかったはず！
この男が一緒じゃ、私はずっと不愉快！
もうっ！イライラする！」

クレアが窓の外から視線をクロウに移して怒鳴る。

「俺だって、『館』の警備や他の乙女の護衛なら良いが、
この女個人の護衛につくのは嫌だってマダムに言ったんだ。
あんたみたいな女、襲おうとする物好きなんか居るもんか！」

クロウも負けずに噛み付かんばかりに怒鳴り返す。この一触即発の事態にロミはあたふたする。

「お二人に何があったか知りませんが……
お願いですから、もう少し穏やかにお話ししましょうよ。
姉様もクロウさんも、これから長いお付き合いなんだし……」

「ロミ……私はね……
こんな礼儀知らずの変態野郎とのお付き合いなんて死んでもごめんだわ！」

クレアはそう吐き捨てる様に言うと、ぷいっと窓の外にまた視線を戻す。

「こらっ！礼儀知らずは認めるが……
『変態』とは何だ！『変態』とはっ！」

「だって『変態』じゃない！
いきなり抱きついて無理矢理キスするなんてっ！」

そう言って、クレアはまたクロウの顔をきっと睨みつける。

「なんだ、お前、まだそんな事気にしてるのか？
生娘じゃあるまいし！キス程度で『変態』はないだろうが！」

ここでロミがはっとした表情になって二人に割って入る。

「ええっ！無理矢理キスって……？」

「ロミ、お前には黙っていたんだがな。
こいつが『館』に来て一週間後くらいに散歩中に見つけて
声かけてちょっと話してたら、
突然、抱きついてキスしてきたんだ！」

クレアはおもいっきり顔をしかめて、クロウを指さしながら怒鳴る。

「ありゃ、お前が誘ったんだろうが！
あんな切なそうな表情されりゃ、男なら誰でもそうするさ！」

「誰が切なそうな顔だって！
私はそんな顔断じてしてない！
絶対に誘ってなんていない！」

そう言ってクレアとクロウは無言の睨み合いになる。ここで二人の間に不用意に手を出そうものなら、両方から噛みつかれかねない空気がその場を支配する。

「はぁ……そんな事があったんですね。」

二人の顔を交互に見て、ロミは呆れ顔になる。クレアの客の多くは、純真無垢な『ソフィア姫』を力ずくで自分の物にするという願望をクレアを使って実現させようとする者が多かった。それ故、クレアの場合、仕事上ではそう言う『無理矢理の行為』を我慢する代わりに、仕事を離れた私生活では『強制』される事を極端に嫌う傾向が強い事をロミは知っていた。実際はクロウとの経緯(いきさつ)の根っこはそこではないのだが、それをロミが知る由(よし)もなく、彼女は今回もそう言う事が原因と理解した様だった。

「そうとなれば、もう良いです……
私は止めませんからお二人、心行くまでやって下さい。
はいっ！第二ラウンド開始っ！」

ロミは半ば投げやりな口調で言うと、窓の外に視線を逸らした。

と同時にクロウが先制パンチを繰り出す。

「大体、お前、この間『妊娠騒ぎ』起こしただろう！
プロが何やってんだ！プロとしての自覚がなさすぎるんだよ！
大方、上客に『特別な事』せがまれて、
はいはいいってやらせたのが騒ぎの原因じゃないのかよ！」

よりによって一番言われたくない相手に図星を突かれたクレアは首筋まで真っ赤になる。

「だ、黙れっ！黙れぇーっ！
この野蛮人！変態！どスケベ！強姦魔！

殺してやる！お前なんか殺してやるっ！
それにもし、お前の子供なんか出来たら、
私は何のためらいもなく、即、『館』の屋根の上から飛び降りて自殺してやる！」

クレアは怒りと恥ずかしさで、すでに自分が何を言ってるのか分からなくなっていた。

「お前を孕(はら)ませる様な『事』が出来るなら、
俺も男だから、それはそれで嬉しい事だがな」

逆にクロウは取り乱すクレアを見て面白がる。彼女にわざと分かる様ないやらしい笑いを浮かべて挑発する。

「な、なんて事を！
あんたと、そんな事するなんて考えただけで吐き気がするわ！
止めて！馬車を止めて！
絶対、吐くんだから！もうダメっ！我慢出来ないっ！」

「馬鹿野郎っ！吐くなら、ドア開けて頭出して吐け！
馬車の中で吐くんじゃねぇぞ！」

そう言って、クロウはけらけらと笑いだす。クレアは完全に自分を見失った状態になっていた。普段のクレアならここまで取り乱す事などめったに無いのだが、何故かクロウ相手だと小娘の様に相手のペースに嵌(はまり)りどんどん取り乱して行った。ただ、この二人のやり取りは傍から見ると完全に『痴話喧嘩』に見えた。

（ひょっとしてクレア姉様、本当はクロウさんの事が好きなんじゃないのかな？）

二人の怒鳴り合いを無視して外の風景を見ていたロミはふっと思った。

クレアとクロウの口喧嘩が延々続く中、馬車はティボーシアの街を迂回して、『薔薇の館』のある森とは反対側の森に入って行った。今回のクレアの出張先は、この森の中にある名門貴族『シャミナード家』のお屋敷。彼女を『出張サービス』で一晩買ったのはこのシャミナード家現当主の『エミール＝シャミナード伯爵』だった。

元々『夕方から早朝まで（オーバーナイト）』専門で割高な値段設定のクレアを出張までさせるとなるとべらぼうな値段になる。実際、あのティリーですら一度もクレアを出張させた事がないほどだった。実はクレアが妙に機嫌が悪いのは、今回の仕事が『出張』だからと言うのが本当の理由であった。わざわざ、大金払ってクレアに出張させるには『それなりの理由』があるケースがほとんどだった。その理由の大半がクレアにとっては出来れば避けたい物ばかり。特に多いのが、自分の屋敷の地下室でクレアを弄ぶケースだった。もちろん、それは大人の遊び、実際に苦痛を与えたり怪我などさせる事はなかったが、彼女にしてみれば城で受けた屈辱の日々をどうしても思い起こしてしまう為、内心は嫌でたまらなかった。しかし、その分、彼女に入って来る報酬がいつもより多い上に、チップも桁違いの為、我慢して仕事を受けていた。チップが多いのは『そう言う趣味』がある事や、例え高級娼婦である『薔薇の乙女』と言えども『娼婦』と遊んだ事実を他人に知られたくない為の『口止め料』でもあった。一日も早く『館』から自分自身を買い戻し『自由の身』になる事が、今のクレアにとっては最大の生きる目的。その為にはこの程度の事、嫌だと言って逃げる訳にはゆかなかった。

森の中をしばらく走ると、馬車の前方に立派なお屋敷が見えて来る。今回の目的地『シャミナード邸』である。森の中に突然現れる白亜のお屋敷は、おとぎ話に出てくる様な不思議な雰囲気を漂わせていた。クレア達が居る『薔薇の館』は、ロケーション的にこの『シャミナード邸』に非常によく似ていた。これはもっともな話で『薔薇の館』自体が、当時からすでにそこに建っていた『シャミナード邸』をモデルにして建てられた物だったのだ。立派な大理石作りの門をくぐって馬車はお屋敷の敷地内に入って行く。ちなみに、お屋敷がある森のほとんどがシャミナード家の私有地なので、正確にはそのかなり前に敷地内には入っていたのだ。

やがて、馬車はお屋敷の玄関ホール前の静かに停まる。その場にはすでに数人のメイドが整列してクレア達の到着を待っていた。馬車が止まると使用人の若い男が駆け寄り、深々と頭を下げながらそっと馬車の扉を開ける。

# 第３３話　少年に買われたクレア

クレア達三人は使用人に導かれ馬車を降り玄関ホールに入る。するとそこはに広々として、そこかしこに凝った彫刻や絵が飾られた重厚で素晴らしいホールだった。そして、正面には立派な大階段がある。そこもやはり『薔薇の館』と非常に似通った造りになっていた。ただ、『館』が豪華さと淫靡さをイメージしたビロードの深紅を主体にして造られているのに対して、『シャミナード邸』の方は清廉潔白をイメージさせる大理石の白を前面に押し出した造りになっていた。玄関ホールに入ったクレアはぐるりと中を見回し、そこに『娼館』と『貴族の館』の違いを感じた。

玄関ホールに入って来た三人をすぐに若い執事が出迎えた。彼は黒い燕尾服に身を包み、同じ職業柄で年格好も似ている為か、『館』のロメオに非常に似た雰囲気を持っていた。ただロメオがブロンドの髪に金の瞳だったのに対して、こちらの執事はこの国には珍しく黒髪に茶色の瞳を持っていた。彼はクレアの前で深々とお辞儀をする。

「お待ち申しあげておりました、
『薔薇の館』の『クレア』様でございますね。
私（わたくし）、執事長の『ベルモンド』と申します。
滞在中、ご要望、ご不便等がございましたら、
遠慮なくお申し付けくださいませ。
では、早速、主（あるじ）の元へご案内させて頂きます。」

その言葉にクレアはにっこり笑って軽く頭を下げる。本来ならこの場合、当主から呼ばれた『娼婦』であるなら相手が執事であろうと跪いて挨拶をするのが当然なのであるが、そこは貴族と同様の地位

を与えられている国家公認の高級娼婦『薔薇の乙女』であるクレアは、彼に対しては立場が上になる為その必要はなかった。

ベルモンドに導かれ三人は大階段を二階へ上がって行く。二階へ着くと左右に伸びる廊下があり、正面には彫刻の施された立派な両開き扉が二枚あった。ベルモンドはその扉を軽くノックすると中へ声を掛ける。

「若様、『薔薇の館』のクレア様をお連れしました」

すると、中から若い男の声が返ってくる。

「入れ……」

その声を聞いて、ベルモンドが頭を下げて扉を開き、クレア達を先に部屋へ入れる。三人が中へ入ると、そこは少人数なら、舞踏会でも出来そうな程の広さがある広間になっていた。天井からはいくつも蝋燭が乗った豪華なシャンデリアが三つほどぶら下がり、壁には美しく手の込んだ調度品が並び、その間には鏡もはめ込まれていた。そして、その奥にあるソファーに深々と座る少年が一人。その少年は肩までである長い赤毛とサファイアの様な美しいブルーの瞳を持ち、華美な所はないが、それでも上質な織りの生地と手の込んだ造りの服を身につけていた。ベルモンドは、そっと扉を閉めると、その少年の脇に控えて、クレア達三人に言った。

「この方が……
現『シャミナード家』当主『エミール＝シャミナード伯爵』様です」

（あの少年が今回の依頼主？

バナビーより少し若い感じ、まだ十三、四では？）

クレアはベルモンドの言葉に少々怪訝は表情になったが、すぐに、にこやかな笑顔に戻って、少年の前に進み出る。クロウとロミは扉から入った所でそのまま控えていた。クレアは少年の前で跪くと深々とお辞儀をする。

「『薔薇の館』の『クレア＝カラス』でございます。
この度はご指名を頂き、心よりお礼を申しあげます」

そう言ってから、後ろのクロウとロミを見て続ける。

「あちらの二人は警護の『クロウ』と、
私の付き人の『ロミ』と申す者です」

クレアのその言葉に、ロミはメイド服の裾を広げて右足を一歩引いて膝を折って挨拶し、クロウは胸に手を当て深々とお辞儀をする。

（クロウの奴、ちゃんとまともに挨拶できるじゃないか！）

クロウが挨拶するのを見て、クレアは安心して心の中でそう呟く。彼の日ごろの言動を見なれていた彼女は、クロウがおざなりの挨拶しかできないのではないかと実は内心はらはらしていたのだった。

エミールは無言でソファーから立ち上がると、そのまま跪いたままのクレアの前まで歩いてくる。そして彼は、いきなり彼女の顎を右手で掴むとぐっと持ち上げて顔を上げさせる。

「噂に違わぬ美しい女だな、ベルモンド。
これなら、あのべらぼうな値段も納得できる。

今晩一晩、退屈せずに済みそうだ」

エミールは冷たい表情でそう言うと、クレアの後ろへ回り左手で彼女の顎を掴んで顔を上げさせたまま、右手を頬から首筋に手を這わせて行く。

（何、こんな所でいきなり！この子！手慣れてるの？）

クレアはエミールの大胆な言葉と行いに一瞬戸惑いの表情を浮かべたが、すぐに恍惚とした表情を浮かべそっと目を閉じる。もちろん、それは本当に感じていたのではなく商売上の演技だった。クレアの表情が変わるのを見てエミールは満足げな表情を浮かべクレアを見ながら、その手を彼女のドレスの胸元から中へ強引に滑り込ませようとする。それを見たベルモンドがすぐさまエミールの元に駆け寄り、彼の耳元でそっと囁く。

「若様、そこから先は寝室でのお楽しみに……」

「この女も良い具合に感じてるんだぞ、ベルモンド。
……が……まあ、良い……
お前がそう言うのなら仕方が無い。
本当は、もう少しこの場で楽しみたかったがな」

そう言ってエミールはやや不満げな表情でクレアの胸元から奥へ入れようとした手を止める。手が止まったのを感じてクレアが振り返り目を開くとエミールと目合った。クレアは、エミールを試す様にわざと少し淫靡な笑みを浮かべる。するとエミールは複雑な表情を浮かべる。しかし、それも一瞬の事ですぐに冷酷なまでの冷たい表情に変わった。その表情の変化をクレアは見逃さなかった。

（この子……何かありそう……）

クレアはこのエミールと言う少年に興味を持ち、心の中で呟く。一方、エミールはクレアから離れ、そのまま部屋の奥の扉の方へ歩いて行きながら言った。

「ベルモンド、少し早いが夕食の準備をさせろ。
この三人には、それまで用意した部屋でくつろいでもらえ。
僕は少し、仕事を片付ける」

「かしこまりました……」

エミールはそのまま奥の扉の中へ消えてゆく。

ベルモンドに案内された客間は、二階の右側の廊下を突き当たった所にあった。広さは『館』にあるクレアの部屋程は十分にあり、その上、大きな窓の外にはバルコニーさえ付いていた。風呂と洗面所、トイレも当然付いていて、壁際に大きなドレッサーと、キングサイズのベッドが二つ大きめのベッドサイドテーブルを挟んで並んでいた。中央には一人掛けのソファーが二つと三人掛けのソファーが大理石のテーブルを挟んで向かい合わせにあった。この三人掛けのソファーは簡易ベッドにもなる造りになっていた。実際には、今晩クレアは朝までエミールと共に過ごす事になるので、通常ならベッドは二つだけで十分なのだった。

クレアはドレッサーの前に座り化粧を直し、ロミはその後ろに立ってクレアの髪を整えていた。クロウはベッドに横になりながら、クレアに話しかける。

「あんた、本当にあんなガキに抱かれるつもりなのか？」
クレアは鏡を覗き込み、ルージュを引き直しながらぶっきらぼうに答える。
「当然でしょ、仕事なんだから」
「あのガキ、初対面で、しかも俺たちや、あの執事が居る前で、いきなりあんたの胸元に手を入れようとしたんだぞ。しかも、あの横柄（おうへい）な態度！思い出すだけでも腹が立つ。なあ、あんな小生意気なエロガキ、拒否しちまえよ」
クロウは天井を見ながら、明らかに不服そうに言う。
「世間じゃ、私たち『薔薇の乙女』は気にいらなければ、どんな客でも平気で拒否するって言われてるけど、実際は余程の事が無い限り拒否はしないの。それにね……私、あの子にちょっと興味があるんだな」
クレアの言葉を聞いて、クロウはがばっと上半身を起こして興味津々と言う表情で尋ねる。
「あんた、ああ言う子供相手だと燃える口なのか？」
「バカ！そう言うことじゃない！」
クレアはクロウを振り返って、手に持ったルージュを投げつけて思わず怒鳴る。
「クレア姉様は、あのエミールと言う若きご当主様に興味があるっ

て事ですよ」

ロミがクロウの方を向いて、クレアの代わりに答える。

「そんな事より、ロミ、今晩私が居ない間、十分気をつけるんだぞ。
こんな変態野郎と同じ部屋で一晩過ごすなんて……
もし、嫌なら私があの執事に言って、もう一部屋用意させるよ」

後ろの居たロミを振り返り心配そうな顔でクレアは言った。そのクレアの言葉にクロウがすかさず反応する。

「あほ！俺はロリコンじゃねぇや！
こいつみたいにペッタンコの胸じゃ、
裸見たってその気になるもんかよ！」

その言葉に、ロミは思わず自分の胸を見る。そんなロミの反応をみてクレアはくすりと笑いながら言った。

「ロミだって、脱げば結構色っぽいんだよね！」

その言葉に思わずロミは俯(うつむ)いて頬を染める。クロウはどきっとした表情を浮かべて今一度ロミを見た。

# 第３４話　弄ばれるクレア

当然の事であるが、その後の夕食をエミールと共に出来たのはクレアだけだった。とは言え、ロミとクロウにも別室でとても従者用の物とは思えない程の豪華な夕食が用意された。しかもシャミナード邸のメイド達が給仕をする正規の客とほとんど変わらない形式の物だった。可愛いメイド達にちやほやされ適度にワインも入ってクロウは終始上機嫌だったし、ロミの方もこれほど豪華な夕食は久しぶりでその味を十二分に堪能し楽しんだ。

一方、クレアの方はと言うと、料理はロミやクロウの物よりさらに豪華で味も申し分なく、ベルモンドの給仕も気持ちのよい物だったが、その雰囲気は楽しいとは言うには程遠い物だった。クレアが努めて色々な話題を振ってもエミールは一言二言短く答えるだけで、すぐに会話が途切れてしまうのだ。

「クレア、お前、しゃべってないで早く食べろ。
この時間も、代金に入ってるんだ。
お前の仕事はしゃべる事じゃなくて、
ベッドで僕を楽しませる事じゃないのか？
僕は、こんな料理より、早く『お前』を味わいたいんだ」

エミールは色々と話しかけてくるクレアをじろりと見て、冷たく言い放った。この言葉にさすがのクレアもむっとする。手に持ったナイフとフォークを少し乱暴にわざと音を立ててテーブルに置き、口元を軽くナプキンで押さえてから、クレアはエミールを睨みつけて言う。

「分かりました、伯爵様。

私はもう十分に食事は頂きました。
そこまでおっしゃるのなら、今すぐ寝室へご一緒します」

ベルモンドは、クレアの反応に少し不安げな表情を浮かべて彼女を見る。

「ふっ……見かけと違って、気の強い女だ。
まあ、僕もそう言う気の強い女は嫌いじゃない。
気の強い女を征服するのは、たまらない快感だからな」

エミールはそんなクレアを見て笑う。

「それは私も楽しみですわ。
是非、若い伯爵様に身も心も征服されてみたいものです」

クレアはそう言ってから、エミールを挑戦するかの様な鋭い目と笑みを浮かべて続けた。

「……お出来になるものなら……」

エミールは、自分もナプキンで口を拭いてから、手をぱんぱんと二度叩いてからベルモンドに言った。

「ベルモンド！食事はここまでだ。僕は寝室へ行くぞ」

そして、席から立ち上がりながら、クレアを見ずに続ける。

「クレア、行くぞ。ついて来い」

「はい……伯爵様……」

クレアは、その言葉にそっと席を立ち上がり軽く一礼してからエミールの後に続く。部屋を出て行く二人を、ベルモンドは頭を下げて見送りながら、そっと呟く。

「クレア様……期待していますよ……」

エミールの寝室は思ったより狭かった。クレア達にあてがわれた部屋よりも二回りほど狭い感じがした。扉を開けて右手に洗面所とトイレがあり、その先が寝室だった。普通は壁際にベッドが置かれる物だが、ここは部屋の中央に深紅の天蓋付きのベッドが置いてあった。そして、その脇に小さな丸テーブルとそれを挟んでイスが二つ向かい合わせに置いてある。壁際にベッドが無い代わりに両側の壁一面が本棚になって無数の本が並んでいた。正面には、彼の執務用の立派な机と椅子があり、その後ろにはバルコニーこそなかったが大きな窓がある。

寝室に入るといきなりエミールはクレアを後ろから抱き締め、右手を胸元から奥へ強引に滑り込ませる。彼の手はすぐにクレアの柔らかい膨らみに届き掌がそれを包み込む。クレアはそっと目を閉じ囁く。

「強引なのですね、伯爵……
そして性急……お話もなしですか……」

「話なんて時間の無駄だ。
僕はお前を味わう為に大金を払ったんだ」

そう言うと、エミールはクレアの耳を軽く噛んでから首筋にキスを

する。

（確かに、この子、歳の割に女の扱いにすごく慣れてる。
でも……この愛撫には愛情の欠片もない……）

うっとりと恍惚の表情を浮かべて、エミールの愛撫に身を任せながらもクレアは冷静だった。

「さすが『薔薇の乙女』の中でも一、二の人気を誇る『クレア』。
良い反応だ……気に言った」

エミールはクレアの耳元でそう囁くと、急にクレアから手を離す。そして、ゆっくり歩いてベッド脇のイスに座る。イスに座ったエミールはゆっくりと足を組み、テーブルに肘をつけて頬杖をつく。クレアはその場に立ったままエミールの意図が分からず戸惑った表情のまま立ちすくんでいた。立ちすくむクレアを見ながらエミールは命令口調で言った。

「僕の見ている前でゆっくり服を脱いで裸になれ」

エミールの言葉にクレアは思わず自分の肩を両手で抱いて彼を睨みつける。

（この子、なんて事を！
安酒場の卑猥なショーの真似ごとを私にさせようと言うの？）

「どうした？誇り高い『薔薇の乙女』はそんな事は出来ないか？
いっその事、拒否して帰るか？」

エミールは口元にいやらしい笑みを浮かべてクレアに尋ねる。

（何が目的なの？この子は……
でも、こんな子供に負けるのは絶対に嫌！）

クレアは意を決して口を開く。

「分かったわ……」

そう言ってから、クレアはドレスの胸元の紐を解き始める。

その頃、ロミとクロウは食事を終えて部屋に戻って来ていた。部屋に入るなりクロウは自分のベッドにバタリと横たわる。

「久々に美味いもん食った！
しかも可愛いメイドが何人も付きっきり！
もう最高だね！」

ロミはそんなクロウを見ながらにっこり笑う。

「クロウさん、上機嫌ですね」

クロウは、ふと真面目な顔に戻りロミを見て尋ねる。

「なあ、ロミ、あいつはあのエロガキと二人で食事したのかな？」

「気になりますか？クレア姉様の事」

ロミが少し意地悪げな表情で逆にクロウに問い掛ける。

「ば、馬鹿言うな！あんな奴の事なんか……」

そう言って、クロウはくるりと背を向ける。クロウの反応にくすりと笑う。

「ふふふっ、クロウさんって分かり易い人ですね。
それじゃ、私、先にお風呂使って良いですか？」

「ああ、俺は後で構わんよ……」

クロウはロミに背を向けたまま答えた。

頬杖をついて見守るエミールの前に一糸纏わぬ姿になったクレアが立っていた。彼女は彼を睨みつけながら尋ねる。

「これで満足かしら？」

「子供じゃあるまいし、女の裸見た程度で満足などするか。
しかし、どこまでも気が強い女だな、お前は。
ああ言えば、泣き出すか、怒り出すと思ったんだが、
まさか、本当に僕の目の前で裸になるとはね」

そう言ってエミールはイスから立ち上がり、自分も服を脱ぎながら言う。

（私を試したの？）

そう思うと、クレアは無性に腹立たしく思えたが、それを表情に出すのは得策でないと判断して努めて冷静に振るまう。エミールは自

分も全裸になるとベッドに上に横になってクレアを誘った。

「こっちへ来い、クレア。
お前に素晴らしい快楽を味あわせてやる」

そう言ってエミールはにやりと笑った。クレアは少し淫靡な笑いを口元に浮かべて彼の待つベッドにその美しい裸身を横たえる。すぐにエミールの手がクレアの体を這い始める。クレアは目を軽く閉じて彼の愛撫に身を任せた。

クロウはベッドに横たわって天井を見詰めていた。ロミの使う水音が浴室から漏れ聞こえてくる。

「今頃、あいつ……あのガキに……
いや、あんな可愛げのない女、どうだって良いじゃねぇか！
あいつは『娼婦』なんだ。
この世で一番嫌いな職業の女なんだ。
あの女にしたら、今してる事は何でもない事なんだ。
畜生め！どうしてこんなに気になるんだ！」

イライラが止まらなかった。もし、ロミが風呂に入って居なければ彼女に当たり散らしていたかもしれないとクロウは思った。彼の脳裏に突然エミールに抱かれ喜びの声を上げるクレアの姿が浮かぶ。そのクレアが何故か急に彼の方を見て、悲しげな表情で涙を流しながら叫ぶ。

「見ないで！お願い！見ないで！クロウ！」

「そんなガキ相手に何やってんだ！

止めろ！止めるんだ！頼む、止めてくれ！」

思わず、クロウは一人叫んでいた。叫んだ後に我に返りはっとした表情になる。叫び声をロミに聞かれたのではないかと思い、彼はそっと聞き耳を立てたが、ロミの気配が変わらない事に少し安心する。

「俺は何を考えてるんだ……
こんな事はなんて事無い。
それがあいつの商売じゃないか。
全部忘れたつもりだったのに！
どんな事情があろうと、今のあいつは『娼婦』、
俺にはどうなろうと関係ない女。
ただ、仕事でボディーガードしてるだけさ」

クロウはたまらず布団を頭から被って無理に眠ろうとする。しかし、彼の耳に、クレアの甘い嬌声と、悲痛な叫びがいつまでも交互に響いて眠れなかった。

## 第３５話　女の意地と少年の懺悔

全身を絶え間なく襲う愛撫に髪を振り乱しながら悶え、妖しい声を上げるクレアを見て、表面上は冷たい表情を崩さぬまま彼は失望と満足の入り混じった複雑な気持ちになっていた。

「最高級娼館『薔薇の館』のナンバーワンと言われる『クレア』でもこうか……

所詮、女なんてこんなものさ。ちょっと体を弄(まさぐ)ればすぐに喜びの声を上げる。

まあ、良い、面倒だけど、今、僕がお前を天国に連れってやるよ」

エミールは吐き捨てる様にそう言うと、クレアの上に覆い被さろうとする。すると突然、今まで獣の様に快楽を貪(むさぼ)って妖しい声を上げていたクレアの顔が真顔に戻る。彼女は無言のまましばらくじっとエミールの顔を見詰めた後、にやりと不敵な笑いをその口元に浮かべて、ぞっとするほど落ち着いた声で言った。

「ねぇ、坊や、そんな優しさの欠片もない強引な愛撫で、本当に私が感じて喜んでるとでも思ってるの？」

その声に、一瞬驚きと戸惑いの表情を浮かべたエミールだったが、すぐに怒りの表情に変わる。

「坊やだと！僕は一人前の男だ！

もう何人もの女を知ってるし満足させてきた！」

彼は無理に冷静な顔を作って続ける。

「ああ……そうか……分かったぞ。
強気なお前の事、それが精一杯の抵抗だろう？
さっきまでお前は我を忘れて悶え狂ってた。
それを僕に見られたのが悔しいだけだろう？」

しかし、そのエミールの言葉は、今のクレアには単なる子供の強がりにしか聞こえなった。彼女はエミールを見詰めたまま言い放つ。

「良いわ、あなたに女の『怖さ』を教えてあげる」

そう言うと、クレアはエミールの両手を押さえて彼の上に馬乗りになり、彼の目を見詰めたまま淫靡な笑みを浮かべ、自分の唇をゆっくりと舐め回す。クレアの艶やかで長いブロンドの髪が蚊帳（かや）の様にエミールの顔の回りに垂れてくる。その時のエミールには、クレアの顔がまるで怖ろしい魔女の様に見え、言い知れぬ恐怖が彼の胸に沸き起こった。次の瞬間、エミールの顔がのけ反り、その口から声が漏れる。

「あっ！ああっ！」

それを見てクレアは彼の耳元で囁（ささや）く。

「坊や……今度は、私があなたを服従させる番よ……」

この囁きは、エミールには、まるで悪魔の囁きの様に聞こえた。また当然、彼からは見えなかったが、いつもは悲しげな表情を浮かべているクレアの背中に刻まれた『薔薇に囚われし聖女』が、この時は淫靡な笑いを口元に浮かべているかの様に見えた。

シャミナード邸の使用人達の控室は一階の奥、大きなキッチンの隣にある。ここは他の部屋とは違い、木と石がむき出しになった質素な造りで、カーペットもない狭い部屋だった。真ん中に白木で何の変哲もない大きなテーブルがあり、同じ様な飾り気のない実用一辺倒のイスが四脚づつテーブルを挟んで並んでいた。壁にある作りつけの棚には使用人達が使う食器類が並べてあった。

ベルモンドはそのイスに座り、大きめのマグカップでコーヒーを飲んでいた。彼の前のイスには三十台半ばほどのメイド服を着た女が座っていた。彼女は若さのピークは過ぎて疲れた表情だったが、それでも整った顔立ちの美しい女だった。

「ねえ、ベルモンド……今度は『薔薇の乙女』ですって。
いつまで若様の好き勝手にさせておくつもり？
確かに、若様は私たちの御主人様。
その上、あの若さで、亡くなった先代より仕事が出来る。
おかげで私たちのお給料も先代の時より良くなった。
でも、あなたは平気なの？
自分の妻がおもちゃにされたのを知りながら、
あなたは何も言わずに、若様の言うがままになってる」

メイド服の女がベルモンドを睨みながら問い詰める。

「すまない、アドラ……
私だって、妻であるお前をおもちゃにされて平気な訳が無い。
腸（はらわた）が煮えくり返る想いだ。
しかしな、若様は、昔はああ言うお方ではなかった。
普通の明るい子供だった。
若様は見てしまったんだよ、見てはいけない物を。
その日以来、若様は変わってしまわれた。

先代夫妻の葬儀ですら涙一つ見せなかった。
あれは私の責任でもある。
あの時、私が若様から目を離さなければ……」

ベルモンドはテーブルに視線を落したまま答える。

「それで、あなたは自分の妻を差し出したって言うの？
私が若様にどんな目にあわされたか知ってる？
女としての自尊心を根こそぎ奪われる様な辱めを受けたのよ。
それでも若様はあの通り。
いえ、むしろ、酷くなる一方。
それなのにあなたは言われるまま次々と『女』を与えて……」

膝の上で握りしめたアドラの拳が震える。

「クレア様なら……もしあの方が噂通りの方なら……」

そう言ってベルモンドは顔を上げてアドラを見た。

「『今は亡きソフィア姫の生き写し』って噂？」

アドラが怪訝な顔で尋ねる。

「いや、それは表面上の噂だ。
あの方は『癒(いや)しの聖女クレア』って一部の常連客の間では呼ばれている。
何でも、クレア様はお客の傷ついた心も癒すって言う噂がね」

そう答えたベルモンドに、アドラはため息をついて呆れ顔で言った。

「はぁ……娼婦が『聖女』……ばっかじゃないの？
ホント、昔からあんたは真面目過ぎるのよ……
でもさ、そう言う所、嫌いじゃない。
だから、あんな事があっても私、あなたとは別れられない」

そう言うとアドラはイスから立ち上がり、ベルモンドの後ろへ歩いて行く。そして彼の後ろに立つとそっと後ろから抱きしめる。ベルモンドも目を閉じアドラの手を優しく抱いた。

ベッドの上でエミールは放心状態で仰向けになっていた。クレアはその横に座り乱れた髪をかき上げ、大きく深呼吸をすると、放心状態のエミールに話しかける。

「どう？これが『女』の本性よ。
まだ御不満なら、もっと続けてあげようか？」

その言葉にエミールは力なく首を振る。

「じゃあ、私に言う事があるでしょ？
男ならちゃんとそれを言いなさい」

クレアはまるで母親の様にエミールを問い詰める。

「……ご、ごめんなさい……」

消え入りそうな小さな声でそう言った。また、その姿はそれまでとはうって変わり年相応の子供らしさが戻っていた。クレアはエミールを抱き起こして、その顔を自分の胸に抱き寄せて優しく彼の頭を撫でながら尋ねる。

「ねえ、もし良かったら、私に話してみない？
なぜ、あんな事したの？
その歳で『女』に恨みでもあるの？」

「母さんが……優しかった母さんが……」

そう言ってエミールは肩を震わせ嗚咽を漏らし始める。

「今まで、自分一人で抱え込んで来たんでしょ。
大丈夫……私に話して……
言えば楽になる。
安心して、私は何を聞いても、それを他の人には絶対に言わないから」

クレアは自分の頬をエミールの頬に当てて優しく囁く。エミールの目から止めどなく零れる涙が流れてくる。

「あの日見たんだ……母さんが知らない男に抱かれてるのを。
母さんは男の体に跨って、まるで獣の様に浅ましい声を上げてた。
しかもそれは母さんだけじゃなかった。
父さんも、知らない女の人を部屋に連れ込んでいた。
その日から母さんだけじゃなく、この世の女性全部が汚らしい物に見えた。
でも間もなく、そんな母さんと父さんは馬車の事故で一緒に死んでしまった。
一人になった僕は、最初にベルモンドの妻でメイド長の『アドラ』をおもちゃにした。
気の強い彼女をベルモンド共々首にすると脅し屈服させ時にたまらない高揚感を覚えた。

僕を裏切った母さんに復讐出来た気がした。
それから僕は、色々な女性を次々と服従させて行った」

「最低な男ね、坊やは……」

エミールの話を聞いたクレアは彼の耳元で冷たく吐き捨てる様に一言呟く。しかし、その頬は彼の頬から話さず、頭を優しく撫でたままだった。エミールはクレアの胸に顔を付けたまま続けた。

「ホントはいつも心の底で誰かに止めて欲しかった。
でも、誰も僕を止めなかった。
最初にメイド長のアドラをおもちゃにした時も、
心の底では夫のベルモンドに怒って欲しかった。
彼は知ってたはずなんだ、僕が大切な妻のアドラを弄んだ事を。
でもベルモンドは普段のまま何も変わらなかった。
それればかりか、その後、僕の言うがまま次々女を当てがってくれた。
与えられた女はすべて最後には僕に逆らうことなく面白い様に屈服した。
母さんと同じ様に獣の様に快楽を貪る痴態を僕に見せた。
もうすべての『女』を征服できる気になっていた。
そして『最高の娼婦』と言われるクレア、君がやって来た。
君を征服出来れば、この世に征服出来ない女は居ないと思ったんだ。
でも君は僕に逆らい、そして逆に僕を屈服させた。
もう一人前の『男』だと自惚(うぬぼ)れていた僕に、
自分の未熟さと女性の『怖さ』を思い知らせてくれた……」

そう言ってからエミールは一度クレアの頬から顔を離して、恐る恐る彼女の顔を見上げる。

# 第３６話　癒しの聖女

エミールが恐る恐る見上げたその先には、「最低な男ね、坊やは……」と呟いた一言の印象とはまったく違う優しい微笑みを浮かべるクレアの顔があった。

「坊や……あなたを一方的に責める事は出来ないのは分かってる。
でもね、この世は理不尽な事に溢れているの。
辛いのはあなただけじゃない。
それに、坊やだって気がついてたんでしょ。
女たちを力づくで征服しても高揚感があったのは最初だけじゃない？
どんどん空しくなって行っただけでしょ。
女は征服する物じゃない、愛する物なの。
心から愛しいと想って抱けば、必ず抱いた自分の心も癒される」

「お願いっ！クレア！僕に『愛』を教えて！
本当の女性の優しさと素晴らしさを僕に教えて！
こんなお願い、今の僕には身勝手過ぎるって分かってる」

エミールはクレアの言葉を聞いて、彼女の目を見て思わずそう叫んでいた。叫んだ後、恥ずかしそうにうつむいて頬を染めて小さく呟いた。

「でも……クレアとなら……きっと……
だから……一度だけで良いから……」

しばらく目を閉じてじっと考えていたクレアがおもむろに口を開く。

「良いわ……教えてあげる『愛』を……
でも一つ約束をして。
もし、私が教える『愛』で坊やの心が少しでも癒えたなら、
ベルモンドさんとアドラさんに心から謝って、そして償いをして
……」

エミールは涙を流しながらクレアを真剣な目で見詰めて答えた。

「約束するよ……クレア……
必ずベルモンドとアドラに償いをする。
二人に僕がした事は並大抵の事じゃ許されないと分かってる。
だから、例え僕の一生を掛ける事になっても必ず償う」

その答えを聞くとクレアはエミールから離れベッドの上に横たわる。
そしてまるですべてを包み込むかの様な柔らかな微笑みを浮かべ、
エミールに両手を差しのべて甘く囁く。

「坊や……いらっしゃい……」

クロウが腰にバスタオルを巻いた姿で風呂から上がり部屋に戻ると、
ロミは自分のベッドの上にちょこんと座り髪をとかしていた。

「お前さ……あいつが言ってた様に、
そうやって薄い寝間着姿でいると結構色っぽいな」

クロウの言葉に驚いて、ロミはブラシを持ったまま自分の胸を両手
で抱いて怯えた目で彼を見る。

「ク、クロウさん……まさか私を……」

「俺はお前みたいな子供をどうこうする趣味はねぇ、安心しな」

そう言うとクロウは大笑いをしながら、自分のベッドの方へ歩いて行く。ロミは少し安心して、また髪をとかしながらクロウに話しかける。

「クロウさんの体、傷痕がいっぱい。ちょっと、カッコ良いかも…」

そう言ってから、ロミは、自分の言葉にはっとしてクロウを見る。

「なんだ、お前も俺を誘っているのか？」

するとクロウはにやにやしながらロミを見て冗談めかして言うと、ロミの方へ襲いかかる様なふりをする。

「来ないで！変態騎士！」

ロミは手に持ったブラシをクロウに投げ付けて、彼をじっと睨みつける。

「ははははっ！冗談だよ、冗談！
お前と言い、あいつと言い、お前たちからかうと本当に面白いな」

「もうっ！絡むなら姉様だけにして下さいっ！」

ロミは、可愛く頬を膨らませる。そんなロミを見て、クロウはまたひとしきり大笑いした後、急に真顔になり小声で呟く。

「あいつ……今頃……なんでだよ……」

そんなクロウを、ロミは一瞬だけ無表情になり両方の瞳をオレンジ色に光らせてちらりと盗み見した。

ベッドの上で横になるクレアに、エミールはまるで小さな子供の様な安らかな顔でしがみついていた。そして、甘えるように彼女の頬を撫でながら囁く。

「クレア……大好きだよ……。
ねぇ、帰らないで、僕と一緒にずっとここに居て……」

クレアも愛(いと)おしそうにエミールを抱き、優しく頭を撫でていた。

「ありがとう……でも……それは出来ない」

エミールは顔を上げてすがる様な目でクレアを見る。

「じゃあ、僕が指名したらまた来てくれる?」

そう言ったエミールにクレアは何故か、彼の頭を撫でていた手を離し、突然、冷たい表情になる。

「嫌よ……もう二度と来ない……」

エミールの顔がどうしようもない悲しみに曇る。そんなエミールを無視するかの様に冷たい表情のままクレアは続ける。

「例え、坊やが大金積んで指名してきても私は拒否する」

深い絶望と悔恨がエミールの小さな胸を襲う。彼の目から涙が零れてくる。やがてそれはシーツの上にぽたぽたと落ちて染みを広げて行く。エミールのその姿をじっと見ていたクレアの表情がゆっくりと和らいでくる。

「でもね、坊や……
相手が『薔薇の乙女』でない、ただの女としての『クレア』で良いなら、
私のお休みの日、私の機嫌が良ければ会ってあげても良い。
ただし、会うのは陽が落ちるまで、当然、ベッドの上はなし。
ちゃんとお陽様が降り注ぐ昼間に遊園地やお花畑のデートって条件ならね。
もちろん、それならタダよ！仕事じゃなく私が会いたくて会うんだから！」

そう言ってクレアはにっこり笑ってウインクする。それを聞いてエミールの表情がぱっと明るくなる。そして喜びの余り小さな子供の様にわんわんと泣きじゃくりながらクレアにまたしがみついて叫ぶ。

「もうっ！クレアの意地悪っ！」

そう叫んだエミールの頭をクレアは再び抱きしめ、愛おしそうにまた撫で始める。

「ふふふふっ、エミール、女ってね、みんな『意地悪』なの。
その位、見抜けない様じゃ、
私に『男』として認めさせるのはまだまだ先ね」

クレアの胸の間に顔を埋めながらエミールは小さな声で囁いた。

「子供で良いよ……クレアにまた会えるのなら子供のままで良い。
もう良いんだ……背伸びして生きるのには疲れたから……」

「そう……良かった……坊やがそう言ってくれて……」

クレアはエミールのその囁きを聞いて、満足げに天井を見上げながら呟いた。

翌日の昼前、朝食を済ませ、身支度を整えたクレア達三人はシャミナード邸の玄関ホールに居た。そこにはメイド長のアドラを筆頭にメイド達、執事長のベルモンドを筆頭に男の使用人達が左右に分かれて並んでいた。クレアにベルモンドの横に立っていたエミールが掛け寄る。

「クレア、もう帰っちゃうの？
もっとゆっくりして行けば良いのに……」

寂しそうに、そして少し不満げにエミールがクレアに小さな声で囁く。

「ありがとう……でも私も次の仕事があるから」

その言葉にエミールはいたずらっ子の様なきらきらした笑顔で言った。

「それじゃ、クレアを僕のお嫁さんにしてあげる！
そうすれば、ずっと一緒に居られるよ！」

クレアは思わず少し目を潤ませエミールを抱きしめる。

「エミールが大人になっても、
その気持ちが変わらなければ考えてあげるわ……」

エミールはクレアの顔を見上げて、自分のポケットから金時計を取りだすとクレアに見せる。

「これ……僕の宝物なんだ。
クレアにあげる。
クレアが僕の事忘れない様に……」

そう言って少し頬を染める。クレアはエミールから手を離し、その金時計を大事そうに両手で受け取ると自分のポケットに仕舞いにっこりと笑う。

「じゃあ、チップとして頂いておくわ。
大事に使わせてもらうね、エミール。
それから、これは、私からのお返し……」

そう言って、クレアはエミールの体を抱いてキスをする。少し長いキスの後、エミールの耳元でクレアは小声で囁く。

「あの約束、忘れないでね……」

「うん、約束は必ず守る。僕を信じて……」

エミールもクレアの耳元でそっと、でもはっきりと答える。そんな二人の姿を見て、ベルモンドとアドラはホールの両端からお互いの顔を驚いた表情で見合わせた。

クレア達三人を乗せた馬車が、エミールやベルモンド、アドラ達に見送られて出発すると、クレアは向かいに座るクロウの様子が何かおかしい事に気がついて彼に声を掛ける。

「クロウ、どうしたの？
行きはあれほど私に絡んで来たのに、
今度は押し黙って……」

クロウはぶすっとした表情で窓の外を見ながら独り言の様に小声で呟く。

「あんなガキとまるで恋人の様に……
しかも使用人達の見てる前で熱いキスなんかして……」

その言葉を聞いてクレアが大笑いを始める。そして、お腹を押さえて、必死に笑いをこらえながら言った。

「クロウひょっとして、あなた、エミールに嫉妬してるの？」

「ば、馬鹿言うな！お前が誰とキスしようが寝ようが俺には関係ない！
しかも、あんな子供相手に俺様が嫉妬などするか！」

クロウは、慌ててクレアの方を向いて彼女に喰ってかかる。

「昨夜もクロウさん、ずっと姉様の事が気になって仕方ない様でしたよ」

ロミが窓の外を見ながらぽつりと呟く。

「うわっ！ロミ、お前！それを言うか！
畜生！今度は、本当に襲うぞ！手籠めにするぞ、ロミ！」

思わずそう叫んだクロウを、クレアとロミは冷たい目で見ながら二人同時に叫んだ。

「変態！！」

# 第37話　知らずとも良い事

それから、また一ヶ月ほど経った昼下がり、クレアはシンシアの仕事部屋に呼ばれた。いつもの様に部屋の中央の重厚なテーブルを挟んでクレアとシンシアは向かい合って座り、二人の前には紅茶の入ったティーカップが置かれ、テーブルの真ん中にはティーポットとクッキーが盛られた皿が置かれていた。

シンシアが紅茶のカップを手に持ち、一口啜ってからクレアの顔を覗き込む様にして尋ねる。

「クレア、あなた、明日の休みは『シャミナード伯爵』とデートですって？」

「そうよ、いけなかったかしら？」

クレアは素知らぬ顔でクッキーに手を伸ばして答える。

「別に、休みの日にあなたが何しようが文句は無いけど……ボンフィス卿が居るからあなたは当然年上好みと思っていたのよ。それが、ああ言う年下でも良いのね……あなた守備範囲が広いんだ」

そう言って、シンシアはテーブルの上の煙草盆の上に置かれたパイプを手に取りその先に煙草を刺す。

「あの子は……エミールは別に『彼氏』とかじゃないわ」

クレアはじろりとシンシアを見てぶっきらぼうに答える。シンシア

はパイプを咥えると煙草の先に火を点け、一口大きく煙を吸ってゆっくり吐き出す。

「まあ、実はね、あなたがシャミナード伯爵のお相手をしてしばらくしたら、
あの伯爵に関して面白い話を聞いたからさ……」

「面白い話って？」

紅茶のカップを手に持ち、ゆっくりと啜りながらクレアが尋ねる。
クレアを見ながらシンシアが煙草をゆったり吹かしながら話し始める。

「あの、歳からすると大人びて、
仕事は出来るけど可愛げのない子供と評判だった伯爵が、
突然、年相応の可愛い子供になったって話。
しかも、どう言う風の吹きまわしか、
今まで一人で切り盛りしていた、彼が所有する穀物問屋とワイン工場の権利を、
『執事長ベルモンド』と『メイド長アドラ』の二人に半分譲り渡した上、
経営も最近じゃベルモンドに、ほとんど任せっきりだって言うじゃないか。
さらに貴族の場合十五歳までは、、
両親が共に死亡している場合は必ず『後見人』が必要って法があるのに、
頑(かたく)なにそれを拒んで一人で仕事も屋敷も切り盛りしていた伯爵が、
あのベルモンドとアドラを自分の『後見人』として申請したそうなんだ」

「へぇー、そうなんだ……
私にとっては、初めて会った時から可愛い坊やでしかないけどね」

クレアはシンシアの話に興味なさそうな顔で答える。目を閉じて紅茶を啜るクレアの表情を探る様に見ながらシンシアは続ける。

「最近じゃ、ティボーシアの街を伯爵がベルモンドとアドラを連れて、
買い物する姿も良く見られるんだと……
今までは買い物なんぞは使用人に任せて滅多に街に出る事なんかなかったのにさ。
実際に見た者の話じゃ、
ベルモンドとアドラと三人で楽しそうに話しながら歩く姿は、
まるで親子連れみたいだったそうな。
以前の伯爵を知ってる私からすると想像も出来ないよ……」

その頃、春の暖かな陽射しが降り注ぐシャミナード邸の裏庭を一望出来るバルコニーでは丸テーブルを囲み、エミールとベルモンド、アドラが仲睦まじくお茶を楽しんでいた。シャミナード邸の裏庭は、名前こそ『裏庭』であるが、けっして質素とか暗い雰囲気はなく、この時期に関して言えば、何種類もの色とりどりの花が咲き乱れそれは華やかで美しかった。特にこのシャミナード邸は、周囲を森に囲まれている為に、静かで背景に無粋な建物等が無い事も美点の一つだった。

エミールは旬のイチゴが山の様に乗ったタルトを手づかみで食べていた。手や口の回りをクリームで汚しながら食べるその姿は、年相応の腕白（わんぱく）な少年その物だった。

「アドラ、このタルト美味しいよ！
ベルモンドも、もっと食べなよ！」

嬉しそうにはしゃくエミールの口元をアドラが呆れ顔でナプキンで拭いてやる。

「若様、ちゃんとナイフとフォークを使って下さいな」

「だって、そんなのまどろっこしいんだもん！」

まるで母と息子の様な二人の姿を、ベルモンドは紅茶を飲みながら優しい眼差しで見ていた。

「そうだ、アドラ！
明日、クレアとデートなんだ。
何処へ行くのが良いと思う？」

エミールが、アドラの方へ身を乗り出して尋ねる。

「そうですねぇ……今の季節ならやはりお花でしょうか？
少し遠いですが、首都シゼルカンドの植物園も良いですし、
シムルード川沿いのトリドール並木も良いですよ」

アドラは宙に視線を泳がせ考える素振りをしながら答える。

「花と言えば、このお屋敷の庭の花も綺麗じゃないか？
ここから見るお庭は、下手な公園や植物園よりよっぽど綺麗だ。
いっその事、クレア様にここに来ていただいてはどうだろう。
そしてお昼を一緒に食べながらお庭の散策なんて良いと思うが」

今まで黙って、エミールとアドラを見ていたベルモンドが口を開いた。

「ここにクレアが来てもらうのが僕は一番嬉しいけど……
来てくれるかな？ここじゃクレア、嫌がらないかな？」

エミールは少し心配そうな顔で、ベルモンドとアドラを交互に見て尋ねる。

「若様が、ちゃんと説明すればクレア様も分かって下さいますよ。
そうそう、もしクレア様がここへおいでになっても、
若様のお部屋へ行ってはダメですよ、誤解されますから……」

アドラが小声でエミールにそう言うと、彼はちょっと大人びた表情を浮かべて答える。

「分かってるよ、アドラ。
もう昔の僕じゃないから……」

そう言ってから、また明るい子供らしい顔に戻ってアドラに尋ねる。

「ねぇ、アドラ……
クレアを迎えに行く時にプレゼント渡したいんだけど何が良いかな？」

アドラは席から立ち上がり、ティーポットを持って空になっていたエミールのカップにお茶を注ぎながら答えた。

「やはり、『お花』が良いと思いますよ。
女はいくつになっても『お花』を男性からもらうと、ときめくも

のです」

「じゃあ、馬車一杯に花を詰めてクレアを迎えに行かせよう！」

一人はしゃいでそう言ったエミールは、アドラがやや寂しそうな表情になっているのに気がついて、彼女の顔を覗き込みながら小声で尋ねた。

「アドラ……どうしたの？
僕、何か悪い事言った？」

「若様……クレア様の事になると夢中ですね。
私の様な女でも『嫉妬』はするのですよ」

アドラは、小声で呟く様に答えた。

「……ごめん、アドラ。
僕は今でも君のことが大好きだよ。
あの時だって、大好きだからこそ……つい……」

エミールが慌ててアドラの顔を見て真面目な顔でそう言った時、ベルモンドがわざとらしく咳払いをする。

「若様、アドラ……私だって男だ。
妻と若い『男』が妖しげな会話をすれば、
私の様な男だって『嫉妬』くらいします……」

そう言ってベルモンドはぷいっと横を向くと明らかに不機嫌な顔になる。エミールとアドラはお互いの顔を見合わせ「しまった」と言う表情になり、慌ててベルモンドの傍に駆け寄る。そして、アドラ

は彼の体を後ろから抱きしめ、エミールは前から手を握ってそれぞれ叫んだ。

「あなた、ごめんなさい！私の一番はいつだって『あなた』よ！信じて！」

「ベルモンド、今の僕にとってアドラは大事な『お姉さん』であって、
もう、『恋人』じゃないよ！そんな気はないってば！」

そして、二人声を合わせて、大声で叫ぶ。

「だから、お願い！機嫌を直して！」

一方、クレアとシンシアの方は、ティーポッドの紅茶も空になり、話も終わりかかっていた。

「シンシア、そろそろ良いかしら？
ロミとカードで遊ぶ約束してるの」

煙草を吹かしているシンシアにクレアがそう言うと、シンシアは手に持ったパイプの先の煙草を灰皿でもみ消しながら答えた。

「ええ……大した用でもなく呼び出して悪かったね、クレア。
たまには、あなたとこうして二人きりで話たかったしさ」

その言葉を聞いてクレアが腰を上げ扉の方へ歩き出すとシンシアが思い出した様に続けた。

「そうそう、伯爵の御両親が亡くなった事故の事だけどさ、一般的には夜の山道で馬車ごと転落したって事になってるよね。まあ、大筋その通りで間違いないんだけど……ちょっと気になる話を小耳に挟んだんだ。事故の後、馬車の残骸を片付けた男が、『馬車の車軸が変な折れ方してる』って不思議がってたとか……」

クレアの足が一瞬止まり、シンシアを振り返らず扉を開けながら言った。

「『世の中には知らずとも良い事』ってあるのよ、シンシア……」

「そうね……私らの商売だって『嘘』で塗り固められた世界だしさ」

結局、クレアは最後まで振り返ることなく彼女の仕事部屋を出て行った。クレアが出て行くとにやりと笑ってシンシアが一言呟く。

「クレア、あなた自身が『嘘を纏(まと)わされた女』だものね……」

## 第３８話　嵐の中の三人

薄い屋根に叩きつけられる滝の様な雨音と木々の間を抜けて泣き叫ぶ様な風音で馬車の中は会話が出来ないほどだった。時折、強い風に馬車全体が揺すられている。合羽（かっぱ）を着た御者が共すれば風に流されそうになる馬車を必死に操る。まるで夜の様に黒い空に、時折、稲光が走り一瞬馬車の中を明るく照らす。

クレアは、目を固く閉じ怖さくてがたがた震えるロミの小さな体を優しく抱いて座っている。向かいの席に座るカサドは心配そうに窓の外を見ている。

「クレア様、この雨と風では『館』まで帰るのは危険かもしれません。
　確かもう少し行くと小さな村があるので、そこで雨風が治まるまで少し休みましょう」

カサドは努めて明るい笑顔を作り、クレアに顔を近づけて話しかける。

「そうですね、無理しない方が良いでしょう。
あなたの判断に任せますよ、カサド」

クレアはロミの体を抱いたままカサドの目を見て雨音にかき消されない様に大声で答えた。その答えを聞いてカサドは自分の座る横に置いたマントをクレアに差し出しながら言った。

「では御者にその様に指示します。私の後ろの窓を少し開けますので、

雨が降り込んでクレア様が濡れてしまうかもしれません。
汚いマントで申し訳ありませんが、しばし、これを頭から被っていて下さい」

カサドのマントを受け取ったクレアは片手でロミを抱いたまま、マントを頭から被る。その瞬間、雨音と風音が和らぎ少しだけ平穏な空間が現れる。同時に仕事柄嗅ぎ慣れた『男』独特の匂いがクレアの鼻腔の奥をくすぐる。城での屈辱の日々では、常に吐き気を催すだけの嫌悪感と共にあったその匂い。『館』で仕事をする様になって、その意識が少し変わった。基本的に同じ匂いであるはずのティエリーの『それ』は嫌悪感でなく、守られている様な安心感があった。白状するとティエリー以外にもそう感じた『男』が彼女には数人居る。一緒に居て心地よい男達。クレアがまだ『姫』であった頃には考えられない感情だった。そんな『特別な男』は常に一人だけと信じ込んでいた。あの時の彼女なら『ミロク』ただ一人。

（そっか……カサドも『男』だったんだよね。
今まで彼の事、『男』としてあまり意識した事はなかったなぁ。
でも、彼の匂い……嫌いじゃない）

ぼんやりとそんな事を考えていた彼女の耳にロミの声が飛び込んできた。

「クレア姉様……私、怖い……」

先ほどまで怖さで目を固く閉ざしていたロミがマントのおかげで音が静まり少し安心したのか目を開けてクレアを見上げていた。

「大丈夫よ、ロミ。
この先の村で雨風が静まるまで休む事にしたから……」

クレアの言葉にロミが口元に少し笑顔を浮かべて頷く。クレアは少し強めにロミの体を抱きしめてやると、ロミも小さな手を彼女の背中に回してぎゅっとしがみついて来た。

「クレア様、もうよろしいですよ！」

マントの外からカサドの声がした。クレアは彼のマントを頭から取って回りを見回すと、やはりこれだけ酷い雨と風、カサドの後ろの小さな窓を開けて御者と話しただけで、車内は結構雨に降り込まれて濡れていた。カサドのマントも前方に位置した部分は水をかけられた様に濡れて水滴が少し滴る程だった。しかし、マントを被っていたおかげでクレアもロミも、マントから出ていた靴先がほんの少し濡れただけで済んだ。

「ありがとう、カサド」

マントを返しながらクレアは笑顔でカサドに言った。

「御者にもこの先の村で馬車を停める様に指示しました。
村についたら、どこか落ち着いて休める場所を探します」

……とその瞬間だった。

クレアは体が急に真横から引っ張られる様な異様な感覚を覚えた。思わず、片手でロミの体を今一度しっかり抱き寄せ、もう一方の手で彼女の頭を自分の胸に押し当て、自分も身を丸めて全身でロミの体を包み込む。同時に彼女自身も何者かに抱きしめられる感覚がした。

すると次の瞬間、上下の感覚が消失した。体が宙に浮かんだ気がした。同時に雨音や風音とは明らかに違う轟音が耳を襲う。一度は宙に浮かんだ体が馬車の屋根か何かに叩きつけられる感覚がした。クレアは目を固く閉じ歯を食いしばる。その後、体が宙に浮かんだり何かに叩きつけられるのを繰り返された気がした。ただ、彼女の体はその間も何者かにしっかり抱きかかえられ、痛みなどはあまり感じなかった。最後に強い衝撃を覚えクレアは意識を失った。

顔に水を掛けられている感覚を覚え、クレアは意識を取り戻した。最初に感じたのはまるで水の中に服のまま飛び込んだ様な全身びしょ濡れの嫌な感覚だった。きちんと結ってあったはずの彼女の長いブロンドの髪は解けて水を含み顔や体に張り付いていた。顔を流れる水で目が開けられず回りがどうなっているのかは分からなかった。ただ、少し頭がふらふらしてはいたが、手足の感覚はしっかりあり、多少の擦り傷程度はある様だが酷い怪我や痛みはない様だった。しかも、自分の腕の中にはロミの体がちゃんとある事だけは分かった。

「ロミ！大丈夫？」

クレアは体を起こし、腕の中のロミに叫ぶ。

「……うっ……あっ！クレア姉様！」

ロミの目がゆっくり開き、金と銀の瞳がクレアを見る。

「良かった……ロミ、どこか体は痛くない？」

「はい、私は大丈夫です……姉様こそ大丈夫ですか？」

心配げに尋ねたクレアに、逆にロミが聞き返す。

「私も大丈夫よ」

クレアはにっこり笑って答えると、ロミは嬉しそうに彼女の体にしがみ付いた。

二人が顔を流れる雨水を両手で拭(ぬぐ)って落ち着いて回りを見回すと、そこには信じられない光景が広がっていた。二人の居る場所から少し離れた所に原形を留めぬほどに壊れた馬車の残骸があり、その細かな破片が周囲に広く散らばっていた。

「カサド？！」

クレアは思わず叫んだ。そう、ロミを抱きしめた自分の体を最後の最後まで抱きしめて守ってくれていたのは間違いなくカサドだったはず。しかし、そのカサドの姿が傍にない。クレアは必死に目を凝らして周囲を探す。幸い、この天気で暗いとは言えまだ日中、クレア達の居る場所から少し離れた所に仰向けに倒れているカサドの姿を程なく見つける事が出来た。クレアが立ち上がりカサドの所へ駆け寄ると、ロミもその後に続いた。

クレアはカサドのすぐ横に座り彼の体を抱き起こし叫んだ。

「カサド！しっかりしなさい！」

「……ううっ……あっ……姫様……」

カサドはゆっくりと目を開き、クレアの顔をぼんやりと見詰める。
カサドが口にした『姫様』と言う言葉に驚き、クレアは思わずロミの表情を盗見したが、ロミは彼女と同じ様にカサドの傍に座って彼の顔を心配そうに見ているだけで、その言葉を特に不審がる事もなさそうなのを確認してクレアは少し安心した。考えてみれば、この非常時、しかも雨と風と、しかも川が近いのか水の流れる轟音で細かい言葉など気にしている余裕などなかったはずだった。

しかし、その時、クレアは彼の背中に回した自分の腕に異様な感覚を覚えた。雨に打たれてずぶ濡れになり全身を冷たい雨水が流れて居るはずなのにカサドの背中に回した腕に暖かなお湯が注がれている感じがしたのだ。

（まさか、これって！）

そう思ったクレアはカサドの体を抱き寄せ、彼の肩越しに背中を見た瞬間、言葉を失った。カサドの背中は服が大きく避け、その下の皮膚が大きく切り裂かれて血が流れ出ていた。腕の中のカサドが顔を上げてクレアを見て尋ねる。

「姫様……あっ……いや……クレア様、お怪我はありませんか？」

「馬鹿者！今はしゃべるな！人の心配するより、自分の心配をしろ！」

クレアはカサドに向かって叫ぶ。そして傍らに座るロミを見て言った。

「ロミ、どこかに雨風を凌げる場所はないだろうか？
とにかく、落ち着いてカサドの状態を確かめたい。

それと御者も心配だ。」

「分かりました、姉様、周囲を少し探してみます。
しばらくお待ちを……」

そう言って、ロミは立ち上がる。

「悪いな。私も一緒に行ってやりたいがカサドが心配なんだ。
彼を一人にしておく事は今は出来ない。
くれぐれも無理するなよロミ。」

立ち上がったロミにクレアが声を掛ける。

「はい、姉様……」

そう笑顔で答えてロミは駆け出して行った。

しばらくして、ロミは肩にクレアの出張用バックを掛け、片手にカサドのマントと御者用の合羽（かっぱ）を持って帰って来た。

「あちらのがけ下にちょうど良い洞窟がありました。
残念ながら、御者さんの姿は見つかりませんでした……
それから姉様のバックとカサドさんのマント、予備の御者用の合羽も見つけて来ました。
これでとりあえず雨を凌ぎながら、洞窟に避難しましょう」

ロミはそう言ってから、地面に座ってカサドを抱いているクレアの頭から彼のマントを掛け、自分は御者用の合羽を羽織る。

「そうだな、ロミ悪いがお前も手を貸してくれ。

御者はここに居なければ下に馬車が落ちる前に、
上の道に投げ出されたんだろう……そう信じよう……」

クレアはロミの手を借りてカサドを立たせると、冷たい雨と風の中、三人寄り添う様にして少しふらつきながらロミの見つけた洞窟へ歩いて行った。

# 第３９話　娼婦と少女の温もり

ロミの見つけた洞窟の出入り口はクレア達三人が立って入れる程の高さと幅があり、奥へ行くほどやや広がっている感じがした。また奥行きも十五メートルほどは十分にあり、一番奥に居れば雨風の心配はまったくないほどだった。

三人は一番奥まで入って、カサドの上半身を裸にしてからうつ伏せに寝かせる。その後、クレアはロミが見つけて来た出張用のバッグを探り、暗い所で化粧を直す為に入れてある小型の簡易ランプを取りだした。幸い簡易ランプは外見上は壊れていない様だった。ランプの胴を倒して、芯を覆うキャップを外す。そして、カバンをもう一度探りマッチを取り出すと、少し湿っている感じがあった。クレアが祈る様な気持で箱からマッチを一本取り出し傍らの乾いた石の表面に勢い良く擦りつけと、その瞬間ぱっと洞窟の中が明るくなる。彼女はそのままマッチの火をランプの芯に移しランプの胴を元に戻しマッチの火を吹き消す。最初はやや不安定だったランプの炎も芯の高さ変えるノブを調整すると安定して、オレンジ色の光が洞窟の奥に広がった。

「良かった……ランプが使えて……」

ランプに火が灯るのを見てクレアが安心した表情で呟く。元々暗い場所での化粧直し用で広い場所を照らすには役不足ではあったが、それでも温かみのある明かりは、クレアとロミの恐怖と心細さでかじかんだ心も温めてくれる様だった。

明かりが灯って少し安堵したクレアは、次にバックからタオルを出し、カサドの背中の血を拭い傷の程度を見極めようとする。

「うっ……ううっ……」

カサドが痛みに顔を歪めてうめき声を上げる。

「すまん、カサド、痛いか？しかし、ちょっと辛抱してくれ」

血を拭ってみると、カサドの傷は思ったより深く大きい物だった。しかも、傷口に食い込むように木やガラスの破片も突き刺さっていた。

「カサド、まず背中に刺さってる破片を取り除くぞ」

「クレア様……どうかお手柔らかに……」

クレアがカサドの顔を見てそう言うと、彼は無理して笑顔を作り少しおどけた様に答える。クレアはバックの中から小型の救急セットを取りだすと、その中にあったピンセットを探し、ランプの胴を倒しピンセットの先をランプの炎にかざして消毒する。

「ロミ、悪いがランプをカサドの背中に近づけてくれ」

クレアの指示に従ってロミが簡易ランプの胴を戻してから取っ手を持って、カサドの傷口近くにかざす。一度タオルで血を拭った傷口からはまた血が溢れ出していた。クレアは傷口に顔を近づけて、左手にタオルを持って血を拭いながら、右手に持ったピンセットで丁寧にカサドの傷口の破片を取り除いて行く。

「カサド、傷が深くて大きい。
出血も止めたいので、少々荒っぽいがここで縫うぞ」

カサドの傷の深さと大きさ、出血の仕方をしばらく診ていたクレアが意を決して彼に言う。

「ははははっ……マジですか？クレア様、医者の心得は？」

「安心しろ、職業柄、お上からのお達しで基礎程度はある。国家公認の娼婦ってのは戦時には看護師代わりに駆り出されるので、医者の真似ごとぐらいは出来るように求められてるんだ」

クレアは、カバンから裁縫セットやら、追加のタオルやらを出して、手元に手際よく並べて行きながら心配げに尋ねたカサドに答える。彼女は裁縫セットから縫い針を取り出し糸を通してから、ロミの持っているランプの胴を傾けて針先を炎で炙り消毒する。

「酒でもあれば飲ませて痛みを和らげてやりたいが……すまないが、このタオルを噛みしめて耐えてくれ」

そう言って、クレアはカサドの口元にタオルを丸めて差し出す。

「クレア様……なるべく早くお願いしまね。出来れば……少しでも痛くない様に……」

そう言って、カサドはクレアに差し出されたタオルを咥え、両手を顔の下でぐっと握りしめる。

「ロミ、ランプをもっと傍に……」

クレアが糸を通した針をカサドの傷口に近づけて言った。

「では、カサド……行くぞ！」

クレアの手に持った針がカサドの皮膚に刺さると、カサドの体がぴくりと硬直しタオルを噛んだ口から苦しそうなうめき声が漏れる。ロミはランプでクレアの手元を照らしながら、思わずカサドから目を背ける。

傷口の縫合が終わると、クレアとロミはカサドの脱がせたシャツなどを細く切り裂き包帯状の物を作り、それをカサドの体に巻いて縫い終わった傷口に当てたタオルを固定する。それから御者用の合羽を地面に敷いてから、バッグに入っていた下着の換えや残ったタオルなどをかき集めて並べると、その上にそっとカサドをうつ伏せに寝かせる。クレアはバッグに入っていた綺麗なハンカチを取り出し、カサドの額の汗を拭いてやりがら彼に優しく語りかける。

「痛かったか？とりあえず傷口は塞いだからな。
本当なら傷口の消毒などをしてやりたいんだが薬はもちろん、代わりになる酒もなくてな」

「思ったより痛かったですよ……
でもクレア様に縫ってもらった傷痕なんて男ならちょっと自慢になります」

カサドは笑ってそう答える。

「多少濡れてはいますが、無いより良いと思います」

ロミはそう言って、カサドのマントを体に掛けてやる。ロミはその

後、洞窟の壁にもたれてタオルで手に付いた血を拭っていたクレアの横に寄り添う様に座った。

「クレア姉様……助けは来るんでしょうか？」

ロミが心配そうにクレアの体にしがみ付く。そんなロミをクレアはそっと抱きしめてやる。

「雨と風がおさまればきっと助けは来るさ。
崖下には御者の姿が無かったんだから彼は道に投げ出されたはず。
生きていて動ければ助けを呼びに行ってると思う。
心配するな、ロミ。きっと助かるよ。
それより、今は少し眠ろう……私も疲れた」

「はい……姉様」

ロミはそう答えてクレアにしがみ付いたまま目を閉じる。

「カサド、お前も眠れるようなら寝ておけよ……」

クレアはカサドの方にも声を掛ける。

「縫って頂いたおかげで痛みが少し治まった感じです。
私も少し眠らさせて頂きますよ……」

カサドもそう言って目を閉じる。二人が目を閉ざしたの見てクレアはランプの火を消してから、ロミを抱いたまま目を閉じる。慣れない医者の真似ごとをして神経が疲れていたのもあり、クレアはすぐに眠りに落ちて行った。

「うっ……寒い……寒い……」

カサドの口からうわごとの様な言葉が漏れていた。その声にクレアが気付き目を覚ます。洞窟内は真っ暗になっていた。入口の方がすっかり暗くなっている所を見るとどうやら陽はすでに落ちて夜になっている様だった。雨と風がその音からするとまだおさまる気配はなさそうに思えた。クレアは手探りでマッチの小箱を探し当てると、箱から一本取り出し手の感触で探し当てた乾いた石で擦ると、ぱっと洞窟内が明るくなる。マッチが燃え尽きる前に急いでランプの芯に火を移す。その間にロミも目を覚ましクレアに尋ねる。

「姉様、どうかしましたか？」

「カサドの様子がおかしい……」

クレアはランプの芯をノブで調整しながらそう答えると、ランプを持ってカサドの寝ている方へ歩いて行く。カサドの傍らに座るとクレアはそっと横になっているカサドに声を掛けた。

「どうした、カサド？寒いのか？」

「はい……何だか無性に寒くて……」

クレアはランプをカサドの顔にかざすと、彼の顎が震え歯がかたかた鳴っているのが分かった。彼女はすぐにランプをカサドの頭の横に置くと、自分の掌を彼の首筋から胸に滑らせる。カサドの体温は明らかに下がっていて、全身に震えが来ていた。

（これは……まずい！失血の為、体温が下がってる！

早く、体を温めてやらねば！
しかし、この雨、落ち葉も馬車の残骸も濡れて焚き木も出来ない……）

少しの間考えていたクレアは決心をする。こうなっては方法はただ一つしか残っていなかった。クレアは立ち上がるとカサドの湿ったズボンを脱がせてから、自分もドレスの胸元の紐をほどき始める。それを見たロミが驚いて声を上げる。

「クレア姉様、一体何を！ま、まさか気でも……」

胸元の紐をほどきドレスを足元に落としながらクレアはロミを笑いながら見て答える。

「私は正気だよ、ロミ。
カサドの体を温めてやるんだ。
薪で暖を取れない以上、私の体で温めてやるしか方法がないからね」

クレアの言葉を聞いて、ロミも自分のメイド服を脱ぎ始める。

「ロミ！お前は付き合わなくても良いって……」

思わずクレアはロミを止めようとする。

「姉様一人より、私も入った方がより温まります。
それに三人で寄り添った方が気持ちも温かくなりますよ」

そう言ってロミは笑顔を見せる。

「それもそうだな……」

二人は下着まで脱いで、雨に湿ったマントの中で震えながらうつ伏せになっているカサドの両脇から中に潜り込み体を密着させる。今まで寒さに震えていたカサドは言い様もない心地よい柔らかさと温かさに包まれるのを感じた。クレアとロミは頬をカサドの背中に当てて目を閉じる。

「カサド……お前、幸せ者だな、私とロミにこんな風に温めてもらって。」

クレアがそっと囁くと、カサドも小声で答えた。

「私は、今なら死んでも良いって思います……まるで天国に居る気分です」

# 第４０話　嵐の夜を越えて

三人は心地よい温もりの中でまどろんでいた。いつの間にか雨も風も止み、寄り添って眠る三人の所まで、洞窟の入り口から柔らかな朝日が届きはじめていた。

「カサド……『娼婦』にまで身を堕した私では嫌か？」

湿気を含んだマントの中、自分の体にぴったり身を寄せるクレアが悲しそうな目で見ていた。カサドは思わず首を激しく振って叫んでいた。

「とんでもない、姫様！
私は、近衛兵としてお城に上がって、姫様を一目見た時から、ずっと心の中でお慕い申し上げておりました。
その気持ちはこれっぽちも変わりません！
姫様が娼婦にまで身を堕したのは、元はと言えば私の不徳の致す所、
私は、その償いの為、一生姫様のお傍でお守りいたします、この命に代えても」

「嬉しい……カサド……こんな私で良ければ……」

クレアが目をそっと閉ざしその身を彼に預ける。今まさに長年の夢が叶う、そう考えただけでカサドの心は天まで上って行く様だった。

「姫様！心からお慕い申し上げております」

そう囁いてカサドはクレアの体を抱きしめた。

「カサド！」

クレアもそう叫んでしがみ付いて来た。彼女の柔らかい両胸の何とも言えない感覚が自分の肌にある。思わず片手でクレアの体を抱いたまま、もう一方の掌（てのひら）でその柔らかな膨らみを包み込んだ。

「カサド！起きろ！カサド！」

クレアは自分の体を片手でしっかり抱きしめ、その上、もう片手の掌（てのひら）で裸の胸を軽く握っているカサドに戸惑いながら声を掛けていた。眠っているとは言え男の力、抱きしめる腕から逃れられず、胸を掴む手も無理に外そうとすると余計に力が入って指先が胸に食い込んでしまう。

「……姫様……？」

うわごとの様にそう呟いてカサドの瞼（まぶた）がゆっくりと開く。彼は目の前にあるクレアの顔が先ほどまでのとろける様な甘い表情ではなく戸惑った顔になっているのに一瞬不審を抱いたが、すぐに事態を把握する。

（夢を見ていた！）

瞼が開きうつろな目になっていたカサドが、すぐに正気の目に戻るのを確認してクレアは言った。

「起きたか、カサド、微かに人の声がする様なんだ……」

「えっ！人の声！助けでしょうか？」

「たぶんな……悪いが誰か来る前に私の胸から手を離してくれないか？」

クレアは苦笑いを浮かべながらカサドに小声で囁く。その言葉にカサドは、自分がまだクレアの胸を掴んだままなのに気が付き顔を真っ赤にして慌てて手を離す。

「こ、これは失礼しました……」

「気にするな……ロミに見られなくて良かった……」

とクレアはそこまで言って言葉が急に止まると同時に一瞬表情が凍りつく。カサドもクレアの異変に気が付き、思わず後ろを振り返る。そこに目を丸くして二人を見ているロミがいた。

「カサドさん……姉様の胸を……」

ロミがぼそりと呟く。

「違うんだ！ロミちゃん！これは誤解なんだ！」

「そうだ！ロミ！変な事は考えるな！」

カサドとクレアは慌てて、ロミに言い訳がましく叫ぶ。

「……いえ……お二人ともお気になさらずに……

私、口は固い方ですから……

あっ……そっか……
ごめんなさい……もう少し、寝たフリしてれば良かったですね。
私ったら……気が利かなくて……」

ロミは頬を染めて、視線を二人から逸らせて小声で言った。

「違うよ、本当に誤解だよ、ロミちゃん！
クレア様相手に、私が『そんな気』を起こす訳ないじゃないか！」

カサドがロミに必死の形相で弁解すると、今度はクレアの表情が急に険しくなる。

「ちょっと待てカサド……
その言い方だと、お前にとって私はこんな状況下でも、
『その気』にならないほど魅力の無い女って事か？
では私の胸を揉んだのは誰か他の女を想っての事か？」

「……あっ！違います！もちろんクレア様の事を想って胸を……」

クレアの言葉に慌てたカサドはそこまで言って言葉を止めて顔を真っ赤にする。

「カサドさん……なんか可愛い！」

「ふっ……カサド……お前、本当に人が良過ぎる位良いんだな！」

顔を赤くしておろおろするカサドを見てロミとクレアは声を出して笑い始めた。つられてカサドもついに笑いだす。

「……つつつっ！」

笑ったカサドは背中に痛みを感じて、背中を押さえてうずくまる。
そんなカサドにクレアは再び体を寄せてその耳にそっと囁く。

「カサド……笑うと背中の傷が開くぞ。
もうすぐ助けが来る。
その間、もうほんの少しだけ、甘い夢をみてろ。
ただし、もう胸は触ちゃダメだぞ……」

そして、ロミもクレアと同じ様に再びカサドに体をぴったりと寄り添わせる。

（ちょくしょう……助けなんか来なければ良いのに……
いつまでも、このままで居られたらどんなに幸せだろう……）

再び、クレアとロミの柔らかい感触と温もりに包まれたカサドは心の中でそう呟いていた。

程なくして、洞窟の中にクロウとバナビーが二人で飛び込んで来た。
二人は一つのマントに包まり横になっている三人を見つけて声を掛ける。

「クレアの姉御?!大丈夫ですか?」

「おい、強情女、怪我ないか?!」

二人の姿を見て、クレアとロミは思わず立ち上がり手を振る。

「おおっ!バナビー!クロウ!こっちだ、こっち!」

そう叫んでクレアとロミは、クロウとバナビーの様子が明らかにおかしくなったのに気が付く。二人はぎこちない笑いをその顔に浮かべて立ちすくんでいた。

「ははははっ……いや……これって……夢じゃないよな。
姉御とロミちゃんのこんな姿が見られるなんて……」

そう呟くとバナビーは鼻血を出して、そのまま仰向けにぶっ倒れる。

「お前ら……なんて格好してるんだ！
馬車が事故ったって聞いて、嵐がおさまるのを待って慌てて駆けつけてみりゃ、
いきなり暗い場所で三人でお楽しみの最中だったとはな！」

クロウは頭を掻きながら呆れ顔になって二人に怒鳴る。さすがにここに来てクレアとロミは事の重大さに気が付いた。そう、二人は彼らの前で一糸纏わぬ姿を上から下まですべて晒して立っていたのだ。

「きゃぁーっ！スケベ！変態！見るな！見るなぁーっ！」

クレアは思わず叫び声を上げる。そして、二人は思わず裸の胸を両手で抱き締める様にして隠し、慌ててカサドのマントの中に再びもぐり込んだ。

結局、最初にクレアが思った通り、馬車が崖下へ転落する前に御者は振り落とされ、怪我もほとんどなく道の上に放り出された。彼は崖から落ちるのを免れた馬の背に乗って『館』まで助けを求めに走ったのだった。それで、嵐がおさまるのを待って、クロウ達館の用

心棒とバナビー達ソードエンジェルが崖下にクレア達の捜索にやって来たと言う次第だった。幸いカサドの怪我はクレアの応急処置が適切だった為に大事には至らずに済み、結果的にこの事故は、馬車一台を失う事になったが、『館』としては人的被害はまったく無しと言う奇跡に近い顛末になった。

ただこの事故、それに絡んだ人間には結構大きな影響を残した様だった。

クレアにとっては最後の最後で天敵とも言えるクロウに『自ら生まれたままの姿を晒す』と言う悔やんでも悔やみきれない、彼女曰く『人生最大の汚点』を残す結果になった。この後、しばらくクロウが事あるごとにクレアをこの事でからかう事になったのは言うまでもない。

バナビーは、あの日からしばらく、恋焦がれていたクレアのあまりに美しくも神秘的な姿が頭に焼きついて離れず眠れぬ夜を過ごした。さらにクレアの姿と共に、子供だとばかり思っていたロミが思ったよりずっと『色気』のある姿であった事も彼の寝不足を酷くしていた。

そして何よりカサドである。城に居た頃は遠くから想うだけの存在だった『ソフィア姫』。『あの男』によって今は『娼婦』にまで身を堕とされてしまったが、それでも変わらず想い続けている大切な女性。彼には、その女性があの一夜から少しだけ身近になった気がした。今でも目を閉じれば、その体の柔らかさ、温もり、匂いが鮮やかに蘇って来る。想うだけで決して手の届かない女(ひと)と諦めていたけれど、もしかしたら自分にも手が届くかもしれないと少しだけ思いはじめていた。もちろん彼女と自分の間にはまだどうしようもないほどの広く深い川が流れている事は分かっていた。それでも、彼

女があの夜縫ってくれた背中の傷痕を見る度に、彼女を手に入れられるのなら、死を賭してその川を渡って見るのも良いかもと思うカサドであった。

## 第４１話　悲しき妖精の物語　～その１～（前書き）

さて、クレアの物語はここで、しばしのお休みをもらって……

その姿と口調に大きな特徴のあり、歴代『薔薇の乙女』三大美女の一人にも
挙げられる『妖精ヘルガ』の物語になります。ミステリアスな彼女の隠され
た過去が明らかになります。

# 第４１話　悲しき妖精の物語　～その１～

『ヘルガ＝シュッターマイヤー』はその前夜珍しく『夕方（オーバーナ）から早朝まで（イト）』で仕事をして疲れきっていた。彼女の贔屓客の一人がどうしてもと言って大金を積み一晩ヘルガを独占したのだ。もちろん、この客とて一晩中休むことなく彼女を弄ぶ様な無粋な事をしたわけではなく、彼女の奏でるシーブラムを心おきなく楽しんで、その合間に少しだけ奏者のヘルガ自身も楽しんだと言う感じであった。ヘルガは絶滅した妖精族の身体的な特徴を受け継いだ『絶世の美女』として生まれた代わりに、厳正な菜食主義者（ベジタリアン）と言う事もあり体力的には普通の人間と比べると劣っていた。その為にクレアの様に五日連続で『夕方から早朝（オーバーナイト）まで』を行う事は言うに及ばず、今回の様に一日それを行っただけで、ほとんどグロッキー状態になってしまう。

「くん、私ハ疲レタ、モウ寝ル……」

手にシーブラムを持ったまま自室のベッドにばたりと倒れ込んだヘルガは、一緒に部屋まで来ていた付き人の老婆『クン』にぶっきらぼうに言うと、すぐに小さな寝息を立て始める。ヘルガを起こさない様に細心の注意をしながら、クンはそっと彼女の靴を脱がせベッドの脇に置き、シーブラムのネックを握っていた彼女の手を解いて、彼女のシーブラムを部屋の片隅にあったケースの中へ納める。

「姫様……お着替えもせずに寝てしまわれて……
　余程、お疲れになられているのですね」

寝息を立てるヘルガを優しい目で見ながらクンは独り言の様にそう呟き、布団をそっと彼女の体に掛けてやる。

「では……ごゆっくりお休み下さい、姫様……」

そう言ってクンは眠っているヘルガに深くお辞儀をしてから、彼女を起こさない様にそっと部屋を出て行った。

このダルメハイン法国や、クレアの祖国クロフォードのある『ミューラス大陸』と海を隔てた反対側にある『アマルファ大陸』がヘルガの故郷であった。ここはミューラスとは全く事なる人種構成の大陸で、白色人種が中心のミューラスに対し、黄色人種と黒色人種が中心だった。もちろんミューラスにも『アル』の様な黄色人種系の人間も居るがこちらは東の外れの王国にのみに存在する少数民族だった。

忘れもしないその日、十六歳になった彼女はいつもの様に社(やしろ)でシーブラムに似た楽器タルーラを奏(かな)でていた。社の回りには村人たちがうっとりとした表情を浮かべ思い思いの姿勢でその音色に聞き入っていた。

その頃の彼女には『名前』と言う物は無かった。ただ『巫女(みこ)』と呼ばれ崇められていた。この大陸の人間はやや黒味の強い黄色か黒い肌を持ち、黒い髪と黒い瞳、小柄な体格なのに対し、彼女の耳は先が鋭く尖って長く伸び、髪は光輝く白銀で、肌の色は透き通る様に白く、瞳の色は宝石のルビーを埋め込んだ様に赤く、その体つきも手足が長い細身の長身で、明らかに他の者とは種族の違うのが一目瞭然だった。もはや人間ではなく『神』に近い存在と感じる者さえ多かった。しかし、彼女の両親は二人とも数年前に死んでしまったけれども、ここではどこにでも居る極々普通の容姿の人間だった。このアマルファ大陸では、非常に稀な確率ではあるが彼女の様な身

体的特徴を持つ子供が突然生まれる事があった。そして、そう言う子供を人々は、神が使わした『天使』として考え、彼女の様にその土地で『巫女』として崇(あが)められていた。実際、その姿で生まれた者は不思議な事に自然の精霊達と自由に会話が出来る特殊能力を持っていた。もちろん彼女も例外ではなかった。

この事に関して、ミューラス大陸の学者達は、今は絶滅してしまった『妖精族』の血が今でも自分たちの中に少なからず流れていて何らかの条件が揃うと彼女の様に完璧な形で発現するのではないかと考えていた。不思議な事には、もっとも姿形が近いはずのミューラスの白人種ではそれが起こらず、何故かもっとも姿形の遠いアマルファの者にだけ起こる現象と言う事も分かっていた。

タルーラを奏でる彼女の手が突然止まり、いままで穏やかな表情をしていた彼女が険しい表情に変わった。

「動物たちが……森が……風が……叫んでいる。
血の匂い、悪魔の気配……
逃げて！みんな逃げて！奴らがここに来る！」

彼女はそう叫んだ。今までうっとりした表情で彼女の奏でるタルーラの調べを聞き入っていた村人達が一斉に立ち上がり右往左往し始める。彼女の前に座っていた小柄な村の長老が立ち上がり、毅然とした態度と声で叫ぶ。

「落ち着け！慌てるな！男達は皆の者をまとめよ！
森を抜けて逃げるのじゃ！
良いか、命が一番じゃ、無駄な物は持つな！
身軽になって逃げるのじゃ！
生きて居れば、またどこかで村を作る事は出来る！」

ともすればパニックになりそうな村人を、村の若者が中心になって的確に指示を出してまとめてゆく。そして若者たちは一人が二家族程の集団を連れて次々と森の奥へ避難して行く。彼女の元には、長老と若い戦士が寄り添っていた。戦士がそっと彼女の肩を抱いて落ち着いた声で言う。

「さあ、巫女様、私達も逃げましょう。
ここはもう危険です」

その言葉に彼女は微笑みを浮かべながらその手をそっと払い、静かに答える。

「あなたは長老様を連れて早くお逃げなさい。
私はここに残ります……」

彼女の言葉に驚き、若い戦士は思わず長老の方を向き何か言葉を求める表情になる。

「巫女様、何と言う事を申される。
あなたは何を考えておられるのじゃ」

長老は、彼女の手を取り目を見詰めて尋ねる。

「奴らは不思議な事に私の様な女を珍重（ちんちょう）するそうです。
私が奴らの物になればきっと満足して、あなた達を追う事はないでしょう。
今まで私の様な身寄りも無い上に醜い女を大切にして下さってありがとう。

これがせめてもの恩返しです」

彼女は穏やかな表情で答えた、その時だった。村人が逃げて行くのと逆の方角から聞き慣れない言葉が彼らの耳に入って来た。

「さあ、早く、お前は長老様を連れて逃げて！
もう時間がありません。お願い！
みなさんを、村の人たちをお願いします！」

彼女のその言葉を聞いて若い戦士は決心する。

「巫女様、お許しください！」

そう言うと彼はその場に手をついて彼女に土下座をしてから長老を抱きかかえる様にして、彼女の傍から駆け出して行った。

「馬鹿者！お前は何を考えておる！
放せ！放すのじゃ！
巫女様を連れに戻るのじゃ！」

若者の小脇に抱えられた長老がじたばたもがきながら叫んでいた。
彼は森の中へ消える前に立ち止まって彼女を振り返り、今一度深々とお辞儀をし目の涙を拭(ぬぐ)ってから、森の中へ消えて行った。

一人になった彼女は、大きく深呼吸をすると、傍に置いてあったタルーラを手に取り目を再び奏で始める。そして目を閉じて精霊達にそっと話しかける。

「本当は死ぬほど怖いんです。
彼らに捕まればどんな目に会うか……

私と同じ白い肌で体の大きな悪魔たち。
王都にすら平気で侵入し、狼藉の限りを尽くし、
皇帝陛下さえも捕えて配下に治めたと聞きます。
森の精霊たちよ……どうか私をお守りください……」

そんな彼女の耳に、あの聞き慣れない怖ろしい声がどんどん近付いてくるのがはっきりと分かった。そして間もなく多くの人間の足音が彼女の方へ駆けてくるのが分かった。彼女は、必死に迫りくる恐怖と闘いながら目を閉じたままタルーラを奏で続けた。いつの間にか、彼女の小さな体はがたがたと震えていた。その閉じた目からは涙が止めどなく流れ落ちていた。多くの足音がついに彼女の傍らまで駆け込んできた時、彼女は小さく呟いた。

「お父様、お母様……助けて……」

「ＸＸＸＸＸ！ＸＸＸ！」

男の叫びと笑い声が彼女の耳元で響いた。と同時に彼女の体がその場に押し倒された。彼女の奏でていたタルーラが彼女の手を離れ地面に落ちて悲痛な音を発してて壊れた。男達の強い手で彼女は手足を床に押し付けられ身動き出来なくなった。

「ＸＸＸ！ＸＸＸＸＸ！」

「ＸＸ、ＸＸＸＸ」

口々に彼らは何か叫んでは笑っていた。彼女はついに我慢できなくなって目を開く。そこには、見た事もない金の髪に青や緑の怖ろしい瞳をした大男達が鉄の服を着て彼女を笑いながら見下ろしていた。

「悪魔！やめて！放して！」

彼女は叫び声を上げる。

「ＸＸ！ＸＸＸＸ」

その声を聞いて一人の男が何か彼女に言うと、そのまま彼女の足もとに立った。同時に左右の足を押さえていた男達が、彼女の足を大きく開いて行く。彼女は最後の力を振り絞ってもがいたが強い力で押さえ付けられた手足はまるで杭で打ち付けられた様にびくともしなかった。

「助けて！神様！助けて！」

彼女は涙声で叫んでいた。足元に立った男はズボンを脱ぎ、卑猥な笑いを口元に浮かべ、ゆっくりと彼女の服の裾をめくり上げて行った。それをを見た彼女は、恐怖の為にもうそれ以上目を開けていられなくなりぎゅっと瞼（まぶた）を閉じた。

# 第４２話　悲しき妖精の物語　～その２～

「ＸＸＸＸ、ＸＸ、ＸＸＸＸＸＸＸＸ……」

「ＸＸＸ！ＸＸＸ、ＸＸＸＸ」

何か言い争う様な声がして、彼女は恐る恐る目を開く。赤いマントを羽織った金の髪にエメラルドの様なグリーンの瞳の若い男が彼女をにこやかな笑顔で見下ろしていた。

「ＸＸＸ！」

その男が彼女の手足を押さえていた男達に何か鋭い口調で言うと、すぐに男達は彼女の手足から手を離した。体の自由を取り戻した彼女は上半身を起こし、捲(まく)りあげられ太ももまで露わになっていた服の裾を慌てて下し、自分自身を両手で固く抱きしめ、男たちを睨みつける。

「ＸＸＸ……」

赤いマントを羽織った男は、優しい口調で何か囁くと、彼女の体を軽々と抱き上げた。そして回り居た男達を見回し何か叫ぶと彼女を抱いたままその場を離れて行く。彼女の手足を押さえ付けていた男達やその場に居た多くの男達も、彼の後に付いて何もせずに村から出て行った。その時、彼女は「助かった」と思った。あの時、もう少しで襲われそうだったのを助けてくれたその男(ひと)。悪魔と聞かされていた異邦人達の中にも良い人は居るのだと彼女は思った。言葉は分からなかったが、その若い男は終始彼女に優しく語りかけていた。彼女はその後、男の乗る馬に一緒に乗せられ彼らの野営地に連れて

行かれた。馬の上でも彼女はその男を信頼してしっかりとしがみ付いていた。

その男が終始他の男達より優位に立ってるのを見て、この野営地の指揮官らしいと彼女は思った。野営地に着いてからも男は彼女を傍から離さなかった。そして彼の傍にいる限り、もう二度と他の男達が彼女に襲いかかる事は無かった。彼女は常に彼の傍らに居て、その腕にしっかりとしがみ付いていた。そして時折、彼の顔を心配げに見上げると、彼も優しい笑顔を浮かべて彼女を見下ろしてくれた。

陽が落ちると、焚き木を囲んで夕食の宴が始まった。彼女から見ると何かの祝宴ではないかと思われるほど豪華な食事と酒らしき物がふるまわれていた。彼女を隣に座らせた男は、色々な食べ物を彼女の目の前に取り分けてくれたが、『巫女』である彼女は生まれた時から厳密な菜食主義であったので食べられる物は限られていた。

「私は菜食主義なのでお肉やお魚、玉子さえも食べられません」

と必死に訴え、食べられる物だけを指さす彼女に、その男は最初は怪訝な顔をしていたが、それに気が付いた傍に居た男が彼の耳元で何か囁いて彼もその事を理解した様だった。その後は彼なりに彼女の食べられそうな物を持って来ては彼女に見せて食べられるかどうかを確認する様になった。やがて宴も終わり、彼は彼女を連れて自分のテントに入って行く。

そしてその後、世の中はそんなに甘い物ではない事を、彼女は思い知る事になる。

テントに入るとすぐに、彼は人が変わった様になり、彼女をベッド

の上に押し倒した。そして野獣の様に彼女の襲いかかった。驚いて必死に抵抗する彼女だったが、所詮十六歳の少女が大の大人、しかも屈強の戦士に勝てる訳もなかった。着ていた服を剥ぎ取られ裸にされた彼女は、あっと言う間に男に組み敷かれ、初めて経験するおぞましい行為の耐えがたい痛みに泣き叫んだ。しかし、その行為は一度で終わる事はなく、男はその夜何度もその行為を繰り返し、彼女はその度に悲痛な叫び声を上げた。結局、彼女が苦痛から解放されたのは、東の空が薄ら白み始めた頃だった。

翌朝、彼女はその男の手で『首輪』を嵌められた。その首輪は、鉄製で小さな鍵が付けられ、男の持つ鍵が無ければ外せない様になっていた。しかも細い鎖が付いていて、その先はいつも男の手に握られていた。その夜を境に名実ともに彼女は彼の『所有物』になった。ただ、夜ベッドに入るまでは、首輪と鎖で繋がれてはいたが外見上は昨日の昼間同様に優しかった。自分の運命を悟った彼女は、昼は『偽りの優しさ』に笑顔で答える『妹』、夜は『野獣の様な欲望』のはけ口となる『娼婦』と言う、男にとって都合の良い『可愛い人形』になった。さらにあの夜以来、彼女は精霊達の声がまったく聞こえなくなった事を知り、自分がもう『巫女』でなくなった事も自覚した。

男の率いる侵略部隊は彼女が捕まって一週間後に帰国の為に港町まで撤収して来た。この港町はすでに、男達の国の人間に完全に占領された、彼女にとっては見慣れぬ石作りの大きな建物が並ぶ異様な街になっていた。しかも、その港には彼女からすれば『小山』が海に浮かんでいるかの様な巨大な物体が何隻も浮かんでいた。それが彼女の知る『小舟』と同じ『船』で海を渡る物と知ったのは彼女がそれに乗せられた後のことだった。

港には、多くのこの国の者達が老若男女問わずに捕えられて、彼女

同様に首輪をされ鎖に繋がれていた。ただこちらは、何人もが一本の鎖に数珠繋ぎにされ、手足も鎖で自由を奪われていた。しかも、傍に居る男達がまるで家畜を扱う様に怒鳴り声をあげ、時折鞭で叩いたり手荒な扱いをしていた。それに引き換え、自分は首輪と鎖で男に繋がれてはいるが手足は自由のまま、しかも、この男以外の男達も彼女を見ると寄って来ては妙に優しい声で何か話しかけて彼女の銀の髪に触れたがった。彼女の所有者である男も、他の男が寄って来ると何か自慢げに彼女を見せている感じがした。自分の様な姿形をした女を征服者達は『珍重』するという事は聞いてはいたがこれほどまで極端とは彼女は思ってもみなかった。そしてこの時はまだ、何故、彼らは自分の様な『醜い女』を『巫女』の力を失った後でもこうも珍重するのかがどうしても彼女には理解出来なかった。

その後数日して、彼女は男達と共に船に乗りミューラス大陸の彼らの母国『ヒスタラーパ』へ向けて出帆した。この時も、一緒に乗せられた彼女の同国人達は暗い船底にすし詰めの状態で乗せられていたが、彼女は男と共に広い個室で過ごした。もちろん、船の中でも夜になると男は彼女を弄び続けた。

海洋貿易国家『ヒスタラーパ』と言えば聞こえは良いが、実際は国家規模の『海賊行為』と『略奪行為』で成り立っている国である。位置的にはミューラス大陸の西端にあり、『薔薇の館』がある表向きはダルメハイン法国はその内陸側の東隣に当たる。『商船』と言っているが、実際は『戦艦』であり『侵略部隊の輸送船』である大型船をアマルファ大陸へ次々送り込み、その土地の国家から物や人を略奪していた。アマルファには、ミューラスでは産出量の少ない『金』や『宝石』、それに珍しい『香辛料』が豊富にあり、それがヒスタラーパの富をもたらしアマルファ大陸の中でも一、二を争う権勢を誇る国家になっていた。そして、アマルファ大陸のもう一つ

の隠れた特産品が、この世で最も美しい姿を持つと言われる先祖返りでこの世に蘇った『妖精』だった。しかし、それを見つけるのは『砂漠に落ちた砂金を見つける事』と同じくらい難しい事とされていた。

ヒスタラーパの港に着き、男と共に船を降りると、すぐに彼女は多くの者たちに取り囲まれた。男は、そこにあった手頃な箱の上に座り、彼女を膝の上に座らせて、早速商談を始めた。もちろん、その時、彼女には彼らが何を話しているのかは分からなかった。その商談が佳境に入ると、男は彼女の着ていた服の胸元をいきなり腰に刺した短剣で引き裂き、上半身を裸にした。二人を取り囲んだ者たちから歓声が起こる。彼女は頬を赤らめ、思わず両手で胸を抱いて、男達の視線から逃れようとした。男達の熱気は一気に上がり、セリ価格もどんどん上がっていった。そして、ついに男は、腰から下だけ残っていた彼女の服を短剣で引き裂き多くの男達の目の前で全裸にしてしまった。彼女はその屈辱に耐えきれず声を押し殺して嗚咽を始めていた。その時だった、身を丸め屈辱に震えながら嗚咽する彼女にマントが投げ掛けられた。そしてマントを彼女の投げた男が何かを大声で叫ぶ。すると、全裸の彼女を膝に乗せていた男はにやりと笑って、膝の上の彼女を立たせ、首輪に繋がった鎖の端をその男に渡し、彼の耳元で何か囁くとその肩をぽんと叩いて、上機嫌でその場を立ち去って行った。それを見て彼女を取り囲んでいた男達も残念そうな表情を浮かべてその場を離れて行く。

## 第４３話　悲しき妖精の物語　～その３～

彼女は、何が起こったのか分からず、ただ投げられたマントを裸の体に巻き付け、怯える目で自分にマントを投げてくれた男を見詰めていた。その男は輝く様なブロンドの髪と、サファイヤの様なブルーの瞳を持った大柄な若い男だった。

彼の名は『ミハエル＝シュッターマイヤー』。歳は３６歳、この港町から馬車で一時間ほど西へ走った所にある小さな村の領主だった。ミハエルは怯えて震える彼女を優しい眼差しで見ながら語りかけた。

「もう大丈夫……分かるかい？」

彼女は、ミハエルの言った言葉の意味は正確に分からなかったが、どうやら自分を落ち着かせようとする意味の言葉である事は分かった。彼女は、彼の目を見て小さく頷いた。ミハエルは、あの男が彼女の首輪に繋がった鎖と共に渡した小さな鍵を手に持つと、彼女の前にしゃがんで彼女の首輪を外してやる。彼女は、首輪が外されるとミハエルにしがみ付き、自分の唇をミハエルの唇に押し当てた。これはあの男に捕まってから彼女が最初に覚えた『男を喜ばす行為』だった。あの男は、こうすると乱暴をやめて少し優しく彼女を扱ってくれた。深い意味は分からなかったが、彼女はこうする事でこの国の男は喜ぶ物らしいとおぼろげに理解していた。美しい『妖精』からの突然のキスに、ミハエルは戸惑い目をぱちくりさせる。しかし、すぐに彼女の肩を持って体を離させ、そのルビーの様な赤い瞳を見て優しく語りかける。

「きっと、あの男にそう仕込まれたんだろう、可哀想に……
でも、もうそんな娼婦みたいな事はしなくて良いんだよ。

それは君が『本当に好きな男（ひと）』が出来た時にするんだ。
……って言っても分からないか？」

そう言ってミハエルは苦笑いを浮かべ頭を掻く。

「……ホ、本当……二……好キナ……ヒト……？」

「えっ！」

彼女が赤い瞳で彼を見詰めながら、たどたどしくそう口にするのを聞いてミハエルは驚いた。彼女達『妖精』を含めてアマルファの人間は知能が低いとの世間の評判を何の疑いもなく信じていたミハエルには、例えオウム返しだったとしてもこんな短時間で自分達の言葉を話すなどとは夢にも思ってなかったのだ。実際、あの男に捕まり、この港街に来る間に彼女は、まだ正確には理解は出来なかったが、彼女なりにこの国の言葉を少しづつ覚え始めていた。

その後、ミハエルは彼女を自分の屋敷に連れ帰った。彼の屋敷は緑豊かな村の外れの小高い丘の上に建っていた。『薔薇の館』より一回り以上小さい館であったが、過美な所がない落ち着いた雰囲気の歴史を感じさせる館であった。ミハエルの治めるこの村は小さいながら、質の良いブドウが獲れ、上質なワインを作る事で有名な所だった。そのワインの製造を昔から一手に取り仕切る彼の家は、小さい村の領主にしては非常に豊かな家だった。

あの日、ミハエルはワインの取引の商談でたまたま港を訪れ、そこで彼女の取引現場に遭遇したのだった。真昼間の屋外で、首輪と鎖に繋がれた美しい『妖精』の少女が多くの男達の目の前で全裸にされるを見て、いたたまれなくなり破格の値段を提示して彼女をその

場で買い取って来たのだった。

彼女は、ミハエルの館に着くとすぐにメイド達の手で風呂に入れられ、その後、髪を整え、美しいドレスを着せられた。初めて『妖精』を見たメイド達は物珍しさで我先に彼女の世話を買って出た。そして、身支度（みしたく）をすべて終えた彼女を見た館の者は誰もが、その美しさに言葉を失いただ口をぽかんと開けて彼女を見詰めるだけだった。そんな彼らの反応を彼女は不思議そうな目で見ていた。

まずミハエルは、彼女に『名前』をくれた。

「良いかい……僕の名前は『ミハエル』」

ミハエルは自分を指さしそう言ってから、今度は彼女を指さし続けた。

「そして、君は今日から『ヘルガ』。
分かるかい？」

じっとミハエルの言う事を聞いていた彼女がたどたどしい言葉ながら答える。

「……みはえる……」

そう言って彼を指さし、今度は自分自身を指さし続ける。

「……へるが……」

そして、さらに彼女は続けた。

「アリガトウ……みはえる……へるが……嬉シイ……」

彼女は、自分なりにそれまでに覚えた言葉を繋げて精一杯の感謝を彼に伝えた。ミハエルはそんな彼女が無性に愛しく思えて思わず抱きしめた。こうして、彼女は生まれて初めて『名前』と言う物を得た。彼女にとって『ヘルガ』と言う名前はミハエルからもらった何物にも代えがたい『宝物』となった。

ミハエルは優しかった。前の男とは違い、昼も夜も。彼は、ヘルガを館に連れ帰ってその日から二人は一緒のベッドで眠っているにも関わらず、決してヘルガを無理に抱こうとはしなかった。ヘルガはいつも子供の様に彼に寄り添い眠っていた。二人は恋人同士と言うより仲の良い兄妹（きょうだい）の関係に近かった。数カ月経ってもミハエルはベッドの中でヘルガをそっと抱き寄せキスをするのがやっとだった。

そして、ヘルガにとってその後に大きな影響を与える物との出会いが、それから一ヶ月ほどした頃訪れた。

ある日、ミハエルは港街にちょっとした用事で出かける時にヘルガも一緒に連れて出た。彼の用事自体は銀行によって簡単な書類にサインをするだけだったので、その後は昼食などを取りながら二人で街を散策していた。街の者達は男も女も、皆、必ずヘルガを見ると物珍しそうに目で追った。この頃には、ヘルガはそう言う好奇な視線にもすっかり慣れていた。特にミハエルと一緒に居れば街中でも『怖い』と言う気持ちにはならなかった。

二人が大きな雑貨屋の前を通った時、ヘルガの歩みが急に止まりシ

ョーケースの中の物に目が釘づけになった。ミハエルは不審に思いヘルガに尋ねる。

「どうしたんだ、ヘルガ？」

するとヘルガはショーケースにある物を指さしてミハエルに逆に尋ねた。

「みはえる……アレ、何？たるーら？」

そこには、シーブラムが飾ってあった。

「ああっ、シーブラムだね。楽器だよ」

そう言って、ミハエルはシーブラムを弾く真似をする。

「シーブラム？へるが、アレ、弾キタイ」

その言葉にミハエルは驚いた。ヘルガが初めて自分からミハエルに『おねだり』をしたのだ。しかも楽器を。ミハエルは何故か嬉しくなり、ショーケースに飾ってあったシーブラムを買い、その場でボディーの部分に金の文字で『ヘルガ』の名前を入れさせてから、ヘルガにプレゼントした。ヘルガはケースに入ったシーブラムを受け取ると家に帰るまでずっと大事そうに抱きしめていた。

そして、家に帰るとヘルガは待ちきれないかの様にケースを開けシーブラムを取りだすと、調律を始めた。何も教えていないのにシーブラムを知っているかの様に扱い始めたヘルガに驚きながらミハエルは黙って彼女のするがままにさせていた。ヘルガの合わせたシーブラムの基本音階は本来の基本音階とは少し違っていた。しかし、

それを慣れた手つきでヘルガが弾き始めるとミハエルは目を見張った。それは今まで聞いた事もない、新鮮で幻想的で美しい曲だった。しばらくすると、ヘルガの奏でるシーブラムの曲に惹かれて館のメイド達もその場に集まって来て、皆、うっとりした顔で聞き入っていた。ヘルガ自身も、シーブラムは彼女の愛用していたタルーラとは多少勝手が違っていたが、久々にタルーラの曲を奏でる喜びに浸っていた。

ミハエルは、早速、翌日からヘルガにシーブラムの教師を付けて本格的にシーブラムの演奏を教え始めた。元々知っていたタルーラの曲同様に、ヘルガはこの国のシーブラムの曲をすぐに覚えた。そして一ヶ月もすると、彼女の教師も驚くほどのシーブラムの名奏者になっていた。さらに、この教師の提案で、シーブラムとは切っても切れない関係の『弾き語り』を彼女の教えてみると、『妖精』特有の澄んだ美しい声と相まって聴く者の涙を誘う程の美しい調べを奏でた。もちろん、ヘルガはその時はまだ歌詞を理解して歌っているのではなく『音』を覚えて歌っているだけだったが、それでも地元で有名なシーブラムの弾き語り奏者よりも巧いと評判になった。

ヘルガは、ミハエルに出会って幸せを取り戻した。ミハエルだけでなく、彼と居れば誰もが彼女に優しく接してくれた。あの日、あの男に捕まり、酷(ひど)い辱めを受け、もう二度と『幸せ』と言う物には縁がないと諦めきっていた所に現れた、彼女だけの『天使様』。ヘルガはミハエルの事をそう想っていた。生まれ故郷の国にはもう帰れないだろうけれど、ミハエルと居ればこの国でも幸せに暮らせるとヘルガは信じる様になっていた。

## 第４４話　悲しき妖精の物語　～その４～

しかし、運命は無情にも彼女に『人並みの幸せ』を得る事すら許さなかった。

そんな幸せな日々が一年続いたある日の午後の事だった。

いつもの様に港町でのミハエルの用事にヘルガが同行し、その後、街でのデートを楽しんだ帰り道、二人を乗せた馬車は森の中を走っていた。この森を抜ければミハエルの治める村だった。街で買ってもらったバッグを大事そうに抱えて向かいの席に座るヘルガにミハエルが声を掛ける。

「ヘルガ、明日になったら、
シーブラムのケースの内張りを剥がしてごらん。
場所はネックの下辺りだよ」

その言葉にヘルガは怪訝な表情で答えた。

「けーすノ内張リ？黄色ノフワフワシタ布ノ事カ？
ネックノ下、明日、へるが、剥ガス、分カッタ。
デモ、ソレ何故？」

ミハエルはにこにこしながら口の前に人差し指を立てて小声で囁く。

「それは、明日のお楽しみ！」

ミハエルがそうするの見て、ヘルガも真似（まね）て自分の口の前に人差し指を立てて笑う。

その時だった、馬車が急に止まる。あまりに急な事に、ミハエルはヘルガの方へよろけそうになるのを何とか堪えた。彼はすぐさま後ろの小窓を開けて御者に怒鳴る。

「一体何事だ！」

すると御者は前方を凝視したまま、がたがたと震えながら声を絞り出す。

「旦那様……に、逃げて下さい……早く……」

そこまで言って御者は急に体を硬直させて、そのまま地面へ落ちて行った。落ちて行く御者の胸には矢が突き刺さっていた。ここに至り、ミハエルも最悪の事態を自覚した。彼は向かいの席のヘルガを真剣な眼差しで見て、極力落ち着いた口調で言った。

「ヘルガ……良いかい、今すぐ、ここから逃げるんだ。
馬車を降りたら、真っすぐ村へ走れ。
後ろを振り向くな。
村に着いたら誰でも良い、助けを求めるんだ！」

そう言う、ミハエルは馬車の扉を開けた。

「走れ！ヘルガ！逃げろ！」

彼は鬼気迫る顔で前に座るヘルガに怒鳴った。ヘルガは一瞬、どうしたら良いか分からなくなったが、彼の表情からとにかく今は彼の言う事に従わねばと理解して、胸に抱いていたバッグを手放し馬車

の外へ駆け出す。

「居たぞ！間違いない『妖精』だ！」

「逃がすなよ！生け捕りにしろ！」

彼女が馬車の外に出ると、今まで静かだった森に男達の怒号が響く。手に剣や弓を持った見るからに柄の悪そうな男達が五人、にやにや笑いながら彼女の方へじりじりと迫って来た。彼女は恐怖の為に、足がすくんで思わずその場に座り込んでしまった。それを見たミハエルは、すぐさま馬車を飛び降りるとヘルガの前に仁王立ちになり、腰の剣を抜いて迫りくる男達に叫ぶ。

「私は、この先の村の領主『ミハエル＝シュッターマイヤー』！
それを知っての狼藉(ろうぜき)か！
もし、この娘に手出しをするなら私が許さない！」

その言葉を無視して男達はミハエルとヘルガの元へ駆け寄り、あっと言う間に二人は男達に取り囲まれた。

「領主様よ、その『妖精』を大人しく俺達に渡しな。
そうすりゃ、あんたは見逃してやるよ！」

リーダー格らしい男が両手にダガーナイフを持ち、その刃を舌で舐めながらミハエルに言う。

「みはえる！逃ゲテ！私、大丈夫！
捕ル、デモ、殺サレナイ！
ダカラ、私、置イテ逃ゲテ！」

ヘルガは、ミハエルを見上げて涙ながらに訴える。

「馬鹿を言うな、ヘルガ！
君がこの先どうなるか分かっていて、
自分だけ助かる事なんて出来ない！
君を死んでも守って見せる！」

そう叫んで、ミハエルは剣を上段に構えてリーダー格の男に駆け込みその剣を一気に振り下ろした。

「悪いな、領主様……俺達、兵隊崩れなんだよ。
貴族のなまくらな剣なんぞ、止まって見える」

ミハエルの振り下ろした剣は男の左手のダガーナイフに弾かれて逸れていた。そして、その男の右手に握られたもう一本のダガーナイフは正確にミハエルの右胸を突き刺していた。

「ぐっ……き、貴様らに……ヘルガは渡さん……」

苦痛に耐え、悔しげな表情で男を睨みつけながらミハエルは声を絞り出した。

「心配するなよ、領主様。
この『妖精』は俺達があんたに代わってたっぷり可愛がってやるからよ。
そして、飽きたら、どっかの娼館へ売り飛ばしてやる」

にやりと笑ってそう言った男はミハエルの右胸に突き刺したナイフをそのままぐっと上に突き上げた。

「ぐううううっ！……ヘルガ……すまない……」

ミハエルはそう呻き、同時にその口から大量の血が流れ出す。程なく彼は目を閉じ、その場にどさりと崩れ落ちた。

「嫌ァーーーーッ！みはえる！」

森にヘルガの悲痛な叫びが響いた。

その後、彼らの山小屋に連れ込まれたヘルガは一昼夜休む事無く男達に弄ばれた。彼女は途中何度も意識を失ったが、それでも彼らはヘルガへの凌辱を止める事はなった。男達が満足してヘルガから離れた時には、彼女はその場に死んだ様に横たわっていた。その後、彼らは、ベッドの足と彼女の右足を鎖に繋ぎ昼となく夜となく気が向いた時に弄んだ。結局、数ヶ月間そうしてヘルガを弄んだ後、男達は遠く離れた街の娼館へ彼女を売り飛ばした。

その娼館では、ベッドとトイレだけがある小さな部屋に閉じ込められた。常にドアには鍵が掛けられ、たった一つの小さな窓には鉄格子が嵌(はま)っていた。毎日、来る日も来る日も、陽が沈んでから夜明けまで何人もの客を取らされた。そこはまさに地獄だった。ヘルガは、固く心を閉ざし、言葉もほとんどしゃべらず、ただ人形の様に男達に抱かれて過ごした。

そして、この娼館に閉じ込められて二年目のある日、ヘルガの部屋の扉を開けて一人の女が目の前に現れた。その女は濃紺一色のドレスを身に纏(まと)い、執事風の美しい男を従えていた。ヘルガは光を失っ

た乾いた瞳で彼女を見ていた。

「驚いたな……本物の『妖精』だよ、ロメオ。
しかし、こんな劣悪な環境で二年間も良く生きていたな」

その女は、半分、呆れ顔でそう言って、後ろの男を振り返った。

「はい、マダム。
かなりやつれてはいますが、
これほど美しい『妖精』は私も今まで見た事はありません」

そして、ヘルガは、信じられない程の高額で買い取られ、その日の内にシンシアとロメオに連れられ『薔薇の館』へと移った。

『薔薇に囚われし聖女』の刺青を背中に刻まれ、ロメオによる『偽りのハニムーン』も終わり、いよいよ『薔薇の初夜』の前日となったヘルガはシンシアの仕事部屋に呼び出されていた。

ソファーの間のテーブルに置かれた物を見て妙な胸騒ぎを思えながら、ヘルガはソファーに座った。彼女の向かいの一人掛けソファーに座り長パイプで煙草を吹かしていたシンシアはそんな彼女を見て静かに言った。

「『薔薇の初夜』を迎えるに当たっての私からのプレゼントだよ。
いやぁ、探すのに苦労したよ。
でも、これはお前の物に間違いないだろう?」

それはケースに入ったシーブラムだった。そしてヘルガは震える手でケースを開けると、中にはそのボディーに『ヘルガ』の名が金の

文字で描かれたシーブラムがあの日から時間が止まったかのようにそこに入っていた。ヘルガのルビーの様に赤い目から涙が零れはじめる。彼女は思わずそのシーブラムを両手で取り上げると胸に抱きしめた。

と同時に、ヘルガは遠い日のミハエルのあの一言を想い出す。

「ヘルガ、明日になったら、
シーブラムのケースの内張りを剥がしてごらん。
場所はネックの下辺りだよ」

ヘルガは急いでシーブラムを自分の横に置き、ネックがあった辺りのケースの内張りを剥がすと小さな封筒が出て来た。封を切ると中から手紙が一通入っていた。

「愛するヘルガへ
誕生日おめでとう！
面と向かって言うには恥ずかしいし、勇気が無いので、
こんな回りくどいやり方をして申し訳ない。
今ここで、僕は君への自分の正直な想いを告げるよ。
ヘルガ、僕と結婚して欲しい。
もし、答えが『ＹＥＳ』なら、
明日の朝食の時にこの『指輪』をして僕に見せておくれ。

ミハエルより」

そして、ルビーの付いた可愛い指輪が封筒から落ち床に転がった。

ヘルガの誕生日はあの悲劇の翌日だった。
もう永遠に来る事のない、ヘルガが返事を告げるはずだった二人の

朝食。

「ハイ……喜ンデ。愛シテマス、みはえる」

そうそっと囁(ささや)いてから、床に落ちた指輪を拾って左手の薬指に嵌め、その手紙を胸に抱きしめ、天を仰ぎヘルガは号泣した。さすがのシンシアもそんなヘルガを見て思わずもらい泣きをしていた。

この日からヘルガは自分の事を『ヘルガ＝シュッターマイヤー』と名乗る様になる。そう彼女はこの日から『ミハエルの妻』となったのだ。

それは、もう八年も前の事だった……

目を覚ましたヘルガは、ベッドから降り、窓を開けバルコニーに出る。彼女の耳にミハエルの優しい声が聞こえた様な気がした。

「ヘルガ、あの日、君を守れなくてごめんよ。
今、君は、幸せかい？」

「私は、幸せよ。ミハエル。
たまには辛い事もあるけれど、
心を許せる友と心から安心出来る居場所を得て……」

ヘルガは、もう何年も使った事のない、祖国の言葉でそっと天国のミハエルに答えた。

# 第４５話　犯罪者と言う汚名

季節は春、『薔薇の館』の中庭にも花が咲き乱れ賑やかな雰囲気になっていた。陽射しは優しく、森を抜ける風も柔らかで、静かで穏やかな日だった。

……が、この日の昼過ぎ『薔薇の館』は異様な雰囲気に包まれていた。

その玄関ホール前には、窓に鉄格子の嵌(はま)った重装甲の馬車が一台と、明らかに騎士が乗る重装備の馬が六頭繋がれていた。

玄関ホール内では二階へ通じる大階段付近に、短銃を持ったシンシアとロメオ、大剣を構えるアマンダとイカロス、箒(ほうき)を手に持つヘルガとクン、長銃を構えたシーヴァとニーナ、短剣を握るアルとルイ、それにそれぞれ愛用の剣を持って構えるクロウ、カサド、ダンテ、エルクの用心棒達に囲まれて、ロミに寄り添われて困惑の表情のクレアが立っていた。その『薔薇の館』の連中と相対する様に、六人の重装備の騎士を引き連れた政府の役人が入口を背に睨みあっていた。

「馬鹿野郎共が！帰れ！
『国家機密漏えいのスパイ容疑』だと！
クレアがそんな事する訳ないだろうが！
馬鹿馬鹿しいにもほどがあるぞ！」

アマンダが男でも扱いが難しい程の大剣を凛々しく構えて、役人達に怒鳴る。

「ここに正式な『逮捕状』が出ているのです。
大人しく『クレア＝カラス』の身柄を引き渡しなさい」

政府の役人は毅然とした態度で、アマンダ達に見える様に逮捕状を手で広げて叫ぶ。

「くれあ、無実、オ前ラ、帰ル、ヨロシ！
サモナイト、怪我スル、良イカ？！」

ヘルガが箒を大上段に構えて叫ぶ。

「こんなのは不当逮捕だ！
クレアには弁護士を付ける権利がある。
国家認定の『ダルメハイン法博士』のシーヴァ様が、
クレアの弁護を買って出るよ！
検事総長のバークレー呼んで来な！」

シーヴァが長銃で役人に狙いを定めたまま声を上げる。

「クレアがスパイなんて三文オペラでもやらない筋書きだわ！
もし、クレアを逮捕するなら私、全出版社を通じて抗議文出すわよ！」

短剣を握ったアルが、彼女には珍しく大声を上げた。

「ですから……まだ有罪と決まった訳ではないですよ。
ここで下手に騒ぎを大きくすればあなた方も逮捕せねばなりません。
どうか落ち着いて、クレアの身柄を引き渡しなさい」

役人は、ほとほと困った顔でクレアを守ろうとする『館』の連中を必死に説得する。

「おうおう！相手が『神聖エリシア騎士団』の騎士だろうと、こっちは一歩も引かないぜ！
俺だって『黒騎士』、
クレアをどうしても連れて行くと言うならお前ら全員、冥界へ送ってやるぞ！」

クロウが剣を片手に、もう一方の手で印を結び、騎士達をけん制する。

「俺たち三人だって『元クロフォード宮廷近衛騎士団』の端くれだ！舐めんじゃないぞ！」

カサドも剣を構えながら威勢良く叫ぶ。

「刺し違えてもクレア様はお守りするぞ！」

ダンテがその後に続く。

「俺ら、正確にはただ『近衛兵』だけどな……」

思わずそう本当の事を口走ったエルクをすかさずエルクとダンテが思いっきり殴る。

「あまり抵抗すると、クレア自身の為にもなりませんし、
最悪、この『薔薇の館』も閉鎖させられますよ」

役人は、あくまで冷静で穏やかな口調で彼らを説得しようとする。
後ろに控えた重装備の騎士達は大剣を抜いて、その剣先を床につけ柄の部分を両手で握り剣を杖の様にして微動だにせず立っていた。

「マダム、あいつ等間違いなく……
ダルメハイン『最強にして最凶』と言われる、
法王直属の『神聖エリシア騎士団』の騎士だぜ」

クロウが剣を構え印を結んだまま、シンシアの耳元にそっと囁く。

「ああ……あいつ等がもし本気になったら……
私らは、数秒もあれば皆殺しだな」

シンシアは短銃を構えながらクロウの耳元に囁き返す。それから役人に向き直り怒鳴る。

「逮捕状が何だってんだよ！
『売れっ娘』のクレアを連れて行かれたら、
こっちは、商売あがったりなんだ！
この補償はちゃんと国がしてくれるんだろうねぇ！」

その言葉に、思わず隣にいたアマンダが突っ込む。

「……ってシンシア、あんた、
クレアの身の心配じゃなく、そっち心配かよ！」

「当たり前だろ！私ゃ、経営者なんだからさ！」

シンシアはアマンダの突っ込みに悪怯れる風もなくにやりと笑う。

またしばらく、重々しい沈黙の時が流れたあと、役人が真剣な表情に変わり口を開く。

「では仕方ありません。
手荒な事はしたくはなかったのですが……」

そう言って、重装備の騎士たちの後ろに下がる。今まで剣先を地面につけて杖の様にしていた騎士たちが、剣を上げ構える。それを見た『館』の連中が身を強張らせる。緊張が両者の間に走る。

その時だった。シンシアとアマンダの間をかき分ける様にしてクレアが前に進み出る。ロミが彼女のドレスの裾を握って叫ぶ。

「クレア姉様！ダメ！行っちゃダメ！」

そのロミを振り返り、優しい笑顔を浮かべて言った。

「大丈夫よ、ロミ。
すぐに帰って来られるから……」

それから、シンシアの方を真剣な眼差しで見る。

「シンシア……行って来るわ。
これ以上、みんなに迷惑は掛けられないから……」

シンシアはクレアの目を見て尋ねる。

「クレア、最後に確認するけど、あんた、やってないよね？」

その言葉に、クレアは一度シンシアの目を見詰めた後、大きく頷いた。

「分かったよ、こっちはこっちでやれる事は必ずやる。
だから、あなたも絶対に希望は捨てないで。
私達は最後の最後まであなたを見捨てたりはしないから」

クレアは思わずシンシアに抱き付き涙を流す。

「ありがとう……シンシア……
私は、あなたや『館』のみんなに会えて良かった……」

シンシアの耳元でそう囁いたクレアはシンシアから離れ涙を拭う。
それから後ろの『館』の者たちをゆっくり見回し手を振りながら静かに笑顔を浮かべながら言った。

「じゃあ、みんな、行って来るね……ロミの事、お願い」

そしてゆっくり役人の方へ歩きだす。彼女のドレスの裾を握った手をゆっくりと離すとロミは、その場に座り込んで声を上げて泣き出した。

クレアが役人の目の前までやって来ると、さっと騎士達が二人の回りを取り囲む。役人は事務的な口調で彼女に説明を始める。

「『クレア＝カラス』、『国家機密漏えいのスパイ容疑』であなたの身柄を拘束します。
同時に、あなたに与えられている『国家公認上級特殊業務従事者』としての

特権のすべても停止されます。
早い話が、あなたは今から『街娼』と同じ扱いになると言う事です。
よろしいですね？」

「分かりました。抵抗しないから、乱暴な事はしないで」

クレアは目を伏せ、小さく頷く。

「もちろん、大人しくしていただければ手荒な事はしません。
ただ、手続き上、両手は拘束させて頂きますのでそれはご了承ください」

そう言って、役人は腰にぶら下げていた手枷（てかせ）を取るとクレアを見てそっと目くばせすると、彼女は黙って両手を握って彼の方へ揃（そろ）えて差し出した。役人は、彼女の手首に手枷を嵌めると鍵を掛ける。静まり返った『館』の玄関ホールに手枷が施錠される金属音がやけに大きく響いた。クレアは、自分の手に仰々しい手枷が嵌められ自由を奪われるとさすがに少し心細くなった。急に自分が本当に『罪人』になった気持ちになる。もちろん、クレアは仕事上、遊びの小道具として手枷や足枷を使われる事はあったが、それはあくまでお遊び用の物で、今、自分が付けられている物とは重々しさがまったく違っていた。

「では、参りましょうか」

役人は手枷を付けられたクレアを玄関ホールの扉の方へ誘う。手枷を付けられたクレアは、今一度、『館』の仲間達を悲しげな視線で見回してから外へ出て行く。

「クレア！」

アマンダがそう叫んで駆け出すと、他の連中もそれを追おうとしたが、すぐに重装備の騎士たちが彼らの方を向き直り剣を構えてけん制する。彼らはそれを見て悔しそう表情を浮かべ、その場に立ちすくむ。

玄関ホールから外へ出ると、窓に鉄格子の嵌った重装甲の馬車の扉を御者が開けて待っていた。クレアが大人しく馬車の入り口の前まで歩いて行くと、役人は彼女に手を貸して馬車の中へ乗せた。そして、自分も馬車に乗り扉を中から閉めると、御者に目配せをした。御者はそれを確認すると外から扉に鍵を掛ける。その御者が馬車の上の定位置に座ると、重装備の騎士達も『館』から出て来て、それぞれの馬を繋いでいた革紐を解き一斉に乗馬する。騎士達の後を追って『館』の者達も一斉に玄関ホールの外へ飛び出してくる。

馬車の前後、左右前方、左右後方、にそれぞれ騎士が一騎ずつ定位置に付くと、ゆっくりと馬車が走り始める。騎士たちに囲まれ『館』を去って行くクレアを乗せた馬車の見送りながらアマンダは大きな声で叫んだ。

「クレア！必ず助けてやるからな！
私たちを信じて最後まで希望を失わずに待ってるんだぞ！」

# 第４６話　その心を覆う不安

「クロウ！てめぇが居ながら何でクレアの姉御を！」

バナビーは扉を開けて『館』の玄関ホールに入るとわき目も振らずクロウの居る所まで駆けて行くと、いきなり彼の胸倉を掴んで怒鳴る！

「落ち着けガキ！あの場ではどうする事も出来なかった。
下手すりゃ、あいつも含めてここに居る全員が殺されてた」

クロウは激昂して我を忘れているバナビーを開いている右目でじろりと睨みつけ諭す様に言う。

クレアが連行された後、『館』の者達はそのまま玄関ホールに残って善後策を話し合っていた。そこへクレアが逮捕され連行されてしまった事を聞きつけ、『ソードエンジェル』の騎士バナビーが『館』に駆けつけて来たのだった。

「だからって、あんた、姉御を見捨てたのかよ！」

「バナビー！お前がクレアに惚れてるのは知ってる。
居ても立っても居られない気持ちも分かる。
だがクロウの言う通りだ。落ち着け、少年。
お前もクレアを助けたかったら冷静になれ」

アマンダがバナビーをクロウから引き離して、その目を見詰めて諭す様に言う。

「分かったよ……アマンダ姉さん。
でも、クレアの姉御は、これからどうなるんだ？」

バナビーは大きく深呼吸をして気持ちを落ち着かせてから、アマンダを見て尋ねる。

「考えたくはないが……やっぱり……」

アマンダはそこまで言って口をつぐむ。

「罪を認めなければ……拷問……」

アルが小声でぼそりと呟く。

「……そんな、真実を主張すれば拷問されるなんて……姉様……」

ロミはそう言うと、床に崩れ落ち顔を両手で覆って泣き出す。そんなロミにシーヴァが歩み寄り優しく両肩に手を添えて説明する。

「ロミ……大丈夫よ。
『ダルメハイン法』は拷問を禁じている。
厳しい尋問はあるだろうけど拷問される事はない」

「ホント……シーヴァさん……」

涙目でシーヴァを見詰めるロミに、シーヴァは笑顔で頷く。

「そうだ、ロミ。
悪いが、長丁場になりそうなんでキッチンへ行って、

何かつまむ物と飲み物を持って来てくれないか？
腹が減っては戦(いくさ)は出来ないからな。
バナビー、ロミ一人じゃ運べないんでお前も一緒に行って手伝ってくれ」

シンシアは中央の一人掛けソファーに腰掛け長パイプに煙草を刺しながら、ロミとバナビーの二人に指示する。

「分かりました、マダム」

ロミは立ち上がってそう言うと『離れ』の方へ駆け出して行く。バナビーは一瞬どうすべきか戸惑った様だったが、シンシアが彼の顔を見て黙って頷くのを見て、ロミの後を追って行った。

「シーヴァ、あんた、ロミに言った言葉、
心からそう信じてるのか？」

クロウは、シンシアの横辺りの床にどっかと腰を下ろしながら尋ねる。

「あんたの言いたい事は分かってるよ、クロウ。
容疑が容疑だ……甘い事は通じないって事だろう。
分かってるさ、でも、ロミの前でそんな事言えるか？」

シーヴァはそう答えながら、シンシアとテーブルを挟んだ向かいの長ソファーに座る。

「ソレハ、くれあ、ヤッパリ拷問サレルト言ウ事カ？」

ヘルガが心配そうに言いながらシーヴァの右横に腰掛ける。

「罪を認めれば、罪状からして公開処刑、否定すれば拷問……
早く何とかクレアの無実を証明しないと……」

アルがシーヴァの左隣りに腰を下ろしながら呟く。

「昔、街娼やってた時に、
恋人が隣国に情報流してた娼婦が居たんだ。
ある日、その娼婦も役人にしょっ引かれて、
数日後に帰って来た時には両手足の爪が全部剥がされてた」

アマンダは悲痛な表情でそう言ってシンシアの隣の一人掛けソファーにどっかりと座り頭を抱える。各乙女達の付き人達もそれぞれの主人の後ろに心配そうな顔をして立っていた。シンシアはパイプの先の煙草に火を点けながらアマンダの肩を叩きながら言った。

「安心しな、相手は『薔薇の乙女』のクレアだ。
そんじょそこらの『娼婦』とは違うんだよ。
奴らだってクレアの体を傷つける様な事はしないさ」

「マダム、気休めはこの際止めようや。
確かにあんたの言う通り体に傷を付ける様な事はしないだろうが、
あいつは、性格はともかくあれだけの美人だ……」

クロウはそこまで言って、口籠る。

「クロウ！それって、まさか？！」

シーヴァがクロウを見て声を上げる。

「体に聞くってやつかよ……」

アマンダが吐き捨てる様に一言呟く。

「ソンナノ絶対二駄目、
女、おもちゃ二スル男、へるが許セナイ、クズ、死ヌヨロシ！」

いつも明るいヘルガが珍しく怒りの表情を露わにして叫ぶ。

「苦痛よりマシだろうって言う馬鹿な男共も多いけど……
女にとって、それは時として殺されるより辛い……」

アルは目を伏せて辛そうな表情を浮かべる。

「クロウさんよ、あんた『黒騎士』だろ？
魔法とかで何とか出来ないのか？」

「クレア様をお守りする魔法はないのかい？」

「抱きつこうとすると電撃が起こるとか……？」

カサド達三人組が、クロウの横に腰を下ろしながら口々に尋ねた。

「さっきは騎士の中に相手の魔法を無効化出来る『抗魔法使い（アンチマジシャン）』が居た。
それに、あいつの乗せられた馬車には『抗魔法結界』が張られてた。
たぶん、この先、あいつの収監される所も同じだろう」

クロウはうなだれて、視線を床に落としたまま力なく呟く様に答えた。

「クレアの事だ、賢いあの娘(こ)なら自分である程度の抵抗はするさ。悠長な事も言ってられないが、焦ってもしょうがない。それに……あの娘(こ)、そう言う事には耐性がある……」

シンシアはそう言って、天井を見上げながらゆっくり煙草の煙を吐く。

「耐性あるって……それはあくまで仕事上の『遊び』だろ、シンシア。

クレアだって、男から手加減なしにされれば、いつまで精神がもつか……」

シンシアの言葉に、アマンダはむっとした表情になって睨む。アマンダのその言葉を最後に、重々しい沈黙が『館』の玄関ホールを包んだ。

その頃、馬車の中のクレアは、じっと窓の外を眺めていた。首都『シゼルカンド』へ向かう街道は馬や馬車の往来も多く、彼女の乗る鉄格子の嵌った馬車の中を追い越しざまやすれ違いざまに覗く連中も多かった。その連中の多くが、鉄格子付きの窓から外を見ているその馬車の雰囲気に似つかわしくない美しい女を見て、皆、驚いた顔つきになる。

「暇ですね……少しつまみませんか？」

役人は少しはにかんだ笑顔を浮かべて、自分のバックから袋に入れ

られた焼菓子をクレアに差し出した。

「あっ……ありがとう……」

クレアは役人の意外な言葉に驚きながら、その袋に手を伸ばしたが手枷が邪魔で袋の中に手が入らなかった。役人はそれを見て、一旦、焼き菓子の袋を椅子に置き、ポケットから鍵を取り出してクレアの手枷を外してやる。

「良いの？こんな事して？」

怪訝な表情でクレアが尋ねると、役人はイスに置いた焼き菓子の袋を再びクレアに差し出しながら答える。

「あなたなら大丈夫でしょう。
扉は外から鍵がかかってますしね。」

「私はやってない。だから逃げる必要などない」

そうきっぱりと言ってから、クレアは右手を袋の中に伸ばし焼き菓子を一つ摘んで口に入れる。その瞬間、クレアの表情がぱっと明るくなる。

「あっ！この紅茶のクッキー美味しい！
紅茶の香りが鼻から抜ける！
バターの風味も良い！」

「よろしければ、売っているお店お教えしますよ」

役人はクレアの表情が明るくなったのを見て笑顔でそう答える。

「ありがとう……是非、売ってるお店の場所教えてね。
……でも……私、そこへ行けるかしら……
罪状が罪状だから……
罪を認めれば、『死罪』……
かと言って、否認すれば『拷問』するんでしょ、認めるまで……」

クレアが表情を曇らせてそう言うと、役人は何故か窓の外に視線を外して独り言の様に呟いた。

「私はね……いえ、私のお仲間の多くも……
あなたへの『逮捕状』見た時はみんな首を傾げたんですよ。
いえ、ここだけの話、確かに機密の漏えい疑惑はあるんです。
でも、それが何であなたかってね。
確かに『証拠』と言える様な物や証言はあるんですが……」

そこまで言ってから、また笑顔に戻って焼き菓子の袋をクレアに差し出し明るい声で続けた。

「……あっ、今のは私の『独り言』ですからね。
さあ、よろしかったら、もっといかがですか？」

クレアは焼き菓子の袋に、再び手を伸ばす。

「ありがとう……お言葉に甘えて、もう少しいただくわ」

焼き菓子を頬張りながら、クレアは窓の外を見てあれこれ色々考えていた。その時、彼女の脳裏に城でされた屈辱の行為の数々が蘇る。そうすると体の震えが止まらなくなった。思わず、彼女は両手で自分自身を強く抱きしめた。

「どうかされましたか？寒いですか？」

クレアの様子に気が付いた役人はそう言って、自分の上着を脱ぐと彼女の体にそっとかけてくれた。

「優しいのね……」

クレアはそう言って上着の前を握ってぎゅっと合わせ、役人の顔を見て微笑む。今は、もうこれ以上考えないでいようと彼女は思った。少なくとも、この役人を見る限り希望を捨ててしまうにはまだ早い気がした。

# 第47話　湖に浮かぶ監獄

クレアを乗せた馬車は首都『シゼルカンド』の外れにある監獄に到着しようとしていた。

この監獄、外見は高い壁に囲まれた城塞その物で、しかも湖の上に小島の様に浮かんでいた。監獄と岸とはかなり距離が離れていて、一本の石造りの長い橋で結ばれていた。

鉄格子の嵌った窓から、その監獄を見たクレアはその不気味なたたずまいに思わず身震いをした。

「すみませんが、手続き上、また手枷（てかせ）をしていただきますね」

そう、役人はここに来るまで一度外した手枷をずっとそのままにしてあったのだ。

「あっ……今まで手を自由にさせておいてくれてありがとう」

クレアはそう言って、両手を揃えて役人の方へ差し出すと、彼はクレアの細い手首に外してあった手枷を再び付けて施錠する。

「怖いですか？」

役人は心配そうな顔でクレアを気遣う様に尋ねた。

「怖くないと言えば嘘になるわ。『女』ですから……」

クレアの言った『女』という言葉の深い意味を理解し、役人は気の

毒そうな顔になる。クレアは、そんな彼の股間にそっと掌（てのひら）を置き、耳元に顔を近づけて甘い声で囁く。

「お願い助けて……もし助けてくれるなら、
私……あなただけの『女』になっても良いわ……」

「残念です。もし、私に妻と子供が居なければ、
あなたのその『甘い囁き』にのっていたかもしれません」

役人は苦笑を浮かべて、すぐにそう答えた。

「そう……奥さんと子供さんを愛してるのね。
羨ましいわ……そう言う人たちが居て……。
今の言葉は忘れて……冗談だから……」

クレアは役人の顔を見ながら、残念そうな表情で言う。もちろん、クレアはこの時、彼が彼女の提案を飲むとはまったく思っていなかった。ここで二人手に手を取って逃げてもすぐ捕まる事は目に見えているし、捕まれば例え無実だとしてもその場で殺される事は分かりきっていた。それでも、何故かクレアはあの様な『誘い』をしたかった。もしかすると、この役人相手に自分の『女』としても魅力をもう一度確認してみたかったのかもしれない。こんな切羽詰まった場面で、そんなちっぽけ自尊心を満足させてどうなるものでもなかろうにとクレアは自分自身の愚かさを心の中で笑った。しかも、こうもあっさり否定され自尊心を見事に打ち砕かれてしまって、自分自身がどうしようもない『愚か者』に思えた。

馬車はやがて監獄の対岸、橋の袂（たもと）に到着する。

橋の袂には立派な石造りの建物があった。この建物、湖の切り立った岸ギリギリに建っている。切り立った岸の高さは優に二十メートルを超えるのではないかと思われた。監獄から伸びた橋はそのままこの建物の裏側に繋がっている。つまり、監獄へ繋がる橋へは、この建物の中を通らない限り行く事は出来ない構造になっていた。

馬車が到着すると、御者が腰に付けた鍵を使って馬車の扉を開ける。

「クレアさん、私はここまでです。
ここから先は、監獄の看守があなたを管理します」

役人はそう言ってから、クレアの耳元に顔を近づけて小声で囁く。

「奴らは同じ役人でも素性が怪しい奴らばかり、
どうか言動にはくれぐれも気を付けて下さい。
それから……言い難(にく)いのですが……
奴らの『要求』には素直に応じて下さい。
抵抗すれば、奴らは手加減と言う物を知りません。
私は、あなたの『無実』を信じます。
ですから、くれぐれも死に急ぐ事はしないでください」

「ありがとう……
あなたとはこんな形じゃなくて知り合いたかった。
もし、晴れて無実が証明されて解放されたら、
『館』に遊びに来て……」

クレアは、微笑みを浮かべて役人に言った。

「私の様な安役人では、
『薔薇の館』であなたと遊ぶ様な贅沢はできませんよ」

役人は自嘲気味に笑って答える。

「あなたなら、一度目は『タダ』で良いわよ」

クレアは、そう言ってから無理に明るい笑顔を浮かべウインクする。

その後、橋の袂の建物内で書類上の手続きを済ませた後、クレアは監獄の看守に身柄を引き渡された。二人の看守に挟まれて建物奥へ消えてゆくクレアを、役人は心配そうな眼差しで見送っていた。

事務室の裏は、広い倉庫の様な場所だった。そこには馬車が一台停まっていて、その馬車の先はまっすぐ監獄へ伸びる橋に繋がっていた。クレアの両脇に立つ看守は、一人が身長二メートル近い大男で、もう片方はクレアより身長がやや高い程度の小男だった。大男の方が馬車の扉を開けると、小男がクレアに向かってぞんざいな命令口調で言った。

「女……乗れ……」

クレアは小男をじろりと睨んでから、大人しく馬車に乗る。クレアが乗って座席に腰掛けると、小男もすぐに乗って来て彼女の横に座り扉を閉めた。大男は乗らないのかとクレアが不審に思っていると、突然、ずんっと車体の後ろ側が下がる。クレアは、思わず振り返り、後ろの窓から覗くと大男は馬車の後ろに立って乗っていた。大男が馬車に乗ると、馬車はゆっくり走り始める。

馬車が動き出すとすぐに小男はクレアの太もも辺りをドレスの上から撫でながら、口元にいやらしい笑いを浮かべて彼女の耳元で囁く。

「これが男なら、歩いて橋を渡らせる所だ……感謝しろよ。
あんた『薔薇の乙女』だって？
さすが良い女だ……後でたっぷり可愛がってやるからな」

「それはどうも……
でも、私はまだ『容疑者』よ。『囚人』じゃない。
変な事をしたら、後で訴え出てやるから……」

クレアは小男を睨みつけ、太ももを撫でていた男の手を払い除ける。

「ふっ……気の強い女だな。まあ、そう言う女も嫌いじゃない。
言っておくがな、お前は『スパイ容疑』。
取り調べ中に殺しても誰も文句は言わん……いや言えない。
下手に文句付ければ、今度は自分に火の粉が降りかかるからな」

小男はそう言って、今度はクレアの胸元から手をドレスの中へ入れようとする。

「止めてっ！」

クレアは思わずそう叫んで、小男の手を勢い良く払い除け、その頬を平手で思いっきり殴る。

「てめぇ！何しやがる！
『薔薇の乙女』って言っても所詮『娼婦』だろうが！
カマトトぶるんじゃねぇぞ！」

そう叫ぶと小男は、手枷を付けられたクレアの手を掴み、その右手の人差し指を掴むとじわじわと手の甲の方へ無理矢理曲げて行く。ク

レアの顔が苦痛に歪む。

「このまま指をへし折ってやろうか？嫌なら、大人しくしてな」

小男はクレアの指を握ったまま、自分の唇を彼女の唇に押し当てる。クレアは一瞬、悔しさと怒りの入り混じった表情を浮かべたが、すぐに諦めた様な表情になりそっと目を閉じた。

馬車は橋を渡り終え監獄の高い壁の中へ入って行く。壁の内側には古城風の建物があった。周囲を取り囲む壁は建物より高く、外からは監獄自体は見えな造りになっていた。周囲の壁も、実際はかなり厚みがあり所々に窓がある所を見ると『壁』と言うよりそれその物が『建物』と言って良いのかもしれない。

「この続きは後でな……」

建物の立派な玄関の前に馬車が着くと、小男はやっと唇を離し、にやりと笑ってクレアの耳元でそっとそう囁き、先に馬車を降りる。クレアは、慌ててドレスと髪の乱れを直してから小男に続いて何事もなかったかの様な顔つきで馬車を降りる。クレアが馬車を降りてくると、すぐに大男も馬車から降り、彼女の横についた。

その頃、『館』の屋根の上、一人、ロミが立ってシゼルカンドのある方角を見詰めていた。

「クレア、人間なんぞにあなたの命を奪われてたまるものか……」

彼女の金と銀の瞳が、オレンジ色に光り瞳孔が蛇のごとく縦長に変わる。ばさりと音がして背中に黒く大きな翼が広がる。

その時だった……

「何処へ行くつもりだ、ロミ……」

ロミがその声に驚き振り返ると、いつの間にか後ろにロメオが彼女と同じ様にオレンジ色の瞳で立っていた。

「邪魔すんなよ、ロメオ！
あんたはシンシアに尻尾振ってりゃ良いんだよ」

「ふっ……相変わらずだな、お前は……。
しかし、今、お前が『館』から消えれば大騒ぎになるぞ。
今は抑えろ、ロミ。
クレア……いや、ソフィア姫はその姿に似合わず図太い運命の糸を持っている。
この程度では死なんと俺は思うぞ」

ロミは背中の広げた翼を畳みながらロメオに近づいて行く。そして彼の目の前に立つといきなりネクタイを掴み彼の顔を自分の顔の前に引き寄せる。

「良いだろう、ロメオ。今は抑えてやる。
その代わり、もし、クレアが殺されたらお前を喰い殺してやるからな！」

ロミはそう捨て台詞を吐いてからロメオのネクタイを離すと、そのままかき消す様に姿を消した。

「やれやれ、なんで奴があの姿なんだ？
ギャップが酷過ぎるだろう……」

ロメオは呆れ顔で頭を掻きながらそう言うと、こちらも、蝋燭の火を吹き消す様にその場から姿を消した。

# 第４８話　悪魔の看守と白銀の騎士

クレアが大男と小男の看守に連れられて『監獄』には似つかわしくない重厚な造りの玄関に入った。そこは『館』と良く似た造りのホールになっていた。小男はまるで恋人の様に慣れ慣れしくクレアの細い腰に手を回し、大男は時折上からクレアのドレスの胸元を覗き込んではにやにや笑いながら、クレアを連れて正面にある大階段を上がって行く。二階にあがると片側が窓になって中庭を見下ろせる廊下が左右に伸び、窓の無い方には沢山の扉が並び多くの部屋がある様だった。クレアはその内の一室に連れ込まれた。そこは一見したところでは『監獄』と言う暗い雰囲気はまったくなく、気品ある貴族が使う寝室と言う趣（おもむき）の部屋だった。大男は部屋の外に置かれた椅子に腰かけて控え、小男だけがクレアを連れてその部屋に入った。

部屋に入ると、クレアはいきなり小男に抱きつかれ、そのまま中央にあった天蓋付きのベッドの上に投げられた。クレアは慌ててベッドから降りようとすると、小男は上着を脱ぎながらクレアを見て強い口調で言った。

「大人しくしてろよ。
抵抗するなら、先に部屋の外で控えてるあの大男に抱かせるぞ！」

そう言ってから小男は、ゆっくり彼女の近づき、今度はその耳元に口を近づけ小声で続けた。

「あいつに犯（や）られたら最後、二度と商売出来ない体にされるぞ。
それでも良いか？」

小男はクレアの耳元から少し顔を離し、彼女の目をじっと見て、い

やらしい笑いを口元に浮かべながら彼女の答えを待つ。

「……分かったわよ。こっちは体が資本の商売なんだ。
抵抗しないから、乱暴にしないと約束して！」

クレアは精一杯強がって小男を睨む。小男はクレアの顎を片手で掴んで顔を引き寄せて囁いた。

「お前、まだ本気でここから出て、元の商売に戻れる気でいるのか？
率直に言ってそれは諦めろ。
お前に残された道は二つに一つ。
このまま、俺の『女』になってここでそれなりに良い暮らしをするか、
あるいは、女に飢えた男が入ってる地下の牢に投げ入れられるかのどちらかだ」

「私は『無実』よ。必ず『館』に戻って見せる」

小男の言葉にクレアは彼の顔を睨みつけながらそう答えた。

「ふっ……相変わらず、気の強い女だ。
まあ、良い。確か、クレアとか言ったな。
お前、あの『ソフィア姫』そっくりなんだってな。
気の強いお姫様を無理矢理征服するってのも楽しそうだ」

小男はそう言って、ベッドのクレアを仰向けにして馬乗りになり、ベッドの頭の部分にあった鎖に彼女の両手を拘束している手枷（てかせ）を繋ぐ。さらに、必死で身をよじり足をばたばたさせて抵抗するクレアの足首さえもベッドの両隅から伸びる鎖付きの足枷（かせ）に繋いだ。クレアはこれで両手を頭の上に、さらに両足を大きく開いた形でベッド

の上に拘束されてしまった。このベッド自体の外見は天蓋付きの貴族の館に置いてある物と変わらず豪華で品の良さそう感じの物だったが、やはり『監獄』の備品、普通ならあるはずもない体を拘束する為の鎖が目立たぬ形で最初から取り付けられていたのだ。

「私に何をする気？」

体の自由を奪われたクレアはそう言って、小男を睨みつける。

「楽しむ前に、とりあえず尋問の時間だ。
給料分、ちゃんと仕事もしないとな」

不気味な笑みをその口元に浮かべてそう言うと、小男はベッドから降り部屋の隅にあった隠し扉から隣の部屋へ消えて行った。クレアはこれから何が行われようとするのか分からず、不安げな顔で小男を目で追っていた。

しばらくすると、小男は小さなワゴンを押しながら戻ってきた。彼がベッドの脇までそのワゴンを持って来た時、クレアの目が大きく見開かれ、その美しい顔が恐怖に歪んだ。そのワゴンの上には、明らかに『良からぬ目的』に使うであろう事が一目瞭然のおぞましい形をした色々な器具が並んでいた。

「止めて！お願い！」

思わずクレアは叫びを上げ、無駄と知りつつ必死に体をよじってそこから逃れようとする。小男は怯えるクレアの様子を楽しそうに眺めながら、ワゴンの上の短刀をまず手に取った。彼は、その刃を卑猥な表情でぺろりと舐めると、いきなりその刃先をクレアのドレス

の胸元に差し入れ一気に下に引き下ろす。そして、そのまま彼女のドレスを下着と一緒に足元まで引き裂さいてしまう。そして、引き裂いたドレスを左右に広げると、小ぶりではあるが形の良い胸を露わにした。

「さて……最初に聞こうか、女。
お前が機密を聞いた相手と漏らした相手の名を言え」

そう言いながら、小男はワゴンの上の器具の一つを手に取り、横たわるクレアの目の前にその器具を見せつけて続ける。

「素直にしゃべるか？それとも……『これ』を体験してみるか？」

目の前の、その器具のおぞましい形にクレアの体ががたがたと震え始め、絞り出す様な声で哀願する。

「いや……そんな物は使わないで……お願いよ……。
信じて！私は知らない。本当に、私は『無実』なの。
だから、答えようがない」

「そうか、そんなに『これ』を使って欲しいのなら仕方ないな」

小男はその手に持った器具の先で、クレアの胸を少し嬲った後、にやりと笑い、器具の先で彼女の体をなぞりながらゆっくりと下へ移動させて行く。

「嫌ぁーっ！止めてぇーっ！お願いっ！」

器具の先が彼女の臍を越えて間もなく、クレアは恐怖に耐えきれなくなり、そう絶叫すると意識を失った。

「ふっ……気を失ったか……。
どの道、これを使えばすぐに意識を取り戻すさ」

小男はそう言うと、手に持った器具を意識を失っているクレアの体のさらに下の方へ移動させて行く。

その時だった……突然、部屋の扉が開き、二人の騎士風の男が飛び込んで来た。二人共、白銀に羽飾りが付いた兜に、同じく白銀に金の模様の入った軽鎧、そして背中に竜と天使が描かれた美しい紋章が刺繍で縫い込まれた純白のマントを羽織っていた。一人は腰に長剣を吊るし、もう一人は背中に重剣を背負っていた。

「お役目、御苦労！だが、そこまでだ！」

その声に振り返った小男が、二人の姿を見て声を上げる。

「げっ！『神聖エリシア騎士団』！何であんたらがこんな所に！」

長剣を吊るした騎士が小男に笑顔を浮かべながら、しかし、その口調は有無を言わせぬ強さを秘めて言う。

「貴殿の仕事はここまでだ。
ここから先は『法王グリエル５世』様自らがその女を取り調べる。よって、女の身柄は我々『神聖エリシア騎士団』が預かる。
貴殿はこの女の手枷の鍵を置いて事務所へ帰られよ。
すでに、事務手続きは済ませてある。
取り調べ、大変、御苦労であった」

「ちっ……これから面白い所だったのによ……」

小男は、悔しげにそう言って長剣の騎士をじろりと睨み、クレアの両手首を拘束している手枷の鍵をしぶしぶと彼に渡す。ベッドの上で裸身を晒して気を失っているクレアを、未練がましく一度舐める様な視線で見た後、扉の方へ歩きだす。扉のノブに手を掛けた所で小男は、二人の騎士を振り返る。

「どうせあんたらも、城でこの女を思う存分楽しむだろう？」

いやらしい笑いを口元に浮かべてそう言うと、小男の看守は部屋を出て行った。

小男が居なくなると背中に重剣を背負った騎士は、自分のマントを脱ぐとベッドの上で意識を失っているクレアの上にふわりと掛けてやりながら呟く。

「良かった……どうやら間一髪、間に合った様だな」

長剣を吊るした騎士は、ワゴンの上の『いかがわしい器具』を、まるで汚い物を触る様に指先で持ち上げながら吐き捨てる様に言う。

「まったく、こんな物を女性に使うなどとは下品極まりない輩だ」

重剣を背負った騎士が気を失っているクレアを見下ろしながら気の毒そうに言った。

「そんな物を実際に使われそうになっては、
さすがのクレア嬢も耐えきれなかったんだな。

完全に意識を失っておられる。
彼女は、このまま私が運ぼう……」

「ふっ……お前、さりげなく良い想いが出来る方を取ったな。
これは借りにしておいてやるから、今度、酒でもおごれよ」

長剣の騎士はそう言いながらクレアの両足を足枷から外す。同時に重剣の騎士は彼女の手枷を外すと、気を失っている彼女の体をマントで包んで軽々と抱き上げる。

「しかし、噂通り素晴らしい美人だな……」

クレアを抱き上げた騎士が、彼女の顔をまじまじと見ながら呟く。

「噂じゃ、まるでエメラルドの様な美しいグリーンの瞳だそうだ。
瞼を閉ざしておられてそれが見られないのが残念だな。」

長剣の騎士も彼女の顔を覗き込んで囁く。

「さて、法王陛下が首を長くしてお待ちだ、急ごうか」

クレアを抱いた騎士はそう言うと扉の方へ歩きだす。長剣を吊るした騎士がその後を追う。

# 第４９話　見知らぬ館のクレア

クレアが目を覚ますと、そこはベッドの上だった。そして何かに気が付き、そっと彼女は回りを見回した。しかし、そこにはあの小男の姿は居なかった。さらに体を拘束していた手枷（てかせ）や足枷（あしかせ）も無くなり、ベッド脇に置かれていたあのおぞましい形をした器具を並べたワゴンもなくなっていた。しかし、それと同時に彼女の心に言い様のない不安が沸き起こって来る。

（まさか、あのまま、私、あのおそましい物で……？）

クレアは、恐る恐る自分の体に意識を集中してみる。しかし、体のどこにも違和感はなく普通のままだった。

「良かった！私、助かったんだ！
でも……何故（なぜ）？じゃあ、ここはどこ？」

思わず彼女は上半身を起こして叫ぶと、改めてもう一度周囲を見回す。落ち着いて見回すとそこは、あの監獄であの小男の看守に連れ込まれた部屋とは明らかに違っている様だった。ベッドの上から見上げる天蓋の色も刺繍もあの部屋の物とは明らかに違っていた。そして何より、あの監獄の部屋は見かけこそ貴族の寝室風に造られてはいたが、そこには微かに血と男の嫌な匂いがしていた。しかし、この部屋には香を炊いたかの様な心の落ち着く良い香りが残っていた。部屋全体が白く清潔感も強い。今思い出すと、あの部屋には連れ込んだ女を嬲（なぶ）り者にする為のベッドはあったがその他の調度品らしい物はまったくなかったが、この部屋にはちゃんと品の良いドレッサー、ソファー、テーブルなどが置かれていた。

ベッドの上で周囲を見回し観察していた彼女の耳に、突然、扉をノックする音が聞こえた。

「クレア様、入ります……」

ノックの後に、若い女の声が続く。クレアは一瞬どうすべきか悩んだが、とりあえず、上半身を起こしたまま布団を胸まで引き上げて、声は出さずにじっと扉の方を見守る。一呼吸開けて扉が開き、頭を下げたメイド服姿の若い娘が現れた。その娘がゆっくりと顔を上げると、クレアと目が合う。

「あっ……」

メイドはクレアが目を覚ましているのに驚いた様子で小さな声を上げたが、すぐに気を取り直し、膝を折ってクレアに改めて挨拶し直すと彼女の方に歩いてくる。

「気がつかれましたか？ご気分はいかがですか？」

ベッドの脇に来るとメイドは笑顔でクレアに尋ねる。

「ここはどこ？」

クレアはやや不安げな表情で、胸まで上げた布団をさらに肩まで引き上げながらメイドに尋ねる。

「ご心配なさらずに……ここは安全な所ですよ。
今、お召物（めしもの）をご用意しますので、しばらくお待ちください」

そう言って、メイドは部屋の壁際にあったクローゼットから下着や

ドレスを取り出して、クレアの居るベッドの上に運んでくる。ドレスは、深紅の生地に白いレースがと花の刺繍が施された素晴らしい物で、下着も絹と繊細なレースをふんだんに使った上質の物であった。クレアは、このまま裸でベッドの上に居続ける訳にもゆかず、メイドの持って来た下着を身に付ける事にした。

ベッドの上で下着を身につけると驚いた事に、サイズがピッタリの物だった。彼女が下着を身につけるのを確認するとメイドはドレスを手に取りベッド脇の床に広げて置く。

「お手伝いします。どうぞこちらへ、クレア様」

クレアが、ベッドから降りて床に広げられたドレスの真ん中に両足を入れて立つと、メイドは手際良くドレスを持ち上げて行く。クレアが、持ち上げられたドレスの裾に腕を通すと肩までドレスを上げ、背中の紐を下から締め上げて行く。

「もし、きつい様なら言ってくださいね」

メイドは手慣れている様できつからず緩からずの絶妙な締め加減で背中の紐を締め上げて行く。首の後ろまできちんと締め上げ終えると、このドレスもまたクレアの体にぴたりとあった物だった。背中の『薔薇に囚われし聖女』の刺青が隠れる様な造りと言い、胸の曲線や腰の位置などは他人の物とは思えぬほどクレアの体に合っていた。

（この微妙なラインとデザインの癖は『バウマンの店』の物では？）

クレアは、ドレスを身につけて体を少し動かしてみてそう思った。しかし、彼女は同時に思う。

（なら何故、ここに私にぴったりの『バウマンの店』製のドレスがあるの？）

とにかく、あの『館』での逮捕劇からここまでの事、すべてがクレアには分からない事だらけだった。

「では、靴をお持ちしますので、履いてソファーに座ってお待ちください。

今、ご主人様とご友人をお連れしますので……」

メイドはそう言って、クローゼットから真っ白な靴を取り出し彼女の足元へ置くと一礼してから部屋を出て行った。クレアはとりあえず靴を履いて、部屋の真ん中のソファにどっかと腰を下ろした。

「ロミ……『館』のみんな、どうしてるかな？クロウは……」

天井を見ながらそう呟いて、クレアは、思わず首を激しく左右に振る。

「なんで？！なんでクロウの事なんか！

どうせ、あいつは今頃、ヘルガでも口説いてるんだわ、きっと！」

クレアはそう憎々しげに独り言を言う。ヘルガを口説くクロウを想像すると何故か余計に腹が立って来るクレアだった。

『薔薇の乙女』達はギリギリまでクレアの事を話し合っていたが、これと言った明確な解決策も浮かばず「とりあえず商売だけはちゃんとするよ！」と言うシンシアの一言で今宵もそれぞれ『お仕事』

を開始していた。すべての乙女達が仕事中になり、手が空いたシンシアはしばし仕事部屋の奥にあるシンシアの私室に戻っていた。そして、そこにはシンシアの他にロメオ、ロミが居た。

シンシアの私室にはロメオとロミ以外には誰も立ち入った事はなかったし、シンシアもそれを絶対に許さなかった。そこには、深紅のビロードが壁や天井に張られ、中央に黒檀（こくたん）で出来た重厚な天蓋付きのベッドが中央にあり、その横に同じく黒檀の丸テーブルと、それを挟んで同じく黒檀でできた椅子が一脚づつあった。中庭に面した広い窓はあったのだが日中でもレースのカーテンが閉められ、外から中の様子をはっきり見る事は出来なかった。

その椅子に座り、シンシアは長パイプで煙草を吹かしていた。

「……でロミ、お前、ロメオが止めなければどうするつもりだったのさ」

シンシアは、ベッドの端にちょこんと座っているロミをじろりと見て尋ねる。

「どうもこうもないさ、力づくでクレアを取り返すつもりだったに決まってる」

ロミがその可愛いらしい姿に似つかわしくない憮然とした表情と口調で答えると、シンシアは呆れた顔でロミを見て言う。

「あのな、ロミ。そんな事をしたらクレアはどうなる？
もう、この国に居られなくなるんだぞ、良く考えろ。
そうなれば、あの娘（こ）の悲願である復讐も遠くなる」

「復讐なんぞ、この私が手助けしてすぐにもしてやるさ！
要はあの『スザク』とか言う男を殺せば良いのだろ？
私がクレアの目の前で生きたまま喰い殺してやるよ！」

ロミは金と銀の瞳をオレンジ色に輝かせ、さらに犬歯を伸ばして、シンシアに喰い付かんばかりの表情で怒鳴る。そんなロミを見てロメオはため息をつきながら言う。

「あのな、ロミ、クレアの望む復讐とは彼女自身の手で奴を殺す事。
そして、自身の汚辱の記憶を雪ぎ、両親の無念を晴らせる形でな。
ただ殺せば良いのでない」

シンシアがロメオの言葉に続ける。

「それにな、ロミ……私はこの事件『裏』があると睨んでる。
たぶん、クレアは大丈夫だと思う。
だから、今は我慢して待ってろ、私は自分の『読み』を外した事はないからな」

そう言ってシンシアは意味ありげに笑った。

「分かったよ。とりあえず、シンシア、お前の『読み』を信じてやる」

ロミはそう不満げに言葉を吐くと、ふてくされた様にベッドにばたりと仰向けに倒れた。

「さて、そろそろ乙女達の第一ラウンドが終了する時間だな。
ロメオ、私たちはホールに戻るぞ。
それから、ロミ、今夜はもう良いから、

『離れ』の自分の部屋に戻ってろ。
それから、頼むから大人しくしててくれよ、馬鹿な事するんじゃないぞ」

シンシアがそう言うと、ロミはいつも通りの金と銀の瞳を持つ可愛い少女の顔に戻ってベッドから降り、シンシアに向かってスカートの裾を広げて膝曲げて挨拶しながら今までと違った可愛い声で言った。

「はい……仰せのままに、マダム……」

「ホント、ロミ、面倒だけは起こさんでくれよ」

ロミをやや不安げな表情でじろりと見てからシンシアはそう言うと、テーブルの上にあった灰皿で煙草を揉み消すと椅子から立ち上がり部屋を出て行く。それを見てロメオとロミも彼女の後に従った。

# 第５０話　クレアと法王様と枢機卿

クレアが部屋のソファに座って『館』の事などあれこれ考えていると、扉がノックされる音が再びした。

「クレア様、ご主人様とご友人をお連れしました」

続いて先ほどのメイドの声がした。

「どうぞ！」

クレアは扉に向かって声を掛けるとソファーから立ち上がる。

扉が開いて、まずあのメイドが入って来て扉の横に頭を下げて控える。そして、次に入って来た人物を見てクレアの表情がぱっと明るくなり、思わず叫んでいた。

「ティエリー！」

クレアはそう叫んで彼の方へ駆け出していた。そして、自分に向かって駆けてくるクレアを見て微笑んで立っているティエリーの胸に飛び込んだ。クレアは彼の胸に飛び込むと彼の背中に手を回してしっかりとしがみ付く。彼もクレアの華奢な体をしっかりと抱きしめる。

「あなただったのね……私を助けてくれたのは！
もうダメって思った。死ぬほど怖かった。
あなたにもう二度と会えなくなってしまうと思った！」

ティエリーにしがみ付いたままクレアはそう言って、得体の知れぬ不安と恐怖からやっと解放され愛するティエリーに再会出来た喜びで耐えきれなくなり彼の胸の中で泣きじゃくる。ティエリーはそんなクレアがたまらなく愛おしく、その美しいブロンドの髪を優しく撫でる。

「すまない……クレア……君に怖い想いをさせて……」

ティエリーはクレアの耳元で優しく囁くと、クレアの顎を持って顔を上げさせてその唇に自分の唇を押し当てる。クレアもティエリーの背中に回していた手を彼の頭に移し、しっかりと抱き寄せる。

その時だった。ティエリーの背後で突然、何者かの咳払いがした。

「お楽しみの所悪いが……
私が居る事を忘れないで頂きたいな、ティエリー」

クレアはその声に驚き、慌ててティエリーから唇を離してから、ティエリーの体の横から後ろを見た。そこには、立派な口髭をたたえた茶色の髪に灰色の瞳の大柄なティエリーと同じ年恰好の男がにやにや笑いながら立っていた。

「ティエリー、この方は？」

クレアは頬を少し赤く染めてティエリーを見上げて尋ねる。彼は少し困った顔をして後ろの男に尋ねる。

「悪い、グリー。クレアに会うのは久しぶりだったんでな。
ところでどうする、彼女に君の正体を明かすかい？」

「彼女には色々迷惑かけたんだ、隠しておくのも良くないだろう」

グリーと呼ばれた男は微笑みながら答えると、まだティエリーの腕の中にいるクレアの横に跪くと胸に右手を当て頭を深く下げて行った。

「初めまして、クレア殿。

私、このダルメハイン法国の法王を務めさせて頂いております、『グリエル5世』と申す者です……以後お見知り置きを……」

その言葉に、クレアの顔がみるみる青ざめる。そして、自分をまだ胸に抱いているティエリーの腕を慌てて振り払うと、跪く法王の前で両手をついて深々と土下座をしながら泣きそうな声で哀願した。

「ほ、法王様！お顔をお上げくださいまし。

私、『クレア＝カラス』と申します。

陛下に公認を頂いております、

娼館『薔薇の館』にて『娼婦』をしております。

どうか、この無礼をお許しくださいませ！

また、この責任はすべて私の不徳のいたす所です。

私一人でどの様な罰でもお受けいたしますので、

ボンフィス卿にはお咎(とが)めありませぬ様お計らい下さいませ」

そのクレアのうろたえぶりには法王も驚き、土下座をするクレアの肩を優しく抱いて体を起こしながらそっと囁く。

「クレア殿、あなたこそお顔を上げてください。

そうやって、土下座せねばならぬのは、

実は私の方なのですから……」

法王は抱き起こしたクレアの顔を見ると、彼女はその宝石の様に美しいグリーンの瞳から涙を流していた。

「お願い……法王様……ティエリーだけは助けて。
私はどうなっても良いから……」

クレアは法王の目をじっと見つめて、両手を合わせて握り祈る様にして彼に懇願する。そんなクレアの姿を見て、法王は傍らに立つティエリーに、少し意地悪げに言葉を投げる。

「ティエリー、君はどれだけ彼女に愛されてるんだ。
さっきだって、彼女は君の姿を見ただけで、
もう他には何も見えなくなった様だしさ。
何でこんなに若くて美人が君なんかに……
そうだ！この無礼な行為の罰として、
クレア殿を今夜一晩、私の自由にさせよ！」

「それで……お許し願えるなら……
私は、喜んで法王様の自由になります」

クレアが覚悟を決めて頭を深々と下げてそう言うと、ティエリーは頭を掻きながら法王を見ながら言う。

「おいおい、グリー、彼女、真に受けちまってるじゃないか。
そう言う冗談はよせ！」

「僕としては『一晩自由に』ってのはまんざら冗談ではないんだが」

「まあ、女好きで有名な君の事だ、半分近くは本気だったかもな」

そう言ってティエリーと法王は顔見合わせ楽しそうに大笑いを始めた。クレアは何が何だが分からずに、その二人をぽかんとした表情で床に座り込んだまま見詰めていた。

その頃、クロウは一人、『離れ』の隣にある用心棒宿舎の屋根に登って夜空を見ていた。

「クレア……お前、大丈夫なのか……」

思わず彼の脳裏に、数人の男にベッドの上でオモチャにされているクレアの姿が浮かぶ。彼女は彼の方を悲しげな眼差しで見ていた。

「畜生！まただ！なんで、こうもあいつの事が気になるんだ！」

体を起こしてそう叫ぶと、自分で自分の頬を数回平手で叩いた。そして何かを振り払うかのように首を左右に振ってから、その場で胡坐(あぐら)をかいて深呼吸を数回して呼吸を整え、両手で複雑な印(いん)を結び、己の意識を一羽の『鷹』のイメージに集約して夜空に放(はな)つ。

「クレア、どこだ！お前は今どこに居る？」

『鷹』はクレアの微かに残る気配を追って首都『シゼルカンド』の上空まで飛んだがそこから先には絞り込めなかった。それでも『鷹』は何度もシゼルカンドの上空を旋回し続ける。

「やはり、クレアは結界の中に居るらしい。
微かに気配を感じるんだが……
くそっ！雑音が多過ぎる！あと一歩絞り込めない！」

屋根の上で目を閉じ胡坐をかいて印を結んでいるクロウの口が悔しげにそう呟く。

移送された馬車にも、監獄にも、そして今クレアが居る場所にも強力な抗魔術結界が張られていた。普通なら彼女がシゼルカンドに居る事すら分からないはずであった。それを、そこから漏れた微かな彼女の気配からシゼルカンドまで意識の『鷹』を飛ばせたクロウの持つ魔力は正に驚異的な物だった。

そして、アマンダは、とある客相手に仕事中だった。

女性にしては大柄なアマンダであったが、その男に背中から抱き締められていると、彼女が少女に見える程の体の大きな男だった。男は優しくアマンダの首筋にキスの雨を降らせながら、耳元で甘く囁く。

「久しぶりだな、アマンダ。今夜は存分にお前を味わいつくすぞ……」

アマンダは、腰をしっかり抱きしめる男の腕に左手にを重ね、右手を後ろに回し男の頬を愛おしげに撫でながら目を閉じて恍惚（こうこつ）の表情を浮かべながら呟く様に言う。

「ねぇ……ビクトル……こんな所であなた遊んでて良いの？」

「んっ？どう言う意味だアマンダ……？」

アマンダがビクトルと呼んだその男がそう言った瞬間だった、アマ

ンダの表情が獲物を狙う雌豹(めひょう)の如く鋭い物に変わり、片手でビクトルの襟首を掴むとそのままお辞儀をするかの様に体を前に倒し、彼の体を自分の背にのせて一気に前方へ投げ飛ばす。アマンダは素早く、床に背中から叩きつけられたビクトルに馬乗りになり、その襟首を締め上げ、叫ぶ。

「『神聖エリシア騎士団団長ビクトル＝キャメンティー』！
このまま締め殺されたくなければ、
うちのクレアの事件、知ってる事全部話しなっ！」

「ぐっ……な、何の事だ？」

アマンダに投げ飛ばされ、その上、首まで締め上げれたビクトルが苦しげな表情で問い返す。

「しらばっくれるんじゃないよ、ビクトル！
事が事だ、あんたが知らない訳ないだろう。
クレアは今どこに居る？クレアを嵌(は)めた奴は誰？
あの娘(こ)は、私にとって妹も同然。
もしも、あの娘の体に少しでも傷つけたりしたら許さないからね！」

アマンダは鬼の形相でビクトルを問い詰める。するとビクトルは急に笑い出す。

「ははははっ！さすがだな、アマンダ。
この俺を投げ飛ばすとは……だが、俺を誰だと思ってるんだ？
ここを刺されるとかなり痛いぞ。しかも、すぐには死ねない」

その瞬間、アマンダの顔が凍りつく。彼女はビクトルの襟から両手

を離し、そのまま頭の上に乗せる。

「良い娘(こ)だ、アマンダ。
俺は、気が強くて、腕っぷしも強いお前が好きだ。
そして、そうやって、素直な所もな……」

いつの間にかビクトルの右手が腰の後ろに付けていた短剣を抜いて
アマンダの腰の後ろに刃先を当てがっていた。

# 第５１話　事の真相と娼婦の怒り

「アマンダの第二ラウンドで、いくら彼女の常連客とは言え、あの『神聖エリシア騎士団団長ビクトル＝キャメンティー』が来るとはねぇ。
さすがの私も腰抜かしたよ。
また都合の良い様に予約客が今朝になってキャンセルでさ。
なんか嫌な予感だよ……アマンダの奴、無茶しなければ良いが……」

シンシアは、玄関ホールの受付で顧客名簿のチェックをしながら二階をじろりと見ながら独り言を呟いた。

「我々の様子を探りに来たのでしょうか？
まさか、部屋でアマンダを拷問でもしてるとか？」

後ろで控えているロメオがシンシアにそっと囁く。

「拷問はないだろう……あのビクトルはアマンダにマジで惚れてる。例え、法王にそう命じられても、奴ならアマンダを逃がすと思う」

愛用の長パイプに煙草を刺しならシンシアは小声で答える。

アマンダは両方の腕を後ろ手に縛られベッドの上に腹ばいに寝かさていた。そしてビクトルが彼女の上に馬乗りなり手に持った短剣を彼女の首筋に当てて耳元で囁く。

「さてと……アマンダ……立場は逆転したな。

君たちがしようとしてる事、全部、俺に話してもらおうか？」

アマンダはこの期に及んでもその顔に笑みを浮かべ背中に乗っているビクトルを振り返り憎まれ口を叩く。

「ビクトル、あんた、こんな趣味があったの？
でも、ごめん、私、そう言う『遊び』はした事ないの。
逆の立場の『遊び』なら専門だけどね。
こんな遊びが御希望なら、クレアが帰って来たら紹介してあげる。
あの娘は、そっちの『遊び』の専門だから……」

「ふっ……君は、ここまで来ても気が強いな。
まあ良い、今日はいつもとは違う君の表情がみたいからな。
俺だって、出来れば君には手荒な真似はしたくないんだよ……」

ビクトルはそう囁いて、アマンダの耳を軽く噛んでからぺろりと舐めた。

「あああっ！……くそっ！……ビクトル、お前、覚えてろよ！」

一番弱い部分を責められたアマンダの顔が一瞬『女』の顔になった。
そのアマンダに耳元でビクトルは再び意地悪げな表情で囁きかける。

「じゃあ、とっておきの事を教えてやるよ、アマンダ。
これを聞けば、君は素直に知ってる事を全部俺に教えてくれるはずだ」

その後のビクトルの言葉を聞いたアマンダは思わず背中のビクトルを振り返って声を上げた。

「ええっ！それって……」

そのアマンダ顔を見て、ビクトルは短剣を背中の鞘に収めながら優しい笑顔でウインクする。

「ええっ！じゃあ、私は『おとり』に使われたって事！」

部屋の中央のソファーに座って法王とティエリーの話を聞いたクレアは思わず素っ頓狂（すっとんきょう）な声を上げた。テーブルを挟んで向かいの席に座るティエリーがクレアに両手を合わせて必死になだめようとする。

「だから、事前に君が贔屓（ひいき）にしてる『バウマンの店』で、君にぴったりの新しいドレスと下着を作ってもらっていたんだ。もちろん、マダムと従業員には固く口止めしてね。それ、最上級ですごく良い物なんだよ」

その言葉を聞いたクレアは、怒り心頭の顔になる。

「新しいドレスだけじゃなく下着までを事前に用意してたですって！じゃあ、私がドレスから下着まで駄目にされる様な目に会うのが分かってたって事？　ティエリー、そこまで分かってて、あなた、その計画に乗ったの？」

クレアの言葉に、即座にソファーから飛び降りて床に土下座して叫ぶ。

「すまん！クレア！　これは国家の一大事だったんだ！許してくれ！」

「知らない！もう、ティエリーなんか知らないんだから！
私が、あの監獄でどんな怖い思いをしたか分かる？
どんなに謝ったって、二度と抱かせてあげない！」

クレアはそんなティエリーからぷいっと顔を背けて完全に臍を曲げてしまった様だった。そんな二人の姿をにやにや笑いながら見ていた法王は、この状態で言ってはいけない言葉を口にした。

「いやぁー、まるで仲の良い夫婦の痴話喧嘩を見てる様だ！」

顔を背けていたクレアがその言葉を聞き付け法王を睨みつける。

「法王様！そもそもこうなったのは、あなたの思い付きからでしょ！
それを他人事の様に……
これはドレス一枚で済む事じゃないですわ！
もし、あの時、助けが来るのが遅れて、
私があのおぞましい物を使われた後だったらどうするおつもりだったのですか！
そうなったら、今みたいに笑い事じゃ済みませんよ！」

法王の言葉は、クレアの怒りの炎に油を注ぐ結果になった。クレアの勢いに押されて、法王もソファーから飛び降りティエリーの横で土下座をする。

「すまぬ、クレア殿！
この埋め合わせは必ずするから、どうか許してくれ！」

土下座して、床に頭を擦りつける勢いの二人を見下ろしながら、クレアは顔を真っ赤にして怒鳴りつける。

「ホントに、あなた達『男共（おとこども）』と来たら、
やれ『国家』だ『政治』だとか言って、私たち『女』を平気で利用する！
その度に、私たち『女』がどれだけ傷つく事か、お分かりですか？！」

クレアの怒りは、すでに身分の上下を吹き飛ばしていた。その場でのクレアは絶対的な『女帝』と化していた。まるで降り止まぬ雨の如く続くクレアの説教を浴びながら、法王は土下座しながら同じく隣で土下座しているティエリーに小声で囁く。

「なあ、ティエリー、あの噂、やっぱり本当じゃないのか？」

「あの噂と言いますと？」

「ほら、クレアは本物の『ソフィア姫』だって噂だよ」

「また、この期に及んで急に何故その様な事を？」

「この感じ、うちの娘が機嫌損ねた時とそっくりだから……」

「でもそうなったら私は『ソフィア姫』の愛人になってしまいますよ」

「そうか、もし『ソフィア姫』が復権出来たら君が『クロフォード王』かぁ……」

「でも、現実のクレアは『ソフィア姫』に似た美しい一人の『娼婦』ってだけだよ」

二人が土下座しながらぼそぼそ話しているのに気が付いたクレアが雷を落とす。

「人が説教してる時に、あなた達二人は何をこそこそ話してるんですか！
ちゃんと反省しているの？私に誠心誠意、謝罪する気はあるの？」

「はい！お姫様！十分に反省しておりますので、どうかお許しを！」

法王とティエリーは土下座したまま、二人声を合わせて叫ぶ。

とりあえず、クレアが法王とティエリーから聞いたこの事件の真相はこうであった。

最近、クレアの母国でもあるクロフォード共和国に、このダルメハイン法国の防衛上の重要機密が漏れているらしいと言う事がクロフォード共和国へ法王が放った間者からの情報で判明した。そこでその漏れた場所、漏らした人物、クロフォード側の間者の特定を始めた所、某所から『薔薇の館』に出入りするダルメハインの重要人物から『娼婦クレア』を通じてクロフォード側の間者に流れているらしいと言う情報が法王の耳に入った。この話、クレアは確かにクロフォード出身の人間だし、彼女を『薔薇の館』に売ったのはクロフォードの現最高権力者の将軍スザク本人、その上、彼女の顧客にはティエリーをはじめダルメハインの重要人物がずらり。そこで、法王は早速、クレアのパトロンであり、自身の友人でもあるティエリーを呼び事実確認をした。ところが、ティエリーはその疑惑を一笑に付す。そもそもクレアが絶対にスザクに協力する事はないと断言したのだ。クレアの正体を知っているティエリーにしてみれば、そ

れは至極当然の事。『ソフィア姫』を生き地獄に落とした張本人のスザクに、『ソフィア姫』その人であるクレアが協力する事など天地がひっくり返ってもありえないのだ。この事実をそのまま法王に告げる事は出来なかったので、『街娼のクレア』がスザクに生き地獄さながらの目に遭わされた事にして法王には伝えた。ちなみに『薔薇の館』の伝統でそこで働く『乙女』達の本当の過去はマダムのシンシアと本人以外誰も知らないと言う事は周知の事実で、クレアとて例外ではなかった。その為、一般に知られているクレアの過去も多少大げさに脚色した所で法王も疑う事はなかった。また法王自身も色々と手を回し調べていたらしく、ティエリーの言葉を信じた。そこで、逆に漏れて来た情報を逆手に取り、クレアを逮捕して、真犯人達を油断させ、クロフォードの諜報組織を一網打尽にする計画を法王とティエリーらが画策したと言う訳だった。元々はクレアを逮捕した後は、直接この法王の公邸に彼女の身柄を移送して、表向きは法王自らが彼女を尋問すると言う名目で、諜報組織摘発まで保護する予定だったが、ついでにあの『監獄』での看守の目に余る横暴の噂も確認して処分しようと言う事になり、クレアがここでもその身を『おとり』に使われてしまったのだ。

法王とティエリーにとっての誤算は、『監獄』の不正摘発のクレアを『ついでに使った』と言う事に彼女が激怒した事だった。まあ、クレアにしてみれば本来なら、あの様な怖ろしい思いをする必要はなかったのに、『ついでに』と言う軽い言い方をされては怒らない方が不思議であったのだが。

## 第５２話　復讐の為の愛

結局、クレアはその後、当初の計画通り、クロフォードの諜報組織摘発まで法王公邸に客人として一週間滞在する事になった。

「私をここに留め置くなら、その分、ちゃんと料金払いなさい！」

と言うクレアの一言で、法王は彼女を一週間占有する代金としてとんでもない額を払う事になった。しかもその一週間、法王は公務が忙しく日中は公邸を留守にして宮殿に行っているのを良い事にティエリーが毎日の様にクレアに会いに来ていた。結局はティエリーのデート代金まで肩代わりした様な形になったが、法王自身、『とある理由』で、何故かその支払いに何の抵抗もなかった。

一週間後、クレアは晴れて『無実』のお墨付きをもらい釈放され『館』に帰る事になった。法王公邸の玄関には一台の大きな荷馬車が荷物を山積みにされて停まっていた。この山の様な荷物、法王から『館』の者たちへ迷惑を掛けたお詫びにとクレアに持たされた『土産の品々』で、もちろん、その品々を選定したのは法王ではなくクレアだった。

クレアが一週間使っていた部屋を出ようとすると、そっと法王が部屋に入って来た。

「クレア、帰ってしまうんだね……寂しいよ……。
ティエリーは先に玄関へ行かせたから……少しだけ……」

彼はそう言うといきなりクレアを抱きしめキスをする。少し長いキスの後、クレアはそっと法王の耳元で囁（ささや）いた。

「お願い、法王様、あなたとの事はティエリーには内緒にして」

法王は頷きながら小声で答える。

「分かってるよ、クレア。
僕との事はあくまで『商売』と言う約束だからね。
僕は君とティエリーの仲を裂く様な真似はしないよ」

そう言って法王はクレアの艶やかなブロンドの髪を愛(いと)おしそうに撫でる。

もし、クレアが普通の女性なら、これは許される事ではないのだろう。しかし、彼女は『娼婦』である。もし、この事がティエリーに知られても彼にはそれを咎(とが)める立場にはないし、それをしないのがルールだった。それともう一つ、他でもない、彼女にとって唯一の生きる目的、『復讐』の為だった。スザクによって文字通り『すべて』を奪われてしまった彼女に残されたのはたった一つ、その美しい『体』だけだった。復讐の為には、自らの『体』を利用するしかなかったのだ。ダルメハイン法国の『法王』の寵愛を受け、彼との強い繋がりを得るまたとないチャンスを彼女は逃さなかった。例え、他人から『悪女』と罵(ののし)られても構わないと彼女は娼婦になる時に覚悟を決めていた。時として死にたいほど自分自身が惨(みじ)めに思えても歯を食いしばり耐えて来たのだった。

（法王様、ティエリー……私を許して……）

その時、クレアは法王の腕の中で、彼とティエリーに心の中で詫(わ)びていた。

（分かってるわ……こんな私のたどり着く先は地獄。
死んでも、お父様やお母様の居る天国へは行けない。
それでも私は良い、あの男に復讐さえ出来れば……
その為なら、私はこの身と心を『悪』に染め抜く）

クレアの宝石の様に美しいグリーンの瞳から一粒涙がこぼれ落ちた。

法王に伴われて、大階段から玄関ホールへクレアが降りると懐かしい声がした。

「姉様！クレア姉様！」

そう叫んで、メイド服姿の小さな人影が彼女の方に駆けて来るの見えた。

「ロミ！」

クレアはそう叫ぶと、思わず駆け出していた。自分の方へ駆けて来るクレアを見てロミは思い切ってその胸に飛び込んだ。クレアはそんなロミをしっかりと抱き止める。クレアに抱きしめられたロミが金と銀の瞳から流れた喜びの涙で顔をくしゃくしゃにしながらクレアを見上げて尋ねる。

「姉様、大丈夫ですか？お怪我などはありませんか？」

「大丈夫よ、法王様とティエリーに良くしてもらってたから」

クレアは輝くばかりの笑顔を浮かべてロミを見下ろし答えた。

「なんだ、元気そうじゃねぇか。
てっきり俺は、ドスケベな拷問でもされて、憔悴しきってるかと思ったぞ」

聞き慣れた、そして妙に気に障る声に、はっとなってクレアが顔を上げるとそこには、白髪に隻眼、頬に大きな傷跡の特徴ある男が立っていた。クレアはロミから腕を離し、その男の前に立つと噛みつかんばかりの勢いで怒鳴る。

「クロウ！なんて事を！それに何でまたお前が！」

その時だった、クロウはいきなりクレアの体を抱きしめると、その頭を自らの胸の押し当てて少し涙声になって言った。

「馬鹿野郎！心配したんだぞ！……でも無事で良かった……」

クレアは訳がわからず目をパチクリさせながらクロウに抱かれていた。彼女の鼻腔をちょっと汗臭い若い男の匂いがくすぐる。ティエリーや法王とは違うその匂い。いつもは喧嘩ばかりしてるクロウなのにその時は妙な安らぎに似たものを感じた。その時、彼女はある事を思い出した。ここに来て彼女はずっと妙な感覚を感じていた。誰かが自分を必死に捜し回っている感覚。それは近くまで来ているのに、何かに阻まれて自分の元まで来られない。でも、その気配は何かあればきっと自分を守ってくれそうな心強い感じがした。彼女は、今それがこのクロウだと気が付いた。何らかの方法でクロウが彼女を探し続けていてくれたのだと。

「ごめん、クロウ……心配させて……」

クレアは眼を閉じそっとクロウの背中に手を回した。クロウはその

クレアの耳元でそっと囁いた。

「今度、こんな事があったら心の中で俺を呼べ。
お前がどこに居ても俺は必ずお前を見つけ出し助けに行く」

「うん……そうする……」

クレアはクロウの腕の中で素直にそう呟く。いつも会えば喧嘩ばかりしてる二人の見慣れぬ姿に、ロミは目を点にして口をぽかんと半開きにして見詰めていた。

「悪いがお二人さん、
その先は、少なくとも馬車に乗ってからにしてくれないか？」

その声に、驚いてクレアが振り返ると法王が呆れ顔で立っていた。

「クレア……いくら私でもその姿は嫉妬に狂いそうだよ」

法王の隣には、苦虫を噛み潰した様な表情のティエリーも居た。その二人に気が付いたクレアは慌ててクロウの腕を振り払い、顔を真っ赤にする。そして、慌ててその場に跪き深々とお辞儀をする。ロミもクレアの横で同じ様に跪き頭を下げる。

「ほ、法王様……これはとんだご無礼を。
長らくお世話になりましたが、『館』より迎えも参りましたので、
これにてお暇させていただきます」

そう言いながらクレアは、クロウがまだぽかんとして立っているに気がつき、彼の手を引く。クロウもそれでやっと気がつき慌てて跪

き胸に手を当てて頭を下げる。

「こちらこそ、『無実』のあなたを一週間もここに拘束してすまなかった。

『館』のシンシア殿には日を改めてお詫びに上がる事にするよ」

法王は、今までとは打って変って法王としての威厳を放ちながら、跪く三人にそう告げた。ティエリーも臣下の顔に戻り法王の横に立っていた。三人が立ちあがり、今一度、法王に頭を下げてから玄関の方へ歩きはじめると、ティエリーがクロウの傍に走り寄り彼の耳元で何か小声で囁いた。クロウはその言葉に口元に微かな笑みを浮かべて小声で何か答えてから軽く頭を下げる。クレアは視界の隅でその一部始終を捕えていたが、その場では何も言わずにいた。

玄関には、見慣れた『薔薇に囚われし聖女』が横に描かれた馬車が停まっていた。クロウが先に馬車に駆け寄り扉を開ける。クレアは馬車に乗り込む前に、今一度、法王の公邸を振り返ると、玄関の前には法王とティエリーを中心にメイドなどの使用人が勢ぞろいして彼女を見送っていた。クレアは軽く頭を下げて、手を振ってから馬車に乗り込む。その後にロミが続き、最後にクロウが馬車の中に入って内側から扉を閉めるとゆっくりと馬車は走り出した。

いつものぶっきらぼうな表情にもどって向かいの席に座るクロウにクレアが尋ねる。

「ねぇ、クロウ、あなた、さっきティエリーに何を言われたの？」

「いや……大したことじゃないさ。

『俺の女に手を出すな』って釘を刺されただけだよ」

クロウはにやりと笑って答えた。クレアは興味深げに少し身を乗り出して尋ねる。

「で……あなたは何て答えてたの？」

「さあな……」

クロウは笑いながらそう言っただけで、その後、クレアが何度問いただしても、のらりくらりとかわして決して答えなかった。そのやり取りがまるで恋人同士の様で、ロミは窓の外を見ながらにやにやしていた。実は、あの時、ロミはクロウがティエリーに言った言葉をちゃんと聞いていたのだった。

『俺はクレアを愛してる』

## 第53話　祝宴の夜の二人

クレアが『薔薇の館』に帰ったのはその日の昼過ぎ。

『館』の者達には、アマンダを通してビクトルから『クレアの事件』の真相が事前に知らされていたので、皆この日を首を長くして待っていた。もちろん、事が事だけに『館』の者以外には口外せぬ様に固く口止めはされていた。また、シンシアは、どうせその日は『営業』出来る状態にはならないと予想して、表向き適当な理由をつけて『臨時休業』を決め込んでいた。

クレアの乗った馬車が玄関に着くと待ちきれぬ様に『館』の者達が飛び出してきた。クレアが馬車を降りると、あっと言う間にアマンダをはじめとする仲間達に取り囲まれ質問攻めにされた。

「お帰り、クレア！本当に何もされなかったかい？
ビクトルから真相聞くまでは、私も生きた心地がしなかったよ！」

「くれあ、無事、へるが嬉シイ！アッチ悪イ男イナカッタカ？」

「クレア！心配したよ！で拷問とかされなかった？
もし少しでも変なことされたのなら訴えるべきだぞ」

「クレア……あなたの貴重な体験、手記にしない？」

『乙女』達がクレアを取り囲んで玄関ホールに入って行くのを横目に、ロミや付き人達、カサド達三人組は一緒に来た荷馬車から『お土産の品々』を下ろし始める。一方クロウは、重そうなバッグを持

って、にやにや笑って立っているシンシアの元へ歩いて行く。

「御苦労さま、クロウ、でそれが法王様から頂いたクレア一週間分の代金ね」

「今にして思えば、これだけの金があるんだから御者も抱き込んで、クレアとロミを二人共かっさらって逃げても良かったかな、マダム？」

ほくほく顔で代金の金貨が詰まったバックを受け取ったシンシアに、クロウはニヤリと笑って尋ねる。

「ふっ……そんな事して私から逃げ切れない事くらいお前なら分かってるだろう？」

マダムはバックを開けて中身を確かめながらクロウに言う。

「ちっ……まったくあんたって女は食えない奴だな」

クロウは頭を掻きながらそう言うと、シンシアは口元にいたずらっぽい笑みを浮かべてウインクする。

その後、『離れ』のサンルームで、シンシアと『乙女』達だけでなくロミ達付き人、クロウ達用心棒などのスタッフ全員参加の大宴会が始まった。クレアも含めて乙女達の酒の強さは尋常ではなかった。男顔負けに飲みだすと全員、文字通り浴びる様に飲む。しかも、平気で男でも躊躇する様な強い酒も飲んでしまう。

最初こそ、イスに座ってパーティーの様に上品に飲んでいたが、す

ぐに、クレアを真ん中に胡坐(あぐら)をかいて床に座り込み大声を上げて騒ぎ始める。

「こらぁ！クレア！飲め！」

アマンダが床に座って、クレアの肩を抱き、手に持ったブランデーの瓶から彼女の空になっていたグラスになみなみと注ぎ入れる。クレアはそのグラスを一気にあおるとドレスの袖で口を拭う。

「よぉーし！良い子だ！」

「アマンダ姉さん！今度は私の番！飲めぇーっ！」

今度はクレアがアマンダのグラスにウイスキーを溢れるほど入れる。

「その代わりこれ飲んだら、お前も飲めよ！」

そう叫んで、アマンダも一気にグラスを空にして、すかさずクレアのグラスにブランデーをまた注ぎ入れる。

その光景を、やや離れて一人椅子に座りラム酒をちびちびやっていたクロウは眼を丸くして見ていた。隣でクレア達を見ながらブドウジュースの入った可愛いマグカップを両手で持って飲んでいたロミにクロウは小声で尋ねる。

「ロミ……あいつ、あんなに飲まされて大丈夫か？」

「心配要りません。先につぶれるのはアマンダ姉様ですから」

ロミが平然と答えるとクロウは驚いて聞き返す。

「あいつがアマンダより酒が強いって？」

「そうですよ、『乙女』の中で一番お酒が強いのはクレア姉様。クロウさん……姉様はお酒弱いと思ってた？」

そう言って、ロミはクロウの方を見てなぜか意味ありげににやにや笑う。

アマンダと二人飲み比べをしていたクレアの所に、少し足をふらつかせながらヘルガがやって来て隣に座りシーブラムを軽く弾きながら誘う。

「へるが、くれあノ踊リ観タイ、一曲踊ル、ヨロシ」

「よぉーしっ！久々に踊るぞ！」

クレアはそう叫んで立ち上がる。ヘルガのシーブラムが激しいリズムの曲を奏（かなで）で始めると、それまで少しふらふらしていたクレアの体はぴたりと揺れが止まり背筋がぴんっと伸びる。そして、すでに酒を浴びる様に飲んでるとは思えないほど、その曲に合わせて優雅にそして激しく踊り始める。カサド達三人組は酒が入っている事もあって、夢見心地のうっとりした表情で踊るクレアに見とれている。他の乙女達、付き人、シンシア、ロメオもしばし飲んだり食べたりするのを忘れ踊るクレアを見ていた。

クロウにとって踊るクレアの姿を見るのはこの時が初めてだった。彼自身、酒場で街娼が踊る男の劣情を掻き立てる踊りならまだしも、この様な上品な踊りと言う物にはあまり興味がなかったが、クレアの踊りには思わずグラスをテーブルに置いて見入っていた。そんな

クロウにロミは椅子を彼の方に近づけて、そっと語り始める。

「クレア姉様はね、クロウさん。
元々お酒はほとんど飲めなかったんですよ。
でも、ここに来てしばらくしてから、仕事が終わって眠ろうとすると、
姉様が昔体験した『怖ろしい記憶』が蘇って眠れない日々が続いたんです。
眠れず苦しんだ姉様は、他人(ひと)に隠れてお酒に手を出したんです。
お酒を飲むと眠れる事を覚えた姉様は毎日眠る前にお酒を飲むようになった。
でも、最初はコップ一杯も飲めば眠れたのが日に日に量が増えて行き……
ついにはお酒が入ってないと日中でも怖ろしい幻覚を見る様になった。
さすがにマダムも「これまずい」と感じてすぐにお医者様に診ていただいんです。
幸いまだ完全な依存症になる前だったので、
姉様は短期間で立ち直り、その後は元々は意思の強い姉様の事、
二度とお酒におぼれる事はなくなったのですが、後遺症というか……
何と言うか、飲ませればどこまでも飲めるようになっちゃって。
ただ今でも、時々、姉様は悪夢を見るんですよ。
そんな時は今はお酒じゃなく、お医者様に頂いた薬を飲んで寝てるんです」

そう言ってロミは、クロウの顔を覗き込む。クロウは踊るクレアを見詰めたままロミに問い返した。

「あいつの『怖ろしい記憶』って何なんだ、ロミ？」

「さあ、姉様はその事だけは決して他人（ひと）には話さないのです、ただ……」

ロミはそう言って口籠る。

「だた、何だ？隠さず教えろ、ロミ」

クロウはロミを真剣な眼差しで見る。その瞳に強い力を感じたロミは自分の見た事だけを話す。

「『悪夢』を見ている時の姉様は、
襲いかかって来る何かを払い除ける様に暴れて、
いつも『やめて！もうやめて！許して！』と口走っているのです」

そう言ってロミは辛そうな顔をして目を伏せる。

「分かった……ロミ、悪い事を聞いたな」

クロウは、再び踊るクレアの方を見詰めてそれ以上はもう何もロミに言わなかった。

日付が変わる頃になると、さすがにサンルームに居た全員が酔い潰れて床にゴロ寝状態になっていた。こう言う事には慣れてるらしく、宴会が始まる前にサンルームの端に山ほど毛布が積まれていて、今ではその毛布を各自が体に巻き付けて床に転がっている。クロウは、テーブルに突っ伏して眠ってしまったロミに毛布をそっと掛けてやる。そのまま壁際に行くと上半身を壁にもたれ掛けさせて、毛布を足に掛けひと眠りしようと目を閉じかかった時だった。誰かが、片

手に持った毛布を引きずりながらふらふらと歩いてくるのに気がついた。サンルームのガラス越しに入る柔らかい月明かりに照らし出されたその顔は、間違いなくクレアだった。

クレアはそのままクロウの横に座ると、彼に言った。

「ここ良い？」

「良いも悪いも、もうお前座ってるだろう？」

クロウがぶっきらぼうに言うと、クレアは彼の肩に頭を預けて小声で呟く。

「あなた、娼婦は嫌いだって言った癖に、私が捕まってる時に、探してくれたんでしょ、何故？」

「そりゃ、ここの用心棒だからに決まってるだろう」

「嘘！……正直に言いなさい……」

クレアはクロウの肩から頭をあげて彼の顔を睨んで言う。

「ふっ……お前、また俺を誘ってるのか？」

クロウがその口元に笑みを浮かべてそう答えると。

「そうよ！誘ってるの。これ以上、私に恥をかかせないで！」

クロウを睨むクレアの瞳に涙が浮かんでいた。

「……馬鹿野郎、愛し始めてるんだ、俺はお前を！
だから、探した。お前を失いたくなかったからな！」

そう言うとクロウはたまらずクレアを抱きしめ、自分の唇を彼女の唇に押し当てる。途端にクレアの全身から力が抜ける。長いキスの後、クレアはクロウの右目だけ開いたサファイヤの様に輝くブルーの瞳をすがる様な目で見詰めて甘く囁いた。

「……クロウ……」

そう囁くと、気を失う様にクレアは眠りに落ちていった。クロウもクレアの体を抱きしめたままその場に横になり眠ってしまった。

# 第５４話　黒騎士と娼婦のスキャンダル

翌朝、宴会場だったサンルームはちょっとした騒ぎが起きていた。

会場の隅、一つの毛布に包(くる)まって、しっかりと抱き合って幸せそうな顔ですやすや眠るクロウとクレアを『乙女』達が取り囲んでいた。

「ちょっと……この二人のこの状況どういう事よ？」

アマンダがにやにや笑いながら二人を見下ろして言う。

「コレ、くれあトくろうハココデ愛シアッタ、間違イナイネ」

ヘルガはそう言ってシーブラムで結婚式の定番曲を軽くつま弾く。

「驚いたなぁ、クレアがクロウと……『ボンフィス卿』命って感じだったのに」

「皆が寝静まった宴会場で、密かに……なんて、まさに小説みたいな展開……」

シーヴァとアルはお互いの顔を見合せながら笑う。

そこへ目を覚ましたロミが慌てて駆け込んできて、クレアとクロウの体を揺さぶって起こそうとすると、アマンダがロミの小さな体を後ろからひょいと抱き上げる。いきなり抱きあげられたロミは宙に浮いた足をばたばたさせて暴れながら声を上げる。

「アマンダ姉様、下ろしてください！
クレア姉様とクロウさんを起こさないと！」

「ロミ、邪魔すんじゃないよ。
きっと激しく愛し合ってお疲れなんだからさ！」

アマンダがロミを抱き上げながらそう言うと、回りに居た乙女達がけらけらと明るい笑い声を立てる。

その笑い声に、やっとクレアが目を覚ます。しばらく、何が何だか分からず、ぼぉとしていたクレアだが、やがて自分の状況を把握して、慌ててクロウの腕を振り解き上半身を起こすと、クロウの頬を思いっきり平手で殴りつける。

「痛ぇーっ！」

突然の痛みに目を覚ましたクロウが悲鳴を上げる。

「この変態騎士！お前、私が酔い潰れてる間に何をした！」

クレアは般若の如き表情でクロウを睨みつけて怒鳴った。

「馬鹿野郎！お前が誘ったんだろうが！」

クロウもクレアを下から睨みつけて怒鳴り返す。

「私が誘う訳ない！酔い潰れてた私をここまで運んでレイプしたんでしょ！」

「レ、レイプだと！人を強姦魔呼ばわりするのか？！」

そう怒鳴り合ってから、二人は睨み合いになった。そんな二人を見ながら『乙女』達はざわつき始める。

「ありゃ、合意の上じゃなく、クロウがクレアを眠ってる間に犯っちゃったんだ！」

アマンダが抱き上げていたロミを下ろしながら呆れ顔で二人を見下ろす。

「くろう無理矢理くれあ犯シタ。ソレダメ、男トシテチャント責任取ル、ヨロシ」

ヘルガは厳しい顔になってクロウを睨む。

「クレア！訴えるなら手続きは任せろ！示談なら僕に慰謝料交渉は任せろ！」

「恋愛小説が、一気に男性向けのいかがわしい小説になっちゃった感じ」

シーヴァは何か期待に目を輝かせ、アルは汚い物を見る目になる。

「クレア！落ち着け！落ち着いて自分の体を見てみろ！
子供じゃないんだ、実際に犯されたかどうかくらい分かるだろ！」

『乙女』達の会話が、完全に自分を『レイプ犯』と決めつける流れになっているのに気がついたクロウが必死の形相でクレアに怒鳴る。

「この期に及んでまだ言い訳するか！女の敵が……」

とクレアはそこまで怒鳴り返して、口籠る。そして、毛布をどけて自分の着ているドレスの状態を確認すると、多少の乱れはあるが明らかに乱暴された気配は残っていなかった。クレアは慌てて立ち上がると一目散に駆け出した。

「こらっ！お前！何処へ行く！逃げるな！」

突然、キッチンの方へ駆けて行くクレアの背中にクロウが身を起こしながら叫んだ。ロミがそんなクロウの横にしゃがんで彼の顔をじっと見つめてから一言ぼそりと囁(ささや)いた。

「……変態……」

「こらっ！ロミ、お前まで！俺を信じろ！
俺があいつを襲う訳ないだろう！俺はあいつを愛……」

クロウはそこまで怒鳴りながら慌てて口を塞いだ。目の前のロミがにやにやした顔になっているのに気がついて回りを見回すと『乙女』達も同じ様ににやにやと笑って彼を見ていた。

「へぇ～、クロウ、あんたクレアを……」

「くろう、へるが口説イテタノ嘘カ？」

「うわっ！カサドだけじゃなくクロウもかい？」

「黒騎士とお姫様のラブロマンス……良いね、次期作のネタかな？」

口々にクロウを囃し立てる『乙女』達にクロウがあたふたしているとカサド達三人組や付き人達も集まって来ていた。

「クロウの兄貴……あなた本当にクレア様を辱めたのですか？
もし、それが本当なら許せない。
あなたとは『ケジメ』をつけなくてはなりません……」

集まって来たカサドの目が尋常でなくなってるのにクロウは気がついて必死になだめる。

「落ち着けカサド！これはあいつの勘違いだ！
本当に何もなかったんだ！信じろ！」

「で……クロウ、お前、『館』の用心棒でありながら、
その『館』の大事な『商品』に手を出したって言うのは本当かい？」

ドスの利いた声にクロウが恐る恐る振り返ると、そこには腕組みをして怖ろしい形相のシンシアがロメオを従えて立っていた。彼女はゆっくりとクロウの前にしゃがんで彼の顎を片手で掴むと、顔を近づけて低い声で囁いた。

「もし、そうならカサドとの『ケジメ』の前に、
私との『ケジメ』付けてもらわないとねぇ……」

その時だった。

「ごめん、クロウ！お前の言う事が正しいみたい。
今、あっちで確認して来たけど大丈夫そうだから……」

とあっけらかんとした調子で言いながらクレアが戻ってきた。そのクレアにクロウが怒鳴る。

「馬鹿野郎！おかげでこっちはとんでもない事になってんだ！
早くこっちに来て、ちゃんと説明しろ！」

結局、クロウのレイプ疑惑は完全なクレアの勘違いと分かって、皆、飲み過ぎで二日酔い気味と言う事もあり、その場は呆気ないほど簡単にお開きとなった。『乙女』達はそれぞれの部屋に帰り、付き人達は調理場のコック達と一緒に宴会場の片付けを始める。疑いも晴れて自分達の宿舎の帰ろうとしたクロウの傍にクレアは駆け寄り、そっと耳元で囁いた。

「ホントにごめん、お詫びにお茶でも御馳走するから後で私の部屋に来て。
来る時は、他人（ひと）に見られない様に裏の階段使ってね」

そう囁くと、クレアは大階段の方へ駆けて行った。クロウはクレアを目で見送りながら、玄関の方へ歩いて行く。

玄関を出たクロウは、『離れ』に沿ってゆっくり歩いて行き、角まで来ると回りを素早く見回し誰も見てないのを確認すると素早く『離れ』の裏庭の方へ走って行った。そのまま裏庭を通り裏の通用口まで来るともう一度慎重に人気（ひとけ）が無い事を確認して、そっと扉を開けそぐ横にある狭い裏階段を足音を忍ばせながら上がって行く。裏階段を上がれば、もうそこはクレアの部屋の目と鼻の先、二階の階段にも人影が無い事を慎重に見定めてクレアの部屋の扉へ走り寄り左右を気にしながら軽くノックする。

すると鍵が開けられる金属音がして扉が小さく開き、その隙間からクレアのグリーンの瞳が覗いていた。

「誰にも見られてない？」

小声で囁いたクレアにクロウは小さく頷く。すると中からクレアの白い手が伸び彼の腕を掴んで小さく開いた扉の隙間から彼を部屋の中に引き込んだ。

部屋に引き込まれたクロウは、自分たちの安宿の様な質素な部屋とは全く違う豪華な造りに驚きつつ、中央のソファーに腰を下ろした。いつもクレアの体から微かに香るあの匂いと同じ匂いが部屋には漂っていた。

「ごめんね、クロウ。さっきは……
目が覚めたらあなたに抱かれてて、それを皆に見られて、
訳が分からなくなって、気がついたらあんな事口走ちゃった。
実は、私、昨夜の事、何も覚えていないのよ」

クレアは、作りつけのミニカウンターでお茶の用意をしながらそう言った。

「じゃあ、俺が言った事も覚えてないのか？」

半場呆れ顔でカウンターのクレアを見ながらクロウが言う。

「えっ、あなた、何か私に言ったの？」

クレアはカウンターから顔を上げてクロウに尋ねた。

「覚えてないなら良い。忘れてろ！」

クロウは少し投げやりな感じで答えた。クレアの事を「愛してる」と言った事を彼女が覚えていない事に、半分の失望と半分の安心を感じていた。

やがてお茶の良い香りがクロウの鼻腔をくすぐり始める。クロウ自身はお茶にはあまり興味はなかったのだが、クレアが淹れるお茶の香りは今まで嗅いだ事の無いほど良い香りだった。銀の盆にお茶のカップとポッド、それに焼き菓子を盛った小皿を載せてクレアが彼の方へ歩いてくる。そして、それらを大理石のテーブルに並べると自分もクロウが座っているソファーに彼に寄り添う様に座った。

「ねぇ、昨夜、私に何したの？何か変な事言わなかった？」

クレアは、そう言いながらポットからお茶をカップに注ぎ、さりげなくクロウの表情を盗み見する。

# 第５５話　女たちの駆け引き

「本当に、お前、昨夜の事何も覚えてないのか？」

クロウはクレアの顔をじっと見てから、確認する様に尋ねた。

「うん……でも、何かとても大事なこと忘れてる気がして……」

「大事な事ねぇ……まあ、確かに大事な事かもな」

クロウはそう言ってティーカップを手に取るとクレアの淹れたお茶を一口飲む。

「美味いっ！茶ってこんなに美味い物だったのか！」

思わずそう声を上げたクロウに、クレアは自分もカップを手に取りその香を楽しみながら答える。

「みんな、渋いとか苦いって言うけど、あれは単に温度の問題。適温で淹れたお茶はまろやかでそのままで十分美味しいの」

目を軽く閉じ、カップのお茶を飲むクレアの横顔は、クロウの知る『娼婦』とはまるで違う貴婦人の様な美しさだった。もう一度、昨夜の様にこのまま抱きしめてキスをしたい衝動に駆られた。思い切って彼女の肩に手を伸ばそうかと思ったその時だった、クレアが彼を振り返って尋ねた。

「どうしたの？私の顔に何かついてる」

「いや……抱きしめてキスしたいなって思っただけさ」

クロウは少し冗談めかして言ってから、いつもの様に強烈な言葉が返って来るかと身構える。しかし、クレアは何も言わず手にもったカップをそっとテーブルに置くと、クロウを向き直りそのブルーの隻眼をしばらくじっと見てから彼の耳元に顔を寄せてそっと囁いた。

「良いわよ……さっき疑ったお詫び。
そして、連れ去られた私を探し回ってくれたお礼。
ただし、その前にあなたの本当の気持ちを教えて」

クロウはクレアの背中に手を回しそっとその華奢な体を抱き寄せる。そして一度彼女の艶やかなブロンドの髪に指を絡ませて撫でると、顎を片手で引き上げる。そしてクレアの耳元で甘く囁く。

「クレア……俺は確実にお前を愛しはじめてる……
くそっ……二度も同じ言わせやがって……
昨夜も言ったんだぞ、俺は！」

クロウは悔しげに言ってクレアのエメラルドの様な瞳を見詰める。

「何度だって聞きたいから……」

クレアは心に秘めた言葉を思わず口にしてしまう。

「えっ！お前、それって！俺を嵌めたな！
お前、昨夜の事、本当は覚えてるだろう？」

「さぁ、どうかしら？」

クロウはそのままクレアの体をソファに押し倒す。

「今度は、必ずお前の口からも同じ言葉を言わせてやるからな！」

昨夜と同じ長いキスの後、自分を見おろすクロウの頬を片手で撫でながら甘える様な声でクレアは囁く。

「本当に昨夜の事はほとんど覚えてないのよ。
ただ、あなたが『愛してる』って言ってくれた様な気がして。
だから、それが夢じゃないか確かめてみたかったの……」

「俺に二度も言わせたんだ……今度はお前が言う番だ」

そう言うとクロウは、クレアの首筋にキスしながら、片手でその柔らかい曲線を描く体の線をなぞる様に滑らせて行く。

「ああっ！クロウ……私もあなたを……」

そこまで言った時、不意に扉をノックする音が静まり返った部屋に響いた。その音に慌てて、二人はソファーから飛び起き、クレアは髪やドレスの乱れを直す。

「ロミです！入りますよ、姉様！」

ロミの明るい声が聞こえたかと思うと、扉の開く音がして部屋の中にロミが入って来る。ソファーに緊張した面持ちのクレアとクロウが並んで座っているを見て、彼女は一瞬固まった。

「……えっ……何でクロウさんが？」

「あっ！ロミ……こ、これはね……あのね……」

クレアも咄嗟にどう言い訳した物か分からず口籠る。

「ロミ……察しろ！」

開き直ったクロウがロミを見てぴしゃりと一言言った。

「ああっ！また、私ったら……すみません……
気が利かなくて……
そうそう……用事思い出しました……
すぐに出て行きますので、続きを……」

ロミはおろおろしながらそう答え、慌てて部屋を出て行こうとしたが、クロウは頭を掻きながら笑ってそれを止める。

「ロミ……もう良いよ、気を使うな。
その代わり、他の奴らには他言無用だぞ！」

「はい……その辺りはご心配なく。私、口は固いですから……」

ロミのその言葉に、クレアとクロウは顔を見合わせて苦笑いをした。

「さて、カサド達が不審に思うから、俺は行くぞ！」

クロウはソファーから立ち上がると扉の方へ歩いて行く。クレアも慌ててその後をついて行く。部屋を出る前にクロウはクレアを振り返らずに、小声で独り言の様に呟く。

「また、お前の淹れる美味いお茶飲ませてくれよ」

「待ってる……」

ドアをそっと開けて出て行くクロウの背中にクレアも消え入る様な声を投げた。

（クロウ……あなたは本当に『ミロク』じゃないの？）

この日を境に確実に二人の中で何かが大きく変わり始めた。ただ、クロウとの間が狭まれば狭まるほど、クレアの胸に残るその疑問が日に日に大きくなって行った。

丁度、その時、シンシアの仕事場では……

「ふっ……ロミの奴、無粋な真似をして……」

シンシアはそう言って、覗き込んでいた仕事机の上の水盆から顔を上げた。

「奴の嫉妬でしょか？」

ソファーに座り、書類に目を通しながらロメオが尋ねる。

「さあな……」

シンシアはいつもの様に長パイプの先に煙草を刺して火を点ける。

「でも、よろしいのですか？

クレア……いや、『ソフィア姫』とクロウを接近させて」

「何でイケないんだ？
すべてを奪われた美しき姫の復讐物語に、
素敵な騎士（ナイト）との甘く切ないラブロマンスは付き物じゃなのか？」

そう言って天井に向かってシンシアは大きく煙を吐く。

「そうおっしゃりながら、
片方では『商品には手を出すな』とクロウに釘を刺す」

ロメオが手に持った書類から顔を上げてシンシアをちらりと覗く。

「姫と騎士の恋は身分違い、障害は多くないと面白くない」

そう言ってシンシアは楽しそうに笑う。

「まったくあなたと言う人は……」

呆れ顔でロメオはそう言い、シンシアは煙草をゆっくり吹かす。

「そうそう、忘れるとこだった。
今回のクレアの事件な、
あれ、クロフォード本国は関与してなかったらしい。
一時は、スザクの奴がいよいよ『ソフィア姫』を亡き者にする為に、
仕組んだか物かと思った事もあったがな」

「マスター、一つ聞きたいのですが……」

ロメオは手に持っていた書類をテーブルに置いて、仕事机の後ろのシンシアに向いて尋ねる。

「何だ？」

「スザクは何故、『ソフィア姫』を生かしているのですか？
私が彼の立場なら、弄(もてあそ)んだ後は殺してしまうと思うのですが」

シンシアは仕事机に頬杖を付きながら、ロメオを見ながら答える。

「良い質問だ、ロメオ。
あいつは姫を監禁して散々弄(もてあそ)んだが、
姫が自害するチャンスはいつも残していた。
それは姫自身に……
『汚辱に塗(まみ)れながら生きのびたのは自分の意思』と心に刻ませる為。
最後に、ここに『娼婦』として売り飛ばしたのも同じ事。
自らの意思で身を売る『娼婦』になってまで生きる事は、
姫にとっては死に勝る耐えがたい屈辱だったはず。
ここに売られ『薔薇の乙女』になれば、
その屈辱が嫌ならいつでも死ねた……そう逃げれば即死罪だからな。
姫はね、常に選ばされたんだ『屈辱』と『死』の二つに一つを。
奴は笑っていたんだよ、聡明で美しいと評判だった『ソフィア姫』が、
それでも『生』を選び続け無残に汚れて行く様(さま)を見てね。
残酷な仕打ちだよ、奴は姫の体だけでなく心も徹底的に弄んだんだ。
悪魔の様な男さ、『スザク＝ジン』って奴は！」

最後の言葉をシンシアはまるで吐き捨てる様に言った。

「しかし、『ソフィア姫』の心の強さには驚かされます。
普通なら、城で弄ばれた時点で自害してるか、あるいは心を壊され、
私たちがヘルガを見つけた時の様に『人形』と化してるはず。
それが今でもまったく普通……いやその『魂』は輝きを増している。
願わくば、一日も早く姫に復讐を遂げさせてやりたいですね」

手に持ったパイプを灰皿の端で叩いて灰を落としながら静かに彼女は言った。

「問題はその後だよ……ロメオ。
その後を生きるには『王家の血』を絶やすぬ為だけでは弱過ぎる。
姫の受けた『汚辱』の本当の痛みは、『復讐』を遂げた後に彼女を襲う。
たぶん、その事に姫はまだ気がついていない」

ロメオは、テーブルに置いた書類をまた手に取り目を通し始めながら独り言の様に言う。

「その時の為にあの『黒騎士』を……」

シンシアは再びパイプを咥え、大きく煙を吸い込んで、ゆっくり吐きながら言う。

「さあな、何も『黒騎士』だけじゃないさ。
ボンフィス卿でも、カサドでも、バナビーでも、可能性はある。
もっと言えば、ロミだって、可能性はあるんだぞ。

また、姫が誰も選ばないって可能性もな。
それに私は『善人』じゃない。
単なる『傍観者』さ……楽しいゲームが見られればそれで良い」
そう言って、シンシアはにやりと笑った。

## 第５６話　美しき雌狐の狩り

それから一ヶ月ほどした後の事だった。

日も暮れ、いつもの様に『控えの間』にそれぞれお気に入りの場所に陣取って『乙女』達が集まっていた。

「おい、クレア、今日は休みだったんじゃないのか？」

いつもの場所に座るクレアにアマンダが声を掛ける。

「そうだったんだけど、この間の事件で一週間も開けちゃったから……」

クレアは苦笑しながら答える。

「デモ、ソレくれあノ責任違ウ、国ガ保証スル事、くれあ休ム、ヨロシ」

「クレアの場合『夕方から早朝まで（オーバーナイト）』なんだから無理すると体壊すぞ」

「体壊したら、損するのは自分だから、無理しない方が良いよ……」

ヘルガやシーヴァ、アルがやや心配そうな顔つきでクレアを見る。

「皆、心配してくれてありがとう。でも休日返上も今日で最後だから」

そう言ってクレアは笑う。

そうこうしている内に、最初の客が玄関の扉を開けて入って来る。五十歳過ぎくらいの典型的なやや太った貴族だった。彼はにこにこ笑いながら『控えの間』を見渡せる大きなガラス窓の前まで来て手を振る。今まで無表情で手に持った本を読んでいたアルがそれに気がついて顔を上げ、満面の笑みを浮かべて手を振り返す。アルのドレスは、いつもの様に他の『乙女』とは違い膝丈ほどの子供が着る様なレースを多用した可愛いデザインのミニドレスだった。それに膝丈の白いハイソックスを履いている。元々、この国では実際の年より若く見えるアルだが、このドレスのおかげでさらに若く十四、五ほどの少女に見える。そんなアルに隣に居たヘルガが小声で声を掛ける。

「ある、アノ客モ『ろりこん』ッテ奴カ？」

アルは客の方を笑顔見ながら小声で答える。

「うん……確かにそっちの趣味もあるけど、
本とか話も合うの。見かけより真面目で良いおじさまよ……」

そう言うと、一度回りの『乙女』達を見回してから一礼してから扉に向かって軽やかに走って行く。

しばらくすると、今度は少し神経質そうな若い男がシーブラムのケース片手に少しおどおどした感じで入って来る。彼は玄関ホールに入ると大階段の脇のカウンターに居るシンシアに軽くお辞儀をしてから『控えの間』の前に歩いて行った。それを見て、今度はヘルガ

が横に置いたシーブラムのケースを手に持ち席を立つ。

「あっ！今日はヘルガ、シーブラムの先生やる日だっけ？」

シーヴァが声を掛けるとヘルガが笑いながら答える。

「デモ、アノ生徒、余リ良イ生徒ジャナイ。
先生ヲ直グベっどへ連レテク。進化遅イ。劣等生」

「ははははっ……まあ、そう言う方がここでは正常だけどな」

アマンダの声を聞きながら、ヘルガは白銀の長い髪をなびかせ部屋を出て行く。その姿はまさにこの世の物ではない『妖精』その物だった。

次に玄関ホールに現れたのは四十過ぎくらいの見るからに上品そうな貴婦人だった。彼女は手に小さなバックを持って、真っすぐ『控えの間』まで歩いて来ると握った右手の指でガラス窓を軽く叩く。

「どうやら僕のお客様がいらしたようだ」

今日も凛々しい男装のシーヴァはそう言って席を立つと、貴婦人に向かって右手を胸に当てて深々とお辞儀をする。

「あら、シーヴァ、今日はそっち方面のお客様なのね」

クレアがシーヴァの背中に声を掛ける。

「私には、どうにも理解出来ない趣味だがな」

アマンダは少し呆れ顔で言う。

「あのマダム、もちろんそっちの趣味もあるけど、結構、歴史マニアで話してても楽しいんだよ！」

そう言ってシーヴァはまるで若い男の貴族の様にやや大股で歩きながら貴婦人の待つ扉の外へ歩いて行く。

『控えの間』には、クレアとアマンダの二人だけになった。

「今日は珍しく客が遅いじゃないか、クレア」

アマンダが不思議そうな顔でクレアに尋ねる。

「ええ、実は今日が初めてのお客様で色々訳ありで、他人（ひと）に顔を見られたくないんだって……」

その時だった、ばんっとあの重い玄関の扉を軽々と片手で押し開けて、見るからに立派な騎士風の大男が入って来た。

「あっ！キャメンティー卿！」

その男を見てクレアの方が先に声を上げた。そう、その大男はクレアの事件の真相をアマンダに教えたあの『神聖エリシア騎士団団長ビクトル＝キャメンティー』だった。

「ああ、今日はあいつが相手さ」

「姉様、なんか嬉しそう！」

クレアがそう言うとアマンダは大柄なその体に似合わない乙女の様な恥じらいの表情を浮かべる。

「馬鹿！こんな年増女をからかうもんじゃないよ！
じゃ、クレア、行って来るよ」

アマンダはクレアにウインクすると、足取りも軽く『控えの間』を出て行った。

しばらくしてから、ついに『その客』がやって来た。

フード付きのマントを頭からすっぽり被り人相も体格もほとんど分からない人物が扉を開けて玄関ホールに入って来た。すると、クレアもシンシアもその場から立ち上がりドレスの裾を持ち上げてその人物に走り寄り、彼の前で跪き深々とお辞儀をする。

「お待ち申しあげておりました、法王様」

シンシアが深々と頭を下げたまま言った。そう、紛れもなくこの人物『法王グリエル５世』その人であった。

「シンシア、クレア、無理言ったね。
でも、これ以上、待てなかったんだ。
どうしても、またクレアと素敵な夜が過ごしたくてね」

「もったいないお言葉でございます、法王様」

クレアが頭を下げたままそう言うと、法王は彼女の前にしゃがみその体を起こしていきなり抱きしめる。

「クレア、あの日、君が帰ってから、
僕がどれだけ多くの悶々とした夜を過ごした事か！
もう固い話は抜きだ！早速、君と二人きりになりたい」

そう言ってから隣に跪くシンシアを見て続ける。

「な……マダム、良いだろう？」

その言葉にシンシアはゆっくり立ち上がりながら答える。

「分かりました法王様。
いえ、これからは『グリー伯爵』とでもお呼びしましょうか？」

「『グリー伯爵』かぁ……うん、それが良いな！
これからはここでは『グリー伯爵』を名乗ろう！」

法王はそう言ってシンシアにウインクすると、シンシアも軽く頭を下げて答える。そして彼は、そっとクレアを立ち上がらせると、その細い腰に手を回して一緒に大階段の方へ歩いて行く。

「では、明日の夜明けまでごゆっくりお楽しみ下さいませ」

シンシアは法王の背中に向かって頭を下げた。

それからしばらくして、大階段脇の受付カウンター内では、長パイプで煙草を吹かしながらシンシアが予約表のチェックなどをしてい

た。そのシンシアが後ろで、顧客名簿の整理をしているロメオに嬉しそうに話しかける。

「ついにあの姫君はここまで来たよ。
ここに来た時は、スザクにすべてを奪われ汚しつくされ、
心が砕け散る寸前で辛うじて踏みとどまっている憐れな亡国の姫だった。
それがたった三年で、どうだ、今のあの姫君は！
まるで獲物を狙う美しく狡猾（こうかつ）な『雌狐（めぎつね）』じゃないか！
自らに残されたその美貌と才智を使って、
復讐の駒に使えそうな男どもの心を狩り集め、
ついにその甘く鋭い牙で『法王』にまで喰らい付いた。
『法王』だぞ、『法王』！
あの姫君、私の予想以上だよ。」

「嬉しそうですね、マスター」

ロメオは名簿から顔を上げてシンシアを見る。

「ああ……ロメオ、久々に楽しいゲームが見れそうだ」

シンシアは満足げに呟くと、二階の方を見ながら大きく煙草の煙を吐いた。

一方、クレアの仕事部屋のベッドの上では、法王が満足げな顔で天蓋の刺繍をぼんやり眺めながら横になっていた。その腕の中で、クレアは彼の体に身を寄せて、その厚い胸板に顔と右手を載せていた。

「法王様……あなたは私を『クレア』として抱いて下さる数少ない

お方」

クレアがとろける様な甘い声で囁く。

「君を『ソフィア姫』の身代わりに使うなんて馬鹿な男共が多い。『クレア』と言う女性が素晴らしいんだ！『ソフィア姫』が良いんじゃない」

法王はクレアの髪を優しく撫でながら答える。

「その言葉、嬉しい……」

クレアはすがる様な瞳で法王を見てそう呟いて、心の中では少し複雑な気持ちになり苦笑する。法王はそのクレアのエメラルドの様な瞳を見詰めて尋ねる。

「クレア、僕は君が望むなら、そして僕に出来る事ならなんだってする。

忘れないでくれ、僕はティエリーと君との関係を裂く気はない。でも、君の心の片隅で良い……ほんの少し僕の居場所を作ってくれないか？」

「はい……喜んで……」

そう言って、クレアは自らの唇を法王の唇に押し当てた。法王は唇を重ねたまま、クレアを今一度抱きしめるとそのままくるりと身を捻り体を入れ替え自分が上になる。片手は彼女の体を強く抱いたまま、もう一方の手を彼女の体の線に沿わせてゆっくりと下へ下していった。

## 第57話　十字架を背負った娼婦　～その1～（前書き）

さて、またクレアの物語はここで、しばしのお休みをいただいて……

大柄な体と気風（きっぷ）の良さが特徴で、クレア達『薔薇の乙女』の良いお姉さん役
でもあるアマンダの意外な過去が明らかになります。
一般には自分の努力で『薔薇の乙女』まで上り詰めた『街娼』と知られてい
る彼女の過去に何があったのか？

# 第57話　十字架を背負った娼婦　～その1～

クレアが法王の寵愛を受けていた同じ頃、アマンダの仕事場ではベッドの上でビクトルがうつ伏せになり、その上にアマンダが馬乗りになってマッサージをしていた。

「くぅーっ！そこ効くぅーっ！」

「まったく、こんな所に来て、私にマッサージさせるなんてどんだけ贅沢な！」

アマンダが呆れ顔で、しかしマッサージの手は緩めずに言う。

「なあ、アマンダ、そろそろ『あの返事』聞かせてくれても良いんじゃないか？」

ビクトルが、ベッドに顔を伏せたまま背中に乗るアマンダに問い掛ける。

「確かに、私もそろそろ年齢的にはこの仕事、潮時なんだけどね」

アマンダは、少し複雑な表情でそう答えた。

時間は十八年遡る。

ダルメハイン法国の北側は険しい『ティベータ山脈』が東西に走り、これが天然の国境となっていた。この山脈の北側には広大な国土を有する勇猛果敢で有名な『北の民』の国『モーダルニア』がある。

そして、このティベータ山脈一帯には『グラル』と呼ばれる少数民族が暮らし、彼らはティベータ山脈の山々その物を神が聖地として神聖視していた。この『グラル』の民は身体的には体が『北の民』に似て大柄なのを除けばダルメハインの国民と大差はなく見た目で区別する事は出来なかったが、その閉鎖的で特異な文化から一般的なダルメハインの一般人から『未開の民族』『野蛮人』と見下され差別されていた。ただ『グラル』の民は、国境に位置し常に紛争に晒される故に剣術等の武術と、険しい土地を馬で駆け巡る為に馬術に関しては非常に優れた民族として有名であった。その為、ダルメハインは、その土地を自らの『領土』としては来たが、無駄な紛争をして『モーダルニア』に侵攻の口実を与えない為に『グラル』の民に目だった弾圧等はしてこなかった。

しかし、数年前にこのティベータ山脈から『金』が見つかってから、事態は一変する。金採掘の為に『グラル』の民の土地に入り込む者達が増え、また、それを『聖地を汚す行為』として武力で排除しようとする『グラル』の民との諍(いさ)いが絶えなくなった。それは日に日に双方の過激さを増し、今では日常的に殺し合いが行われるまでに悪化していた。ここに至り、ダルメハイン政府も無関心でいる訳にも行かなくなり金採掘の為に山脈に入る者たちへの保護の為に兵力派遣する様になった。しかも、あの『最強にして最凶』と恐れられる『神聖エリシア騎士団』の一部まで極秘に投入しているとの噂もあった。もちろん『神聖エリシア騎士団』投入は噂であり、その後の公式な記録にはその様な事実はまったく残っていなかった。

ティベータ山脈の林の中。その中にひっそりと存在する美しい泉のほとりに小さな山小屋があった。ここはこの辺りに住む『グラル』の民達が山菜やキノコ採りをする際の休憩等に使われる物だった。幸い、この辺りにはまだ金鉱脈は見つかっておらず、ここに住む『

グラル』の民は血なまぐさい抗争とは無縁の昔ながらの穏やかな暮らしをしていた。

その山小屋の中、少し癖のある長い栗毛色の髪とブルーの瞳を持つ美しい娘とブロンドの髪で大柄な体の若い男が抱き合って一つの毛布に包まっていた。二人の回りには脱ぎ散らかした二人の服が散らばっている。さらに入口の脇には軽鎧と長剣が置かれたいた。

「ねぇ……ビー、今度はいつ会える？」

娘が、男の胸に顔を当てて甘く囁いた。

「そうだなぁ、ルーファ……一週間後くらいかな？」

男は、娘の髪を優しく撫でながら答えた。

「いやっ！そんなに先じゃ私、我慢できない！
それなら今日は帰さないから！もっといっぱい愛して！」

娘は駄々っ子の様に膨れ面になり男に喰ってかかる。

娘の名は『ルーファ＝ルン』今年十七になるこの近くに住む『グラル』民の村娘だった。ルーファは、数ヶ月前にこの林の近くで道に迷っていた『ビー』と名乗る男を助けてから恋仲になり、その後、数日おきにこの山小屋で密かな逢引を繰り返していた。ビーはダルメハイン政府からこの辺りを担当する役人として派遣された騎士と名乗った。幸い、ルーファの村ではまだ金採掘の者たちとの諍(いさか)いは起こっていなかったが、自分達『グラル』の民を弾圧する為に、ダルメハイン政府から『怖ろしい騎士集団』が派遣されたとの噂を聞いていた。ルーファは、ビーを見つけた時に彼がその『怖ろしい騎

士集団』の一人ではないかと疑い短剣を片手に威嚇したが、彼は剣も抜けず腰を抜かしてその場にへたりこんだ。それを見てルーファはその疑問が単なる取り越し苦労だと確信した。

「ルーファは可愛いなぁ……でも、もう一回だけだぞ！」

ビーは笑顔で言うと、ルーファをその場に仰向けに寝かせて、そっとその上に自分の体を重ねる。

「嬉しい！でも、あと一回だけじゃ許さないんだから！」

ルーファはそんなビーの体を下からしっかりと抱きしめた。その時のルーファは、このささやかな幸せがこの先ずっと続くと少しも疑う事はなかった。

ルーファの村は、彼女がビーと密やかな一時を楽しんだ森から馬を飛ばして十分程の距離、林と山との間に広がるわずかな丘陵地にあった。山小屋風の可愛い平屋の家が二十軒ほど身を寄せ合う様にして建つ小さな村だったたが、それでもすべての家が小さな庭を持って冬以外は花が咲き乱れる、まるでおとぎ話に出て来そうな平和な村だった。ただし、見かけは平和そうな村ではあるが、『グラル』の民の伝統に違う事無く少女であるルーファも含めてすべての村人が剣術等武術と馬術には大変優れていた。事実、先ほどルーファがビーと逢瀬を楽しんだ小屋から村までは十分ほどと言ったがこれはルーファや『グラル』の民に限っての話で、ダルメハインの一般的騎士の馬術レベルでは優にその三倍の時間が掛かる。『グラル』の民の優れた馬術レベルだからこそ通れる険しい近道を通った場合の話だからであった。

ルーファはその中の一軒の垣根を、馬に乗ったままひらりと飛び越え玄関前で馬を止めると、玄関の木戸が開いて可愛いらしい少女が出てきた。彼女の瞳の色はルーファと同じブルーだったが、髪は同じ栗毛ながらルーファの様に癖はなくさらさらの真っすぐな毛質で腰辺りまで綺麗に伸ばしていた。もちろん、ルーファに負けず劣らずの美少女であった。この娘、ルーファの三つ歳下の妹『シルファ＝ルン』である。

ルーファが馬を降り、その手綱を玄関前の横木に回し付けると、馬はその場にあった水桶から水を飲み始める。

「姉さん、お帰りなさい！」

そう言いながらシルファは、ルーファが馬からきのこや山菜の詰まった袋を下ろすのを手伝う。

「ありがとう、シルファ。
今日はシナール茸も見つけたんだよ！
夜は、これ焼いて食べようね」

そう言ってルーファは肩に掛けていたバックから大事そうにシナール茸を出してシルファに見せる。

「姉さん……シナール茸よりもっと良い物見つけてるでしょ？」

シルファは下ろした袋を持ったまま、いたづらっぽい目をしてルーファを言った。

「えっ？何の事？シナールの他はトリルもビマルも見つけてないよ」

「隠したってダメよ、私には分かるんだから……」

シルファはにやにやしながらルーファの顔をじっと見詰める。

「な、何よ、シルファ。何が言いたいの？」

戸惑った表情を浮かべるルーファの首筋辺りにシルファは顔を近づけて鼻をひくひくさせる。

「やっぱり……姉さん、今まで男の人と会ってたでしょ。
姉さんの体から微かに男の人の匂いがするんだもん」

「えっ……」

実の妹にそこまで言われてしまってルーファは言葉を失う。まだ十四だからと思って油断していた自分が腹立たしく思えた。ルーファとシルファの父親はシルファが生まれた翌年に鹿狩りの途中に事故で崖から落ちて亡くなり、母親も二年ほど前に病気で亡くし、姉と妹の二人だけで暮らしていた。もし、両親のどちらかが生きて居れば、ルーファはビーと会って愛し合った後はその事を悟られない様に泉で体を洗って帰ってきたであろう。しかし、シルファをまだ子供と思っていたルーファは、その心配はまったくしていなかったのだ。改めて思えば自分が十四の時にはすでに村の男友達とキス程度の経験はあった。シルファに対してもっと慎重になるべきだったとルーファは後悔した。

「ねっ、隠さず教えてよ、姉さん！
この村の男（ひと）？それとも他の村の人の男（ひと）？」

ここに至り、ルーファはさらに窮（きゅう）する。直接、この村には被害等は

なかったが、それでもダルメハインの人間はこの村でも心証は良くなかった。ましてや、体から男の匂いがする様な関係を持ったと知られたら妹から軽蔑されるかもしれないと言う不安がルーファの胸に広る。

「ち、違う村の男(ひと)よ！
でも、まだこの事は誰にも言わないでね、シルファ」

ルーファは思わず嘘を言う。

「大丈夫よ、姉さん。私、誰にも言わないから。
その代わり、私にはなるべく早くその男(ひと)に会わせてね！」

満面の笑みでシルファはそう言ってルーファにウインクした。

## 第５８話　十字架を背負った娼婦　～その２～

その日の夕食でも、ルーファはシルファから『彼』について質問責めにあった。それはビーのすべてを話す訳にはゆかないルーファにとっては質問と言うより『尋問』の様に感じていた。結局、ルーファはビーの容姿から正確、癖など素性以外の事はあらかたシルファに話してしまった。

「その男（ひと）の事、話してる姉さん、すごく嬉しそう。
姉さん……今、幸せ？」

シルファはテーブルの上に両手で頬杖をつきながらルーファの顔を覗き込みながらにっこり笑って尋ねる。

「うん……私は『彼』に会えて、今、とても幸せよ。」

ルーファも笑顔でそう答えた。

しかし、その一週間後、ルーファとシルファの運命を狂わせ、まだ十七だったルーファの背中にあまりに重い十字架を背負わせる事になる事件が起こった。

その日の昼過ぎ、ルーファはいつもの山小屋へ馬を走らせていた。一週間ぶりに愛するビーに会える、その胸のときめきに彼女は昨夜は一睡もできないほどだった。今も、乗っている愛馬の足が今日に限って妙に遅く感じて苛立ちを隠せなくなっていた。

山小屋の前に着き、手綱を横木に回すのももどかしく、ルーファは

小屋へ飛び込んで行く。

その後、彼女はこの時の事を異様なまでに鮮明に記憶していて、思い出す度に深い後悔の念に苛まれる事になる。そう、この時、彼女は確実に明確な『違和感』を感じていた。冷静な時の彼女なら小屋の扉を開ける前にもっと回りの事に注意を払っていたはずであり、そうすれば、あの『悲劇』は起こらなかったかもしれない。

「ビー！待った？！」

そう叫んでルーファの表情が凍りつく。

「へぇー思ったより、かなり上玉じゃねぇか？」

「うひょーっ！こりゃ、役得だぜ！」

「ふふふっ……まだ若いな……長く楽しめそう……」

部屋の中には、いつもの様に優しい笑顔を浮かべ座っているビーの姿はなく、如何にも柄の悪そうな騎士崩れの男達が三人、それぞれ手にナイフや短剣を持ってにやにやと卑猥な笑いを浮かべながら彼女を待っていた。身の危険を感じたルーファは反射的に腰の後ろに差した短剣を抜いて構える。

「あんた達、誰？ビーはどうしたの？」

「ははははっ！お前、馬鹿か！
エリートの『神聖エリシア騎士団』の騎士様が、
お前の様な『グラル』の雌猿とまじめに付き合うと思ったか？」

ルーファは男たちを睨みつけながら、短剣を構えながらゆっくりと後ずさりして出口へ向かおうとする。しかし、不意に背中から四本の手が伸びて来て彼女はその場で羽交い締めにされていまった。気が動転した彼女は前方の男達に気を取られすぎ、背後からそっと彼女に迫っていた二人の男の気配に気がつかなかったのだ。

「は、離せ！……ううっ！」

そう叫んだ途端にタイミングを逃さず後ろの男が猿轡（さるぐつわ）をルーファの口に噛ませる。

「楽しむ前に舌噛まれたら面白くないからな」

ルーファの後ろの男は彼女の耳元でいやらしい声でそう囁くとそのまま猿轡を彼女の後頭部でしっかりと締め上げる。猿轡を噛まされた彼女はそれでも最後の力を振り絞って男の手を振り払おうと暴れたが、じきに前の男三人も彼女に襲いかかり、あっと言う間にその場にねじ伏せられ両手を後ろ手に縛りあげられてしまった。そのまま、男達はルーファの体を、彼女がビーと愛を確かめ合うはずだった藁を敷き詰めた寝床の上まで引きずって行く。

後は、地獄だった……ルーファは途中何度も意識を失ったが、それでも男達はよってたかって休む事無く彼女を弄（もてあそ）び続けた。意識を取り戻すと毎回、意識を失う前と変わらず男に組み伏せられた状態だった。永遠の繰り返しの様に思えた。頭の中が深い霧で覆われて何も考えられなくなっていた。どれほどの時間が経ったのかも、もう分からない。いつの間にか後ろ手に縛られた手が自由になっていたのにも最初は気がつかなかった。

やっと体から離れた男達の一人が、肩で荒い息をしながら横たわる

ルーファを見下ろしながらに笑いながら言った。

「人生の最後に良い想いが出来て良かったな、雌猿。
そろそろ、山猿の村も綺麗に焼け落ちてる頃だ。
お前もすぐに、仲間の所へ逝かせてやるよ……」

その言葉を聞いた時、混濁したルーファの脳裏に、愛する妹シルファの姿が浮かんだ。

（シルファ！）

光を失い焦点が定まらず視線が宙をさまよっていたルーファの青い瞳に鋭い光が蘇る。その瞳がすぐ傍に落ちていた彼女の短剣を捕える。

「うおおおおおっ！」

一瞬の事だった、死体の様にぐったりと横たわっていたルーファの体がバネ仕掛けの人形の様にとび跳ねたかと思うと、猿轡をされたままの彼女の口から獣の咆哮（ほうこう）の様な雄たけびが上がった。彼女はすぐさま短刀を拾い上げ一人目の男に襲いかかる。瞬殺だった。首筋から赤いシャワーを吹き上げながらその男はゆっくりと倒れていった。全裸の上に返り血を浴びまるで赤いドレスを纏った様なルーファの顔は正に般若その物だった。口に噛まされたままの猿轡が、まるで耳まで裂けた口の様に見えた。その後、狭い小屋の中を恐怖に駆られ逃げ回る残り四人の男を仕留めるのに五分と掛からなかった。最後の一人に馬乗りになり心臓を一突きにしてもルーファの怒りは止まらなかった。すでに息絶えて床に倒れていた男達の体を何度も手に持った短剣で怒りに任せて突き刺し続けた。

その後、しばらくして小屋を出て来た全身血まみれのルーファは、手に持った短剣で猿轡を切り外すと、しごく冷静な表情でそのまま小屋の後ろにある泉で血で汚れた髪と体を洗った。体を綺麗に洗った彼女は、自分の馬から予備の毛布を下ろすと、手に持った短剣で真ん中に穴を開け、そこに首を通し小屋にあったロープをベルト代りに腰に巻き付けて簡単な服代わりにした。

辺りはすでに陽が落ちて夜になっていた。一度深く深呼吸をすると、何時間もの間休む事無くおもちゃにされ続けた体にまるで鉛を仕込まれたかの様な重さをルーファは感じて、一瞬、その場に膝から崩れそうになるのを辛うじて堪えた。

「帰らなきゃ……村へ……シルファの所へ……」

そう呟くと重い体に鞭打って、ルーファは馬に跨る。

月明かりを頼りに村までたどり着いたルーファは村全体が見下ろせる丘の上で馬を止めた。

そこには異様なまでに明るい不気味な月明かりに照らされて、信じられない光景が広がっていた。普通ならこの時間、どの家の窓にも暖かく明るい灯が灯っているはずなのに光る物は何もなかった。異様な沈黙の闇がそこには広がっていた。ルーファの背筋を冷たい汗が流れ落ちた。

「シルファ！」

彼女はそう叫ぶと、シルファが居るはずの我が家へ馬を再び走らせる。途中の通り過ぎた村の家や店、倉庫などは一つ残らずはすべて

焼き尽くされていた。そして道沿いには無残に殺され焼け焦げた村人の死体がそこかしこに散乱していた。

「お願い！神様！妹を、シルファを助けて！
シルファ、無事でいて！お願いよっ！」

ルーファは、呪文の様にその言葉を繰り返しながら家に急いだ。

しかし、そこにはあの暖かい我が家はなかった。あるのは無残に焼け落ちた真っ黒な残骸の山があるだけだった。彼女は慌てて馬から飛び降りるとその残骸を必死で掻き分け始める。

「シルファ！どこ？どこに居るの？！」

しかし、月明かりの中どんなに探しても最愛の妹シルファの姿はどこにもなかった。ここに来るまでに道端でルーファが見た見た遺体はどれも炭の様に真っ黒で性別すら判別できないほどの物がほとんどだった。もしかするとあの中にルーファもいたかもしれない。あるいは、村を襲った連中に連れ去られたか？自分があの小屋でされた仕打ちを考えれば、若い女なら連れ去られた可能性も高い。もしそうであっても、それはシルファにとっては殺されるより辛いことでしかない。

ルーファの心に深い悲しみが広がって行く。そして、その後にどうしようもない怒り。それは当然、村を襲った者たちへの怒りだが、同時に自分自身への激しい怒りも感じていた。ダルメハインの男などを信じて愛したが故に、この惨劇は起こった。ルーファにはそう思えてならなかった。この事件はあの『ビー』と言う男が仕組んだ事、自分の心を弄んだ上に、妹を、村人を地獄へ叩きこんだ張本人。

「許さない……あの男……必ず、どんな事をしても見つけ出す。
そして、生きたまま、八つ裂きにしてやる！
その為なら、私はどんな事でもする！」

ルーファは、そのサファイヤの様に美しい瞳から血の涙を流し、夜空に浮かぶ不気味なまでに美しい月に復讐を誓った。

# 第５９話　十字架を背負った娼婦　～その３～

それから八年後のティボーシアの夜の暗い裏路地。

大柄で背の高い美しい女が煙草を咥えて一人歩いていた。肩よりやや下辺りで切った癖のある栗毛にサファイアの様なブルーの瞳。その身なりは一見して『街娼』である事は明らかであった。その彼女の前に暗い路地から数人の若い男が飛び出して来て彼女の前を塞ぐ。

「おい、女、俺たちと遊ぼうぜ」

真ん中に立った男がにやにや笑いながら言う。女は、口元に淫靡な笑いを浮かべると、咥えていた煙草を地面に捨てて靴で踏み消しながら、じろりと男たちを見回す。

「五人？全員一緒が良いの？
良いわよ……それなら二時間で金貨二枚」

女の言葉に、男達は声を立てて笑いながら腰の後ろに隠したナイフを抜いて構える。

「馬鹿が！誰が金なんぞ払うか！
タダだよ、タダ！しかも『朝まで（オーバーナイト）』！
腰が抜けるほど可愛がってやるぜ！」

「ふーん、そっちのお遊びのオプションもしたいのね。
良いわよ……でも手加減しないから……」

女は、そう言うと傍に落ちていた棒切れを拾い上げると、二、三度

片手で振り回した後、まるで剣を構える様に両手で構える。

勝負は一分も掛からない内についていた。

「ふんっ……ホントに不甲斐ない。
それじゃ、本番のお楽しみは無理ね。
商売し損なっちゃったよ」

女は手に持った棒切れを投げ捨てると、ドレスのポケットから銀のシガーケースを取り出して煙草を一本咥えるとマッチでその先に火を点ける。煙そうな顔で大きく煙を吐くと、地面に倒れてうめき声を上げる男たちを振り返る事もなくその場を立ち去って行った。

それからしばらく後、女はその少し先にある安酒場のカウンターに座っていた。あちらこちらで柄の悪い男どもがテーブルを囲み、ある者はカードで掛け興じ、ある者は酒場女をひきい入れて大騒ぎをしている。一応、片隅ではアップライトピアノで女が何か曲を弾いているのだが、騒ぎ声が大き過ぎてまったく聞こえ無いほどであった。女は目の前に置かれたショットグラスのウイスキーを一気にあおる。

「もう一杯ウイスキーをダブルで……」

女はカウンター内のバーテンに声を掛ける。その時、女の横に汚れた貴族風の服を着た男が座り声を掛けてきた。

「アマンダの姉御……
あんたの知りたがってる『グラル』の焼き討ちにされた村の話な、

確かに噂ではあるんだが、公式にはやっぱ何も記録が残ってねぇ。
あんたの言ってる場所付近には金の精練所があるだけのはずだぞ」

そうこの女、あのルーファのなれの果てだった。自身の体を徹底的におもちゃにされ、村を焼かれ、妹まで行方不明にされた彼女は、その敵（かたき）と狙う『ビー』と言う騎士を探して国中を彷徨い、このティボーシアに五年前に流れ着いた。首都『シゼルカンド』に近く『夜の歓楽街』で有名なこのティボーシアは彼女の望む情報を集めるには一番都合の良い街だった。彼女は自ら『アマンダ』と名乗り『グラル』の民である事を隠し、色々な男との接点を得ることで多くの情報も得られる上に、生活資金も稼げる『街娼』に身を堕としていた。幸か不幸か『街娼』が彼女の性分に合っていたらしく、今ではティボーシアでは有名な売れっ子『街娼』になり稼ぎも多く、色々な『娼館』からもスカウトが来る様になっていた。しかし、彼女は一か所に縛られる事を嫌って頑（かたく）なに『街娼』のスタイルを貫き通していた。またそんな彼女の生きざまが評判を呼び、ティボーシアの夜の世界では『アマンダの姉御』と呼ばれ慕われる様にもなっていた。

「まったくどいつも、こいつも役立たずばっかだね。
まあ良いや、騎士の方は何かわかったかい？」

そう言いながらアマンダは紙に包んだ銀貨数枚をさりげなく男の前に出す。男はその包みを素早く握るとズボンのポケットに押し込む。

「姉御、その物ズバリって訳じゃないだが……
あの『薔薇の館』に入り込めれば、
『神聖エリシア騎士団』の騎士も客として出入りがあるらしいから、
姉御の探してる奴の情報も手に入るんじゃないか？」

「『薔薇の館』ってあれだろ、街外れの森の中にある超高級娼館だろ。
あそこの娼婦……『薔薇の乙女』って言うんだっけ？
街で見た事あるよ、いつも、付き人を従えた上に、
ソードエンジェルの騎士が一人付きっきりでガードしてさ。
どう見ても『娼婦』じゃなくて『貴婦人』って感じだった」

アマンダがカウンターに置いた銀のシガーケースから煙草を出して咥えると、バーテンダーがさりげなくマッチでその先に火を点ける。
彼女は、にっこりと微笑みかける。

「あっ……こいつにもウイスキーダブルで……」

「すみませんね……姉御。
でも、姉御なら美人だし気風も良いんで、
『薔薇の館』に売り込みに行っては？」

男は、ショットグラスを手に取ると美味そうにウイスキーを啜る様にちびちび飲み始める。アマンダは自分の前に置かれた生ハムとチーズが盛られた小皿をさりげなく男の前にずらしてやると、男は手づかみで生ハムを一枚摘むと顔を上げて口の中にぽとりと落とす。

「売り込みかぁ……なんか嫌なんだよね『娼館』っての。
監獄に入れられて、体、無理矢理売らされてる感が強くてさ」

「姉御……『薔薇の館』をここいらの『娼館』と一緒にしちゃいけねぇ。
あそこは別物って噂だぜ。
『薔薇の乙女』は下手な貴族より良い暮らししてるらしいぜ」

アマンダは煙草の煙をゆっくり吐き出しながら呟く。

「八年嗅ぎ回っても、ろくな情報集まらないからなぁ……
一か八か『薔薇の館』に殴り込み掛けてみるか」

それから一週間後の昼過ぎ、『薔薇の館』の玄関ホールではちょっとした騒動が起こっていた。

アマンダが、『館』の用心棒に羽交い締めにされた状態で怒鳴っていた。

「こらっ！お前、どさくさに紛れて胸触わんな！
『娼婦』の胸は商品なんだ、タダでさわるんじゃねぇ！」

「こらっ！胸なんか触ってないだろうが！
ここはお前ら汚い『街娼』がくる所じゃない、帰れ！」

後ろの用心棒は必死にアマンダを外へ連れ出そうとするが、アマンダもそれをさせまいと身をよじって暴れていた。

「シンシアとか言う、ここのマダムやってる婆に会わせろ！」

アマンダは、ホールの奥へ向かって声を限りに叫んだ。

「何事だ、騒々しいぞ！
それに、婆とは何だ！私はまだ四十五だ！
やろうと思えば、まだ現役で『薔薇の乙女』やる自信がある！」

そう叫び返しながら、仕立ての良さそうな濃紺一色のドレスを着て、シルバーに近いブロンドの髪を美しく結い上げた貴婦人風の女が、後ろに若く美しい執事風の男を引きつれて、正面大階段脇から出て来る。アマンダはその姿を見て、一気に後ろの用心棒を振り解いて、女の前まで走り寄る。

「あんたが、ここのマダムのシンシアかい？」

シンシアはアマンダをじろりと一瞥すると、ぴしゃりと言い放つ。

「お前が騒ぎを起こしてるんだ、先に名乗れ、馬鹿女！」

その強い調子の声と灰色の瞳に宿る妖しい輝きにやや押されながらも、アマンダは精一杯の虚勢を張って言い返す。

「私はアマンダ！ティボーシアじゃ、ちょっとは知れたフリーの『娼婦』だ」

「ふんっ……フリーの『娼婦』？早い話が『街娼』だろうが」

シンシアは鼻で笑う。しかし、アマンダも負けてはいなかった。

「お言葉だけど……
あんたの所『なんとかの乙女』とか言うお高くとまったお人形さんより、
男を喜ばす事に掛けてはこっちが上さ。それもリーズナブルな値段でね」

その言葉にシンシアが急に腹を抱えて大笑いを始める。

「ははははっ！なかなか、言うじゃないか、お前！
……で、そのアマンダって『街娼』が私に何の用さ」

シンシアの言葉を聞いて、アマンダはその場に土下座して床に頭を擦りつけ叫ぶ。

「シンシア！お願いだ！この私を買ってくれ！」

アマンダの態度が豹変し、それを見たシンシアは鳩が豆鉄砲を喰らった様な顔になる。

「おいおい、突然、何だよ、お前？
ヒモが莫大な借金でも作って新しい女と逃げたか？」

アマンダは土下座したまま続ける。

「どうしても、ここで働きたいんだ、頼む！
いくらでも良い私を買ってくれ！」

「ふっ……面白い奴だ。
ここに自分を押し売りに来た娼婦は初めてだぞ。
しかも『街娼』とはな。
で、お前、歳はいくつだ？」

シンシアが自分に興味を持ったのを感じてアマンダを顔を上げ、しかし両手は床に付けたまま答えた。

「十九！」

「馬鹿者！私相手に、歳をサバ読みするな！」

アマンダは頬を赤らめやや小声で改めて答える。

「二十五……」

「おいおい、この世界じゃもう完全な『年増（としま）』じゃないか！
そんな『年増』を買った事など、ここでは過去に一度もないぞ」

シンシアの顔が呆れ顔になる。

「その代わり、男のどんな要求にでも答えて見せる！
そして、他人（ひと）の倍、客を取る。
だから……頼む……私をここで使ってくれ！」

「うちは慈善事業じゃない、
お前の様な『年増の街娼』を雇う様な酔狂な真似はできん。
帰れ！」

シンシアはそう言って必死に哀願するアマンダを一度じろりと睨みつけてから、くるりと踵を返すとホールの奥へ向かって歩きはじめる。後ろに控えていたロメオが無言でその後に従う。

## 第５９話　十字架を背負った娼婦　～その３～（後書き）

感想、メッセージ等は気楽な気持ちで送って頂けると嬉しいです。
気にいって頂けたら、評価、お気に入りへの登録も、お願いします。

申し訳ありませんが、次回から更新ペースを二日に１話のペースに落します。
なお更新時間もＰＭ２２：００に変更いたします。

次回、第６０話ＵＰは１０／３１ＰＭ２２：００を予定してます。

## 第６０話　十字架を背負った娼婦　～その４～

遠ざかるシンシアの背中を見てアマンダは思った。今を逃せば『薔薇の館』に入り込むチャンスは二度と来ないと。そうなれば、あの憎い『ビー』と言う男を探し出す事も出来なくなる。アマンダは今一度遠ざかるシンシアの背中に向かって叫んだ。

「シンシア！頼む！ここに置いてくれ！後生だから……」

その叫びは最後には涙声になっていた。するとシンシアの歩みが止まり、振り返らずロメオに声を掛けた。

「なあ、ロメオ、クリスティーの奴が公爵に『身請け』されるのは来月だったな」

「はい……その通りです」

「そうなると『乙女』の数は何人になる？」

「全部で四人となりますが……」

シンシアは一呼吸置いてから正面を見たまま言った。

「お前みたいな『年増の街娼』を誰が金出して買うか！
『タダ』だ！その上、今日から十年間『身請け』はさせない！
少しでも見込みがないと私が踏んだらいつでも首にする。
それでも良ければ、ついて来い……」

アマンダの顔がぱっと明るくなる。

「そ、それって……」

シンシアはまた歩きはじめながら言う。

「どうした、来ないなら、この話は無しだぞ！」

アマンダはよろける様にして立ち上がると、シンシアの後を走って追った。

「ふっ……運の良い奴だ。
さすがにうちも『乙女』四人じゃ経営が厳しい……」

突然、シンシアが立ち止まりアマンダを振り返り、その眼を見て尋ねた。

「ところで、お前、名字は何て言うんだ？」

「アマンダ＝ルン」

「その名はダメだ……隠してるつもりだろうがお里が知れるぞ」

シンシアがにやりと笑う。アマンダは自分の事を見透かされた様なシンシアの言葉に思わず身を固くする。

「今日から『アマンダ＝シカルティア』を名乗れ。
三百年前にダルメハインを蛮族の侵略から救った伝説の女騎士『エイダ』の名字だ。
今じゃ『エイダ』は純粋なダルメハインの英雄と誰もが信じているが、

本当はお前と同じ『グラル』の民だった。
『シカルティア』ならお前も『グラル』の誇りを失わずに、
しかも『グラル』の民である事を隠せるからな」

「シンシア、あんた、私が『グラル』の民と知った上でここに置くと？」

「私は、細かい事は気にしない主義でね」

シンシアはそう言って高笑いをしながら、またロメオを従えて歩きだす。アマンダも彼女の後について歩いて行く。

『薔薇の館』での暮らしも二年余り過ぎ、アマンダもすっかりここでの生活に慣れていた。彼女の場合、男を喜ばすテクニックは言うに及ばず、他の『乙女』達とは全く違う『街娼』独特のさばさばした気風が貴族達には受けて顧客が着実に増え、今では『乙女』の中でも一、二を争う売れっ娘になっていた。シンシアも半年を過ぎた頃にはアマンダの実力を認めて、採用時からずっと休日もほとんど取らず、連日残業をして言葉通り他の『乙女』の二倍近い男を相手にしてた彼女を、『これ以上は体を壊す。お前の実力は分かったから』と言って自分から頭を下げて他の『乙女』同様の働き方に変えさせたほどだった。

そして、アマンダと『ビー』の再会は呆気ないほど簡単にやって来た。

その日、シンシアから特別な新規客が彼女を『夕方から夜明けまで』で予約を入れたと聞いて、アマンダは少々緊張気味の面持ちで『控えの間』のお気に入りのソファーに姿勢を崩して座って待っていた。

その客が、玄関ホールの立派な扉を開けて入って来たのは他の『乙女』達が全員仕事部屋へ客を伴って消えた後だった。扉を開けて入って来た騎士風の男を見た途端、アマンダの心臓は早鐘の如く激しく早く打ち始めた。そして無意識の内に全身に震えが来た。彼女はそれを必死に抑える。

（抑えろ！気取られたらすべてが終わる。
十年待ったんだ。やっとこの日が来た。
『ビー』、やっと見つけた！）

控えの間からゆっくりアマンダは出て行くと、その男の前で跪き何食わぬ顔で頭を下げる。

「初めまして、私（わたくし）『アマンダ＝シカルティア』と申します。
今夜は夜明けまでお相手務めさせていただきます。」

そして彼女は心の中で言葉を続けていた。

（夜明けまでじゃないよ……地獄の底までお伴するよ『ビー』！）

男は、アマンダの右手をそっと取るとその手の甲にキスをしてから軽く頭を垂れて言った。

「私は『神聖エリシア騎士団』副団長『ビクトル＝キャメンティー』。
今夜一晩、よろしく頼む」

アマンダがビクトルの手を引いて大階段を上がって行くとシンシアとロメオは頭を下げて見送る。その時、アマンダは何故かシンシア

の方をちらりと見て軽く頭を下げた。

「さて……どうなるか、楽しいショーの始まりだ。願わくば、あまり仕事部屋を壊したり汚されたくないがな。その時の清掃代と修理代の請求書はやはり『法王庁』へ送るべきかな？」

「まったく、あなたと言う人は……」

シンシアがにやにやしながら言うと後ろに控えたロメオが苦笑しながら答える。

部屋に入ったアマンダとビクトルは、極々普通の『薔薇の乙女』と客だった。二人はワインを飲みながら、ソファーに並んで座りとりとめもない話を続けた。時折ビクトルの手がアマンダの豊かな胸のラインや太ももをさする。やがて、ビクトルが強くアマンダの体を抱き寄せ、片手でその顎を持って長いキスをする。アマンダの体から力が抜けて行くのを確認すると彼は女性としては大柄で筋肉質な彼女の体を軽々と抱き上げベッドへ連れて行った。

懐かしい愛撫だった。もう十年近く前なのに、体がしっかり覚えていた。アマンダは仕事と復讐を忘れビクトルの腕の中で何度も彼の愛に溺れた。白状するとアマンダは何度も復讐を忘れてこのままビクトルと今の関係を続けていたいと言う衝動にかられた。ビクトルが満足してアマンダの体から離れると、彼女はベッドサイドテーブルの引き出しを開けながら彼に声を掛ける。

「ビクトル……煙草は吸う？」

「ああっ……一本お願いするよ」

ビクトルは心地良い疲れと気だるさの中、ベッドの上の天蓋をぼんやり眺めていた。開かれたベッドサイドテーブルの引き出しの中には象牙で出来た煙草ケースとマッチ、そしてもう一つ、あの日アマンダを何時間に渡っておもちゃにした男たちを血祭りにあげたあの短剣がその奥にあった。ベッドの上から手を伸ばし煙草ケースから一本煙草を取り出すとアマンダはそれを咥える。マッチで火を点け、一度大きく煙を吸ってゆっくり吐き出したあと、気だるい表情でその煙草を仰向けに横になっているビクトルの口に持って行き咥えさせる。

アマンダは、天蓋の模様を見上げながら煙草を吸うビクトルの胸に顔を乗せて、右手の指先でその胸をくすぐる様にしながら甘い声で囁(ささや)いた。

「ねぇ……ビクトル、あなた『グラル』の女、抱いた事ある？
ああ言う蛮族の女って私達と比べてどうなのかしら？」

ビクトルの体がびくりと一瞬硬直した。それまでとろける様な目をしていた、アマンダのブルーの瞳に獣の様な輝きが浮かぶ。

「やはり、お前、ルーファ！」

ビクトルは思わず口の煙草を投げ捨てて叫んだ。同時にアマンダの体がばね仕掛けの様な俊敏さでベッドから起き上がりながら、開いたままにしてあったサイドテーブルの引き出しから短剣を掴み取り、鞘を投げ捨て構える。

「やっと見つけたよ、ビー！

私と村の者全員の怨み、晴らさせてもらう！」

そう叫んでアマンダはベッドの上のビクトルに切りかかる。ビクトルは紙一重でそれを交わすと、枕を片手にベッドから飛び降りる。そして手に持った枕を盾の様にしながら、殺意に燃える瞳で般若の如き表情のアマンダに話しかける。

「落ち着け、ルーファ！
俺は逃げも隠れもしない！
だから、俺の話を先に聞け！」

「問答無用だ！
あの日、お前の為に、私がどんな目に会わされたか！
その上、村と村人を焼き尽くし、妹を連れ去った！」

アマンダはビクトルの話に耳を貸さずに、手に持った短剣で正確に彼の心臓を狙って突いてくる。それを手に持った枕で防ぎつつビクトルは必死にアマンダを説得しようとする。

「頼む、冷静になってくれ、ルーファ！
俺はあの日、急な呼び出しで本国に帰ってた！
お前の村の事を知ったのは、後になってからだ！」

ビクトルの言葉に、アマンダの動きが一瞬止まる。その一瞬を逃さずビクトルはアマンダに駆け寄り彼女の右手の短剣を叩き落とすと、しっかりと抱きしめ、自らの唇を彼女の唇に押し当て舌を絡ませる。最初は激しく抵抗していたアマンダの体が次第に力を失う。そしてその腕がビクトルの背中に回され、逃げ回っていた舌が彼の舌を求め始めた。

# 第６１話　十字架を背負った娼婦　～その５～

長いキスの後、ビクトルは腕の中のアマンダの眼をしっかり見て言った。

「何で、俺が愛するお前をそんな酷い目に会わせるんだ？
急な呼び出しで本国に帰った俺が、お前の村の事を知ったのはその数日後だ。
慌ててお前の村に行った時にはすべては手遅れだった。
お前もあの黒焦げの死体の一つだと思って俺は己の無力さに泣いた。
すべてはあの村の土地を狙ったある金商人の画策した事だった。
俺はお前の敵（かたき）を取る為に必死に法王庁を説得した。
あの事件を起こした実行犯だけは俺がこの手で一人残らず捕えて皆殺しにした。
ただ、実行犯の処刑と引き換えに、黒幕は見逃す事になった。
相手が大きすぎたんだ。
そして、事件その物も公式記録からはすべて抹消された」

アマンダはビクトルの言葉をじっと聞きていた。聞き終わると彼女は彼の眼を見詰めたまま問い返す。

「それは嘘じゃないね、ビー」

「ああ……俺を信じてくれ、ルーファ。
それと俺も、あの事件の実行犯を捕まえた後、
お前があの村では、殺されてない事を実行犯から聞いた。
奴らは、前からその美しさで有名だったお前を、
二人の想い出の山小屋で思う存分嬲り者にした後に殺す計画だっ

たと。

しかし、あの山小屋にあったのはお前を襲った男達の死体だけ。

俺はその日からずっとお前を探していたんだ」

そこまで言ってビクトルはアマンダをベッドに座らせ、自分もその横に座った。

「それじゃ私……この十年間、何やってたの？

あなたへの復讐だけを心の支えに自分自身を汚し尽くして生きてきた。

今では、あなたに愛される資格もない薄汚れた『娼婦』にまで堕ちてしまった」

そう言ってアマンダは隣に座るビクトルにしがみ付いて嗚咽を漏らし始める。そのアマンダの癖のある栗毛を撫でながらビクトルは優しくその耳元で囁く。

「何を言ってるんだ。

俺はまだお前を愛してるんだ、あの時とちっとも変ってない。

お前は、あの時と同じ美しいままだ」

そう囁いても泣き止まないアマンダにビクトルは続ける。

「ルーファ、次の休日に悪いけど僕に一日付き合って欲しいんだ」

意外なビクトルの言葉にアマンダは泣き腫らした眼のまま、不思議そうに彼の顔を見上げる。

「一番近い、お休みなら明日から二日だけど……」

彼はそんなアマンダを優しい眼差しで見詰めながら言った。

「じゃあ、明日のお昼前にここへ君を迎えに来る。
　翌日のお昼まで予定を空けておいて欲しい」

そう言うとビクトルは再びアマンダをベッドに横たえる。ビクトルの懐かしく優しい愛撫にアマンダはまたすべてを忘れて溺れ行った。彼女は何もかも忘れて彼と共にその深い深い愛の海に沈んで行く。これほどまでに穏やかな気持ちで男と愛し合ったのは、あの山小屋で当時『ビー』と呼んでいた彼と最後に愛し合って以来の事だった。ただ、それでもまだ一つ消えない心の刺があった。

「シルファ……」

ビクトルと共に愛の海に沈んで行きながらアマンダは小さく呟(ささや)いた。

翌日の昼過ぎ、アマンダはビクトルの屋敷に居た。広い応接間の中央に置かれた大理石のテーブルを挟んで向かい合う様に、アマンダは長ソファー、ビクトルは一人掛けのソファーそれぞれに座っていた。そしてビクトルの脇には寄り添う様に立つ、腰まである艶やかで癖ないブロンドの髪とブルーの瞳の若く美しい娘が居た。ビクトルが彼女を『シェリル＝キャメンティー』と紹介した途端、それまでにこやかに話していたアマンダの態度が急変した。今、二人の間には先ほどまでとはうって変わって沈黙と重い空気が流れていた。やがてアマンダの固くなった表情が、やや悲しげな表情に変わった。

（そうよ……私、何を浮かれていたの。
　もうあれから十年。こんな事ぐらい何で予想出来なかったの。
　可愛い女(ひと)。彼の奥さんにピッタリ。

でも良いや、こんな可愛い女(ひと)なら私は諦められる。
でも、出来れば『愛人』で良いからお付き合いを続けたいな。
女の身勝手かもしれないけど……）

アマンダはそう思った。そして、精一杯の笑顔を作ってビクトルに言った。

「綺麗な奥様ね……羨ましいわ。
でも、いきなり奥様に会わせるなんて、あなたは人が悪い。
初めまして奥様……
私(わたくし)、娼館『薔薇の館』の『アマンダ＝シカルティア』と申します」

それは、アマンダに出来た精一杯のビクトルへの皮肉と、シェリルへの嫉妬だった。

アマンダのその言葉を聞いたビクトルとシェリルが顔を見合わせ急に大笑いを始めた。

「ビクトル！私、帰らせて頂くわ！
今の私は確かに娼婦だけど、
ここまであなた達に馬鹿にされる程落ちぶれては無いわ！」

いたたまれなくなったアマンダはそう叫び乱暴に席を立つと出口に向かってすたすたと大股で歩き出す。その時だった、今まで黙って立っていたシェリルが初めて口を開いた。

「私を忘れちゃったの？ルーファ姉さん！」

その声に驚いてアマンダは立ち止まり、ゆっくりとシェリルを振り返る。

「確かに髪の色は染めてるからぱっと見は分からないかもしれないけど、
私よ……妹の『シルファ』よ、落ち着いて良く見て！」

そう、勝手にビクトルの妻と信じ込んでシェリルの顔をアマンダはまともに見ていなかったのだ。今、落ち着いて見てみれば、あれから十年経って遥かに大人びて美しくなってはいるが、その顔は妹『シルファ』の面影を色濃く残していた。

「シルファ！本当にあなたなの？無事だったの？
良かった！夢じゃないよね！顔をもう一度よく見せて！」

アマンダはそう叫ぶと同時にシェリルに駆け寄り、その体を抱きしめ顔を覗き込む。

「すまない、アマンダ。
君を驚かそうとして、かえって君に嫌な想いをさせたかな？」

微笑みながらそう言ったビクトルにシェリルを抱いたままのアマンダが尋ねる。

「どうして、シルファがここに？
しかも『シェリル＝キャメンティー』なんてあなたの性を名乗って」

「君の村に駆けつけた時、偶然一人の少女を村の井戸の中で見つけた。
その少女は衰弱しきって餓死寸前だったが何とか一命を取り留めた。

それが『シルファ』、今の『シェリル』さ。
村が襲われた時、彼女はとっさに井戸に身を投げて隠れたが、
そのまま出る事が出来なくなって僕が見つけるまでずっと井戸の底に居たんだ。
彼女と話してる内に、彼女が君の妹と知って本当に驚いたよ。
僕は、もう彼女を他人に任せておけなくなって、
表向きは死んだ親父の隠し子で『腹違いの妹』が見つかったと言う事にして、
うちで引き取ったんだ。
だから、髪の色も染めてるんだよ、素性を隠す為に。
幸い、お袋もシェリルを本当の娘同様に可愛がってくれたしね。」

シェリルを抱きしめて立っていたアマンダは急に足の力が抜けかの様にその場にぺたりと座りこんだ。

「ね、姉さん！大丈夫？」

「ははははっ……なんか急に腰が抜けちゃったよ……」

アマンダはそう言って笑いながら、ブルーの瞳からはぽろぽろと涙がこぼれ出す。アマンダは、あの日から凍りついて止まっていた時間が再び動き出した感じがした。そして、彼女は十年振りに季節を感じた。

「ビクトル、シルファ……今は『春』だったんだね……」

そして、時はまた現在に戻る。

「『十年間は『身請け』を許さない』って言うシンシアとの約束の

十年も来月で終わる。
来月になれば、あんたが私を『身請け』する事は可能になる。
でも、あの日、殺された村の仲間達の事を思うとね、私に責任が無い訳じゃない……」

シンシアはうつ伏せのビクトルに跨りマッサージをしながら寂しげな表情で呟く。

「あの事件からもう十八年だ……
お前も、もうそろそろ、あの事件から解放されても良いと思うぞ。
もし、その事に罪があるなら、お前はもう十分に罰は受けている」

マッサージを受けているビクトルが言う。

「それにね、私にはシルファの他にも妹たちが居るんだ。
この『館』に四人もね。あの娘達を置いてゆくのも心残りだし」

「ふっ……まったくアマンダ、お前って奴は……。
いつも自分自身の事は後回しなんだなぁ」

そう言ってビクトルはくるりと体をひねって、背中に居たアマンダをベッドの上に落として、今度は自分がアマンダの上に乗る。そして、真剣な眼差しでアマンダを見詰めて言った。

「良いか、アマンダ、お前が何と言おうが、
俺は来月になったらマダムにお前の『身請け』を申し出る。
もちろん、それをお前が受けるかどうかはお前次第だ。
それから、これだけは忘れるな。
あの日から俺は何度も結婚話を持って来られた。
でも、それを全部断って来た。

何故なら、お前を初めて抱いた時に俺は心に決めたんだ。
『どんな事があってもこの女を俺の妻にする』ってな。
だから、お前が俺の妻にならなければ俺はいつまでも一人者だ」

アマンダはそんなビクトルに苦笑しながら答える。

「ホント、馬鹿正直な男だね、あんたって人は……。
まあ、良いや……私もあんた以外の男の物になる気はないから」

# 第６２話　過ぎ去りし想い出

月に数回たった一時間だけ、クレアの密やかな楽しみが増えた。この一時間だけはロミも気を利かせて部屋には来ない。

休日の昼過ぎ、クレアの部屋には、お気に入りの茶『天上の桜』の香りとクロウの残り香が入り混じって漂っていた。クレアはソファの上にうつぶせになり、そっと深呼吸をしてみる。そこにはまだクロウのぬくもりと匂いが強く残っていた。唇が、そして体がまだクロウのことを求め続けていた。『娼婦』と、その娼館の『用心棒』、決して許されぬ、そして実ることはない『恋』。最初からそれは覚悟の上だった。その為、二人は自らの想いに枷を嵌めた。二人の想いが許される時が来るまで、最後の一線だけは越えないと。それは他人から見れば、『娼婦が乙女を気取るお遊び』に映るかもしれない。しかしクレアは、今の自分が『娼婦』だからこそ、芽生え始めたクロウへの想いだけは、純粋な女の真心（まごころ）でありたいと願ってこの枷を自らに嵌めた。そして、クロウもそのクレアの想いを受け入れてくれた。

そしてクロウには言えない、もう一つの理由がクレアにはあった。それはティエリーへの『操（みさお）』を彼女なりの形で守る意味があった。これとて「『娼婦』がいまさら何を？」と言う人がほとんどだろう。商売としてティエリー以外の男たちに体を開く事は『娼婦』である以上仕方ない事だとクレア自身も諦めていたし、ティエリーとて『娼婦』である彼女を愛した以上は分かりきっている事だろうし、それをとやかく言う気もないはずだろう。ただ、法王の公邸で彼がクロウに対して見せた『嫉妬』だけはクレアも見過ごす事は出来なかった。実際、ティエリーとの付き合いは三年近く続いているが、ティエリーのあからさまな『嫉妬』を見たのは初めてだった。故にク

レアは自分自身の中で誓いを立てた。商売抜きで純粋に愛して体を開く相手は、生き地獄で苦しむ自分に対してこの世で一番最初に優しい救いの手を差し伸べてくれたティエリーだけだと。その一線を守ることは同時に、例え『娼婦』に身を堕としても心まで堕ちることはないと言う自分への決意でもあった。

ただ、あの『冤罪事件』で国のためとは言え、愛する自分の女を『おとり』として危険を承知で差し出したティエリーに対しては、クレアの心に消せないわだかまりを残した事も確かだった。そのわだかまりがあったからこそ、彼女の心があの日を境に一気にクロウへ傾いて行ったのもまた隠しようのない事実であった。

クレアはまだ体の芯が熱いままの体をソファーから起こし、テーブルの上のカップやポット、焼き菓子が乗っていた小皿を銀の盆に乗せると、部屋のミニカウンターへ運んで行く。カップやポットを洗いながらクレアは独り言を呟く。

「そうか……ミロクとは結局キスすらしてなかったんだ……。あの日も、こんな夏の日だった。」

時は四年前に飛ぶ。

当時まだ十九のクレア……いや、その時はまだ『王女ソフィア』だった……は、城の中庭を巡る回廊をドレスを両手で持ち上げ、艶やかで長いブロンドの髪をたなびかせて走っていた。

「姫様！そうお急ぎにならなくとも、あの方は逃げてゆきませんよ！」

「ソフィア様、危ないです、どうか、走らないでください！」

彼女の後ろを黒いワンピースに白いエプロンを付け、頭には白いカチューシャを付けた侍女二人が追っていた。

「駄目よ！早く行かなくちゃ！

一秒でも長く、ミロク様のお傍でたくさんお話をしたいから！」

一瞬、ソフィアは立ち止まって二人を振り返り、そう声を掛けて、またすぐに走り出す。

城の三階、玉座の間の真上にあたる王の私室、ここは城本体から一室だけ飛び出す様に作られ、部屋の周りには広いバルコニーが巡り大きな窓が正面と左右に広がりまるでサンルームの様な部屋だった。日差しが入る明るい造りで、冬はもちろんその日差しで窓を閉め切れば日中は暖炉が必要ないほど暖かで、夏は三面の窓を開け放てば心地よい風が吹き抜けまるで高原に居るかの様な涼しさであった。王の私室とは言え、王自身の好みで調度品などには華美なものは避けてどれも見た目は落ち着いた物ばかりであった。もちろん、それは見かけだけで、実際にはどれも手の込んだ素晴らしく高価な品々であった。

この日も、三面の窓は開け放たれ、涼しい風が部屋の中をそよそよと気持ちよく流れ、夏の暑さを和らげていた。

中央の大理石造りのテーブルを挟んで立派な体格に口の周りに豊かな黒い髭を蓄えた王と、ブロンドの髪を結い上げ優しそうなブルーの瞳を持つ美しい妃が、それぞれ一人掛けのソファーに座り、反対側の長ソファーには、ブロンドの髪にブルーの瞳、堀の深い整った

顔立ちの若い騎士が座っていた。三人は身分の上下をほとんど意識しない砕けた雰囲気で談笑していた。

「では……ミロク、そう言う事にしておく。
もう一度、確認するが、それで良いな？」

王が笑顔を浮かべながら若い騎士に問いかける。

「もちろん、私には異存はありませぬ、王様」

そう言って、騎士は軽く頭を下げる。

「これで、私たちの心配事も一つ減ります。
いえ……逆に、増えることになるかもしれませんね」

妃は、少し意地悪げに笑いながら騎士に言った。

その時、ノックもなく部屋のドアが勢い良く開いてソフィアが駆け込んで来た。

「ミロク様！いらっしゃい！お待ちしておりました！」

ソフィアは満面の笑みを湛え、若い騎士の元へ走り寄る。

少し、遅れて侍女二人もノックしてから部屋に入って来る。

「陛下、お妃様、申し訳ありません！姫様をお止めしたのですが……」

「馬車を降りるなり、駆けだされて追いつけませんでした」

二人はそう言って頭を下げ、扉の両側に分かれて控えた。

「ひとえにソフィアが悪いのだ。気にするな」

王はそう言って二人に微笑み掛ける。

そう、この若い騎士こそ今もクレアの心の中の想い人『ミロク＝クジョウ』その人だった。彼女はミロクの横にぴたりと体を寄せて座るとその腕をしっかりと抱いてせかす様に言う。

「もう、お父様とお母様とのお話は終わったんでしょう？
早く、私のお部屋に来て、旅のお話を聞かせてください」

そんなソフィアに、王と妃は呆れ顔になる。

「ソフィア、あなた王女なんですよ、もっと慎み深くしなさい！」

「そんな事だから、ミロクにいつまでたっても子供扱いされるのだ」

「私は、それでも構わないわ！
ミロク様と一緒に居られればそれで十分だもの！」

ソフィアはミロクの腕にしがみついたまま、甘えるような眼でミロクを見上げる。そんなソフィアを優しい笑みを浮かべて見てから、助けを求める様な困った顔つきでミロクは王と王妃を見る。

「ミロク、もうこちらの話は良いから、ソフィアに付き合ってやってくれ」

「わがまま娘で申し訳ないけど夕食までの時間、お願いね、ミロク」

王と王妃の言葉を聞いてソフィアは待ち切れぬ様に立ち上がると、ミロクの手を引いてせかす。

「早く！早く！ミロク様！」

「姫様、わかりましたから、そう手をひっぱらないでください」

ミロクはそう言って、苦笑しながらゆっくりと立ち上がる。彼が立ち上がるとソフィアは嬉しそうに、まるで恋人の様にその腕にしがみつく。

「やれやれ……子供なんだか大人なんだか分らん奴だ」

「そういう年頃なんですよ」

王と妃はそんな娘の姿を見ながら幸せそうに微笑んだ。

ソフィアの部屋は王の私室と同じ三階にあった。あちらの様に三面広い窓があるという様な特別な造りではなかったが、南面は一面広いガラス窓が広がり、その外には見晴らしの良いバルコニーがあった。こちらは、やはりソフィアの趣味で壁は一面淡いピンクのベルベットが張られ、天井にはまるで一面がガラス張りで空が見えるかの様な絵が描かれていた。その為に部屋自体が実際以上に明るく、そして開放的に感じられた。調度品も花の模様を散らした女性的で可愛い物が多く、所々に人形やぬいぐるみも置かれていかにも若い娘の部屋という趣（おもむき）だった。

自室にミロクを招き入れたソフィアは、一緒について来た二人の次女にそっと耳打ちする。

「あなた達はもう良いわ。夕食までミロクと二人きりにして」

「では、私どもは夕食になりましたら、またお迎えに上がります」

「陛下に怒られますので、くれぐれも嵌めは外さぬように……」

「わかってるわ……私だって馬鹿じゃないわよ」

そう言ってソフィアがウインクすると、二人の次女は少し意味ありげな笑いを浮かべて囁く。

「姫様……男は基本的に浮気者、首輪をつけるのは早い方がよろしいかと……」

そう囁いてから膝を軽く曲げてお辞儀をすると部屋をそっと出て行った。

## 第６３話　王女と黒騎士の恋

ミロクは部屋の真中に置かれた白いテーブルの脇の長ソファーにくつろいで座り、ソフィアはその横に恋人の様に寄り添って座っていた。そして二人の前にはソフィアが入れたお茶が良い香りを漂わせていた。このお茶、今でもクレアが愛用する一番のお気に入り『天上の桜』だった。

「ねえ、ミロク……あなた『黒騎士』なのよね」

ソフィアのその言葉に、ミロクは少々驚いた。いつもなら、真っ先に尋ねられるのは『旅の話』だったのに今日に限っては、予想だにしなかった質問をされた。

「はい、姫様、おっしゃる通りですが？」

「じゃあ、魔法も使えるのよね？」

ソフィアはサファイアの様に美しいブルーの瞳をきらきらさせて身を乗り出し尋ねる。

「そうでなければ『黒騎士』は名乗れません」

ミロクはお茶を啜りながら、にこやかに答える。ソフィアはさらに身を乗り出し、ミロクの顔に自分の顔を近づけてさらに尋ねる。

「もしも……もしもよ、あなたが私をさらって自分の物にしたいと思ったら、

ここから誰の目にも触れず、誰の手も届かない処へ私をさらって

行く事が出来る？」

あまりに突拍子のないソフィアの問いかけに、ミロクは思わず飲んでいたお茶をのどに詰まらせ咳き込んだ。ソフィアは、慌ててポケットから薔薇の刺繍の入った絹のハンカチを取り出しミロクに手渡す。ミロクは咳き込みながら、ソフィアから受け取ったハンカチで口を押さえてしどろもどろになりながら言った。

「ひ、姫様、突然、何という事をおっしゃるんですか……」

ミロクは、大きく深呼吸して、少し気持ちを落ち着かせてからソフィアを見て答える。

「魔法で可能か？と問われれば可能です。
ですが、お城にも専属の魔術師がおります。
もし、私が姫様をさらおう物なら、その者が必ず私を見つけて、
最後には死罪にされることになるでしょう」

ソフィアはここで、下を向いて頬を赤らめ少しもじもじしながら小声でさらに尋ねる。

「もし、その時、私があなたのすべてを受け入れ『他人』でなくなっていたら、
どうなるのかしら？それでもあなたは死罪になるの？」

「姫様がその様な事を口にしてはいけません」

ミロクはソフィアをたしなめる様に少し強い口調で言う。その言葉に、ソフィアは顔を上げミロクを不満げな目で見つめて言い返した。

「なぜ私が口にしてはいけないの？
私だってもう十九、子供じゃない！」

ミロクは穏やかな笑みを浮かべて、ソフィアを諭すように語りかける。

「姫様、良いですか……
もし私が、姫様をどうしても欲しくなったら、
まず王様とお妃様の処へ行って誠心誠意でお願いします。
そうすれば、王様とお妃様はきっと許してくださると思いますよ」

ソフィアはそれでも納得せず、テーブルのカップを手に取りお茶をすすりながら不満げに呟く。

「どうかしら……お父様の事だからきっと反対するわ。
どっかの国のつまらない馬鹿王子に私を嫁がせる気に決まってる。
自由に恋も出来ずに、好きでもない人の妻になるなんて絶対に嫌！」

ミロクはソフィアの言葉に思わず苦笑する。それは誰が聞いても『私はあなたが好き』と高らかに宣言しているのも同じことだった。
まあ、本人はそのことを隠し通せていると思っているのがミロクにはまた可愛らしく思えた。いっその事、ソフィアをこの場で押し倒してキスでもしようかと想ったが、彼はその気持ちをかろうじて押し留めた。その代わりにと言っては何だが、ミロクは少しソフィアをからかってみる事にした。

「では、姫様には今、お好きな方がいらっしゃるのですか？」

「えっ……」

ソフィアにとって、そのミロクの問い掛けは思ってもみない物だった。一見ごく自然な問い掛けに見えるが、それは彼女にとっては心かき乱される物だった。まず、正直に「それはあなたよ」と答える事などまだ恋の経験がほとんどないソフィアには恥ずかしくてとても出来なかった。しかし「その様な方はいません」と答えれば、ミロクを拒否した事にもなる。どう答えれば良いのかその時のソフィアには分からなかった。

下を向いてもじもじとしながら沈黙しているソフィアにミロクはわざと少し悲しげな表情と声で呟く。

「そうですか……今の姫様にその様な方はいらっしゃらないのですね」

「いえ……違います！その……私……私……」

ミロクの寂しげな声を聞いてソフィアは思わず口走ってしまった。しかし、その後の言葉は続かなかった。言ってしまえば楽になる。それはソフィアには分かっていた。元々ミロクの心を確かめたくて、おかしなことを言い始めたのは自分自身だった。ああ言えばきっとミロクは自分の気持ちを分かってくれると思っていた。そして彼の口から先に自分への気持ちを正直に言ってくれると思っていた。ところが気が付いたら自分自身が追い詰められていた。

「早く姫様にも、その様な素敵な方が現れると良いですね」

ミロクは、ソフィアが少し可愛そうな気もしたが、この可愛い姫君の口からその言葉を引き出したい欲望に駆られていた。心の中ではキスを我慢したのだからこのくらいはと言う勝手な理屈を付けて。

次の瞬間、下を向いて、両手を膝の上に置きドレスをぎゅっと握りしめてもじもじしていたソフィアが意を決したように半ばやけくそ気味に叫んだ。

「ミロク、私はあなたが好き！」

そう叫ぶと、握りしめた手の甲にぽたぽたと涙の粒が落ち始めていた。穴があれば入りたいくらい恥ずかしかった。自分の顔から火が出てるかの様に熱かった。心臓が壊れてしまいそうな程早く鼓動を打っていた。ソフィアの口から嗚咽が漏れ始める。

ミロクはソフィアのその姿を見て、逆に慌てていた。意地っ張りで世間知らずな可愛いお姫様を少しからかうつもりで言った言葉に、彼女は追い詰められついに自分の本当の気持ちをそのまま正直に叫んでしまった。正直に気持ちを吐露した後、今度はその恥ずかしさで、今は辛そうに下を向いて嗚咽を漏らしている。自分の言葉が、ここまでソフィアを追い詰めてしまうとは思ってもみなかった。ミロクは、『恋の駆け引き』に対してあまりに不器用で、そして純粋なこの姫君が無性に愛おしくなった。

「あっ……」

ソフィアが小さな悲鳴を上げた。彼女が気がつくと、すでにミロクの腕の中にしっかりと抱きしめられていた。何が起こったのか分からなかった。ミロクの力強い腕の中は心地よい暖かさだった。さらに、髪が優しく撫でられ、耳元でそっと囁かれた。

「姫様、私もあなたを心からお慕い申し上げております」

その言葉に、ソフィアの想いは一気に弾けた。彼女はまるで子供の様にミロクにしがみついてわんわんと声をあげて泣きながら叫んでいた。

「意地悪！ミロクの意地悪！
それなら先に言いなさいよ！
『黒騎士』の分際で王女にこんな恥ずかしい言葉を言わせるなんて！
許さない！絶対に許さない！
あなたは一生かけて私に償いをしなさい！」

それはソフィアの精一杯の強がりだった。ミロクにもそれは分かっていて、その言葉が無性にいじらしく思えた。ソフィアの小柄な体を抱きしめながら片手でその艶やかなブロンドの髪を優しく撫でていた。

ソフィアは本で読むように甘くとろける様な形ではなく、不器用でみっともない形の告白になってしまったが、それをミロクに受け入れてもらいとても幸せだった。しかし、聡明なソフィアは、いくら自分がミロクを心から愛し、またミロクも自分を愛してくれようと彼とは決して結ばれることはない事を分かっていた。一国の王女と、国王に使える『騎士』ならいざ知らず、特定の主を持たぬ『黒騎士』とではあまりに身分の差がありすぎた。奇跡が起きぬ限り、この恋は『夢』のままで終わってしまう事を十分に承知していた。ならばいっその事、このままミロクにすべてを捧げてしまっても良いとその時ソフィアは思っていた。もし、ミロクがこのまま自分を求めてくれるなら、その求めに応じるつもりだった。

「ミロク……愛してる……」

ソフィアはそう囁いてから、ミロクの顔を見上げて一度彼の目をじっと見つめてから、静かに目を閉じた。

## 第６４話　知られざる悲劇の真実

ところが、いくら待ってもソフィアの唇には何も触れなかった。その代わりに額に軽くミロクの唇が触れた感触がした。

「姫様……ここから先は今日は止めましょう」

その後、ミロクの声がして、ソフィアはそっと目を開く。彼女はすぐさま不満げな顔でミロクを睨みつける。

「なぜ？あなたは王女にそれをするのが怖いの？」

ソフィアにしてみれば、せっかくすべてを捧げる覚悟をしたのに、それをこの様な形ではぐらかされるのは屈辱であった。

「そうではありません。
今日は私が姫様をここまで追い詰めてしまった。
あなたが恋に不慣れな事を知っててそれを利用した。
今の姫様は冷静な判断がお出来にならない状態です。
この様に姫様を罠にはめる形でここから先には進みたくないのです」

ミロクは優しい笑顔でソフィアに説明する。

「でも、私は今の気持ち、間違ってないと思う」

ソフィアはそれでもミロクの目をしっかり見つめてそう言って食い下がった。ミロクはソフィアを今一度抱きしめその髪を撫でながら耳元で囁く。

「ではこうしましょう。
来年は姫様の二十歳の誕生日です。
必ず私はその日にここへ帰ってまいります。
その時にお互い今の気持ちが変わらなければこの続きをしましょう」

「私の二十歳の誕生日……十か月も先ね。
知らないわよ、そんなに先じゃ私の心が変わってしまっても」

ソフィアはミロクの厚い胸板に顔を当てて、その心地よい心臓の鼓動を聞きながら答える。

「たった十か月程度で姫様のお気持ちが変わってしまうなら、
今、このままこの先に進んでも後で後悔するだけですよ」

「なんか、それって大人の屁理屈みたい。
でも、あなたが言うなら良いわ、その通りにする。
その代わり、もう一度、あなたの本当の気持ちを聞かせて」

ミロクの腕が今まで以上に強くソフィアの体を抱きしめた。そしてソフィアに耳元で彼女を優しくとろけさせる様な言葉は再び囁かれた。

「ソフィア姫様、私ミロクは、あなたを心からお慕い申し上げております」

「その言葉に嘘偽りはないな？もし偽りなら許さぬぞ、ミロク」

ソフィアは彼の胸に顔を付けて甘えたまま、でも精一杯背伸びした

王女らしい言葉で彼の言葉を今一度問い正す。

「はい……姫様」

ミロクはソフィアの体を抱きしめながらそっと答えた。

結局、その後三日ほどミロクは城に滞在した後、東の遠い国へ旅立って行った。その三日間、ソフィアはたびたびミロクを自分の部屋に招き入れていたが、これ以降はいつもの様に『旅の話』を聞くだけで、この話はその日だけで終わってしまった。

『王女ソフィア』が一日にしてそのすべてを失う事になる日は、ミロクが城を立って三か月後だった。

時は戻り、クレアの部屋。

「嘘つき……あなたは助けに来てくれなかった。
私は何度もあなたに助けを求めたのに……」

クレアのグリーンの瞳から一筋涙がこぼれた。

その日の事を想い出すと、悔しさと悲しさがクレアの胸を襲う。彼女は両親を殺した憎い男の手で、大切に守ってきた物すべてを根こそぎ奪われ、ミロクとの約束は永遠に果たせなくなった。もし、あの時、無理にでもせがんでミロクに抱かれていたら、例え、今の様に、体を汚しつくされてもミロクなら許してくれたかもしれない。もちろん、それは自分勝手な思い込みかもしれないが、そう思う事で心の痛みも和らいだかもしれない。今の彼女には、もしミロクに再び出会えても『彼に捧げるべき物』はすべてあの男に奪い取られ

て、残っているのは薄汚れた『娼婦』の体だけになってしまっていた。

それと、クレアはあの日の事を思い出す度、どうしてもひっかかる事があった。その時は何も思わなかったが、『娼婦』として男との駆け引きも巧くなった今では、あの日のミロクの言動がどうしても理解できなかった。そこには不自然な点が多すぎるのだ。何故、ミロクは自分にキスすらせずにあの日終わったのか？ミロクには他に好きな女性が居て、その女(ひと)に操を立てていた為か？あるいはやはり王女に手を出した後の事を恐れたか？あるいは単純にソフィア姫をそう言う目で見る事が出来なかった為か？それとも、ソフィア姫の二十歳の誕生日に何か意味があったのか？いずれにせよ、あの状態で目の前の若い娘がすべてを捧げる覚悟を見せていたのに手を引いた事には何らかの事情があったはずだった。

クレアは知らない。あの日、彼女が部屋に飛び込む前に、王と妃とミロクが何を話していたのか。

王と妃がソファーに座り、ミロクはその前の床に跪(ひざまず)き深々と頭を下げていた。

「身分の違いは重々に心得ております。
しかし、私の気持ちは変わりません。
無理を承知でお願い申しあげます。
姫を……ソフィア姫様をどうか私にください」

その突然の言葉に王と妃は顔を見合わせた。しばしの沈黙の後、先に口を開いたのは妃だった。

「まあ、私たちもソフィアの気持ちは分かっていました。
娘は隠し通せているつもりでしょうが、
あの娘、あなたと初めて会った時からずっとあなたの事を慕っていた様です。
あなたが来るとわかると、何をするのも上の空になって……」

そう言って妃はほほ笑む。

「あやつの事だ、口では分かった風な事を言うだろうが、
普通にどこかの王子の元に嫁がせたり、婿をもらったりすれば、
自棄を起こしてどんな事をしでかすやも知れぬ。
そうなれば、問題は余計に複雑になる。
それより、多少異例とは言え、ミロク、お前を婿にした方が話は早い。
諸外国を回り、政治の世界の表も裏も知りつくし、あやつより頭も切れる。
あの変に頭の回転ばかりが早くて、その実、
精神は子供のままのソフィアを御せる可能性のある男はお前以外になかろう」

王はにこにこ笑いながら、跪き頭を深く下げて緊張しているミロクに言った。

「実はね、ミロク、あなたにそう言われる前に、
この人と話していたのよ。
近い内にこちらからあなたにお願いしようかとね」

妃のその言葉を聞いて、ミロクはゆっくり頭を上げた。彼は当然、ここで王と妃にどやされ拒絶されると思っていた。心の中では山の様な説得の言葉を考えていた。しかし、それはすべて取り越し苦労

になってしまった。

「どうだろう、来年はソフィアの誕生日だ。
あやつには内緒で、その日にミロクとあやつの婚約発表をすると言うのは？」

「あっ！あなた、それは良いお考えです！
あのお転婆娘が当日、どんな顔をするか楽しみですわ。
ミロク、あなたもいつまでも跪いてなんか居ないで、そこに座りなさい」

王と妃は、楽しそうに二人でどんどん話を進め始める。ミロクは妃の言葉に従い、軽くもう一度会釈してから二人の向かい側にある長ソファーの方へ腰掛ける。

「しかし、姫様はそれで良いのでしょうか？」

ミロクは二人の会話について行けず、やや戸惑った表情で尋ねる。

「あの娘相手ならこの位でちょうど良いのよ」

「では……ミロク、そう言う事にしておく。
もう一度、確認するが、それで良いな？」

そう、ソフィアは知らなかったが彼女はミロクの『婚約者』となっていたのだ。しかし、この事が実はすべての始まりでもあったのだ。

ミロクとソフィアの婚約の話は、すぐに当時、王が信頼を寄せていた将軍『スザク＝ジン』にも伝えられた。彼を通して内密に色々な

準備をしておこうと王は考えての事だった。しかし、スザクはソフィアに想いを寄せており、いずれ王の信頼が厚い自分がソフィアの夫となり、この国を治める物だと思っていたのだ。それはスザク一人の思い上がりではなく、城の重鎮達のほとんどがそうなる物と信じていたし、スザク自身、誰もが認める才能と実績は十二分にあった。スザクの怒りはすさまじい物だった。よりによってどこの馬の骨かも分からぬ『黒騎士』風情に、自分の愛する女も国も奪われるなどとは彼の自尊心が許さなかった。そして、彼はその優れた頭脳で短期間の内にこのクロフォードの国を自らの力で奪い取る綿密な計画を立てて、それを無慈悲に実行した。自分をないがしろにした王と妃の首を自らの手で跳ね、ソフィアを力ずくで自分の『物』にしてその夫に収まりこの国を手に入れるはずだった。しかし、ソフィアは、王と妃の首を跳ねる瞬間を目の前で見せ、その後力ずくでその体を奪っても屈服しなかった。それがスザクが燃やす怒りの炎に油を注ぐ結果になり、自分が受けた屈辱のすべてをソフィア一人にぶつけるか様に彼女の体と心を徹底的責め抜いた。

クレアは洗ったカップを棚にしまうと、部屋のバルコニーに出て深呼吸をしながら背伸びをする。ふと下を見るとクロウが脚立に乗って立木の選定をしていた。

「もし、あなたがミロクなら私は一番嬉しい。
私を気遣いわざと他人のふりをして愛してくれてるならどんなに幸せなことでしょう」

クレアは、小声でそっとそのクロウの姿に問いかけてみた。

# 第６５話　誇りを捨てて生を選んだ女　～その１～

その日、シーヴァは珍しくいつもの男装ではなく、他の乙女たちと同様にブルーの綺麗なドレスを身に纏い貴婦人の姿で『控えの間』に現れた。いつもは凛々しい貴族の若者に見える彼女も、この出で立ちになると元々かなりの美女である事が分かる。事実、シーヴァの馴染みの客の多くが「彼女は女性らしい格好さえすればヘルガとは言わないがクレアと肩を並べるくらい美しい女だ」と言ってその美しさを認めていた。しかも、女性の姿で居る自分が少し恥ずかしいのかややうつむき加減にはにかんだ表情で椅子に座って客待ちをするその姿は新鮮味もあり、美少女風の姿が売りのアルとはまた違う可愛らしさを醸（かも）し出していた。

早速、隣の椅子に座るクレアがにやにやしながら声を掛ける。

「シーヴァ、今日は珍しく『お姫様』なのね。
という事は、今日のお相手はあの方でしょ。
そしてお決まりの『夕方から早朝まで（オーバーナイト）』！」

「しーばぁ、本当ハトッテモ美人、デモソレ隠シテル。
アノ人以外二ハ、ソノ美シイ姿見セナイ。
コレ『真実ノ愛ノ証』！しーばぁ、今日ハ幸セ、間違イナイ」

手に持ったシーブラムを軽くつま弾きながらヘルガもはやし立てる。

「や、止めてくれよ！僕だってこんな格好は恥ずかしいんだ。
クレアもヘルガもからかわないでくれよ！」

格好は女性になっても口調だけは変わらず男言葉のまま、シーヴァ

が頬を赤らめて言い返す。

「おいおい、その口調で、その格好で、
さらに小娘みたいに頬を赤らめてそんな事言ったって、
かえって可愛らしさを強調するだけだぞ、シーヴァ。
余計にからかいたくなっちまう」

アマンダは恥ずかしがるシーヴァを見て大笑いしながら言った。

「もうっ！アマンダ姉さんまで！」

「いっその事、男装止めて、そっちをメインにしたらどう？
シーヴァって、そっちの方が自然な気がするのは私だけかな？」

アルが手に持った本をから顔を上げて彼女に尋ねる。

「それはダメ！私のお客が取られる！
方向性がバッティングしちゃう！
だってシーヴァってその格好すると『お姫様』の雰囲気だもの」

その問い掛けにシーヴァが答える前に、クレアが悲鳴に似た声を上げた。

「ははははっ！確かにな、クレアがそう言うのも分かるな。
それで髪を伸ばしたら『ソフィア姫』ファンも浮気するぞ！」

アマンダが大笑いしながら楽しそうに口を挟む。

「一人ノ客ヲ巡ッテ、二人ノ『姫』ガ火花ヲ散ラス。
ソレハソレデ見テル方ハ面白イ。

しーばぁ、オ姫様二方向転換スル、ヨロシ！」

「うん……それ小説のネタに使えそう！
是非、クレアとシーヴァにやってほしいね」

ヘルガとアルが顔を見合せて笑う。

「もう、みんな勝手に盛り上がって！
これ以上からかうと僕は本気で怒るよ！」

シーヴァは恥ずかしさで首まで真っ赤になりながら怒鳴った。しかし、今の彼女ではいくら怒鳴ったところで男装の時の迫力はなく、可愛らしさを強調するだけだった。

「あっ……そうこう言ってる内に『お姫様』の彼氏登場……」

アルのその声に、シーヴァは『玄関ホール』の方を見た。

そこには、法曹界に身を置く者が着る黒いマントを羽織り、丸眼鏡を掛けたグレーの瞳にブラウンの髪、豊かな口髭を湛えた品の良さそうな中年の男が立っていた。男は『控えの間』の方をちらりと見てシーヴァの姿を確認するとにっこりと笑い軽く会釈した。

その男の姿を確認したシーヴァは席を慌てて立ち上がる。

「じゃあ、みんな、ひと足先にお仕事に行って来るよ！」

と言って、一度他の乙女たちを見まわしてから、扉の方へドレスを持ち上げて走って行く。

「良い夜をね！素敵な彼氏と楽しんでおいで！」

シーヴァの後ろ姿にアマンダがにこやかに声を掛けた。

『控えの間』を出てシーヴァは、その男の前まで駆けて来ると軽く膝を折ってあいさつをする。

「いらっしゃいませ、バークレイ検事総長様。
お待ち申し上げておりました」

そう言うとシーヴァはすぐにその男の腕に恋人の様に自分の腕を絡ませ、その男の顔を見上げてにっこり笑う。男はシーヴァを伴って正面大階段脇のシンシアがいる受付で支払いを済ますと、そのまま大階段を二階に上がって行った。

この男、名前を『アデル＝バークレー』と言い、歳は五十歳。シーヴァが言ったように、このダルメハイン法国の検事総長を務める男だった。

まるで貴婦人の寝室の様な豪華なシーヴァの仕事部屋、その真中にあるソファーにアデルは腰掛けていた。

「シーヴァ……いや……シルビア、元気にしてるか？」

造りつけのミニカウンターで飲み物の用意をしているシーヴァにアデルが声を掛ける。シーヴァは銀の盆にワインのボトルとワイングラス、チーズと生ハムを盛った小皿を乗せて彼の前のテーブルにそれらを並べながら、アデルの顔を覗き込むようにしていたずらっぽ

い目で答えた。

「ええ、おかげさまで私は元気です。
先生は、良いんですか？奥様がいらっしゃるのにこんな所に来て」

シーヴァはそっとアデルの横に腰掛け、二つのグラスにワインを注ぐ。

「それを言うな。
私は純粋にお前を心配して来てるんだ」

アデルは自分の前のワイングラスを手に取り一口飲みながらシーヴァの顔を見て答える。

「無実の父と母に毒杯を仰がせ、
その娘である私を娼婦にしたあなたが良く言いますわ」

シーヴァは口ではそう皮肉たっぷりに言いながら、甘えるように彼の肩に頭を乗せて体を預ける。アデルはそっと片手でシーヴァの肩を優しく抱きながら目を閉じ、何かを思い出す様に呟く。

「助けられなった……お前の両親を……
両親同様に死刑が決まっていたお前の命を救う事だけがかろうじて出来た。
それとて、命を救っただけで、
美しく聡明なお前の明るい未来のすべて奪ってしまった。
すまない……シルビア……私の人生最大の汚点だよ」

「それは私が望んだ事でもあります。
先生が悪いわけじゃない、先生は正しく職務を果たしただけ。

わかっています。だから私は、先生を怨んではいませんよ。
今もあの時も、私は……」

シーヴァは体をアデルに預けたままワインの入ったグラスを目の前でくるくると回して揺れるワインを見ながら言った。

それは四年前の事だった。

鉄格子の嵌る石造りの牢の中、火の点いた一本の蝋燭と赤い液体の入ったグラスが二つ置かれた粗末な木のテーブルを挟んで、貴族風の男女が向かい合って座っていた。たった一つある鉄格子の嵌る窓からは不気味なほど青白い月明かりが差し込んでした。テーブルの上でお互いの手を握り合いながら、無言でじっとお互いのやつれた顔を見つめあっていた。そして、その二人の傍には、黒いマントを羽織りブラウンの髪と豊かな口髭を湛えた男が悲痛な表情で立っていた。

「バークレイ、娘を……シルビアを頼む」

男はアデルだった。椅子に座る男がアデルを振り向き、その目を見つめて落ち着いた声で言った。

「すまん、ヴァレンタイン……こんな結果になって……
その代わり、シルビアの命は何としてでも助ける」

アデルは、うつむいたまま男と目を合わせず、両手の拳を握り締めたまま悲痛な表情で答える。そんなアデルを女が恨めしげな目でアデルを見ながら呟くように言う。

「命が助かったとしても、あの娘は……」

「申し訳ありません、奥方。
しかし、私にもこれ以上はどうにも出来ぬのです」

アデルの握りしめた拳が震えていた。

「もう、言うな、マリア。
さあ、旅立ちの時だ……
これからは空の上からシルビアを見守ろう」

そう言って、男はグラスを手に取る。

「あなた……私はこんな結果になってしまったけれど、
あなたに会えて一緒に今まで暮らせて本当に幸せでした……」

女もそう言ってグラスを手に取る。二人は今一度お互いの顔を見合わせてほほ笑むと、一気にグラスの液体を仰いだ。そしてグラスをそっと置くとお互いの手を今一度固く握りしめる。永遠とも思える一呼吸の後、二人の目が静かに閉じられ、そのまま倒れ込むように机の上に倒れ込む。グラスが倒れてそのまま石の床に落ち静寂に満ちた空間を切り裂く鋭い音がした。

二人の為に一番苦しまずに短時間で眠る様に死ねる毒を選んだ。それが自分が親友夫婦にしてやれる精一杯のことだった。実際、二人はまったく苦しむ事なく、アデルの目の前で息を引き取った。しかし、彼にはまだ一つ、さらに辛い務めが残っていた。

この日、シーヴァの両親は身に覚えのない『法王暗殺関与』の罪により、刑を執行されその命を落した。

# 第６６話　誇りを捨てて生を選んだ女　～その２～

腰まである艶やかな長いブロンドの髪に茶色の瞳を持つ若く美しい貴族の娘が、その姿に似つかわしくない石造りの冷たい牢の中に一人居た。その娘は牢の壁際に付けられた粗末な木製のベッドの上に腰を下ろし、目を閉じて、両手を胸の前で握りしめ一心に何かを祈る様な姿だった。

そう他ならぬ二十歳のシーヴァ、その時の名は『シルビア＝ヴァレンタイン』だった。

シルビアの耳に、近づいてくる足音が聞こえてきた。それは彼女に絶望の知らせを運んでくる足音。彼女の体が小刻みに震えだす。迫りくる津波の様な絶望の中、それでも神が『正義』の名の下（もと）に救いの手を差し伸べてくれるかもしれないと、彼女は一欠（ひとか）けらの希望を持っていた。やがて足音は彼女の牢の前で止まる。牢の鍵が鍵穴に差し込まれ、微かな金属音がした。そして足音がゆっくりと自分に近づいて来て、すぐ傍で止まる。

「シルビア……今、君の父上と母上が旅立たれた。
　苦しまず、眠る様な最後だった」

聞きなれた声が言った。やはり奇跡は起こらなかった。神は無実の父と母を見捨てた。足元の固い石の床が一気に崩れ落ち、深い深い奈落の底に落ちて行く感じがした。自分自身で感情が分からなくなった。悲しみ、憎しみ、怒り、絶望、すべてが混じり合った激しい嵐の中に居るようだった。どうすべきか分からなかった。頭の中が真っ白になった。

アデルは、ベッドに腰を下ろし一心に祈る『愛弟子（まなでし）』シルビアに残酷な知らせを伝えた。その知らせを聞いた彼女は、今、目の前でベッドから立ち上がりそのまま放心状態で人形の様に立ち尽くしていた。やがて、その顔がゆっくり自分の方を向いた。ぞっとするほど無表情の顔だった。

「先生……お茶の時間です。
さあ、先生もお父様とお母様と一緒にお茶にしましょう……」

そう小さく呟いたシルビアの目はからからに乾き、口元だけが不気味に笑っていた。アデルは思わずシルビアに駆け寄りその体を強く抱きしめ叫んでいた。

「すまない……父上と母上を救えなかった！」

その瞬間だった。

「いやあああああああっ！」

腕の中のシルビアの顔が天を仰ぎ叫びを上げた。今まで人形の様に無表情だったその顔に怒りとも悲しみともつかぬ表情が現れていた。同時に腕の中のシルビアが凄まじい力で暴れだした。とっさにアデルは思った。今この娘（こ）を放してはいけないと。彼の腕を振り解こうと激しく暴れるシルビアの体をアデルは必死に抱きしめる。

「落ち着け！落ち着くんだ、シルビア！」

「放して！まだ間に合う！
私がお父様とお母様を助けるの！」

父と母の元へ行こうとして泣き叫ぶシルビアの体をアデルは抱きしめ続けた。やがて、シルビアは動きを止める。そして、全身から力がゆっくり抜けて行く。そしてシルビアは静かに意識を失った。アデルはシルビアの体を抱き上げゆっくり牢を出て行く。

アデルとシルビアの関係は、『ダルメハイン法学』の師弟だった。シルビアが十歳の時からアデルに弟子入りし『ダルメハイン法』に関して徹底した英才教育を施された彼女は、ダルメハインにおいて最難関と言われる『ダルメハイン法博士』の資格を十八の若さで取得した。ちなみにこれは、二十年間破られていなかった『ダルメハイン法博士』を取得した最年少記録十九歳を一歳更新する物だった。この事により、彼女は次期枢機卿候補の最有力者と目されるまでになっていた。

シルビアが再び意識を取り戻し最初に見たのは、ここ数日間ずっと見ていたあの黒ずんだ石の天井ではなく、白地に色とりどりの花の刺繍が施された天蓋だった。あの汚れて異臭がする薄汚れた粗末な木製のベッドではなく、体が沈みこんでしまうかの様にふかふかで良い香りのする豪華なベッドの上に寝ていた。着ている物も牢に入れられてから一度も着替える事を許されず汚れていたドレスではなく、絹で出来たやわらかで肌触りの良い寝間着を着ていた。その上、自分の髪や体からはほのかに石鹸の香りが漂っていた。どうやら気を失ってる間に誰かに体を洗われた様だった。牢に入れられてからは一度も入浴はおろか洗顔すらしてなかった為に全身がべたつく嫌な感じが常にしていたのが、今は全身がさらさらと気持ち良くなっていた。この場所を確かめようと、シルビアが恐る恐る上半身をベッドから起こすと優しい声が響いた。

「気がついたか、シルビア？」

その声に驚いてシルビアが声のする方に振り向くと、そこにはアデルがソファに座ってこちらを見ていた。

「先生？！ここはどこ？
なぜ、私はここに居るの？」

「ここは、検事総長の公邸だよ。
君も知っての通り、ここは君の居た監獄のすぐ隣でね。
気を失った君をここに連れて来たんだ。
着替えさせるついでにメイド達に入浴もさせておいた」

アデルは立ち上がってそう言いながら、シルビアのベッドの脇まで歩いて来る。

「でも、宜しいのですか？
私は『死刑囚』。そんな私を牢から出して」

「心配しなくて良いさ。
相手が私では、下っ端役人は嫌とは言えんさ」

そう答えてアデルはシルビアの居るベッドに腰を下ろす。

「シルビア、君も『ダルメハイン法博士』の銘を持つ身。
今の君の立場は十分に分かっているはずだね」

「はい……先生。
『国家反逆罪』で死刑判決を受けた者は判決後四十八時間以内に死刑を執行すべし。

もし配偶者が存在すれば連座して本人と同時に死刑を執行すべし。
その子供も連座して当人の刑が執行されてから三日以内に同様に死刑を執行すべし。
この国でもっとも重い罪と刑。
その罪を犯した者の直系の血は残させないという強い警告です。
もし、許されるなら……
私も毒殺として、なるべく苦しまずに済む毒を選んでいただければ……」

ベッドの上のシルビアは寂しげに頭(こうべ)を垂れて小声で答える。そんな彼女にアデルは教師としての顔で問うた。

「では、もう一つ君に問う。
君の両親は本当に罪を犯したと思うかね？」

「私は『ダルメハイン法博士』としての立場であれば、
冷静に判断して、この判決は妥当だと思います」

シルビアは頭を起してアデルの目をしっかりと見て静かにそう答えた後、やや言葉を荒げて感情を込めた声で叫んだ。

「しかし……
ヴァレンタイン家の一人娘『シルビア』としては、
判決は妥当でも、納得はできません。
父は冤罪です！
父がその様な恐ろしい事をする理由がありません！」

そう叫んでシルビアは目を固く閉じ再びうつむいてしまった。掛け布団の上に彼女の固く閉じた瞳からぽたぽたと涙が落ち始める。やがて、押し殺したような嗚咽が漏れ始めた。

「時間さえあれば……いつか……冤罪を証明してみせるのに……
悔しい……この陰で笑う奴らが居るのに……
私はどうする事も出来ずに死んでゆくなんて……」

彼女は嗚咽の合間に呪文の様に同じ言葉を何度も呟いていた。

「時間か……
もし、その時間を得られるならば、
君はどんな屈辱にも耐える自信はあるかね？」

嗚咽するシルビアを見ながらアデルは教師の顔で再び尋ねる。その問い掛けに驚いた様にシルビアは顔を上げてアデルを見た。

「えっ……まさか……その方法があるのですか？」

「本人とその配偶者の命を救う事は出来ないが、
子供だけなら、命を救う事は出来る」

アデルの言葉にシルビアは思わず彼の腕にしがみつき叫んでいた。

「先生！教えてください！
今、生きる事さえできれば、いつか必ずお父様の冤罪を証明できる！
私は、その為なら、どんなことでもします！」

「子供が貴族で男子の場合、
去勢して二度と子孫を残せぬ体とする事で死刑とみなす。
貴族で女子の場合は……」

そこまで言ってアデルは言葉を止めた。シルビアの顔が真っ青になりがたがたと震え始める。やがて自分自身の体を両腕で抱きしめながら彼女は震える声で言った。

「あまりの事でずっと忘れてた……
いえ、私自身が思い出すのを拒んでいたのかもしれない。
『ダルメハイン法』判例による連座死刑に関する補足事項……
貴族で女子の場合、その身を死するまで『娼婦』となす事で死刑とみなす。
先生は、私に娼婦になれと……」

「あくまで可能性の話だよ、シルビア。
娼婦になっても父上の冤罪が証明されれば、
元の君に戻りヴァレンタインの家を再興する事も可能なはずだ。
ただし……
貴族の娘で『娼婦』になる事を選んだ者自体が皆無に近い。
ほぼすべての娘が『死刑』を選んだ。
過去にほんの数例ある、娼婦になる事で生き延びた者も、
家を再興した女性となると前例はまったくない。
すべて娼婦としてみじめな一生を終えた者ばかりだ」

アデルは感情を抑えた口調で震えるシルビアにそう語った。

# 第67話　誇りを捨てて生を選んだ女　～その3～

シルビアは必死で冷静になろうとしていた。不思議なもので自らの『死刑』が変わらぬ物と信じていた時にはむしろ冷静でいられた。今、『死』以外の選択肢が出来たことで心がかき乱されていた。歴史ある『ヴァレンタイン家』最後の一人として誇りを持ったまま『死刑』に処されるか？あるいは一切の『誇り』を捨て『娼婦』となり果てても『生』を取るか？もちろん、これがまっとうな『死刑』判決ならば、彼女は悩む事はなく、誇りを守り『死刑』を選んでいたであろう。だが、父は『冤罪』であると信じる彼女には時間が欲しかった。ここで自分がどんな屈辱を受けようと生き延びる事が出来れば父の汚名を晴らす事が必ず出来ると思えた。とは言え、まだ二十歳前の、しかも処女だった彼女にとって娼婦になり多くの男に身を売る事など考えるだけでも身の毛もよだつ事だった。

「シルビア。三日ある。結論を急ぐ事はない。
君をもう牢に戻すつもりはないから、ここでゆっくり考えれば良い」

ベッドの上でうつむいて自らの体を抱きしめ震えているシルビアを見てアデルは優しくそう言った。

シルビアはそれからの三日間、睡眠もほとんど取らず、ソファーに一人じっと座り苦悩し続けていた。アデルやメイドたちが何を話しかけても彼女は口を閉ざしたまま何も話さなかった。部屋まで運ばれる三度の食事にも、ほとんど手をつけず、口にしたのは一日コップ一杯のミルクだけだった。

やがて三日目の朝が来た。シルビアはじっとソファーに座ったままだった。艶やかだった長いブロンドの髪は艶を失い見てわかるほど白髪が混じり、光り輝き潤んでいた茶色の瞳も光を失いからからに乾いた陶器の様になり、憔悴しきったその顔は一気に十歳ほど歳をとってしまったかの様に見えた。

やがて、赤い液体の入ったグラスを載せた銀の盆を手に持つ執事を伴って、アデルが部屋にやって来た。執事は部屋の入り口付近で控え、アデルはシルビアの座るソファに並んで座り、まだうつむいたまま苦悩する彼女の横顔を見ながら口を開く。

「シルビア……残念ながら時間だ。
君の結論を聞かせてくれるかな？」

そう言ったアデルの言葉はシルビアを気遣う優しい声の様でありながら、その中に彼女に決断を迫る冷徹な響きも含まれていた。重苦しい沈黙の後、シルビアが消え入るような微かな声で答えた。

「私……『娼婦』に……なります……」

シルビアはそう言い終わるとソファーの前のテーブルに突っ伏して号泣し始めた。その答えを聞いたアデルが入り口付近に控えていた執事に目配せをすると、執事は赤い液体の入ったグラスが乗った盆を持ったままそっと部屋を出て行った。号泣し続けるシルビアの背中を優しく撫でながらアデルが語りかける。

「今は泣きたいだけ泣くがいい、シルビア。
私は、その決断をした君は間違っていないと思う。
この先、色々あるが、私に出来る事は何でもしてあげるからね」

しかし、今のシルビアにはアデルの言葉はほとんど聞こえていなかった。いや『音』として耳には入ったが『意味ある物』とは認識できなかった。『死刑』を選んでも、恩師であるアデルが彼女の為に選んだ毒薬ならば苦しみはたぶん一瞬で済んだであろう。しかし、彼女は『生』と引き換えに『娼婦』となる事を選び、それは苦しみがこの先じわじわと長い時間を掛けて、まるで真綿で首を締められる様にして彼女を死ぬまで苦しめて行く事を意味していた。例え、父の『冤罪』を晴らし『ヴァレンタイン家』を再興出来たとしても、娼婦となった事実は決して消すことはできない。どちらに転んでもシルビアにとっては、一生苦しみを背負う事に変わりはなかった。

「先生！助けて！私を助けて！」

シルビアは、思わず隣に座っているアデルにしがみ付き叫んだ。もちろん、聡明な彼女の事、そう叫んだところでアデルにどうする事もできないのは分かっていた。それでも、彼女は彼にすがりそう叫ばずにはいられなかった。

「すまない……シルビア……君を助ける事は今はできない。ただ、私の権限で、君が売られる先の『娼館』だけはある程度選べる。

下賤な者が君を弄ぶ事がない様、『高級娼館』だけに候補を絞る」

アデルはそれ以外に言葉はなかった。相手がシルビアでは下手な嘘は言えなかったのだ。シルビアはしばらくそのままアデルの胸の中ですすり泣きを続けた後、泣き腫らした目ですがる様にアデルを見ながら言った。

「先生……このまま、好きでもない男に、

今まで守ってきた一番大切な物を奪われるは嫌。
せめて、私がこの世で一番尊敬する先生に捧げたい。
もし、このまま汚れて行く私を少しでも哀れと思ってくださるなら、
このまま、何も言わずに私を抱いてください。
最初で最後のたった一つの綺麗な想い出を私にください、お願い……」

アデルはシルビアの涙に濡れる悲しげな茶色の瞳をじっと見つめながら尋ねる。

「分かった、シルビア。後悔はしないね？」

「はい……先生……」

シルビアは精一杯の笑顔を作ってアデルの目を見つめて答えた。その答えを聞いてアデルはシルビアの体を優しく抱き上げて、そのままベッドに運んで行った。そして、その夜、アデルは私邸に帰らず、一晩シルビアと共にベッドで過ごした。例え、本物の愛ではなくとも、尊敬する恩師アデルに『女』にしてもらい、そのまま一晩中、腕に抱かれて過ごしシルビアは幸せだった。この想い出があれば、この先に地獄が待っていようとも耐えて行けると思えた。

それから、一週間後、シルビアは早速耐えがたい恥辱と恐怖を味わっていた。

カーテンを締め切られた検事総長公邸の広い客間の一つに、シルビアは肌が透けて見えるほどの薄い下着一枚だけを身につけ、両手で自分を抱くようにして立っていた。彼女の前には上品なドレスを身

に纏った五人の中年女性達が椅子に座っていた。彼女はとても目を開いている事が出来ずに下を向いて目を固く閉じ唇を噛みしめて震えながら耐えていた。

「五百六十万ルベル！」

「六百万ルベル！」

女たちが買値を次々と上げて行く。彼女の横で、演台の前に立つディーラーの中年女が女性達に声を掛ける。

「歴史あるヴァレンタイン家の一人娘にして、
『ダルメハイン法博士』と『歴史博士』の二つの銘も持つ、
その名を全国貴族に知られた才女『シルビア＝ヴァレンタイン』ですよ、マダム達。
その値段は彼女に対してあまりに失礼かと思いますよ」

「八百万ルベル！」

「八百五十万ルベル！」

そう、シルビアはその身を『娼館』のマダムを客としたセリに掛けられていた。ここの集まった五人の女達は、ダルメハイン内に五つだけ存在する、国が公認する『高級娼館』のマダム達であった。普通ならセリに掛けられる女は全裸にされるのが普通であるが、シルビアの場合、貴族の娘と言う事もあり、薄い下着を身につける事を許され、しかもセリが行われる部屋に入れるのはディーラーも含めてすべて女性に限定されていた。それでも、その時のシルビアにとっては舌を噛んで死にたいくらいの恥ずかしさでった。

「一千万ルベル！」

一際（ひときわ）豪華な赤いドレスを身に纏った恰幅の良いマダムが手を上げて叫ぶと、今までセリ上げてきたマダム達の声が止まった。その後しばしの沈黙がその場を包む。

「『桜の園』のマダム、一千万ルベル！
他の方もうありませんか？」

ディーラーの女が会場を見まわし確認してから、手に持った木槌を振り上げ叫ぶ。

「では、一千万ルベルで『シルビア』嬢は『桜の園』へ！」

そして木槌が振り下ろされようとした時だった。今までずっと目を閉じ一言も口にしなかった、濃紺一色の地味ながら仕立ての良さそうドレスを着た女が目を見開き叫んだ。

「一千百万ルベル！……いや、一千五百万ルベル出そう」

その声に会場がどよめいた。『桜の園』のマダムが憎々しげな目で彼女を睨んで小声で呟く。

「くそっ！シンシアの奴！足元を見やがって……」

「一千五百万ルベル、それ以上ないですか？」

ディーラーの女が今一度会場を見まわしてからマダム達に尋ねる。さすがに今度はどのマダムも首を左右に振り諦めの姿勢を明らかにした。

「では『シルビア＝ヴァレンタイン』嬢は、
一千五百万ルベルで『薔薇の館』へ落札とします」

そう宣言して、ディーラーは木槌で机の上を叩いた。

「それから『薔薇の館』マダムの『シンシア＝ラザフォード』様、
支払いは事前のお約束通り金貨にて本日お支払いただきます様お願いします」

セリの緊張感から解放されたマダム達が私語をお互い交わし少々ざわつく中、最後にそう言ってディーラーの女が会場を後にする。その後、しばらく雑談していた各娼館のマダム達も皆、一言づつシンシアに声を掛けてから会場を次々と出て行った。

## 第６８話　誇りを捨てて生を選んだ女　～その４～

一人残ったシンシアは、まだ震えながら立っているシルビアに近づくと、手に持った自分のコートをシルビアに羽織らせてから、マダム達の座っていた椅子の一つに座らせる。そしてその前にしゃがんで彼女の顔を見て優しい頬笑みを浮かべ言った。

「私は『薔薇の館』のマダム『シンシア＝ラザフォード』。
長い付き合いになると思うが、よろしくな」

娼館のマダムと言う者はもっと冷酷で恐ろしいものと思っていたシルビアにとって、その時のシンシアの優しい頬笑みは思ってもみない物だった。不安と恐怖に押しつぶされそうになっていた彼女の心が少しだけ救われた気がした。

「『シルビア＝ヴァレンタイン』です。
これからお世話になります」

シルビアはシンシアの顔を見て小声でそう言って軽く頭を下げた。
シンシアは、艶を失いこの歳で白髪も混じってしまったシルビアの髪を優しくそっと撫でながら囁いた。

「案ずるな、うちの『乙女』は皆、毎日明るく生きている。
『住めば都』とも言うしな。きっとお前も大丈夫だ」

その言葉を聞いて、思わずシルビアはシンシアにしがみ付き号泣し始めた。

「仕方がないか……貴族のお嬢様がいきなり娼婦だものな。

可哀相に、綺麗な髪がボロボロだし、可愛い顔もやつれ果ててる。
相当悩み苦しんだと見える」

シンシアはそう言った後、黙ってシルビアが泣き止むまでその体をずっと抱いていた。普段のシンシアなら商品でもある『乙女』達にここまであからさまな優しさは見せない物だが、さすがにこのシルビアの境遇と今の状態を思うといつもの調子にはなれなかった。

小一時間ほどして、会場からシンシアのコートを羽織って彼女に肩を抱かれながら、少しふらつく足で出てきたシルビアを見つけて、廊下の椅子で座って待っていたアデルが駆け寄る。

「シルビア、大丈夫か？」

アデルのその声にシルビアは無理に笑顔を作ってほほ笑んで頷く。

「シンシア殿、シルビアをよろしくお願いする」

まるで母親の様にシルビアの肩を抱くシンシアにアデルはそう言って頭を下げた。

「いつもあんたら男の都合で泣かされるのは私ら女なんだ。
この娘だって、こんな事がなければ、
この国初めての『女性枢機卿』になるはずだったんだろ、しかも最年少で。
そんな未来ある娘によくもこんな残酷な仕打ちが出来るもんだ」

シンシアはそう言ってアデルの顔を睨んだ。

「私とて同じ気持ちだ。しかし、こうするより他に方法はなかった。私は私なりに考えて、いつか名誉の回復が出来る可能性のある方法を選んだんだ」

「ふんっ、どうだかね。法的な問題はなくとも……一度でも娼婦となった事実が残れば、例え名誉の回復は出来ても、世論的には『枢機卿』への道は永遠に閉ざされるに決まってる」

シンシアがなおもアデルを責める様に言うと、いままで黙り込んでいたシルビアがシンシアの目を見て口を開いた。

「マダム、バークレー卿を責めないで！これはみんな私が決めた事です。彼は私の命を救ってくれた恩人ですから」

シルビアの言葉と真剣な表情を見て、シンシアは一瞬少し驚いた様な顔なる。

「お前さんがそう言うなら分かったよ。バークレイ卿、悪かったな。私の性分で、どうしても女贔屓（ひいき）で物事を考えてしまう。今言った事は忘れてくれ」

シンシアはそう言って、すぐに頬笑みを浮かべて彼女を見た後、アデルに向き直り軽く頭を下げた。

それから二時間後には、すでにシルビアは普通の街娘の着る綿の洋服を着て、シンシアと共に『薔薇に囚われし聖女』の図案が書かれた馬車の中に居た。

シルビアの着ている洋服も、実はシンシアが同行していたロメオに命じて急遽調達した物だった。残酷な事に、シルビアは捕らわれた時、身に付けていたアクセサリーのすべてはもちろん下着一枚に至るまですべて国に没収され、その身一つだけをシンシアに引き渡されたのだった。『法王暗殺関与』などと言う大罪を犯した者は家族も物も含め、そのすべての財産を国に没収される。その為、今のシルビアに残された物はその身一つだけで他には何もなくなっていた。ただ、彼女の持つ『ダルメハイン法博士』と『歴史博士』の二つの資格だけが特別に剥奪を免れた。

「お前さ、今日から名前を変えた方が良いぞ」

うつむいて隣に座っているシルビアにシンシアが声を掛けた。

「嫌です！名前まで捨てるなんて！
私は例え娼婦に身を堕としても、
ヴァレンタイン家の『シルビア＝ヴァレンタイン』です！」

シンシアの言葉をシルビアは顔を上げ彼女の顔を見つめて激しく拒絶した。

「気持ちは分かるがな、その名のまま商売始めると、
才女として名高いお前を滅茶苦茶にして楽しもうとする貴族どもが群がるぞ。
世の中、そう言う男が多い。出来る女はいつも目の敵にされる」

「でも……この名は今の私にとってはとても大事な物」

シンシアはそう言った物のシルビアの気持ちが分からなくもなかっ

た。またシルビアとてシンシアの言う事は理解できたし、彼女の心遣いは嬉しかった。二人の間にしばし沈黙が流れた。

「では……名前と姓の頭を取って……『シーヴァ』と言う名は如何でしょう？
それなら、御本人だけにはいつも本当の名前を感じられると思いますが」

二人の向かいの席で黙って座っていたロメオがそう言って二人の沈黙を破った。

「うん……『シーヴァ』か悪くない、響きも良い。
この名前ならどうだ、シルビア？」

シンシアはシルビアの顔を見て尋ねる。

「『シーヴァ』……『シルビア』と『ヴァレンタイン』の頭を取った名前。
本当の名前を失うのは悲しいですが……
この『シーヴァ』と言う名なら私も誇りを失わずに済みます」

シルビアはロメオとシンシアの顔を見ながらそう答えた。彼女が意外に早く納得してくれた事にシンシアは心の中でほっとしていた。シルビアが『本当の名』にこだわれば、今の彼女の精神ではとても耐えきれない様な『遊び』を強いる客が群がるのが目に見えていた。少なくとも『仕事』に慣れるまではその手の恥辱はシルビアに味わせたくなかったのだ。

「後は『姓名』の方だが……」

「『エクダル』を使わせてください。母の旧姓です」

シンシアは、自分のこの問い掛けに、ほぼ即答したシルビアに少々驚いた。

「しかし、良いのか？そちらの家の姓を語っても？
貴族の家は色々うるさいぞ。
特にお前の場合、言い難(にく)いが事情が事情だしな」

「母はヴァレタイン家のメイドでした。
それを父が見染めて激しい恋愛の末、結ばれたのです。
母の実家は片田舎の小さな雑貨屋ですから問題ありません」

「ふっ……なるほどそう言う理由か……
『シーヴァ＝エクダル』……うん……良い名だ！」

シルビアから彼女の母の話を聞いたシンシアは、頭の中でもう一つ別の事を考えていた。

（ヴァレンタイン卿が生贄(いけにえ)にされた理由の一つがそれだな。
後一つは、可哀相だがシルビア自身だろう。
この娘(こ)はあまりに賢すぎた。
これが男ならまだ良かったのだろうがな。
『出る杭は打たれる』って奴か……）

「マダム、どうかされましたか？」

シンシアが視線を宙に漂わせ、何か考えてる様子で黙りこんだのを不審に思いシルビアは彼女の顔を見て尋ねた。

「あっ……いや、何でもない」

シンシアは自分を見たシルビアの顔を逆にじっと見つめた後、いきなりシルビアの長い髪を首の後ろ辺りで両手でぎゅと束にしてから、にやにや笑いだした。

「うん……これはいけるかもしれんぞ。
これなら、こいつの為にもなるし、うちの『売り』が一つ増える」

突然、髪を掴まれたシルビアは訳が分からず目をぱちくりさせる。
また向かいの席のロメオはシンシアの考えに気がついたのか、少し笑みを浮かべながら独り言の様に呟く。

「まったく、あなたと言う人は……
よくそれだけ、次から次へと色々考えつくものですね」

「ははははっ！こんな私だからお前もつるんでいるんだろう？」

「あなたと居れば、退屈と言う物は無縁の毎日がある……」

「ふっ……今日のお前は珍しく良くしゃべる。
可愛い『乙女』が入ったのが、嬉しいからかな？」

そう言って、シンシアはロメオを見てけらけらと笑いだした。

シンシアとロメオの会話を聞きながらシルビアは訳が分からなくなっていた。シンシアが何に気がついたのかもさっぱり分からないし、シンシアとロメオの二人も良く分からなくなっていた。娼館のマダムとその執事と見た目から思っていたが、今の会話からは主従関係以上の何かをシルビアは感じていた。

# 第69話　誇りを捨てて生を選んだ女　～その5～

『薔薇の館』に到着した後、本来なら早速シルビア……いやシーヴァはその日の内に『薔薇に囚われし聖女』の刺青を有無を言わさず背中に彫られてしまう運命だった。しかし、事情が事情だけに、それでは彼女が精神的にもたないだろうとのシンシアの判断でシーヴァは、先にそれから一週間シンシアに『薔薇の館』と『薔薇の乙女』に関しての教育を受ける事になった。

シルビアが『薔薇の館』に来て数日後の昼過ぎ、シンシアの事務室。

シルビアへのレクチャーを終えてシンシアは部屋の中央にあるソファーで煙草を長パイプで吹かしながらくつろいでいると、ロメオがコーヒーと焼き菓子を盛った皿を銀の盆に乗せてやって来た。彼は手慣れた手つきでコーヒーと焼き菓子の皿をシンシアの前のテーブルに並べるとシンシアを見て尋ねた。

「マスター、シーヴァには例の事、伝えたんですか？」

ロメオはそう言いながらシンシアの前のソファーに腰を下ろす。シンシアはちらりと彼を見てから、焼き菓子に手を伸ばす。

「ああ、今朝、伝えたよ」

「で……彼女はどんな反応でしたか？」

「最初は意味が良く分からなかった様だぞ。
そりゃそうだろうな、

貴族のお嬢様じゃ『女同士が愛し合う』って言う事自体知らなかったみたいだ。
まあ、そっちの方を前面に出した方が、変な男どもが群がらずに済むって事を説明したら分かったくれたみたいだ。
でも、まだ完全には理解できてない節もある。
とりあえず、明日いつもの美容師を呼んで髪だけは先に短くさせるつもりだがな」

シンシアはそう言って煙草を深く吸い込んで天井を向いて煙をゆっくり吐き出す。

「通常のテクニックはまた私が三カ月掛けてしっかり仕込みますが、そちらの方のテクニックは、私は男ですので仕込めませんよ」

「お前の仕込みが終わった後、そっちの方は私が直々に仕込むつもりだよ」

シンシアが少し隠微な笑みを浮かべてそう言うと、ロメオが自分のコーヒーカップを手に取りながら尋ねた。

「マスター、シーヴァに関してはいつものあなたと少し違う。
ひょっとして五十年前のソーニャの事をまだ気にしてるのではないですか？」

その問い掛けに、シンシアの顔が急に曇る。

「気にしてないと言えば嘘になる。
客を取り始めて、一ヶ月した頃だったよな、
ソーニャが自室で自らの喉を短剣で突いて命を絶ったのは。

仕事も慣れてきて、もう大丈夫と私が気を緩めた直後だった。
あの娘もシーヴァと同じ様に、親の罪でここに売られた貴族の娘だった。
もうあんな想いは二度としたくないからな。
お前も、当分はシーヴァから目を離さないでくれよ」

「分かりました、マスタ……」

シンシアとロメオはその後、会話も途切れしばしの間黙ってコーヒーを飲んでいた。

その後のシーヴァは、シンシアも驚くほどの順応性を示した。首筋が後ろから見えるほどに短く切る事も、『薔薇に囚われし聖女』の刺青を背中に彫る事も、シーヴァは抵抗も泣き叫んだりして取り乱すこともなく受け入れた。今は、その事を悲しんだり苦しんだりするよりも、その先の事を考える事で心の平静を保っていた。一日も早くここの生活と仕事に慣れ、その中で父親の冤罪を晴らす方法だけを考えるようにしていたのだ。

髪を切ると同時に、シンシアはシルビアに男装を始めさせた。そして言葉も男言葉を普通に使えるように教育していった。髪を短くして男装し男言葉を話すシーヴァはまさに麗しき貴族の美青年になった。シンシアにとって嬉しい誤算だったのが、シーヴァは髪が短いまま女性としてドレスなどを着ても違和感がないばかりか、普通の女性が持たない中性的な美しさと色気があって男にとっても十二分に魅力的な女性になった。

やがて、すべての研修を終えて、『薔薇の初夜』を迎える事になっ

たシーヴァがシンシアの仕事部屋に呼ばれた。

シンシアは、いつもの様に部屋の真ん中のソファーに腰掛けて長パイプで煙草を吹かしていた。シーヴァが部屋に入って彼女の前のソファーに腰を下ろすとシンシアが口を開いた。

「シーヴァ、お前もいよいよ『薔薇の初夜』を迎える事になるんだが、
気持ちの整理はついてるか？」

シンシアはそう言ってシーヴァの表情を覗き込む。

「はい、マダム。私はもうすべての覚悟は出来ています。
御心配には及びません」

そう答えたシーヴァの表情には一点の迷いも無いかの様に凛とした物だった。

「そうか……なら良い。
ところで『薔薇の初夜』の相手だが……
私は『ティエリー＝ボンフィス枢機卿』と言う方を考えてる。
ひょっとして、お前、知ってるか？」

「ボンフィス卿なら知ってます。
人格者で有名な上、現法王のご友人でもあられる素晴らしい方だと思います。
ですが……マダム、もし出来るなら『薔薇の初夜』の相手は、
是非『アデル＝バークレー検事総長』様にしていただきたいのです。
今の私がこんなわがままを言える立場でない事は重々承知してい

ます。
　しかし、私の身の上を憐れんで、一つだけわがままを聞いていただけるなら……」

シンシアは、そのシーヴァの答えにやや戸惑った表情を浮かべた。
それに気がついたシーヴァが表情を曇らせる。

「ダメですか？やはりこんなわがままは……」

「お前が娼婦にされると知って、処女を捧げた男か？
　それほどまで、お前はバークレイ卿を慕ってるんだな」

シンシアの言葉に今度はシーヴァが驚きの表情を浮かべる。

「なぜ、あなたがその事を知ってるの、マダム？」

「そのくらいの事、気がつかない様では娼館のマダムなんてやってられないよ」

そう言って、煙草の煙をゆっくり吐き出すと、シンシアはその口元に笑みを浮かべて答えた。

「分かった、シーヴァ、お前の気持ちを優先しよう。
　『薔薇の初夜』は三日後、相手は『アデル＝バークレー検事総長』。
　その時はちゃんと女としてドレスアップして臨む様にな」

シンシアの言葉にシーヴァは満面の笑みを湛えて、深々と頭を下げた。

「マダム……わがままを聞いてくださって本当にありがとうございます」

そして、三日後、シーヴァは無事にバークレイ卿を相手に『薔薇の初夜』を迎え、晴れて正式に『薔薇の乙女』となった。ただ、他の乙女たちが『薔薇の初夜』の前に、『薔薇の乙女』として『舞踏会』を通して『社交界』へのプレデビューをしているのに対し、シーヴァはすでに『シルビア＝ヴァレタイン』として社交会デビューは済んでいたし、事情が事情の為『シーヴァ＝エクダル』としての社交界デビューは行われなかった。それは、これ以上、シーヴァを他の貴族の好奇の目に晒したくはないとのをシンシアの想いからであった。

その後のシーヴァは、シンシアとロメオが心配していた様な事態もなく順調に『館』の生活に慣れて行き、一年後には『館』にやってきたクレアを同じ年頃の先輩として面倒が見られるほどになっていた。また、商売上もその男装の佳人と言う特異な風貌だけでなく、歴史や法学に詳しい知性も好評で男女共に多くの常連客を抱えるまでに成長した。

時は再び現在へ戻る。

ベッドの上で、シーヴァはアデルに寄り添い、その胸に頬を当てて片手で彼の頬を撫でていた。そんなシーヴァを片手で抱きながらアデルはシーヴァに尋ねる。

「シルビア、『姫君』の動向に変化はないな？」

シーヴァはアデルの問い掛けに彼の胸から顔を上げて彼の顔を見る。

「特に大きな動きはありません。
ただ、また一人、顧客が増えた様です。
この顧客はクレアもマダムも素性をひた隠しにして特定は出来てません」

「その客については大体の見当は付いているからお前は気にしなくて良い」

そう言って、アデルはシーヴァの体を片手でなぞって行く。シーヴァは目を閉じてその指先の動きに身を任せる。

「クレアが本当に『ソフィア姫』自身だったなんて今でも信じられません。
しかも一年もの間、自分の両親を殺した将軍に散々弄ばれていたなんて。
お城育ちの姫君なら普通は気が狂っているか、自害してるはずです。
それを耐えて生き延びたなんて……今のクレアからは想像もできません」

アデルはシーヴァを再び仰向けに寝かせるとゆっくり自分の体をその上に重ねる。

「お前は亡国の姫の事など何も考えなくて良い。
だた、動向を探る事だけ考えれば良いのだ。
それが、お前の父の冤罪を晴らし、『見受け』される事を一生許されないお前が、
ここから救われる唯一の道だからな」

「はい……アデル様……あっ……」

そして、アデルがシーヴァの首筋にキスの雨を降らせながら強く彼女の体を抱きしめせり上がると、彼の背中に回された彼女の手がゆっくり爪を立てる。

# 第７０話　少年騎士と娼婦のデート

「ロミ、なんであいつ一人で行かせたんだ！
いつもなら、必ず、お前がくっついて行くのによ」

「だって、姉様が付いて来ちゃダメって言ったんだもん！」

「しかし、大丈夫でしょうかねぇ……二人きりにしちゃって……」

夏の日の昼下がり、クロウ、ロミ、カサドと言う珍しい組み合わせの三人が裏庭にある薔薇園の東屋で頭を突き合わせて会談中だった。ダルメハインは、内陸にある為に真夏でも空気は乾いていて、この東屋の様に日差しさえ遮れれば屋外でも吹き抜ける風は気持ちが良いものだった。特に森の中にある『館』は夏こそ、森を吹き抜ける爽やかな風が心地よく最も良い季節と言えた。

「くそぉ、あのガキ、俺のクレアに下手な事しやがったらぶっ殺してやる！」

クロウが明らかにイライラしながら怒鳴る。

「クロウの旦那！『俺のクレア』とは聞き捨てならぬ事を！
まさか、旦那はすでにクレア様に手を出しちゃったって事はないでしょうねぇ？」

カサドがクロウに噛み付きそうになりながら問い詰める。

「あっ！それは大丈夫。私が保証しますよ、カサドさん。
まあ、あってもキスとそのちょっと先ぐらい。

考えようによっては裸で姉様と抱き合った事があるカサドさんの方が
一歩リードかもって所だから」

ロミが水筒からコップに冷やしたレモネードを注ぎながら代わりに答える。

「しかし、あの馬鹿、何でバナビーの奴とそんな賭けしたんだ？」

「先週、街に遊びに出た時、カフェで食事した後カード始めたんですよ。
姉様、カードには自信があるし、事実、最初は勝ちまくってたんです。
それまでは小銭を掛けて遊んでたのに、最後の最後で……
気が大きくなった姉様が『二人っきりの一日デート』を賭けたら、
何とバナビーさんが奇跡の逆転勝利！」

「それで、今日は朝からバナビー君とクレア様は二人きりでどこかへデートって事に」

カサドがそう言うと、三人は一度お互いの顔を見合わせ大きくため息をつく。

「私やクロウの旦那がため息つくの分かるが何でロミちゃんまで？」

「だって、私もクレア姉様の事、愛してるだもん！」

「……ってお前、もしかしてそっちの気（け）が？」

「イケないですか？クロウさん。

クレア姉様は、毎日、お風呂の中で私を優しく抱っこしてくれるんですよ。
姉様だって、そっちの気が少なからずある様な気がしますが」

そう平然と言ってコップのレモネードをこくこくと飲むロミを見て、クロウとカサドは唖然としてお互い顔を見合わせた。

その頃、クレアとバナビーは『館』から馬で三十分ほど走った距離にある深い森の木々に囲まれ誰もいない静かな泉の畔に居た。夏の強い日差しも森の生い茂る葉に適度に遮られた優しい木漏れ日が射し、木々を渡る風は『館』を吹く風よりもさらに優しく爽やかだった。泉はこんこんと清らかな水をその底から湧き上がらせ、直径が二十メートルほどの泉を満たした後さらさらと小さな音をたてて流れ出して行く。きっとこの泉はどこかの川の源泉の一つなのであろう。

小さめの毛布を地面に敷いて、その上にクレアが作って来たサンドウィッチや水筒に入れて持って来たお茶をカップに並べてピクニック気分でランチを楽しんだ後、クレアは毛布の上に座り、バナビーはそのクレアの膝枕で寝そべっていた。

「姉御の作ったサンドウィッチ美味かったよ。
意外に姉御って家庭的なんだ」

バナビーは、目を閉じて、時折吹く気持ちの良い風とクレアの膝の心地よい暖かさと柔らかさを感じていた。

「意外とは何だ、意外とは！
これでも料理は結構好きなんだぞ」

きつい言い方をしながらも、なぜかクレアは、片手を横になるバナビーの胸に置き、もう一方の手で自分の膝の上に頭を乗せている彼の黒髪を優しく撫で続けていた。クレアはお姫様として城で生活している間は料理を作る事にはまったく縁のない生活だった。しかし『館』に来てからは、何故か料理やお菓子作りに興味を持って、休日などの暇な時に『離れ』のキッチンへ入って料理人たちに調理の仕方やお菓子の作り方を習っていた。その甲斐あって今では、料理やお菓子造りの腕はかなりの物になっていたし、その他にも掃除、洗濯等、家庭的な事もかなりの部分まで自分で出来る様になった。

「お前が馬で迎えに来た時は正直驚いたぞ、少年。
当然、馬車で迎えに来るもんだとばかり思っていたからな」

自分の膝の上で気持ち良さそうに目を閉じているバナビーを見降ろしながら言う。

「姉御を乗せて馬で走りたかったんですよ。
俺ってさ、馬車で優雅にデートなんて柄じゃないし」

そう言いながらバナビーは憧れのクレアと恋人気分のひと時を満喫出来て幸せいっぱいの気持ちだった。目を閉じていてもクレアをこんなに間近に感じられる。いや、間近と言うより彼女に包まれているかの様な感じだった。クレアの膝の感触は言うに及ばず、時折風が運ぶ鼻をくすぐる様な彼女の甘い香りがまたたまらなかった。このまま永遠に時間が止まってしまえば良いと彼は思っていた。

「実はな、男と一緒に馬に乗ったのは初めてだったんだ。
ちょっと怖かったが、でもお前の背中、なかなか頼り甲斐があったぞ」

馬の背でバナビーの背中にしがみ付いていた間、クレアは言葉通りバナビーに頼り甲斐のある男を感じていた。思っていたよりずっと広くたくましい背中と男の匂い。普段は自分を慕う年下の可愛い少年としか見ていなかったが、今日はクロウやカサド、ティエリーと同じ恋愛対象の『男』として初めて見る事が出来た。その気持ちが、今こうして彼に膝枕を許していた。もし、バナビーがここで自分を求めてきたら、それを拒む事が出来るかどうかクレアは正直自信がなかった。その一方、ティエリーの他にクロウとも恋人の関係になりながら、またバナビーに対してそんな気持ちになる『女の狡さ』を心の中で苦笑していた。

「なあ、少年。
　一つお前に聞きたい事があるんだが良いかな？」

クレアの問い掛けにバナビーは目を開いて答える。

「何ですか、姉御？」

「前に、お前『最初の女は私が良い』って言ってたが、
その気持ち、まだ変わらないか？」

クレアは、バナビーの髪を撫でながら尋ねる。

「もちろん変わってませんよ、姉御……
　あっ！、もしかして、今日ここでその夢をかなえてくれるとか？！」

膝の上のバナビーが期待に目をらんらんと輝かせる。

「馬鹿者！違う！本当に、お前と言う奴は……」

そう言って、呆れ顔でバナビーを見下ろしながらクレアは頭を掻きながら続ける。

「そうじゃなくて……

その顔とスタイル、その上ソードエンジェルの騎士なんだから、お前なら、処女の街娘をいくらでも彼女……いや恋人に出来るだろう。

それなのに、なんで私の様な『娼婦』が良いんだ？」

クレアが少し自嘲気味にそう尋ねると、急にバナビーはその体を起こしクレアの両肩を掴んで、真剣な表情で彼女の目をじっと見る。

そのバナビーの行動に驚いてクレアは目をぱちくりさせる。

「姉御……良い機会だから俺もはっきり言います。

俺は姉御が心から好きだ。

初めて姉御に出会った時からその気持ちはまったく変わらない。

姉御が『娼婦』って事、もちろんちゃんと理解してる。

前に姉御が言ったみたいに、姉御を『貴婦人』と勘違いしてる訳じゃない。

でも、姉御には不思議な魅力があるんだ。

本当なら俺の様な人間には手の届かない所に居る人間みたいな感じがね。

なんか、高貴な感じって言うのかな。

姉御って隣の国の『ソフィア姫』に似てるって言われてるけど、本当に姉御はどこかのお姫様みたいに感じる事が時々あるんだ。

『薔薇の乙女』と駆け落ちして捕まれば、

その場で有無を言わずに殺されるって知ってるけど、

もし姉御が俺と一緒に逃げてくれるって言うなら、
俺、すぐに姉御を連れて一緒に逃げるよ。
俺にとって姉御はそのくらいの価値がある女なんだ」

「バナビー……お前……」

バナビーのあまりに真剣な言葉にクレアは思わず返す言葉を失った。

その時だった、バナビーはクレアの肩を両手で掴んだまま体をひねる様にして彼女を毛布の上に押し倒した。そして、彼は自分の唇をクレアの唇に押し当てる。驚いたクレアは思わず両手でバナビーの体を押し戻そうしたが、逆に彼にその手首を掴まれ頭の上に押さえつけらてしまった。彼の唇が少しだけ離れて小さく呟いた。

「ごめん……姉御……いや、クレア。
愛してるんだ……どうしようもない程、あんたを……」

「バナビー……こんな事をしてはダメ！」

クレアは悲鳴に近い声でそう叫んだが、再びバナビーの唇でその口を塞がれてしまった。

## 第７０話　少年騎士と娼婦のデート（後書き）

感想、メッセージ等は気楽な気持ちで送って頂けると嬉しいです。

気にいって頂けたら、評価、お気に入りへの登録も、お願いします。

引き続き、１話／二日（毎回ＰＭ１０：００）のペースで更新して行きます。

# 第７１話　青い情熱と女の言い訳

（ダメ！抵抗しなきゃ……このままじゃ、私……）

クレアは焦っていた。バナビーにのしかかられ、強い力で両手の自由を奪われ、唇を塞がれ、その上、彼の舌が閉じている歯の間をこじ開けようとしていた。クレアの中では、彼の強引な要求に必死に抗おうとする自分と、もう一人、彼がそれほどまでに自分を強く求めてくれるなら許してしまって良いのではないかと思う自分がせめぎあっていた。

それまでクレアの左手首を掴んで押さえつけていたバナビーの右手が不意に離れる。彼女は、彼の意図を察して慌ててその右手首を自由になった左手で掴んだが若い男の力には勝てなかった。バナビーの右手は強引に彼女の胸を掴んだ。

「あっ！」

クレアは、唇を塞がれながら思わず小さな悲鳴を上げた。その一瞬を逃さず、バナビーの舌が彼女の歯の間から中に滑り込み、舌を絡ませて来た。クレアは頭がしびれる様な感覚に襲われた。それはクロウやティエリー、女に手慣れた客達と比べると、強引で荒々しいキス。しかし、今まで経験したどのキスより情熱的で自分の気持ちに正直なキスだった。彼の舌は何のテクニックも駆使しない、思うがままに自分の舌を求めて来た。そして、クレアは自分自身の心に言い訳をした。

（この子が、そこまで私を求めてくれるのなら……
今日だけ、今日だけだから、許して……クロウ……ティエリー…

……）

バナビーにも、自分の舌がクレアの舌と絡んだ瞬間、彼女の全身から力が抜けて行くのが分かった。最初は逃げ回っていた彼女の舌が今では自ら舌を絡ませて来ていた。彼は恐る恐る頭の上辺りで押さえていた彼女の左手から手を離す。するとクレアの両手がゆっくりと自分の背中に回されて行く。彼は左手を彼女の背中に回し、彼女の胸の膨らみを包みこんでいた右手をゆっくり下の方へ滑らせて行く。

その頃、シンシアは仕事部屋の事務机の上に水盆を乗せて、頬杖をついてその光景をいつもの様に長パイプで煙草を吸いながら眺めていた。

「他人（ひと）のデートを覗くのはあまり良い趣味ではないと思いますが、マスター……」

事務机の前のソファーに座り書類の整理をしていたロメオが声を掛ける。

「他人（たにん）ではない。クレアは私の大事な商品なんだ。私には監視する権利がある」

シンシアは水盆を覗き込んだまま答える。

「……ではどうされるおつもりですか？邪魔をしますか？」

「お前は邪魔して欲しいのか？」

シンシアはちらりとロメオを盗み見した。しかし、ロメオは書類に目を落したままだった。

「私は若い二人の恋路を邪魔する悪趣味はありませんよ」

「まあ、私も商品と言えども乙女達のプライバシーは尊重する方でな。

監視はするが極力干渉はしない主義だ」

「しかし、クレアはあの少年にどこまで許すつもりでしょうか？」

「さあな……ただ、今のクレアは男の扱いに関してはプロだが、逆にあいつの場合、あの少年の様な超純粋種はまったく経験がないい」

その言葉にロメオは急に顔を上げて真剣な顔でシンシアに尋ねる。

「まさか……それは、あの少年の願いをかなえてやるかもしれないと！」

「クレアにとってはあの少年は新鮮に感じてるだろうからな。

あの少年の持つあいつへの『純粋な愛』は眩しい程の光輝く物だろう。

自分が願っても叶える事が出来なかった『純粋な愛』がそこにある。

少年の『純粋な愛』を受け入れてやる事で、

叶えられなかった自分の願いを疑似的に叶えようとするかもしれんな」

シンシアは頬杖をついたまま、水盆から顔を上げてロメオの顔を見

てにやりと笑う。

同じ頃、『離れ』のサンテラスではアマンダ、ヘルガ、シーヴァ、アルの乙女達が昼食を食べ終わっていた。食後はいつもそれぞれのお気に入りの席に座ったまま、ヘルガが奏でるシーブラムの調べを聞きながらのんびりと過ごしているのであるが、今日に限ってはアマンダの座る席にヘルガ、シーヴァ、アルが集まって来ていた。

「アマンダ姉さんは、率直にどう思う？
これって、ボンフィス卿やクロウさんからすれば浮気って事じゃないの？」

シーヴァが眉間に皺を寄せてアマンダに尋ねる。

「浮気と言うか……何というか……難しい所だろうなぁ……」

アマンダがコーヒーを一口飲んでから難しい顔をして答える。

「問題ハ、くれあ、ドコマデ許スカッテ事、違ウカ？」

ヘルガは、コップに立てた野菜スティックをかじりつつ言う。

「私たちの職業の場合、浮気って線引きが非常に難しい……」

アルがテーブルの中央に置かれた焼き菓子を山ほど持った皿に手を伸ばしながら呟く。

「やっぱ、私らの場合……
『料金をもらったらセーフ』『ただで許したらアウト』

って言う、古典的な線引きだろうなぁ……」

「それじゃ、今回のクレアの場合、
『ただで一日デート』って事だから、何か許した時点でアウト？」

「きすハあうと？せーふ？当然せっくすハあうと間違イナイ」

「クレアって……意外に押しに弱い所あるから……」

ここでアマンダが思い出した様ににやにやし始める。

「それに相手が童貞となると、恋愛感情とはまた別の気持ちがあるからなぁ。
そう言う時は浮気云々とは言えない事も……」

「ええっ！それって何、アマンダ姉さん！」

シーヴァが目を輝かせて身を乗り出す。

「シーヴァは『男の筆おろし』の経験はなかったっけ？」

「『筆おろし』って？」

アマンダに聞かれたシーヴァがきょとんとした顔で尋ね返す。

「ソレ童貞サン相手シテ、初メテノ女二ナッテアゲル事ネ。
大抵ノ童貞サン、スゴク喜ブネ」

「アマンダ姉さんやヘルガはそっちの方も経験豊かなんだ。
私はまだないけど、それってそんなに特別な事なのかなぁ」

ヘルガが嬉しそうな顔で答えるのを見て、シーヴァがちょっと羨ましそうな顔で呟く。

「男が処女を抱く時の感じに近いかも……」

「そうなると……噂通りバナビー君が童貞だとクレアもやばいのかな？」

アルが紅茶のカップを手に取りながらぼそりと囁くと、シーヴァが難しそうな顔になって独り言の様に呟く。

「クレアってさ、そう言う純粋な男に弱いからなぁ。
あの娘、バナビーの奴が目をきらきらさせて、
『姉御を心から愛してる』なんて言って迫ったら……」

「くれあ、全テヲ許シテシマウ可能性ハ高イネ」

アマンダが焼き菓子を口に放り込みながら言うと、ヘルガが頷きながら続ける。

「うわぁーっ！もしそうなって……
その事がクロウに知れたら、完全に修羅場じゃない」

「死人が出なきゃ良いけど……」

シーヴァがややおろおろしながら叫ぶとアルが妙に冷静な顔で呟いた。

「ごめん……姉御……こんなことして……」

バナビーは、体を起こして服や髪の乱れを直しているクレアの背中に声を掛けた。

「馬鹿者……謝る位なら最初からするな！
こういう時は謝るんじゃない！
背中から強く抱きしめて……
『お前に後悔させない』って自信たっぷりに言うもんだ！」

クレアはそのブルーの瞳にいっぱいの涙を貯めてバナビーを振り返って怒鳴りながら、手元にあったナプキンを彼に投げつけた。そして、またぷいっとそっぽを向いてしまった。その顔は、バナビーが初めて見るクレアの顔だった。今までのクレアは彼にとって美しく気高い存在。自分が手を伸ばしても届かない所に居る者。まるで大空高く優雅に雄々しく飛ぶ鷹だった。しかし、今のクレアは小さな巣の中で母鳥を求めて泣く弱々しい小鳥の様に感じた。自分が守ってやらねばならない存在に映った。彼は思わずクレアを後ろから片手で強く抱きしめると、もう一方の手で彼女の顎を掴んで振り向かせると、その唇に自分の唇を押し当てた。クレアの目が一瞬大きく見開かれ全身が強い硬直が走った後、ゆっくりと瞼を閉じられ力が抜けて彼の腕にその体を委ねて行く。

「姉御……可愛い……すごく愛しい……。
誰にも渡したくない……俺だけの物にしたい」

バナビーは唇をゆっくりと離しながら、クレアの瞳を見つめて優しく囁いた。

「その台詞吐くのなら『姉御』は止めろ。

ちゃんと私の名前を呼べ。この大馬鹿者が……」

クレアもまた、バナビーのグリーンの瞳を見つめてそう囁き返すと、今度は自分の方から唇を押し当てる。クレアは心の中で、自分自信が分からなくなっていた。今朝は、可愛い年下の男を適当に手の上で遊ばせて楽しんでやろうと考えていた。それが、気がつけばその年下の男に完全に溺れてしまっていた。正直に白状すれば、バナビーに押し倒されてからは、クロウにされている時と同じくらいに頭の中が真っ白になり体の芯が熱くてしびれる様になっていた。

（女って……男より遥かにズルイ生き物なのね……）

クレアはバナビーとキスを交わしながらふとそう思った。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1756w/

薔薇の館にて……

2011年11月22日22時55分発行